



高須梅溪著

近代文藝史論

東京
日本評論社版

本書の內容に就て

私が明治、大正年間に於ける文藝發達のあとを史的に論述しようと考へたのは、今から八年前のことです。最初は、原稿紙三千枚以上の物を書かうと考へたのですが、餘りに大き過ぎるので、今度は一千四五百枚のものとすることになりました。恰度、友人茅原茂氏が拙著『明治大正五十三年史論』の出版を引受けて、日本評論社から公にした關係から、『近代文藝史論』の撰述を薦めてくれられたので、私も年來の志望をはたし得る喜びを感じて、玆に本書の上卷（原稿紙約七百枚）を書きあげて、出版することとなりました。

在來、明治、大正の文學を史的に考察した著書が二三種ないではありませぬが、何れも餘りに簡略に過ぎたもの、乃至小說に偏したものなどで、殊に一般文化及び思潮との關係を輕視した傾きがあります。私は本書に於て、最も精確な、有機的な文學史を書きたいと思つたのですが、紙數の都合上、各作家の性格、趣味、生活などを精叙し得ないので、此の點は、一つのエポツクを作つた代表作家のみとしました。而して（第一）特に力を入た

て一般文化、思潮との影響交渉を論じ、(第二)小說のみならず、評論、雜文詩歌其の他のものにも、相當の注意を拂つて、其の方面の人々の事業をも、力めて紹介することにしました。(第三)文體の變遷、文閥打破の徑路その他にも、相應の研究をして在來の文學史の足らぬところを補充しました。而して私の力の及ぶだけは盡し得たと信じます。

次ぎに本書の下卷は、自然主義勃興前後から大正十年までの文藝發達史を論述する筈で目下執筆中で、大半出來て居りますから、近く發行し得ることと思ひます。以上の上下二册を通じて、一般の御教示を賜りたく思ひます。

尚ほ本書著述について、茅原茂氏が種々の便宜を與へられたことを感謝いたします。

大正十年初夏

高須梅溪

例言

（一）本書のうちで、演劇、繪畫のことを少しばかり記述したのは、文學と密接の關係があるため、彼是其の發達の推移を參照する必要があるからです。だが、これは、專門的に詳しく取扱つたのでありませぬから、其の簡略に失したのは止むを得ないことです。

（二）他の文學史で、比較的に紹介されない文人で、特に紹介すべき必要ある人物は、本書に於て力を入れて、其の眞相を明かにしようとしました。河竹默阿彌、齋藤綠雨、大西操山などは、其の一例です。

（三）著者は、明治、大正年間の文士詩人は、大抵一二度以上、逢つた人が多いのですから、其の人物の印象をも詳しく書く豫定でしたが、紙數の都合で、此の點を斷念したのは、止むを得ないわけです。他日、增補したいと思ひます。

（四）文藝評論の發達は、他の文學史で、全く閑却した點ですが、本書は、此の點には、力を注いで、

大體の發達を明かにするようにして置きました。

（五）本書は、今迄出た現代文學史のうちでは、一番優れたものだとは言ひかねますけれども、大體に於て、纒まりよく出來て居ることを信じます。後に偉大な現代文學史が出る迄の補ひとなることを得れば。著者の本懐です。

近代文藝史論目次

總說 現代文藝の大勢及び進歩

總説　現代文藝の大勢及び進歩……（一）
（一）明治大正時代に於ける文藝發達の由來……（一）
（二）明治文學に對する西鶴の影響……（三）
（三）明治文學に對する芭蕉近松の影響……（六）
（四）文藝的進步の五原因と歐米文化……（八）
（五）日本國民の文化的飛躍……（一一）
（六）頻出せる文壇の人材……（一三）
（七）文藝的進步の五期……（一五）
（八）第一期の後半に於ける文學……（一八）
（九）第二期時代の文藝……（一九）

（一〇）第三期時代の文藝……（二三）
（一一）第四期時代の文藝……（二九）
（一二）劇界の新運動……（三四）
（一三）第五期の文藝……（三六）
（一四）文壇と社會の接觸……（四〇）
（一五）第五期時代に於ける劇壇と詩壇……（四二）
（一六）結　論……（四四）

第一期　舊套墣守時代……（四七）

第一章　英米功利思想の流入と啓蒙運動……（四九）
（一）大變革の時代……（四九）
（二）英米功利思想の流入……（五二）
（三）福澤諭吉の文明觀……（五四）

（四）福澤の啓蒙的、改造的運動……（五八）
（五）福澤の文學方面に於ける功績……（六一）
（六）中村敬宇の『自助論』……（六五）
（七）當時の教育と新學術……（六七）
（八）新聞雜誌の啓蒙的勢力……（六九）
（九）新文化開拓に貢獻した『明六雜誌』……（七三）
第二章　舊套を離れざる文學……（七五）
（一）假名垣魯文の戲作と新聞小說……（七五）
（二）劇壇に於ける河竹默阿彌……（七九）
（三）惡の詩人としての默阿彌……（八一）
（四）默阿彌の劇的技巧と其の强味……（八四）
（五）默阿彌の短所……（八九）

（六）默阿彌の代表的作品……（九一）
（七）『東京繁昌記』其他……（九三）

第三章　翻譯文學と政治小說の流行……（九六）

（一）政治思想の勃興と英佛獨の思想……（九六）
（二）翻譯文學の種類及び文體……（九九）
（三）翻譯文學の功果……（一〇三）
（四）政治小說の作者と技巧……（一〇五）
（五）當時の青年と文學……（一〇九）
（六）劇界革新の徵光……（一一三）
（七）美術界と歐化的風潮……（一一五）

第二期　新文學發生時代……（一二一）

第一章　當時の思想及び文學の概勢……(一二三)
(一)歐米文學思潮と國粹的思潮……(一二三)
(二)當時の社會思潮と文化……(一二六)
(三)歐米文學とキリスト教思潮の勢力……(一二九)
(四)新島襄のキリスト教宣傳……(一三一)
第二章　新文學の黎明……(一三五)
(一)坪内逍遙の『小説神髓』……(一三五)
(二)新文學の模型としての『書生氣質』と寫實主義……(一三八)
(三)ロシヤ文學と『浮雲』を書いた二葉亭……(一四二)
(四)『浮雲』を書くに就ての苦心……(二四五)
(五)『浮雲』の新着想と新描寫……(一四九)

（六）『浮雲』の缺點と特長……（一五六）

第三章　徳富蘇峯を中心とした民友社……（一五八）

（一）「國民之友」の文學的勢力……（一五八）
（二）評論家として先驅者櫻痴と兆民……（一六〇）
（三）當時續出した雜誌……（一六四）
（四）文學評論の創始時代……（一六六）
（五）蘇峰が創始した人物評論と政治記事の文學化……（一六九）
（六）民友社中の文學的秀才……（一七三）

第四章　尾崎紅葉を中心とした硯友社……（一七五）

（一）言文一致の創唱者山田美妙……（一七五）
（二）美妙の「夏木立」と「胡蝶」……（一七八）

（三）紅葉の出世作「色懺悔」……（一八三）
（四）紅葉の人物と優れた藝術的氣禀……（一八六）
（五）紅葉の「新色懺悔」と「二人女房」……（一九〇）
（六）紅葉の文學に於ける一進步……（一九三）
（七）「三人妻」の文章及內容……（一九五）
（八）硯友社同人の文壇的活動……（一九八）

第五章　紅葉に對峙した幸田露伴……（二〇二）

（一）詩人としての露伴と其の作品の特質……（二〇二）
（二）出世作「風流佛」の思想、文章……（二〇四）
（三）藝術家氣質を描いた「一口劍」……（二〇六）
（四）代表作としての「五重塔」と佳作「血紅星」……（二〇九）
（五）「五重塔」の名文章……（二一二）

（六）「五重塔」の缺點及其他の作品……（二一六）
第六章　評論壇に於ける逍遙と鷗外……（二一八）
（一）二人評論家……（二一八）
（二）談理を好んだ鷗外……（二二〇）
（三）「沒理想論」についての論戰……（二二三）
（四）鷗外の逍遙の說に對する論難……（二二七）
（五）談理と記實との問題……（二三〇）
（六）評論界に於ける綠雨、不知庵、思軒……（二三三）
（七）評論家としての北村透谷……（二三五）
第七章　硯友社以外の作家及作品……（二三八）
（一）逍遙の「細君」及び「一圓紙幣の話」……（二三八）

（二）鷗外の處女作「舞姬」……（二三九）
（三）鷗外の「文づかひ」……（二四二）
（四）小說家として綠雨と篁村……（二四四）
（五）關西文壇の人々……（二四八）

第八章　傳奇小說、探偵小說及び歷史小說……（二五一）
（一）行語つた寫實小說と文壇の新要求……（二五一）
（二）傳奇小說の代表的作品……（二五四）
（三）探偵小說の流行……（二五九）
（四）探偵小說に對する非難……（二六一）
（五）文壇に於ける歷史熱……（二六四）
（六）文學と史傳の調和……（二六五）
（七）歷史文學と傳記文學の價値……（二六八）

（八）歴史小説の出現と其の作家……（二七一）
（九）當時の文藝批評と作家に對する要望……（二七五）

第九章　翻譯文學の曙光……（二七七）
（一）最初に出た藝術的翻譯……（二七七）
（二）二葉亭の「あひびき」と「めぐりあひ」……（二八〇）
（三）思軒の漢文調と鷗外の國文調……（二八二）
（四）鷗外の「水沫集」と翻譯小說……（二八四）
（五）內田不知庵の「罪と罰」……（二八七）
（六）逍遙の「マクベス」評註……（二九〇）

第十章　新體詩、戲曲及新國文……（二九四）
（一）「新體詩抄」と初期の詩壇……（二九四）

（二）哀世詩人としての北村透谷……（二九六）
（三）劇文學開拓と學海、櫻痴……（二九九）
（四）新しい意義の演劇論……（三〇一）
（五）逍遙の新史劇についての意見……（三〇四）
第十一章　文化思潮の特相と美術及び演劇……（三〇六）
（一）文明批評の先驅者大西操山……（三〇六）
（二）哲學の民衆化的傾向……（三一〇）
（三）キリスト教の發展と佛教の復活……（三一三）
（四）此の期の劇界と新舊勢力……（三一五）
（五）日本畫の勃興と雅邦、芳崖……（三一八）
（六）青年繪畫協會と明治美術會……（三二一）

第三期　ロマンチシズムの時代

第三期　ロマンチシズムの時代……（三二三）

第一章　思想界の大勢……（三二五）

（一）日清戰爭に對する文化的考察……（三二五）
（二）日本主義の提唱と其の意義……（三二九）
（三）日本主義の長所及び缺點……（三三三）
（四）世界主義及び帝國主義の提唱……（三三五）
（五）現實的傾向と道德論理の研究……（三三八）
（六）樗牛の個人主義、天才主義、本能滿足說……（三四〇）
（七）哲學宗敎熱の沸騰……（三四二）
（八）綱島梁川の宗敎思想……（三四六）
（九）社會主義思潮の發生……（三四九）

第二章　文壇の新機運が生んだ觀念小說深刻小說……（三五三）
（一）戰勝と文學……（三五三）
（二）文壇に於ける黨閥と新人……（三五六）
（三）觀念小說の先驅者泉鏡花の藝術的資質……（三六一）
（四）川上眉山の新傾向……（三六四）
（五）廣津柳浪の深刻小說、悲慘小說……（三六六）
（六）柳浪の代表作と心理描寫……（三六九）
第三章　群起した文壇の新人……（三七三）
（一）人としての樋口一葉……（三七三）
（二）生活を藝術化した一葉……（三七五）
（三）一葉の文學的進路と描寫の特長……（三七七）
（四）一葉の代表作「たけくらべ」の藝術味……（三七九）

（五）新進作家としての宙外、抱月、天外、風葉……（三八一）
（六）風葉の出世作「戀慕流し」……（三八五）
第四章　社會小說家庭小說の出現……（三八七）
（一）文壇に於ける社會的風潮……（三八七）
（二）內田魯庵の社會小說……（三九〇）
（三）最初に家庭小說「不如歸」を書出いた蘆花……（三九三）
（四）田山花袋の新進作家時代……（三九五）
第五章　新進作家に對峙した紅葉、露伴……（三九七）
（一）紅葉に對する非難と嘲罵……（三九七）
（二）「小說の米の飯」と自稱した「多情多恨」……（四〇〇）
（三）「多情多恨」に於ける巧妙な描寫……（四〇二）
（四）藝術上の時代的要求を輳合化した「金色夜叉」……（四〇七）

（五）露伴の大作「風流微塵藏」……（四一一）
（六）「新浦島」の思想及び技巧……（四一三）
（七）クラシックの味が深い「二日物語」……（四一六）
（八）水蔭、美妙、小波の文學的收穫……（四一七）

第六章　後半期の小説と少壯作家……（四一九）

（一）鏡花の作品に現はれた神秘的傾向……（四一九）
（二）此の期に於ける蘆花、春雨、秋聲、春葉……（四二三）
（三）天外のゾライズムの功過……（四二六）
（四）風葉の藝術的得失……（四二九）
（五）小説の新傾向に志した人々……（四三一）
（六）「水彩畫家」を書いた島崎藤村……（四三三）
（七）『地獄の花』を書いた荷……（四三五）

第七章　此の期に於ける戯曲　翻譯　雜筆……（四三七）
（一）新史劇の先驅となつた「桐一葉」……（四三七）
（二）逍遙の三部曲の最初に出た「牧の方」……（四四一）
（三）鷗外の「兩浦島」と「日蓮上人辻說法」……（四四三）
（四）劇壇と文壇の接觸……（四四五）
（五）二葉亭の名譯「片戀」と「うき草」……（四四七）
（六）鷗外の「即興詩人」と上田柳村の南歐文學の紹介……（四四九）
（七）寫生文、美文、紀行文、隨筆……（四五三）
第八章　此の間に於ける新體詩……（四五六）
（一）擬古派の少壯詩人……（四五六）
（二）鐵幹と子規……（四五八）

（三）新體詩界の黎明…………（四五九）
（四）藤村が開拓した詩境…………（四六一）
（五）冥想詩人としての晩翠…………（四六四）
（六）泣菫と有明の詩人的特質…………（四六七）
（七）史詩の流行…………（四七一）
第九章　短歌及び俳句…………（四七三）
（一）直文、鐵幹の短歌革新運動…………（四七三）
（二）「亂れ髮」の女詩人…………（四七五）
（三）竹の里人の一派…………（四七八）
（四）正岡子規の俳句革新運動…………（五八一）
（五）子規及び其の周圍の人々…………（四八四）

第十章　文藝評論の勃興及び演劇美術……（四八八）
（一）新進評論家の輩出……（四八八）
（二）文壇に於ける美學研究の傾向……（四九〇）
（三）ニーチエについての論爭……（四九四）
（四）樗牛の美的生活說……（四九七）
（五）文壇に於ける現實生活の問題……（四九八）
（六）梁川の思想と文壇的交涉……（五〇〇）
（七）文藝評論の勢力……（五〇二）
（八）劇界の新現象……（五〇三）
（九）美術界の新現象……（五〇五）

——目次畢——

近代文藝史論

高須梅溪著

總說　現代文藝の大勢及び進步

（一）明治大正時代に於ける文藝發達の由來

明治、大正の時代を通じて、最も進步したのは、何であるかと云へば、私は第一に文學だと答へるに躊躇しない。政治や、經濟や、學術なども、勿論、相應な進步を示したにちがひないけれどもこれを文學の進步に比較すると、大分、劣つて居ると云はねばならぬ。現時の文學は、歐米の文學に比較しても、決して劣つて居ない。其の優秀な部分は、慥かに獨創的な內容と形式とを備へて居

る。少くとも、一面に於て、歐米文學の摸倣狀態から脫出して居る。斯うした現象は、眞に空前である。平安朝時代、元祿時代、文化文政時代の文學とても、明治大正時代の文學的進步に遙かに及ばないやうに思はれる。後世の史家は屹度、明治大正の文學時代を日本に於ける偉大な文藝復興期として、正に元祿期の文學と相對比して論ずるであらう。

明治大正に於ける偉大な文藝復興は、國史の上に於けるそれが對比を元祿期に求めるよりほかはない。元祿期は、日本に於ける最もブリリアントな時代の一つである。今まで抑へ付けられて居た民衆が、ある程度に於て解放されて、生の飛躍、生の歡喜を味ふことが出來るやうになつて、そこに始めて民衆文藝の花が一時に開いた。近松巢林子、松尾芭蕉、井原西鶴、尾形光琳、菱川師宣らの巨匠は、何れも、元祿に於ける民衆の新興精神の中から出た人々であつた。殊に巢林子、芭蕉、西鶴の藝術は、今日も尙ほ偉大な生命を保つて居て、日本文學史上に於ける尊い收穫を示して居るのである。

けれども元祿期の偉大さも、これを明治大正の偉大に比較すると、遙かに劣つたものになる。少くとも、文藝の上に於て、左樣である。日本人には、一種の尙古癖、過去嘆美癖があつて、すべて現在よりも、過去を美しく見る傾向がある。近松や、芭蕉や、西鶴を產出した元祿期を以て、明治

大正に優つて居ると見るものがないとも限らない。けれども冷靜に考へると、恐らく、左樣でないことを發見するにちがひない。假りに、明治、大正の文壇に於ける故人を數へて見ても、尾崎紅葉、高山樗牛、國木田獨歩、長谷川二葉亭、正岡子規、樋口一葉、岩野泡鳴、上田敏、綱島梁川、大西祝、川上眉山、河竹默阿彌らの人々がある。紅葉の小說は、決して西鶴に劣つて居ない、默阿彌の戲曲は、巢林子に追隨し得る丈の光彩を以て居る、子規の俳句は、芭蕉に肉迫するに足りる內容を持て居る。其の他、ロシヤ文學に於ける二葉亭、短篇小說に於ける獨歩及び一葉、評論に於ける樗牛、祝、梁川の如きは、何れも不朽の光りを放ちつゝある。斯うして、彼是對照すると、明治大正の時代は、文學的に最も偉大なブリリアントな收穫を示したものと云はねばならぬ。殊に現存の第一流大家のうちにも、不朽を以て目すべき人々が、少くとも、十名に上つて居る以上は、私が、現代文化の中に於て、文學が一番、進歩して居ると云つたことは、決して不當ではない。

（二）明治文學に對する西鶴の影響

明治、大正の文學が、それ程、目ざましい進歩を示した由來、原因は、何であらうかと云ふことを一考するのは、此の際、順序として、必要である。其の由來は、傳統的に進んで來た江戶時代の

文學を繼承すると共に、其の長所を吸收したことにある。近松、西鶴、馬琴、京傳、一九、三馬、春水、芭蕉、蕪村、眞淵、景樹らの文學は、明治文學に相應の影響を及ぼした。殊に芭蕉と西鶴とは、日本の現代文學に著大な深い影響を與へた。例せば、幸田露伴、樋口一葉らは、簡勁な西鶴の文章に傾倒したことがあつた。尾崎紅葉は、啻に西鶴の文致に共鳴したのみならず、其の好色本から來た感化をも明かに受けた。ひとり以上の三人ばかりでなく、自然主義の主唱者田山花袋の如きも、西鶴を研究して、得るところが、極めて多かつたことを『西鶴小論』のうちに述べて居る。勿論、花袋は、好色本よりも、寧ろ他の作品に共鳴したので、それについての感想を記して「西鶴物と言へば、人はすぐ好色物を聯想する。好色物即ちかれの藝術のすべてだとさへ思はれてゐる。しかし私はさうは思はない。私は好色物以外に、かれの眞面目な、本當な、人に知れない理解を發見して、いつも驚愕の眼を睜つた。」と云つて居る。花袋が共鳴したのは『胸算用』や『永代藏』などで、それは、大阪町人の金錢生活を描いたものである。

花袋は、西鶴の『胸算用』について「あの中にはどんなに深いかれの悲痛がかくされてあるか。智慧あり且つ聰明なる大阪人の苦痛がかくされてあるか。かれはその中に『金』を取扱つた。むづかしい『金』の悲劇を取扱つた。私達作者の願ひとしては、『女』と『金』とを十分に理解したい。『金』を唯

物質と思つてゐるやうな心の簡單な境から離れて、金即心、金即女といふ境、更に進んで、物質即ち心と言つたやうな境、さういふ境に入つて行きたい。から思つてゐても中々其處には行けない。『女』はまア書けても『金』は容易に描けない。何故なら『女』には『詩』があるが『金』には『詩』がないからである。『詩』のない『金』を描いて、それが『眞』に達するといふことは容易なことではない。それを西鶴は『胸算用』『永代藏』でモウパツサンや、チェホフが書いたもの以上に本當の『金』を書いた。近松の藝術には、『金』はあつても、要するに芝居で見る『金』だ。梅川忠兵衛の『金』などは、決して心に喰ひ入つた『金』ではない。女郎金と言つた『金』ではない。それから比べると『永代藏』にある『拾つた金』の悲劇などは、深く心理に觸れて行つてゐた。私の考では、日本の文壇で、『金』を本當に取扱つた作者は、かれを除いては他にない。『胸算用』のうちにある大晦日の苦痛、あれは今では我々の心に響いて來る。我々の生活を動かして來る。あらゆる善きもの、美しきもの、あらゆる思想、あらゆる理想、それが到る處で幻滅してゐる。」と云つて居る。これで見ると、花袋は、紅葉、露伴などとは、別の意義で西鶴に傾倒して居ることが知れる。

島村抱月も亦西鶴に共鳴して居た。勿論、彼れの小說は、近松の戲曲から深い影響を受けたとを示して居るけれども、自然主義運動に參加した頃から、西鶴の藝術に對して、深く共鳴した。『五人

女に見えたる思想』のうちで「西鶴の人生は個人性、快樂性、感情性の一圖の向上より生ずる寂寞不滿の感を見せたものではないか。此の意味よりいふときは、西鶴の思想は多くの點に於いて、却つて近代の歐洲文藝に見えたる思想と接邇する。」と云つた。

西鶴の作品は、今日、研究しても、いろ〳〵の事を考へさせる。それだけに深い永遠性をもつて居る。だから、今日の作家にも、勿論、新しい印銘と感化とを與へるであらうけれども、在來の作家では、紅葉、露伴、一葉などが、西鶴から感化されたことを、其の作品の上に現はした。大正時代の文壇は兎も角、明治の文壇は、可なりに、傳統的に西鶴に負ふところが少くなかつたことを證明して居るのである。

（三）明治文學に對する芭蕉、近松の影響

西鶴の次ぎに明治文壇に深い影響を與へたのは芭蕉である。それに續いては、近松巣林子である。芭蕉は、蕪村と共に、正岡子規を動かして、明治の俳壇を革新させたばかりではなかつた。芭蕉の藝術は、北村透谷、島崎藤村らの如き『文學界』の一派をも深く動かした。透谷の哀世思想、藤村の放浪時代に於ける思想と表現とには、芭蕉から來た感化のあとが明かに印象せられてある。藤村の新

體詩と小說とは、明治、大正の文壇を通じて、不變の生命力を有して居る以上、芭蕉が、明治文學に與へた影響を見逃がすわけに行かないと同時に、今日の文學にも、隱然、新しい印銘を附與すべき可能性を有することをも肯定して、差支へないやうな氣がするのである。

近松巢林子も亦明治文壇に相當な感化を及ぼした時代があつた。坪內逍遙が先頭に起つて、明治二十三年『日本評論』に『評釋天の網島』を發表して、新しい解剖を試みて以來其の顰みに倣ふものが出た。高山樗牛は明治二十八年『近松巢林子』『巢林子の女性』『近松巢林子の人生觀』などを『太陽』『帝國文學』などに發表した。續いて、二十九年には『早稻田文學』に於ける『近松研究』が連載されて、一般に相當な影響を與へた。抱月は巢林子の作品に就て『近松の藝術及人生』『近松と東西心中劇の比較』などの論文を書いた。のみならず、彼れの小說『しろあらし』『玉かづら』『めをと波』などは、近松の構圖に學ぶところがあつた。花袋は『明治小說內容發達史』のうちで「抱月の作は、布置の整然たるを以て特色とされ、一般に近松の感化を受けたものと認められた。」と云つて居る。明治文壇が、近松の戲曲から相當の感化を受け入れたことは、以上の敍述によつても明白である。思ふに、大正の文壇も、幾分か近松の影響を受けるかも知れないけれども、それは、西鶴や、芭蕉に比較すると、遙かに淺いものにちがひない。

要するに、明治文學の發達は、其の由來の上に於て、江戸時代文學の巨人であるところの芭蕉、西鶴、巣林子に負ふところが、少くなかつたことは、以上の通りであるが、其の他馬琴、春水、三馬、一九、眞淵、景樹らの影響を幾分づゝ受け入れたことも見逃がすわけに行かない。高山樗牛は『明治の小説』のうちに於て「明治十年以前の小説は、德川時代の殘肴冷杯を嘗啜して僅に其餘脈を繋ぎたるの有様なりき。……其文體より見れば、馬琴、春水、三馬、一九の糟粕を甞むるのみ。」と云つて居るが、それは、正確な事實であつた。また明治初期の文壇に於けるユーモリストとして知られて居た饗庭篁村の如きは、其磧、三馬、一九の影響を最も多く受けた。さうした色合は、明治二十五六年頃までは、仄かに一部の作家の上に殘つて居たのである。それ等は、西鶴、近松、芭蕉のやうに、明治文壇に宜い意味の影響を與へたことが、極めて少かつた。

（四）　文藝的進歩の五原因と歐米文化

更らに、明治、大正の文學が發達した原因を考へると、凡そそれを五つに分けることが出來る。第一は時勢の變革、第二は歐米文化の流入、第三は民衆生活の進歩、第四は日清戰爭、日露戰爭の勝利第五は人材の輩出などである。在來出た明治文學史などには明治文學發達の原因を究明して居

ない。偶まあれば、歐米文化流入の一事を數へて居るに過ぎないのである。だが、歐米文化流入の一事だけでは、どうにもならないのである。それに對して、民衆の自覺、努力がなければならぬ。生の發展、飛躍がなければならぬ。日本の富强を增進せしめたところの戰爭と勝利がなければならぬ。さうした環境、雰圍氣のうちにあつて、それに適應して腕を伸ばすところの詩人、文士がなければならぬ。卽ち私が數へあげた五種の原因が、彼是相俟ち、相依つて、綜合され、融化されたところに、明治、大正の文學が發達したのである。

明治、大正の文學は、維新革命が產出したものである。江戶末期の廢頽文學は、既に行き着くべきところ迄、行きつくしてしまつたのであるから、どうしても、新生面を開拓せねばならぬ必然的な勢になつて居た。そこへ勃發したのが、明治維新の革命であつた。勿論、それは、十九世紀初頭に於けるフランス革命のやうな烈しい性質のものではなかつたけれども、日本史上に於ては、空前のものであつた。此の革命によつて、封建制度は全く顚覆して、在來の文化は、半ば以上、破壞されて了つた。而して舊文化に代るべき新文化の建造に着手する時代に入つた。それで、舊文化の俤は、尙ほ社會の一部に殘存しては居たけれども、大抵のものは、新しい地盤の上に築かれることとなつた。政治も、經濟も、敎育も、學術も、すべて新しい色彩を帶びて現はれて來た。此の際、ひ

とり文學のみ新しくならぬわけはなかつた。明治文學の萠芽は、維新革命が齎らした新文化の一部だつた。

明治維新の日本が、新文化を作り出すに當つて、唯一の目標としたのは、歐米文化であつた。歐洲の文化は、既に戰國時代から、徐ろに日本に流れ入つて居たが、それは、素より微々たるものであつた。幕末頃に一部の知識階級が、オランダ語を透ほして、歐洲文化に接觸して居たが、これとて、素より云ふに足らなかつた。眞に歐米文化が、急潮のやうな勢を以て、日本に流入し始めたのは、明治維新の始めからで、其の後も、引續いて、流入して居ることは云ふ迄もない。明治大正文學の進歩を促すべき絕大な勢力となつたのは、實に歐米文化である。

最初は、主として、英米文化が、わが國に流入したが、其の後、フランス、ドイツの文化も亦流入して、歐米各國の文學や、思潮がわが文壇の人々に強い感銘を與へた。明治文學の黎明は、イギリス文學に親んだ坪内逍遙によつて促進されたのみならず、ドイツ文學の造詣が深かつた森鷗外によつて、一層、向上の機緣を作り出された。フランス思潮に共鳴した中江兆民、ロシヤ文學に傾倒した長谷川二葉亭、内田魯庵らによつて、わが文學思想は、比較的に早く進んだ。それ等は、主として、明治文壇の黎明前後の現象であるが、其の後、ゾラに私淑した小杉天外、永井荷風の寫實主

義、歐洲大陸文學に親んだ田山花袋、島崎藤村らの自然主義を始め、大正の今日に至る迄の文壇の新運動は、大抵、歐洲文學から得た新しい印銘が原動力となつて起つて居る。ひとり、それは、小說の上にのみ限定されて居る現象ではない。戯曲も、長詩——曾て新體詩と稱した——も、すべて歐洲文學の影響と刺戟とによつて、發達したのである。今後の日本文學は、或は半ば以上、獨自の發達を續けてゆくかも知れないけれども、これ迄の文學は、悉く歐米文學の影響の下に進んで來たのである。

（五）日本國民の文化的飛躍

だが、それに就て考へねばならぬのは、日本國民の生活が、時代に適應して、漸次に向上したことである。其の文化的能力に於ても、政治、商業、軍事の上に於ても、世界の新風潮に遲れまいとして努力した。これが、何よりも重要な一契點である。たとひ、維新の革命が勃發しても、歐米文化が急潮のやうに流入して來ても、日本國民の文化的能力が、それに適應してゆくことが出來なければ、一切駄目である。ところが、日本國民は、三百年間の平和によつて、日本獨有の文化を完成し得たのみならず、外から來る文化的刺戟を巧みに受け入れて、それを十分、咀嚼し、融化してゆ

く力を持つて居た。それで、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツなどの新文化が一時に流れ寄つても、左程、狼狽しなかつた。快活に敏捷にそれを受け入れた。而も其の取捨や、選擇についても、大體の方針を誤らなかつた。歐米の物質文明の長所を一切、採り入れて、日本を富强にすることに力めた。それと共に、歐米の精神文明をも吸收して、學術、教育等の刷新を行つた。斯うして明治文壇の黎明が始めて見えるまで、日本國民のすべては、日本の新文化を築きあげることに忙はしかつた。斯うした空氣の中から、坪内逍遙の『書生氣質』や、長谷川二葉亭の『浮雲』などが出たのである。

文學は、貧弱な國には、決して勃興しない。何となれば、文學の發達を助長すべき機緣に乏しいからである。日本は、既に上下を擧げて、富强に力めた上、日淸戰爭に勝ち、日露戰爭に勝つて、更に其の富强の度を加へた。更に其の富强に加へたばかりではなかつた。國民的自負心を增進させた。この事が、文學の進步の上にどの位有力な影響を與へたかと云ふことは、日淸戰後、日露戰後の文學が自ら證明して居るところである。

戰勝が、必然的に文學の進步を促がすかどうかは、一概に斷定し得ないところであるけれども、古來、戰勝後、文學が旺盛となつた國が可なりに多い。ドイツが、七年戰爭の勝利後、レッシング、

クロプストツクなどの文豪を出したことや、フランスが、ルイ十四世の時代に全歐に覇たるべき武威を示した際、ラシーヌ、モリエール、コルネーユなどの偉大な文人を出したことなどを考へると戰勝は、概して文學の進歩を促がす原動力となるやうに思はれる。それは、確かに國民的自負心を喚起させるからだと云ふばかりではなく、戰勝から來る經濟上の巨利が、國民の富を增進せしめ、生活を向上させて、社會の好景氣を煽り立てるからである。即ち生活上の進歩と餘裕、精神上の飛躍と自覺とが、相依り、相俟つて、文學上に於ける目ざましい進歩を實現すべき雰圍氣を作り出すために、戰勝後の文學が非常に振ふのである。明治の文學が、著しく進歩したのは、日清戰後と日露戰後との勝利の榮光に輝いた時代であつたことを思ふと、戰勝と文學との關係が、一層、明白に解かれるのである。

（六）頻出せる文壇の人材

斯うして、明治の文學は、種々の機縁が錯綜して、進歩したのであるが、それについて、進歩の中心となるべき人物がまた夲前に輩出したことを見逃してはならぬ。小説に於ても、長詩に於ても短歌、俳句に於ても、將た戯曲や評論に於ても、いろ〳〵の有力な人材が一時に輩出した。評論文

の如きは、明治に入つて、始めて進歩したのであつた。それは福澤諭吉によつて始められて、其の後、多くの文人によつて、大成されたのである。單に文藝評論の如き範圍に限定して考へて見ても逍遙、鷗外、忍月、透谷、樗牛、綠雨、嶺雲、梁川、筑水、敏、桂月、操山、抱月と云つたやうな人人によつて、略ぼ大成されたのである。科學的批評を試みた文藝評論家が、出たのは、明治文壇の一特色で、逍遙、鷗外の二人は、文藝評論の最初の模型を示した人であつた。而して其の後に續いて、大小の文藝評論家が出たのである。

明治文壇に於て、小說家として輝いた人々は、可なりに多かつた。紅葉、露伴、一葉、風葉、鏡花、柳浪、天外、眉山、春葉、宙外、水蔭、蘆花、美妙、獨步、藤村、白鳥、泡鳴、鷗外、荷風、漱石、虛子、秋聲、花袋らを始め、他にも相應な作家が居た。長詩に於ては、藤村、晚翠、泣菫、有明、白秋、露風らが居た。短歌に於ては、直文、信綱、晶子、寬、薰園、牧水、柴舟、空穗、啄木、哀果、左千夫らが居た。俳句に於ては、子規、鳴雪、虛子、碧梧桐、井泉水などが居た。戲曲に於ては、逍遙、櫻痴、默阿彌などを初め、吉藏、雨雀、破笠、綺堂らが居た。評論方面では、長江、仲、御風、臨川、王堂なども居た。

以上は、明治時代の人々で、其のうちには、大正時代にかけて活動して居る人々も少くない。だ

が、大正時代に入ると、作家としての中心人物は、新人によつて、占められるやうになり、評論も、戯曲も、新人の色彩が濃厚になつて居る。谷崎潤一郎、上司小劍の如きは、大正時代に入つて、寧ろ特色を發揮した。だが、それは暫く措いて、明治文壇に輩出した人材が如何に多かつたかと云ふことは、以上、列擧した人名によつて見るも明かである。

要するに、右に擧げた五種の原因と江戸文學の傳統的影響との下に、明治文學の著大な發達を促がして、其の餘波が、更に大正文學の發展を促がしたのである。其の作用、關係は、極めて複雜で尙ほ他に小さいいろ〳〵の原因があるにちがひないけれども、大體、以上の通りである。若し小原因の一二を附加するならば、普通教育、中等教育の進歩と普及から來た讀書力の增進や、自然主義勃興前後から、新人が文壇に出る機會と道とが自ら開かれて、政治界、實業界のやうに、老人が跋扈しない事などをも數へて差支へないであらう。此の點に於て、文壇は比較的自由な、淸新な空氣が、絕えず流動して居るので、これも、文學的進歩を促がす上に相當の功果があるにちがひないのである。

（七）文藝的進歩の五期

明治、大正に於ける文學の進歩は、前後連續して、有機的關係を保つて居るが、其の進歩の徑路を明かにするには、勢ひ或る區劃を假定せねばならぬ。それで、私は明治初年から大正十年に至る迄の文學的進歩を五期に分つて説明しようと思ふのである。其の第一期は、明治初年から十八九年迄である。第二は十八、九年から日清戰爭前後迄である。第三期は日清戰爭前後から日露戰爭前後迄である。第四期は、日露戰爭前後から明治末年頃迄である。第五期は、大正元年から今日迄である。此の區劃が當を得て居るかどうか、勿論、見る人によつて、多少の相違がないとは云へないけれども小説、評論を中心として、文壇に於ける主潮の變化に力點を附するとすると、此の區劃が、比較的に妥當を得て居るやうに思はれる。

それで、右のうち、第一期は舊套墣守時代である。第二期は新文學發生の時代である。第三期は寫實主義的過渡時代若くはロマンチシズムの時代である。第四は自然主義の時代である。第五期は、各流派分立の時代である。此の區劃は、文學のすべてに亘つて、當てはめ得ないかも知れないけれども、大體、評論でも、小説でも、戯曲でも、長詩、短歌、俳句でも、略ぼ文學界の思潮と相觸れる關係から脱出しない以上は、大抵、當てはまらう。私は、評論と小説とに重きを置いて、右のやうな區劃を立てたのであるから、時には、俳句、短歌などの方に、當てはまらないともあるだらう

それは、複雑な現代文學の進步的徑路を明かにする上から、自然、止むを得ないのである。

第一期の前半は、明治文學の闇黑時代、後半は、準備時代とも云ふべき有樣にあつた。前半は、明治初年から十年頃迄である。後半は十一年から十八年頃迄である。前半の時代は、大改革、大動搖の最中で、思想、生活の兩方面に激しい變化と動搖とを續起したから、文學、美術などは、全然、顧みられなかつた。社會では舊分子と新分子、保守派と進步派との烈しい爭ひから、神風連の亂、萩の亂、佐賀の亂などを始め、征韓論を起點として爆發した西南戰爭などがあつて、ごつた返した。それと同時に新政府の要路に起つた人々は、政治、財政、司法、軍事、敎育、產業等の上に大改革を加へて、有名な廢藩置縣をも斷行した。斯うした有樣だから、誰も彼れも騷亂と改革とに忙殺されて、有爲の人材は皆其の當面の必要な仕事に奔走し、熱中した。それで、文學方面に居たものは舊套を襲ふに過ぎない保守的な人々に過ぎなかつた。其の小說も一九、三馬、春水、馬琴の作風を模倣したもので、何等の新意を認めることが出來なかつた。其の中で、稍目に附いたのは、假名垣魯文位のものであつた。脚本の方では、僅かに河竹默阿彌が居た。彼れは江戶演劇の最後の殿將として、最も光りを放つた。魯文の代表作は『西洋道中膝栗毛』で、一九の『膝栗毛』を模倣したのである。默阿彌の代表作は『三人吉三』『村井長庵』などで所謂白浪物の長所を巧みに發揮したものであつ

た。

更に廣義に於ける文學の埒内にあつては、成島柳北の『花月新誌』や、福澤諭吉の『世界國盡』及び『學問の勸め』や、中村正直の『西國立志篇』などが出た。また明治五、六年頃に續生した新聞雜誌が通俗的な文學趣味を普及したことも注目に價した現象の一つであつた。要するに、第一期の前半に於ける文學的進步は、殆ど云ふに足りなかつた。

（八）　第一期の後半に於ける文學

後半に入ると、西南戰爭によつて、多くの不平士族を除き去つて、平民階級の勢力が增したのみならず、一先づ騷亂を打切つてしまつて、平和な時代に入り始めたところから、文學方面の仕事も幾分か新しい光りの下に蘇生の色を帶び始めて來た。此の時代には、自由民權の思想が中江兆民、板垣退助らによつて輸入されて、それが天下を風靡した。而して新たに政治運動によつて、自己の地步を占めようとした士族、地主などが蹶起して、到るところに烈しい政治熱を起させた。政治の改革！　それが時代の中心興味だつた。此の時勢の傾向に應じて、當時の文壇に流行したのは、勿論政治小說であつた。それに雁行したのは、科學小說であつた。科學小說は、當時、何事にも『文

明開化』と云つた人々に對して、歐米の科學思想を傳へようとする一種の啓蒙的意義から相當に流行した。

政治小說には、飜譯と創作とがあつたが、最初、其の先驅となつたのは、明治十二年に出た織田純一郎の『花柳春話』で、それはリツトンの作物を譯したものだつた。當時、最も目新しかつた此の種の政治小說も、畢竟、歐洲文學の刺戟から出たのであつて、藤田鳴鶴の名で出した尾崎庸夫の『繫思談』も亦リツトンの小說 "Kenelm Chillingly: his adventures and opinions" を譯したのであつた。此の流行の潮合に乘り、藤田鳴鶴は『文明東漸史』を出し、矢野龍溪は『經國美談』を出し、始めて日本に於ける政治小說の序幕を開いた。明治文學の開山である坪內逍遙も、此の時代にシェークスピヤの『シーザー』を譯して出した。

科學小說は、井上勉が譯した『月世界旅行』『海底旅行』と云つたやうなものが出た。其の他外山ゝ山、井上巽軒の『新體詩抄』が明治十五年に出たのは、後の新體詩を興起させる種を蒔いたものであつた。それ等の現象を前半の時代に比較すると、大分、文學界が生氣附いて來たことを示して居た。

（九）第二期時代の文藝

第二期（十八年前後から日淸戰爭前後迄）に入ると、明治文學は、始めて其の出發點を見出し得た時代となるのである。それは、坪內逍遙が、明治十八年四月に『小說神髓』を出して、馬琴以來行はれて來た勸懲主義を小說界から一掃して、寫實主義を唱へたのに始まるのである。當時歐化思想が日本の上下を風靡して、何事も舶來を尊重した時勢であつたところから、文學も亦歐化的風潮の中に卷き込まれ始めた。而して何等か新しい文學を要求しつゝあつた世間、何等か新工夫を出さうとしつゝあつた若い文學志望者の群は『小說神髓』を讀んで、始めて小說の原理、意義及び創作の方針を知つた。それに續いて逍遙が『書生氣質』を出して、新しい小說の模型を示したので、若き人々は始めて文學上の自覺を喚び醒まされた。爾來、小說作家は何れも『小說神髓』と『書生氣質』の影響の下に、乃至は歐化的風尙の下に創作することになつた。其の第一に出たのは、長谷川二葉亭の『浮雲』であつた。この『浮雲』こそ、逍遙の小說に對する理論を略ぼ具體化した傑作であつた。それに讀いて文學雜誌『我樂多文庫』や、女學雜誌『以良都女』などが出た。『我樂多文庫』は、硯友社同人の機關で『以良都女』は山田美妙が主宰して居たのであつた。

此の期に入つて、小說界の新興氣運に乘り出したのは、硯友社の人々で、それに對立したのは、早稻田派、文學界一派、民友社の人々らであつた。個人としては幸田露伴、內田不知庵、齋藤綠雨、

長谷川二葉亭、森鷗外、森田思軒、山田美妙らが一方に雄視して居た。だが、小說界の一半は、殆ど硯友社同人の手に歸した觀があつた。硯友社の首領は、尾崎紅葉で、彼れは、最初、山田美妙と提携したのだが、中途で手を分つて、ひとり、同人の牛耳を執つた。其の同人中には、川上眉山、廣津柳浪、巖谷小波、江見水蔭、石橋思案らが居た。

紅葉は、最初、山田美妙と對立し、後、幸田露伴と對立して、小說界の覇を爭つた。紅葉の出世作は『新著百種』に出した『色懺悔』であつた。美妙は、紅葉に先立つて短篇集『夏木立』を出し、續いて『國民之友』に『胡蝶』を出した。露伴は、紅葉と前後して「都の花」に『露團々』を出した。此の三人が文壇の新人として、新しい小說界の曉鐘に促がされて現はれたのは、當時の鉅觀だつた。紅葉は、艶麗な著想と文致とを以て、美妙は嶄新な結構と文體とを以て、露伴は高邁な思想と熱氣ある文章とを以て、相對峙した。

ところが、美妙は、途中、落伍してしまつて、結局、紅葉對露伴の時代が來た。二人は、自然、競爭の形となつたが、彼我共に西鶴の文致に共鳴して、新しい雅俗折衷の文體を始めたのは同じだつたが、思想、傾向は、全くちがつて居た。紅葉は其の小主觀から出た色慾の世界戀愛の世界を描くに力めたが、露伴は佛敎思想から流れ出た意志の世界、狂熱の世界を描くに力めた。紅葉が『伽

羅枕』『二人女房』などを出すと、露伴は『五重塔』『風流佛』などを出して、一歩も讓らなかつた。

紅葉、露伴以外に於ては、鷗外の『舞姫』逍遙の『細君』柳浪の『殘菊』眉山の『墨染櫻』篁村の『むら竹』綠雨の『かくれんぼ』浪六の『三日月』樗牛の『瀧口入道』などが、有力な小說として知られた。飜譯では內田不知庵(今の魯庵)の『罪と罰』二葉亭の『あひゞき』『めぐりあひ』鷗外の『埋木』『惡因緣』『地震』思軒の『探偵ユーベル』などが宜かつた。殊に『あひゞき』は、ツルゲーネフの『獵人日記』の一節を巧みに譯したものとして『埋木』は、オシップ・シュビンの作を親切に譯したものとして、當時文壇の若い、目ざめた人々に深甚な印象と感化とを與へたのであつた。他に澁柿園の歷史小說、涙香の探偵小說などが、一般的な讀物として、認められたが、文學的價値は少かつた。

文藝批評が旺んになり始めたのは、此の時代であつた。『早稻田文學』『國民之友』『柵草紙』『文學界』などが、前後して出て、何れも文學評論を揭げた。創作と評論とは相俟ち、相依つて、文壇の進步を實現すべき二個の支柱である。大正の文壇では、評論が不振で、頗る權威のないものになつてしまつて居るけれども、當時は、寧ろ評論が旺んだつた。それは、文壇第一流の大家逍遙と鷗外の如き人が、評論壇に陣を張つた爲めでもあつた。此の二家が、沒理想論について、互ひに論戰を始めて、其の學殖、見識を示したことは、當時の鉅觀であつた。逍遙はあく迄も、イギリス風で科學的

批評を尊び、鷗外はあく迄も、ドイツ風で哲學的批評を好んで其の對照に深い興味を惹いた。其の他、透谷、不知庵、忍月、緑雨などの人々も評論壇に新しい活氣を加へた。それから傍系としての現象には、史傳が二十七、八年頃に流行した事や、歐化思想極盛に對する反動の現はれとしての國漢文の新研究、東洋哲學の推究及び美學に關する新説の發表と云つたやうなことも行はれた。

斯うして居るうちに、日清戰爭となつた。それは、當時にあつては、空前な大きな出來事で、國家の運命を賭すると云ふ上に人心が緊張した。而して國家思想が、それと共に濃度を加へて來た。愈よ日本が見事に支那に勝つと、國民的自尊心が頭を擡げて、世界に於ける日本の地位、東亞に於ける日本の使命と云つたやうなことが考へられて來た。また財界は好況を示して、人氣が引き立つた。其の影響は、自然、文學の上にも及んで、こゝに一轉機を劃すべき時が來た。第二期の文學的進歩は、大要、斯うした具合であつた。

(一〇) 第三期時代の文藝

第三期(日清戰爭前後から日露戰爭前後迄)に入ると、文壇の面目は、半ば以上、一新されて、若い人々が、續々出て來た。蓋し前期の文壇に行はれた小説を一貫して居た寫實主義は、皮相な狹小

なもので、其の題材も人生と沒交渉なものが多かつた。大抵、作家の小主觀や、嗜好を土臺として作りあげられた內容を持つたのが多かつた。斯うして、殆ど千篇一律に流れつゝあつたところから、評論家のうちには、それを非難する聲が高くなつて來た。勿論、撥剌小說の名を得た浪六物や、探偵小說は、左樣した缺陷を埋めるために出たのだが、低級で藝術的色彩に缺けて居たので、云ふに足りなかつた。而して文藝評論家は當時、思想界に起りつゝあつた日本主義の運動、世界主義の提唱と云つたやうな實際的な思想問題を考慮のうちに入れると共に、當時の作家に向つて、より深酷な小說、哲學的背景を有する深遠味ある小說乃至國民的小說と言つたやうな物を要求して止まなかつた。斯うした要求に應じて、先づ現はれたのが、觀念小說や、深刻小說であつた。

觀念小說、深刻小說の先驅者は、廣津柳浪、泉鏡花、川上眉山などであつた。柳浪は明治二十八年に出世作『黑蜥蜴』を出して以來、流行兒の一人となつて『河內屋』『今戶心中』『畜生腹』『靑大將』などを出して、殆ど紅葉を壓倒しようとする勢を示した。

泉鏡花は、紅葉の門人で、硯友社に於ける第二期の出身であるが、其の奇才は、早くも頴脫して、二十八年に『外科室』『夜行巡査』の二篇を出して、觀念小說の模型を示した。彼れは、これに依つて、文壇に認められたので、愈々力を其の方に傾倒して『化銀杏』『海城發電』などを出したが、三十年に

公にした『照葉狂言』三十一年に書いた『辰巳巷談』などに至つて、其の長所を遺憾なく發揮して、流行兒の一人に數へられて來た。

川上眉山は、二十八年に『うらおもて』を出して、觀念小說中の優秀作と認められた。彼れは、それに次いで『賤機』や『白藤』や『暗潮』などを書いた。斯うして、柳浪、鏡花、眉山の三人は、觀念小說の先驅たる觀があつた。ところが、同じ硯友社同人でも、江見水蔭は、また別な軌道を歩いて居た。彼れは『炭燒の烟』や『女房殺し』などを書いて、淸新な空想的な作品を見せた。だが、すべてに亙つて好奇心を動かし易かつた彼れは、旣に此の頃から、邪徑に陷らうとする傾向がほの見えて居た。

以上の諸家の他に文壇に出て、新人として活動したのは、樋口一葉、小栗風葉、小杉天外、後藤宙外、島村抱月、田山花袋などであつた。樋口一葉の作風は、極めて眞面目な態度の下に、人生を觀照して書いたところがあつた。在來の硯友社派らしいところもなければ、觀念派らしいところもなかつた。其の代表作『たけくらべ』『十三夜』などは、人生の不如意な一面が、さながらに出て居た。小栗風葉の作風は、紅葉に似たところがあつて、一體に濃艷で、才氣が溢れて居た。其の出世作は、三十一年に出た『戀慕流し』で、其の作を通じて流れて居るロマンチックな情熱は、當時の若い人々を動かした。『十七八』『臺下地』なども、濃艷を極めて居た。小杉天外は、ゾラに私淑して三十三年

に出世作『初姿』を出した。彼れが主唱したリアリズムは、一時、文壇を動かした。後藤宙外は、心理描寫を以て優れて居ると見られた。『思ひざめ』『ありのすさび』『闇のうつゝ』などは、彼れの特色を示したもので、何れも、二十八、九年頃に出た。島村抱月は『めをと浪』『墨繪草紙』などを出して作家としても、確かな手腕を有することを認められた。田山花袋は當時、文壇の一隅に介在して、戀愛小說に於て一特長を有した作家として稍認められたに過ぎなかつた。

觀念小說が行詰ると、時代精神論や、社會小說、家庭小說の呼び聲が起つた。それは當時の社會に於ける强い現實的傾向と一脈相通じたものであつた。新進作家の群は此の呼び聲に應じて社會小說に筆を染めた。風葉の『政黨』宙外の『腐肉團』などが、それだつた。また文壇の先輩だつた內田不知庵も、魯庵と號を改めて『片鶉』『霜くづれ』『暮の二十八日』などを公にした。次ぎに家庭小說は、今日の通俗小說と同じ味の物で、藝術味の乏しいものであつたけれども、一時、流行を來たしたところから、德富蘆花の『不如歸』菊池幽芳の『己が罪』中村春雨(吉藏)の『無花果』などが出た。それ等は、畢竟、時代の現實的傾向が求むるところに應じて出たのであるが、槪して、皮相に流れて、生きた人生に觸れたところが見出されなかつた。時代は、もつと深く、鋭く現實の人生に觸れたものを要求して止まなかつた。けれども作家のうちに、それに適應し得るものは、一人も居なかつた。

以上のやうな形勢であつたから在來の有力な作家は、何れも行詰つた形で煩悶しつゝあつた。紅葉は、頻りに批評家から嘲罵されたのを憤つて、二十九年に『多情多恨』を公にした。其の文體、內容も、彼れの在來のものに比較して、遙かに優れて居た。平淡で周匝な文致、平凡な些末事にひとしい事件と云つたやうなところが、殆ど作爲のあとを除くようにして老巧に書かれてあつた。彼れは更に三十年に入つて『金色夜叉』の長篇に筆を著けたが、これは、當時の批評家の要求や、社會の傾向や、時代精神などを一つに融化させようとして失敗した作だつた。けれども彼れが努力は、慥かに尊重された。露伴は、紅葉よりも一層行詰つた形で『新浦島』や『一日物語』を書いたが、時代思潮と觸れないやうなものだつた。最後に『天うつ浪』で復活しようとしたが、未完の儘、筆を捨てた。斯うした間にあつて長谷川二葉亭は、ツルゲーネフの傑作『浮草』を出して、侮り難い、獨自的な翻譯の筆を見せた。坪內逍遙は、劇文學の方面に向つて、『桐一葉』『牧の方』『沓手鳥孤城落月』などの新史劇を發表して、脚本革新の先聲を爲した。鷗外は『即興詩人』の翻譯乃至『玉手匣兩浦島』の劇作などに於て、彼れの存在を明かにした。

斯うして、當時の文壇は、第二期に比較すると、餘程、進步して、色彩が多樣になつて來て居た。勃興の氣勢にあるものは、ひとり小說ばかりではなかつた。劇界に於ける新運動は、既に二十八年

頃から、有力な芽を吹きかけて居た。俳句革新、長詩革新、短歌革新の新運動も亦強い氣勢を示して來た。文藝批評も抱月、樗牛、嶺雲、桂月らによつて、非常に勃興した。思想界に於ては、日本主義や、世界主義の新提唱を聞くと共に、一面、現實的で、一面、ロマンチツクな傾向が鮮かに流れて居たことも認めねばならなかつた。それ等の現象を分析し、湊合することは、極めてむづかしい。

だが、强ひて系統的に一つに纏めて見ると、社會に於ける强い現實的傾向に根ざした倫理研究、道德研究が行詰つて、懷疑的な風潮が旺んになると、個人主義、天才主義を背景としたロマンチシズムの潮流が、時人の不滿と苦悶とを除かうとして、第三期の後半卽ち明治三十三年頃から横流し始めて日露戰爭前まで續いた。在來の劃一的敎育の下に行はれた凡才主義、國家主義の名の下に抑へ附けられた個性、それ等の弊套を一掃し去るために、天才主義、個人主義が力說された。其の主唱者は、高山樗牛で、彼れの言說を有效に裏づけるべく、ニイチェ思想を鼓吹した。美的生活、本能滿足說なども、樗牛が眞先に唱へたのであつた。

此のロマンチシズムの時代は、やがて詩歌の時代であつた。短歌革新運動が先づ鐵幹、晶子、蕪園、柴舟、信綱らによつて行はれた。長詩の革新運動は、藤村、晩翠、泣菫、有明、羽衣らによつ

て行はれた。俳句革新運動は子規、鳴雪、虛子、碧梧桐らによつて行はれた。劇界革新運動の烽火は、逍遙、鷗外、月郊、春曙らによつてあげられ初めた。

ところが、樗牛の死と共に、それに代つて一時、綱島梁川の『見神の實驗』などに於ける詩的宗教思想が勢力を得たが、間もなく、日露戰爭が起つて、今までロマンチツクな、美しい空想を喜んだのを一排して、直ぐに現實の中に突入して、其の眞を摑み來らうとする自然主義運動が漸く行はれ初めようとしつゝあつた。斯うした有様が、第三期に於ける文學的進歩の行程であつた。

（一一）第四期時代の文藝

第四期（日露戰爭前後から大正末年迄）は、明治文學史に於ても、最も重要視すべき文學革新の時代である。卽ち自然主義の文學が、在來の文學に取つて代つた時代である。高山樗牛の言說其の他によつてロマンチシズムの時代、スツルム・ウンド・ドラングの時代が現出した後に自然主義が起つた行程は、歐洲に於ても、フランスの文學が、ユーゴーのロマンチシズムから、進んで、ゴンクール兄弟、フローベルらの自然主義に赴いたのと同じ趣が見える。

日露戰爭は、一面、國民の自尊心を高調したけれども、他面、悲痛な現實の姿をまざ〳〵と國民

の前にさらけ出した。德冨蘆花が唱說した『勝利の悲哀』と云ふことが、內面的な考へを或る一部の知識階級の人々に起させた。さうした眼で、此の現實を凝視すると、いろ〳〵の不滿や、不平が湧いてくる。其の不滿不平を取り除いて、充實した新しい生活に入るには、在來行はれて居た虛僞の道德、形式に囚はれた風習を一排して、赤裸々な眞實に面する必要が起つてくる。これは、ひとり、當時の社會や、生活や、思想の上に感ぜられたばかりでなく、文學上に於ても、同樣に感ぜられた。そこに自然主義が勃興すべき可能性があつた。

だが、他にも、自然主義が發生せねばならぬところのいろ〳〵の原因があつた。それは拙著『明治大正五十三年史論』のうちに於て說述した通り、思想的方面では(一)科學尊重の精神が擴充された爲め(二)プラグマチズムや、ヒユーマニズムの影響を受けた爲め(三)在來、行はれた詩的宗教思想や、唯心的哲學や、形式道德に滿足しないで、直ぐに個人的自覺の徹底境に入つて、人生の眞を把握せんがためであつた。更に文學的方面では(一)歐洲大陸文學の影響を受けた爲め(二)在來の遊戲的、空想的の弊に囚はれたり、小主觀に偏したり、作爲のあとが著しかつたりした文學を破却して、眞面目に赤裸々の人生と現實とを虛飾なく表現しようとした爲めであつた。

以上のことについて註脚を加ふれば、思想的方面では、十九世紀から二十世紀にかけて、科學が

最も尊重された結果、精密な窮理的方法から出發した機械的、唯物的な人生觀が强い勢力を持つて來た。それで人生現象を研究するにも、一定の方式を以て、科學的に見ようとする風が旺んになつて、善よりも、美よりも、第一に眞を把握せねばならぬと云ふ歸結に到達した。自然主義の根柢は主としてこゝにあつた。それに一脈の生氣を加へたのは、イギリス、アメリカなどで起つたヒューマニズム、プラグマチズムであつた。此の學派は、實際生活や、現實生活を何よりも尊重せねばならぬことを力說して、根本から、現實生活に突き入らねばならぬ精神を高調したのである。

文學的方面について云へば、明治の文壇はいつも、歐洲文學の輸入によつて、新しい刺戟を得て居たのであるが、日露戰爭前後の時代に、フランスのゾラ、バルザック、フローベル、モーパッサン、ゴンクール兄弟を始め、ドイツのズーデルマン、ハウプトマンなどの作品が、旺んに紹介されたことが、日本の少壯な文學者の一部を刺戟して、自然主義思潮に感染させたのである。明治文壇に於ける自然主義の主唱者とも云ふべき田山花袋は、夙に歐洲文學を熱讀して、新しい文學的風潮に接觸して居たところから、明治三十五年頃『アカツキ叢書』へ『重右衛門の最後』を書く前に文學、雜誌『新聲』へ、歐洲に於ける自然主義の文學を紹介すると共に、露骨な描寫の必要をも說いたのであつた。

けれども當時は、未だ花袋の說に耳を假さうとしなかつた。自然主義が眞に勢力を得るやうになつたのは、日露戰後のことで、三十九年頃だつた。最初は、單に文學上に於ける新運動に過ぎなかつたけれども、其の舊套打破、個性發揮の精神は、思想界、敎育界などにも、大きい波動を及ぼした。窮屈な範疇に嵌つた敎育や、超越的に窮屈になつた哲學や、舊生命の殘骸に過ぎない宗敎などを破却して、もつと、新時代に適應した自由な、自然な生氣あるものとしようとした。それは、自然主義の長所であつたが、一面に於て、其の無理想、無解決を標榜した機械的人生觀が、自棄的、虛無的な思想を誘致しようとしたのは、一つの弊害であつた。

自然主義を基調とした文學が文壇を占領し始めたのは、明治三十九年頃から四十年にかけてであつた。三十八年には、先づ自然主義の先聲を爲した國木田獨步の『獨步集』が出た。其の翌年には、藤村の『破戒』が出た。續いて、花袋の『蒲團』白鳥の『紅塵』靑果の『靑果集』などが出た。次いで四十年には、文壇の一大廻轉が行はれた。自然主義是非の論が、到所に起つた。島村抱月、長谷川天溪、岩野泡鳴などは、自然主義に味方した。後藤宙外らは、非自然主義を主張して、自然主義の上に烈しい論難を加へた。けれども時代精神の歸嚮するところは、自然主義の勝利に歸して、二十年來、文閥を固持して居た硯友社派は、大抵、文壇の外廓へ押し出されて、新しい作家が、續々、頭角を

捧げ出して來た。

此の文壇の廻轉期に於て、最も目ざましく働いた人々には、藤村、花袋、白鳥、青果を始め、風葉、秋聲などが居た。風葉は『青春』『戀ざめ』に於て、秋聲は『出産』などに於て、自然主義運動に力を添へた。次ぎに評論に於ては、抱月の『囚はれたる文藝』天溪の『幻滅時代の藝術』泡鳴の『神祕的半獸主義』などが、自然主義を高調した。殊に抱月は、共の後も、續々、此の方面に於ける有力な論文を發表して、自然主義確立のために健鬪した。斯うして、自然主義は、文壇を風靡して、一期を劃するに至つた。

長詩(新體詩)の如きも、矢張、自然主義の影響の下に起つた。相馬御風、三木露風らは、現實に即した詩を作つた。國語詩の提唱なども、矢張、自然主義運動と一脈、相通じた點があつた。北原白秋らが、都會情調を歌ふやうになつたのも、上田敏が民謠詩のことを唱へ出したのも、矢張、歸するところは、自然主義的風潮に共鳴した爲めだつた。短歌、俳句なども、勿論、長詩と同じやうな影響を蒙らざるを得なかつた。

斯うして、自然主義の勢は、愈々旺んになつて、第四期の後半期には、藤村の『春』と『家』花袋の『田舍敎師』や『生』『妻』『緣』などの三部作、獨歩の『濤聲』『第二獨歩集』秋聲の『黴』『足痕』泡鳴の『耽

溺』虛子の『俳諧師』二葉亭の『平凡』などが出た。それと同時に、自然主義の脈を繼承した新しい作家が續々出て、文壇は、潑剌たる生氣に滿たされた。

當時、自然主義運動と全く離れて、別な道を歩いて居た人々に夏目漱石、森鷗外、高濱虛子、永井荷風などが居た。漱石は『吾輩は猫である』の一作によつて、大名を文壇に馳せて以來、『虞美人草』『三四郎』『門』などを出して、低徊派の首領となつた。虛子は『俳諧師』を書いて、作家としての力量の優れたことを示した。鷗外は『ギタ・セクスアリス』『あそび』『靑年』などで、其の老練な技巧を見せた。荷風は都會人の、享樂的傾向を示した作品『あめりか物語』『歡樂』『冷笑』などを出した。

評論では、此の後半期に相馬御風、片上伸などが、抱月の麾下にあつて健鬪した。生田長江も亦氣の利いた批評を書いた。だが、抱月が此の時代に於ける覇者であり、リーダーであつた。詩歌の方面は、一體に稍沈靜して、蒲原有明、三木露風、北原白秋、石川啄木、吉井勇、前田夕暮、若山牧水、金子薫園、土岐哀果などが、最も活動して、詩壇を賑はした。

（一二）　劇界の新運動

小說界に於ける自然主義運動の花々しかつたに對して、少しも譲るところがなかつたのは、此の

期に於ける劇界革新運動であつた。其の先驅となつたのは、坪内逍遙が實際上の指導者をした文藝協會であつた。當時、逍遙は、三十七年に『新樂劇論』や『新曲浦島』を發表して、劇壇の注目を惹いたが、更に三十八年は『新曲赫哉姫』を出し、續いて、三十九年に文藝協會の發會式を擧行した。其の主なる演技は雅劇『妹脊山』史劇『孤城落月』などであつた。同じ年の十一月には、歌舞伎座で、第一回公演を催して『桐一葉』や『ヱニスの商人』などを上演した。此の風潮に刺戟されて『東京毎日』の文士劇が第一回公演を開いた。

それ等と併行して、新しい脚本も續々出て來た。中村吉藏の『牧師の家』佐野天聲の『意志』『大農』山崎紫紅の『七つ桔梗』青果の『第一人者』などが其の主要なものであつた。それらの人々に續いて、新しい劇作家の群も、頭角を擡げ出した。秋田雨雀、長田秀雄、木下杢太郎、楠山正雄、吉井勇などは、何れも清新な内容と技巧とを示した。

それと前後して、文藝協會の新運動は、著々、成功して、イプセンの『人形の家』や、ズーデルマンの『故郷』などを上演すると共に、東儀鐵笛、松井須磨子、土肥春曙などの新しい優人を育てあげた。文藝協會に對して稍別な方向を執つて、新劇革新を企てたのは、市川左團次、小山内薫の自由劇場であつた。其の第一回公演には、イプセンの『ボルクマン』を演じ、第二回には、エデキンドの

『出發前半時間』鷗外の『生田川』チエホフの『犬』などを演じて、若い人々に強い共鳴を起させた。其の他、新時代劇協會、新社會劇團、土曜劇場、東京俳優學校の試演などが、新劇發達に身方して、相當の功果を收めた。さうした新運動に刺戟された尾上菊五郎、中村吉右衛門らは、近松劇の新演出などを試み、川上貞奴や、帝國劇場の當事者などは、女優の養成に力を入れて來た。

以上は、第四期に於ける文學的進步の大要である。小説も、長詩も、脚本も、劇壇も、評論壇も、多事を極めて、共の現象が極めて複雜である。明治文學史上に於て、これほど緊張した時代は前後にないと云つて宜い程だ。すべてが眞劍になり、眞面目になり、內部生命の充實を尊重して來たことが、際立つて見えて來たのである。

（一三）　第五期の文藝

第五期（大正末年前後から大正十年迄）は、第四期に比較すると、稍緊張を缺いた趣がある。けれども文學的進步の上に於て、相當に重視しなければならぬ新しい現象をも生んだ。此の期には、自然主義が行けるところ迄行つてしまつて、文學も、社會もある程度迄、自然主義の洗禮を受け終ると、いろ〳〵の餘弊が、釀されて來て、自らいろ〳〵の分派が出來るやうになつた。殊に思想界に

於ては、早くも、ネオ・アイデアリズムが、明治末年から根ざし始めて、此の期に入つて、一時流行した。

蓋し自然主義が齎らした舊套打破や、自我擴充や、幻滅的、無解決的、物質的な思想は、行きつくすところまで行きつくすと、暗さ、淋しさに堪られない感じを與へた。あるものは、自己の力のみを恃もうとしたが、それ丈では、たよりないと云ふ感じを與へた。あるものは、強ひて一種の宿命觀に落著かうとしたが、それも、矢張。暗いものに過ぎなかつた。あるものは、虛無思想に安住しようとしたが、矢張、長い間、堪へられなかつた。一部の文學者や、知識階級は、それでも尙ほ自然主義脈を固持して、懷疑的な、虛無的な態度を渝けて行かうとしたが、大多數の人々は、それに滿足し切れなくて、明るい希望のある方へ、何等かの新解決乃至新理想のある方へ出てゆかうとした。換言すれば、無理想に對する有理想、無解決に對する有解決、物質的人生觀に對する精神的人生觀、幻滅的な考へに對する非幻滅的な考へを要求するやうになつた。此の要求に應じたのが、ネオ・アイデアリズムである。

ネオ・アイデアリズムの意義、內容は、在來のやうに超越的な、空漠な理想主義を指すのではなかつた。それは、一度、自然主義の洗禮を受けて、更にそれを超越した新理想主義であることを意味

した。そこに新しい生命があり、積極的な力があつた。少くとも、ネオ・アイデアリズムの主張者は、斯く信じた。此の思想の源流となつたのは、ドイツのオイケン、フランスのベルグソンであつた。

オイケンの思想は、比較的に理解され易かつた。其の哲學は、外面的、物質的、皮相的に人を導く方向へ傾き過ぎて居た自然主義の弊を一排して、內的生命、內的統一の必要を力說した。卽ち外への自我發展よりは、內への自我發展のより有用なことを肯定して、そこから精神生活の新しい世界を作り出さうとして、小我を排して眞我につき、本能生活を排して、道德生活に進み、廣い、明るい、自由な精神界へ出てゆかうとした。而してこれによつて新しい內的生活を創造し、建設して日に〳〵新しく、日に〳〵充實して働けと敎へた。

ベルグソンの思想は、オイケンに比較すると、稍理解し難かつた。彼れは『創造的進化』のうちに於て、物心兩界の現象は、一定の時と形とに捕へられて、唯單純に働き、移りゆくやうに見えるけれども、深く推考すると、そこに絕へざる進化の流れがあつて、どれも、これも、一時一刻でも、同じ形、同じ有様のうちに流轉しないで、過去の形や、有様を存すると共に、絕えず、新しい形や、有様を創造して進歩しつゝある。そこから、新しい動的な生命が湧いて出ると說いた。

斯うして、オイケンとベルグソンの思想は說き方及び內容を異にするけれども、新人生の創造、

新生命の開展を高調する上に於ては、同じ傾向を示して、懷疑と沈默とに惱む自然主義の弊を一排する上に强い力となつた、暗さと淋しさと包まれて居た人々に、希望と活動との光りを與へた。

斯うして、ネオ・アイデアリズムが、思想界を風靡すると共に、大正の文學も亦其の影響を受けて、在來の自愛に對する博愛、他愛を標榜するところの人道主義や、唯美主義乃至、享樂を主とする都會情調を帶びた傾向や、在來の無技巧に對する新技巧を唱ふる一派や、社會主義的作品を提供する群や、書齋に籠つて懷疑に沈んで居るよりも巷へ出て、社會改造、政治改造をやらうとする一派が起つて來た。もう彼等は、自然主義の繋縛から離れて、各自、自由な道を步かうとしたのである。

以上のやうな、いろ〳〵の流派が出來たが、此の期の前半を支配したのは、人道主義、享樂主義、唯美主義の作品であつた。人道主義は『白樺』一派の人々が主張して、其の主要な役目を働いたのは、武者小路實篤、志賀直哉、有島武郎などであつた。享樂主義の作品を提供したのは、永井荷風、吉井勇、長田幹彥、近松秋江などで、彼等は、新しい花柳文學を書いて、一時文壇を明るくした。唯美主義の作品に於て、成功したのは、谷崎潤一郎、北原白秋などで、殊に潤一郎が書いた初期の小說中には、嘆美的傾向が『刺青』などに於て、最も鮮かに示されて居た。

後半期に入ると、文壇の潮流は、目まぐるしく動いて、殆ど混戰狀態に陷つた。勿論、人道主義、

唯美主義の傾向を帶びた作品も續いて出たが、それと共に『人間』一派の新技巧說、批評家、作家の一部が主張したネオ・ロマンチシズム乃至社會主義的色彩を背景としたものなども、それ〴〵文壇に迎へられた。けれども第四期の全般が、自然主義下に支配されたのとは、ちがつて、流派が、いろいろに分かれ、底止するところがないと云つたやうな有樣になつて來た。强ひて後半期の文壇を一貫する主流を探るならば、矢張社會的民衆的色彩若くは社會主義的な傾向が、餘程、深く出て來たと云つて宜いかも知れない。島田淸次郎、加藤一夫、小川未明、江口渙らの一派は、社會主義的な作品を提供する上に於て、文壇に新しい色彩を加へた。だが、此の兩三年來、文壇の一部に殘存し若くは寄生して自然主義の餘脈を追ふ末流の徒や、駄洒落、輕口に似た風の冗漫な小說を書く手合などが文壇の潮流を濁らせて、似非寫實主義の非難を喚起したのは、やがて大正十年前後に於ける文壇の停滯とそれを打破るべき何等かの新しい流れを必要とすることを示すやうに思はれる。

（一四）　文壇と社會の接觸

此の期に於ける文壇の人々が、社會改造の上に何等かの貢獻をしようとしたことは、在來に見ない現象であつた。日本に於ける社會改造の機運は、大正六年の頃から、正に成熟し始めて居た。其

の改造の聲に逸早く、目ざめたのは、社會的色彩を有した一部の文人であつた。拙著『明治大正五十三年史論』の附錄『大正時代の文化』のうちで、私は、それに言及して『彼等は敏感で、反撥し易い神經と感情とを持つてゐる。其の心と眼とが、政治又び社會に向けられると、其處にいろ〳〵の缺陷を見出した。それで、大隈內閣の時代に、文士の中から、三、四人が立候補を宣して、選擧場裡へ打つて出た。それは、大抵失敗に歸して、一部の嘲笑を買つたけれども、其の政治革新の意氣と熱誠とを有して居たことは、決して嘲笑すべきものではなかつた。彼等にも、種々平生からの用意が足らない缺點があつとしても、書齋から街頭へ出ようとした意氣は、多としなければならなかつた。』と述べた。此の文學者の政治運動と共に、評論壇は、在來のやうな文藝のみの言議に沒頭しないで、政治問題、社會問題にも筆を著けて、其の改造的意見が、田中王堂、內田魯庵、大杉榮、生田長江らの人々によつて發表された。

少し、順序が前後するが、大正年間に於ける後半期の思想界を一瞥すると、今迄ネオ・アイデアリズムに固著して居た思想界は、デモクラシーの思想乃至社會主義的思潮に感染し始めた。文壇でも人道主義、唯美主義の思想に取つて代らうとしたのは、社會主義的思想やデモクラシーの思想であつた。大正時代の後半は、それの研究と論議とによつて、思想界を賑はした形であつた。最近、そ

れらに對して、新國民主義乃至文化主義が唱へられて、一は國家的に、一は内在的に思想界に改造の新生命を吹き込もうとしつゝある。畢竟、人道主義や、民本主義や、唯美主義の思想だけでは、社會を改造するわけに行かないところから、文化主義や、社會主義や、新國民主義の思想が、入り亂れて、先づ思想的、社會的に改造の實をあげようとするに至つた。

社會主義思潮は、堺利彦、賀川豐彦其他いろ〳〵の新人が、それを宣傳しつゝある。文化主義思潮は、金子筑水らが、早稻田派の人々と共に宣傳しつゝある。新國家主義思潮は、岩野泡鳴が前にそれを唱へ、今は吉江孤雁らが主張しつゝある。社會主義一派の思想は概して外形的、物質的改造を主眼とし、文化主義一派の思想は、內部的、精神的改造を主眼とし、新國家主義一派の思想は國家を中心として、それに新しい解釋を下して、新しい生命を吹き込むことを主眼としつゝあるやうに思はれる。此の三つの流れが、どう云ふ風に融化するか、或は反撥し合ふか、それは、今後の形勢に徵するよりほかはない。

（一五）　第五期時代に於ける劇壇と詩壇

此の期に於ける劇壇及び詩壇の收穫は、どうであつたか。劇壇は、勿論、一進一退があつたけれ

ども、新劇開拓の歩みを續けて、相當の進歩を實現した。それは前半期に新しい劇團が續々、生れたのでもわかる。近代劇協會、公衆劇團、舞臺協會、藝術座、狂言座、黒猫座(文藝座の前身)無名會、新時代劇協會、吾聲會などは、各自、新劇開拓の上に盡した。

共のうちで、前半期に最も活動したのは、藝術座と無名會とであつた。藝術座は、抱月の指導の下に松井須磨子の一派が、新劇趣味を普及する上に大きい功績を殘した。無名會は、逍遙の指導の下に、東儀鐵笛の一派が、新しい脚本と共に新しい藝風を創始して、どこ迄も紳士的な氣品を見せた。尾上菊五郎、守田勘彌、市川猿之助らは、それに刺戟されて、新劇方面に努力し始めたが、共の熱心は、寧ろ後半期に入つて現はれて來た。勘彌の文藝座、猿之助の春秋座などが、それである。東儀鐵笛が、伊井一座を脱して、新文藝協會を組織して、逍遙の『法難』を上演したことも、鐵笛が終始一貫して渝らない努力を思はせた。要するに、一時、新劇は、沈滯しかけたが、此の一兩年來頓に生氣を吹き返して來たのである。作家側も、劇作家協會を創設すると共に、中村吉藏、山本有三、長田秀雄、秋田雨雀、菊池寛らの新しい活動を見るに至つた。

詩壇は、散文的な時代のために萎靡してしまつて居るけれども、最近、稍生氣を帶びて來た。共の前半期は、北原白秋、三木露風の時代であつた。後半期は、民衆詩の時代に入つて、ホイツトマ

ンやトラウベルの詩などが歡迎されて、詩が民衆化して來た。歌壇も亦同樣に民衆化したが、矢張長詩や、短歌は、純な藝術味を中心とする上から、其の民衆化は、長詩や、短歌を墮落させたやうな傾きが一部に見えないではなかつた。此の期の民衆詩人としては、福田正夫、室生犀星、千家元麿などが、認められて來た。だが、詩壇の流派も、いろ〳〵にわかれて、西條八十、日夏耿之助などが出て、其の主流と云ふやうなものがなくなつて、各自、自由に其の個性に從つて、新しい藝術味を創造してゆく傾きになつたやうに思はれる。

以上は、第五期に於ける文藝的進歩の大要である。此の期に於ける現象も、第四期と同樣、可なりに複雜で、而も變化が著しく多くなつて來たので、簡約に全內容を包括し得ないところがある。單に文壇に於ける有力な個人の上にも、いろ〳〵の變動があつて、一々、述べつくされない。細說は、すべて本書の下卷に於ける第五期のうちに於てしたい。

（一六）結　論

明治、大正の文學は、五期に分つて、大體の印象を說いたが、其の進步が、他の事業に比して一番、目ざましいと云ふとは、誰の眼にもわかるであらう。全體として、歐洲文學や哲學の影響が、

どの期にも見出されると云ふことが、際立つた特色である。それがため大正の日本は、未だ眞にわが國獨自の文學を創造するところ迄至つて居ないけれども、其の要素は、既に醱酵しつゝあるから、遠からず、日本獨自の文學を生産する時代が來るであらう。

第壹期　舊套撲守時代

第壹章　英米功利思想の流入と啓蒙運動

（一）大變革の時代

明治維新の夜は略ぼ明けはなれて、日の出前が近附いたが、文學の日の出前は未だ來ないと云ふのが、第一期に於ける前半（明治元年から十年迄）の光景であつた。維新革命によつて、舊制度舊文物の大半が、破壞されて、新文物、新制度を打建てなければならぬ時代には、先づ政治、經濟其の他、實生活に必要な新知識の需要が切に感ぜられる。一口に云へば、日本を富强ならしむるため、文明開化の新時代を造る必要に迫られた。

明治の新政府は、今まで行惱んで居た對外關係を解決して、全然開港主義を執ると共に、有名な五事の詔勅を奉戴して、政治的、法制的、物質的の大改革を始めた。勿論廢藩知縣が斷行される迄は、新政府も、安心して、新しい仕事が出來なかつたが、それが斷行された後は、どし〳〵改革の歩を進めた。それは、實に急激なものだつた。

新政府の要路に起つた人々は、先づ政府を維持してゆく基礎とも云ふべき財政上の紊亂を整理し

て、大きい改革を加へた。次ぎに軍事上の革新を企てた、徴兵制度を確立すると共に、海軍條例を制定した。教育上に於ては、小學校の創設や、義務教育の方針を定めた。法制上に於ては、改定律令を公布して、新しい民法、刑法、商法などを作つた。

改革と創設とは、尙ほ續々出て來た。新政府は、在來の階級制度を打破つて、四民平等を宣すると共に、穢多非人の稱號を撤廢して、普通の平民に伍せしめた。また平民と華族及び士民と外人との結婚を許可した、百姓町人にも、苗字を呼ぶことを許した、人民の土地賣買を許して、其の所有權を認めた。斷髮令と前後して、士族の脫刀隨意をも布告した。

更に物質文化を象徵した電信の基礎が確立した、京濱間に鐵道を布設して、汽車が其の間を走り始めた。比較的に精密で便利な太陽暦が採用された。新聞雜誌が次第に發行される、留學生が歐米へ出かける、元老院や大審院が設けられると云つた風で、改革と創設とが、どの方面にも併行して續いた。

以上の改革、創設は、大抵、歐米文化のうちに、其の範を求めたのであつた。陸軍は、フランス式で、海軍は、イギリス式であつたやうに、教育は、アメリカ式を學んだ。文藝が、歐米の感化を絕えず、受けたやうに、政治、經濟、教育、學術も、矢張、歐米の感化を受けざるを得なかつた。

而していろ〳〵の改革のうちで、特に重要視せねばならなかつたのは、四民平等を布告した事と徴兵制度を確立したことであつた。士族の特權は、それがために大半を失つて、平民階級の權利が、一層、伸暢されるやうになつた。軍隊が士族のみによつて組織された時代は、これと共に過去の夢となり始めた、百姓でも、町人でも軍隊の一員として、護國の任務に當るべき新しい時代が來た。

此の新しい時代に適應してゆくために、どの人々も忙はしかつた。文明開化と富國强兵と云ふことの前には、誰も彼れも夢中だつた。さうした中に、士族階級の大半が、改革の氣勢に反抗しようとする景色も見えて、新舊思想の衝突が、到るところに行はれて居た。だが、保守主義による舊勢力は、時代の潮に逆行するものであるから、彼等の大半は、西南戰爭と前後して亡びてしまふか、屏息してしまつた。進歩主義による新勢力は、急潮のやうな勢で全國に漲つた。文明開化の聲は、到るところに響き渡つた。富國强兵の叫びは、至るところに聞えた。

斯うした多忙な變革時代に當つて、文藝が閑却されたのは、止むを得ないことであつた。實利思想の前には、文學も、美術も、何等の價値を認められなかつた。政府は、新道德や、新倫理や、新藝術を得るよりは、主として、實利を眼目とする學問を要求した。物質上に於ける文明の利器をのみ要求した。一般の民衆も亦それに共鳴して、電信や、汽車や、汽船や、石版刷の洋畫や、ブリキ

製、ガラス製の日用品を嘆稱すると云つた風だつた。洋服と帽子と牛肉とは、當時の新人が、最も誇りとしたものであつた。今日から考へると、不可解のやうであるけれども、新しい文化を象徴したいろ／＼の器具や、服裝が、好奇と珍重との念を以て、歡迎されたのは進歩的な異國情調を愛して來た日本國民としては、當然のことであつた。彼等は、爭うて、外來の新刺戟に適應したのみならず、それをわが物として、消化しようとあせつたのだ。」

（二）英米功利思想の流入

當時、性急に文明開化を實現しようとするところの時代精神の要求に應じて、澎湃とした大波のやうに入り來つたのは、實利を主眼としたイギリス思想、アメリカ思想である。蓋し江戸幕府時代に於ける歐洲文化は、主としてオランダ人の手によつて、日本に傳へられたけれども、幕末時代に入つて、アメリカの水師提督ペルリが、日本へ來てから、アメリカの文化が、自然、わが國に流入した。それと共に、東西兩洋を通じて、一番廣大な版圖を擁して、世界第一の海上王と稱せられて居たイギリスの國語が、最も廣く用ゐられて居た關係からと、伊藤、井上らの維新元勳の人々が、イギリスへ早く留學した關係からとによつて、イギリスの文化が、アメリカ文化と前後して、わが

國に流入した。而してオランダの勢力は、全く一掃されてしまつて、アメリカとイギリスとが、文化的に日本に深く影響すると云つたやうな有樣になつて來た。

それに明治初期の日本が、眞先に求めて居たのは、實利的文化で、アメリカ、イギリスから流入したのも亦それに適應するところの實利思想、實利的文化であつたところから、双方、ぴたりと一致した趣があつたのだ。斯うした時代の潮勢に乘つて、アメリカ文化、イギリス文化を鼓吹したのは、慶應義塾の創設者である福澤諭吉及び同人社を立てた中村敬宇の二人であつた。

福澤諭吉は、天保五年十二月十二日、豐前中津奥平藩に生れた。彼れの父百助は士族中の下級に居たが、人物、學問は、相當に優れて居た。『福澤自傳』のうちに「其書遺したものなどを見れば、眞實正銘の漢儒で、殊に堀河の伊藤東涯先生が大信心で、誠意誠心、屋漏に愧ぢすといふこと許り心掛たものと思はれるから、其遺風は自から私の家には存して居なければならぬ。」とあるのを見ても、略ぼ其の人物がわかる。福澤は、安政元年二月、二十一歳の時に、オランダの書物を讀まなければ、西洋の文物が一向わからぬと痛感して、大阪に出て、緒方洪庵の塾に入つて、オランダ語を學習した。其の後、安政五年、二十五歳の時、江戸へ出て、苦心して、イギリス語を學んだ。斯うした素養を積んで、翌年、幕府の使節に隨つて、アメリカに行き、後、歐洲を巡遊して歸朝したが、慶應三年、またアメリカへ赴いて、歸つてから、慶應義塾を立てた。

福澤諭吉は、明治時代に於ける豫言者であり、改革者であり、平民的學者であり、平民的文人で

あり、また獨立自尊の精神を體現した大平民であつた。彼れは、新しい日本が、どう云ふ方針を執つて進むべきかを豫言すると共に、どう改革すべきかを敎へた。それがために、彼れは等身の著述を世に出した、彼れは慶應義塾に於ける多くの學徒を育てあげた。敎育と著書との二面を通じて、彼れは、イギリス、アメリカの新文明を鼓吹した。また峻烈な言語、文章を以て、舊道德、舊風俗、舊習慣を破壞するに力めた。

（三）　福澤諭吉の文明觀

福澤の目的、主眼は、日本が、歐米と同じ水平線に起つを得べき文化を具へさせようとする上にあつた。即ち彼れが、其の著書のうちに於て、屢々、繰返したところの『文明』の根基を日本に植ゑ附けようとすることを第一の任務だと感じた。其の『文明』は、當時の政府が、考へて居たやうな武力的乃至機構的のものばかりではなかつた。その上へ更に『文明』そのものを生み出す基調であるところの精神的文化を加へたものを意味して居た。彼れは、有形の文明を愛しないではなかつたが、より多く無形の文明を愛した、物質文化よりも、精神文化を重く見た。

福澤を解しないものは、彼れは唯物的人物と速斷して、物質文化を高調したやうに思ふけれども

彼れの本心は、主として、精神文化を高調しようとする上にあつた。彼れは『文明論の概略』のうちに於て「近來我國に行はるゝ西洋流の衣食住を以て、文明の徴候と爲す可きや、斷髮の男子に逢て、これを文明の人と云ふ可きや。肉を喰ふ者を見て、之を開化の人と稱す可きや。決して然る可らず。或は日本の都府にて、石室鐵橋を模製し、或は支那人が俄に兵制を改革せんとして、西洋の風に倣ひ、巨艦を造り、大砲を買ひ、國内の始末を顧みずして、漫に財用を費すが如きは、余輩の常に悅ばざる所なり。是等の事物は、人力を以て作る可し、錢を投じて買ふべし。有形中の最も著しきものにて、易中の最も易きものなれば、之を取るの際に當ては、固より前後緩急の思慮なくして可ならんや。必ず自國の强弱貧富に問はざる可らず。卽ち或人所云の人心風俗を察するとは、此事なる可し。この一段に就ては、余輩固より異論なしと雖ども、或人は唯文明の外形のみを論じて、文明の精神をば捨てゝ問はざるものゝ如し。蓋し精神とは何ぞや、人民の氣風卽是なり。」と云つて、先づ精神文化に力點を附すべきを主張して居る。而して更に一步を進めて「此氣風は賣る可きものに非ず、買ふ可きものに非ず。又人力を以て、遽に造る可きものに非ず。洽ねく一國人民の間に浸潤して、廣く全國の事跡に顯はるゝと雖ども、目以て其形を見る可きものに非ざれば、其存する所を知ること甚だ難し(中略)文明の精神とは、或はこれを一國の人心風俗と云ふも可なり。これに由て

考れば、或人の說に西洋の文明を取らんとするも、先づ自國の人心風俗を察せざる可らずと云ひしは、其字句足らずして、分明ならざるに似たれども、よく其意味を砕て、これを解くときは、即ち文明の外形のみを取る可らず。必ず先づ文明の精神を備へて、其外形に適す可きものなる可らずとの意見を述べたるものなり。今余輩が歐羅巴の文明を目的とすると云ふも、此文明の精神を備へんがために、これを彼に求るの趣意なれば、正しく其意見に符合するなり。唯或人は文明を求るに當て、其形を先にし、忽ち妨碍に逢て、其妨碍を遁るゝの路を知らず、余輩は、其精神を先にして、豫め妨碍を除き、外形の文明をして入るに易からしめんとするの相違あるのみ。」と云つて居るのを見ても、福澤の意のあるところがわかる。此の精神文化と云ふことは、彼れが『學問のすゝめ』に於ても亦力說した點であつた。

彼れが、尊重したところの精神文化は、智德そのものであつた。勿論、其の唱說して居る智德は在來のやうなものではなくて、そこにイギリス流の新解釋が施されてあつた。彼れは、それに就て『文明論之概略』に於て「德とは、德義と云ふことにて、西洋の語にて「モラル」と云ふ。「モラル」とは心の行儀と云ふことなり。一人の心の內に慊くして、屋漏に愧ざるものなり。智とは智慧と云ふことにて、西洋の語にて「インテレクト」と云ふ、事物を考へ、事物を解し、事物を合點する働なり。

又此德義にも、智惠にも、各二樣の別ありて、第一貞實、潔白、謙遜、律義等の如き一心の內に屬するを私德と云ひ、第二廉恥、公平、正中、勇强等の如き外物に接して、人間の交際上に見はるゝ所の働を、公德と名く。又第三に物の理を究めて、之に應するの働を利智と名け、第四に人事の輕重大小を分別し、輕小を後にして、重大を先にし、其時節と場所とを察するの働を公智と云ふ。」と說いて居る。公德と私德、公智と私智とを區別したのは、當時に於て、新しい、進んだ考へだつた。而して彼れは、近代主義の傾向を追うて、特に公智を第一に尊重した。知識的と云ふことは近代主義の一大要素である。

それで、彼れは、公智を尊重する理由に就て「德義は一人の行ひにて、其功能の及ぶ所は、先づ一家內に在り(中略)智惠は則ち然らず。一度び物理を發明して、これを人に告ぐれば、忽ち一國の人心を動かし、或は其發明の大なるに至ては、一人の力よく全世界の面を一變することあり。「ゼームス・ワツト」蒸汽機關を工夫して、世界中の工業これがために其趣を一變し、「アダム・スミス」經濟の定則を發明して、世界中の商賣これがために面目を改めり、其これを人に傳るや、或は言を以てし、或は書を以てす可し。一度び其言を聞き、其書を見て、之を實に施す人あれば、其人は正しく「ワツト」「スミス」を生ず可し。其傳習の速にして、其行はるゝ所の領分の廣きは、彼の一人の德義

を以て、家族、朋友に忠告するの類に非ず。」と云つて居る。勿論、彼れは「私德は地金の如く、聰明の智慧は細工の如し。」と云つて居る通り、德義を輕視したのではなくて、日本の文明を速進する上から、一層、智慧を重んじたのである。そこに知識的な近代主義者としての彼れの面目が出て居た。だが、彼れの求めたところの智慧は、實用的な智慧であつて、哲學的な智慧ではなかつた。應用的な科學であつて、超應用的な科學ではなかつた。約言すれば、何處迄も、功利的色彩を帶びて居た。主として、イギリス思想、アメリカ思想の感化を受けた彼れが、こゝに赴いたのは、當然の歸結であつた。

（四）福澤の啓蒙的、改造的運動

福澤が抱いて居た文明思想の大要は、以上の通りであるが、それを實現するには、第一に實學を尊重して、國家に獨立の氣象があり、人民にも獨立の精神がなければならぬとした。それで、彼れは『學問のすゝめ』に於て「一科一學も、實事を押へ、其事に就き、其物に從ひ、近く物事の道理を求めて、今日の用に達すべきなり。右は人間普通の實學にて、人たる者は、貴賤上下の區別なく、皆悉くたしなむべき心得なれば、此心得ありて後に、士農工商其分を盡し、銘々の家業を營み、身

も獨立し、天下國家も獨立すべきなり。」と說いた。更らにそれを强調し、擴充して「道のためには英吉利、亞米利加の軍艦をも恐れず、國の恥辱とありては、日本國中の人民、一人も殘らず、命を棄てゝ、國の威光を落さゞるところ、一國の自由獨立と申すべきなり。」と云つた。斯うした自由獨立の思想は。アメリカに於て、福澤が深い感銘を受けた點から胚胎して居た。彼れの獨立自尊主義とても、畢竟は、アメリカやイギリスの紳士生活から、體得したものであつた。

福澤は、其の文明思想を基調として出發した實學の普及と獨立自由の精神を土臺とした國家、人民の品性向上を促がすがために、いろ〳〵の著述を續刊した。其の態度は、啓蒙的、破壞的、改造的、懷疑的であつた。彼れは舊文化、舊制度、舊風習に對しては、破壞的で、懷疑的であつた。彼は、新文化、新制度、新風習を作るためには、改造的、啓蒙的であつた。此の態度は、彼れの著述全般の上に能く現ばれて居た。

彼れの舊文化、舊精神に對する懷疑的、破壞的態度は、夙に彼れが、武士生活をして居た頃に現はれて居た。彼れは、封建制度に纏ひ附いて居るところの格式、制度の窮屈なことを咀つた。彼れは、また舊習に囚はれて居た迷信や、不合理な信仰を排した。而して自己の個性を抑へ付けないで、獨立的な態度を以て、其の出身した藩に對し、世間に對した。それであるから、彼れが、英米文化

の洗禮を受けて、日本の舊文化、舊制度を破壊するに當つては、少しも、容赦しなかつた。例せば楠公の忠死を權兵衞が無意義に首を縊つたと同様であると云ひ、忠臣が二君に仕へ、寡婦が二度目の夫に嫁するのは當然だと主張した。時には、逆說的に『私の利營む可きの說』などを唱へて「私慾の深遠にして、一國の事實に顯はれたる成跡を見れば、暗に公共報國の旨に適するのみ。是即ち余が敢て人に勸るに、公平無慾を以てせずして、私慾の甚しきを祈る由縁なり。」と叫んだこともあつた。

彼れの新文明を建設するために執つた啓蒙的、改造的の著書は、主として、新知識を普及する上に努力された、彼れは明治二年『世界國盡』『西洋事情』を出し、五年には『學問のすゝめ』を出し、六年には『文學の敎へ』を出すと云ふ風に各種の著書を出した。『福澤全集』が、原本五十部、百五冊に達して居るのを見ても、どんなに彼れが著述に全力を傾倒したかが思はれる。『學問のすゝめ』は七十萬冊『西洋事情』は二十五萬冊を賣つたと傳へられるから、どんなに彼れの著書が博く行はれたかを知ることが出來る。彼れは、それ等の書に於て、西洋の地理や、歴史や、倫理や、風俗や、算數など、あらゆる百科全書的の新知識を最も平民的に、最もわかりよく述べた。

（五）福澤の文學方面に於ける功績

彼れの業績が、文學方面に關係して居る點は、其の内容よりも、寧ろ文章の上にあつた。彼れの思想は、全然、文學に寄與しなかつたとは云ひ切れないけれども、大體に於て、緣の薄いものであつた。ところが、其の文章は平民的で、福澤流の一體を開いたのみならず、明治時代に於ける最初の Criticism 若くは Essay を創始したものだと云へる。

福澤が評論を書く迄、嚴密な意義に於ける評論若くは、批評と云ふものが、我國になかつた。勿論、少數の政治經濟論、史論、文章論と云つたやうなものがないではなかつたけれども、多くは、固定して概念に囚はれたり、善惡の標準によつて、是非を判斷したりして、殆ど見るに足るべきものが乏しかつた。ところが、福澤は始めて新しい文明思想を基調とした近代的意義に於ける評論を書いて、正しい理論　筋道を、成るべく究明することに力めた。近代生活を開明してゆくべき評論乃至批評は、彼れの手によつて、始めて創始された。この一事を以てしても、彼れが文學上に於ける形式についての貢獻を無視することが出來ないのである。

のみならず、彼れは、其の思想を普及するために、彼れ獨自の平民的な新しい文章を書き始めた。

當時、評論を書くものは、大抵、拮屈な漢字を多く使用して、殆ど漢文直譯體の文章で押通して居た。またそれを以て、大に誇るべきことのやうに思惟して居た。ところが、彼れは、斯うした囚はれから脫出して、俗語や、平易な漢字を驅使して、極めて巧妙に其の思想を表現しようと力めた。彼れは、此の點から、漢字の數を制限すべきことを夙に主張した。彼れが『文字の教へ』に於て、述べたところによると、漢字の數は、二千か三千で、十分、事足るのだ。それで彼れは「此書三冊に漢字を用ひたる言葉の數僅かに千に足らざれども、一通りの用便に差支なし。之に由て考ふれば、漢字を交へ用ふるとてさまで學者の骨折に非ず。」と斷言した。

斯うした流儀から出立して、俗語と漢字とを混融的に用ゐて、福澤流の文章を創造すると共に、文體の改造をも計つた。彼れの文章は、彼れの談話その儘のやうなところがあつて、少しも虛飾がない。警句や、譬喩や、波瀾曲折はあつても、それが、極めて適切で、自然である。平明に暢達に其の表現しようとするところが、すら〳〵と云ひ盡されてある。思ふに、彼れは、親鸞上人の文章などを見て、多少、啓發するところがあつて、斯うした文體を創始したものであらう。だが、畢竟文は人である。彼れのやうな人格があつて、始めて彼れのやうな文體が生み出されるのである」今、左に其の一節を引用して見よう。

學問とは、廣き言葉にて、無形の學問もあり、有形の學問もあり。心學、神學、理學等は形なき學問なり。天文地理窮理化學等は形ある學問なり。何れにても、皆知識見聞の領分を廣くして、物事の道理を辨へ、人たる者の職分を知ることなり。知識、見聞を開くためには、或は人の言を聞き、或は自から工夫を運らし、或は書物をも讀ざる可らず。故に學問には文字を知ること必要なれども、古來世の人の思ふ如く、唯文字を讀むのみを以て學問とするは、大なる心得違なり。文字は學問をするための道具にて、譬へば家を建るに槌鋸の入用なるが如し。槌鋸は普請に缺く可らざる道具なれども、其道具の名を知るのみにて、家を建ることを知らざる者は、これを大工と云ふ可らず。正しく此の譯にて、文字を讀むことのみを知て、物事の道理を辨へざる者は、これを學者と云ふ可らず。所謂論語讀みの論語知らずとは即是なり。我邦の古事紀は諳誦すれども、今日の米の相場を知らざる者は、これを世帶の學問に暗き男と云ふ可し。經書史類の奧義には達したれども、商賣の法を心得て、正しく取引を爲すこと能はざる者は、これを帳合の學問に拙なき人と云ふ可し。數年の辛苦を嘗め、數百の執行金を費して、洋學は成業したれども、尙ほ一個獨立の活計を爲し得ざる者は、時勢の學問に疎き人なり。是等の人物は、唯これを文字の問屋と云ふべきのみ。其功能は飯を喰ふ字引に異ならず。國のためには、無用の長物、經濟を妨る食客と云うて可なり。故に世帶も學問なり、帳合も學問なり、時勢を察するも亦學問なり。何分必ずしも、和漢洋の書を讀むのみを以て、學問と云ふの理あらんや。

其の言說は、功利的に淺近なものであるけれども、文章は、達意的で、今日、讀んでも、現代の口語文、言文一致體などと餘り遠くない程度の親みを感ずるのである。此の點に於て、彼れの文章

は、確かに文壇に貢獻したところが少くないのである。彼れが平明な文字のうちに、卑近で而も適切な譬喩、新しい警句を用ひたのは、讀者を引き附ける最上の祕訣で、右に引用した文中にも「文字は學問をするための道具にて、譬へば、家を建るに槌鋸の入用なるが如し。」と云ふやうな譬喩を用ゐて、讀者にわかり易いやうに力めて居る。而して途中、退屈を感じさせないために「文字の問屋」とか「飯を喰ふ字引」とか「經濟を妨る食客」とか云ふやうな警句を巧みに用ゐて居る。福澤流の文體は、概して、斯う云ふ風であつた。

第二に彼れは、近代文學の一要素であるところの告白文學に先鞭を附けた人であつた。彼れの『福翁自傳』は、一種のヒューマン・ドキューメントである。此の種の物として、最も偉大なのは、ルソーの『懺悔錄』で、古今を通じて、最優れた懺悔文學、自己告白文學である。そこには、全體を通じて、ルソーイズムが鮮かに流れて居る。福澤の自傳は、素より『懺悔錄』などのやうに、藝術的價値は乏しいけれども、此の種の形式を以て、其の半生を懺悔し、告白したのは、興味ある現象である。

第三に彼れは『世界國盡し』に於て後に興起した新體詩の先鞭を附けたのみならず、寓意小說『かたわ娘』を書いて、新味ある書き方を示し、英文和譯の模範を『童蒙教草』に於て示した。『童蒙教草』は、イギリスに行はれて居た通俗的な『モーラル・クラス・ブック』を譯したもので、少年にわかるや

うに書いたものであつた。文學的に幼稚な明治初年の時代にあつては、彼れが此の種の試みも、多少、文學的に貢献したであらうと思はれる。

要するに、彼れが、明治初期の文學に寄與した點は、主として、評論の形式を創始して、平民的な達意の文章を組成したところにある。新しい時代に於ける新しい思想を表現するものゝために、新しい批評をするものゝために、彼れは、其の指導者として起つたのである。そこに、彼れの一特色があつた。

（六）　中村敬宇の『西國立志編』

福澤諭吉に比較すると、中村敬宇は、遙かに輪廓が小さくて、其の感化力も廣くはなかつた。けれども彼れは、ある一部に深い印銘を與へるべき力を持つて居た。彼れは、福澤のやうに、百科全書的知識を持つて居なかつたのみならず、評論の形式を創造すると云つたやうなところもなかつた。彼れの目的は主として、イギリス風の自助自立の品性ある清い紳士を養成しようとするにあつた。

中村敬宇は、名を正直と云つた。天保三年五月、東京に生れて、其の青年時代には、昌平黌に入つて、漢學を修めた。彼れの長所は、主として、儒者たる點にあつた。其の後、慶應二年、イギリスに留學して、約一年

半、滯在して、其の文化を親しく研究した。イギリス思想の感化を受けたのは、それがためだつた。敬宇の著書として、世に普及したのは『西國立志編』である。これは、スマイルスの『自助論』を譯したもので、力めて、原文の一字一句をも、損しないで、嚴正に和譯しようとしたところが見えて居る。文體は、福澤の平民的なのに對して、寧ろ貴族的で、漢文直譯風のあとが殘つて居た。だが、典雅莊重と云つたやうな趣は、福澤に無くて、敬宇の文章にあつた。

天は自ら助くるものを助くと云へる諺は、確然經驗したる格言なり、僅に一句の中に、歷々人事成敗の實驗を包藏せり、自ら助くと云ふことは、能く自主自立して、他人の力に倚らざることなり、自ら助くるの精神は、凡そ人たるもの丶才智の由て生ずるところの根原なり、推してこれを言へば、自ら助くる人民多ければ、その邦國必ず元氣充實し、精神强盛なることなり」他人より助けを受けて成就せるものは、その後、必ず衰ふることあり、然るに內自ら助けて爲すところの事は、必ず生長して禦ぐべからざるの勢あり、蓋し我もし他人の爲に助けを多く爲さんには、必ずその人をして自己勵み勉むるの心を減ぜしむることなり。是故に師傅の過嚴なるものは、その子弟の自立の志を妨ぐることにして、政法の群下を壓抑するものは、人民をして扶助を失ひ、勢力に乏しからしむることなり。

翻譯としては、忠實ではあるが、どうしても、片苦しいところがある。だが、翻譯文としての一體を創始したもので、時人は、喜んで『西國立志編』を一讀して、其の自助的精神を振起した。其の

賣高は、福澤の『西洋事情』に譲らなかつた。思ふに、後の翻譯文は福澤と中村とに敎へられたところが多いやうである。漢文體の翻譯をした森田思軒の如きは、敬宇の翻譯振を見て、自然、一體を發明したとは云へない迄も、敬宇の脈を追ふたものと見られよう。

（七）當時の敎育と新學術

當時、福澤と中村の啓蒙運動と呼應して、文化開發に資したのは、民間の私塾や、文部當局の敎育施設や、新聞雜誌などであつた。私塾として、最大なのは、福澤の慶應義塾であつた。明治四年の調査によると、三百二十三人の塾生が居た。その他福地源一郎の塾には七十八人、箕作秋坪の塾には百六人、尺振八の塾には百十一人、鳴門義民の塾には、百四十一人居た。

慶應義塾が創立されたのは、安政五年であつた。最初は、オランダ語を敎へて居たが、後には英語を敎へることになつた。福澤の功利的文明思想は、こゝで宣傳された。彼れが、慶應四年、幕軍と官軍とが上野で砲火を交へて、市民が狼狽しつゝある間に、悠然と砲火を窓外に望みながら、ウエーランドの經濟書を講じたと云ふことは、當時の有名な逸話であつた。學者としての本分を自覺した彼れの門から、多くの秀才を出したのは、當然である。

尺振八の共立學舍は、正則英語を主として敎へたが、こゝからは、田口卯吉、島田三郎、小池靖一らの人材が出た。中江篤介の佛學塾、江原素六の集成社、中村敬宇の同人社なども有爲な若い人たちを出した。當時の私塾は、大抵、英語またはフランス語を敎へて、新知識を有する新人を養成するのを目的とした。其の新興の勢は官學を凌駕する有樣だつた。

以上述べた私塾のほかに近藤眞琴の攻玉塾(文久三年創立)福田理軒の順天求合社、(天保五年大阪に創立、明治四年東京に移る)村上彥俊の達理堂(明治元年創立)などがあつた。攻玉塾は海軍士官養成を目的として英語、數學、航海學などを敎へた。順天求合社は、數理を敎へ、達理堂は、フランス語を授けた。

官學の方面を見ると、高等敎育を授ける機關として、大學南校と大學東校とがあつた。大學南校は、以前、開成所と稱せられたのであるが、慶應三年、學制を改めてから、オランダ語よりも、英語、フランス語、ドイツ語の敎授を主眼とするやうになつて、外國敎師を招聘して、親しく敎鞭を執らせた。明治四年には、其の規模が擴大されて、雇外人敎師は英人五名、アメリカ人四名、フランス人三名、ドイツ人三名を數へるやうになつた。生徒も千百九十五名に上つた。また各藩の貢進生と稱する秀才を集めて、其のうちの最優者をイギリス、フランスに留學させた。大學東校は昌平黌を改稱して、醫學を專修するところで、專門敎育の先驅だつた。畢竟、明治十年に出來た東京帝

國大學は、以上を基礎として生れたのである。

文部省は、斯うして、高等教育の端緒を開くと共に、一方では、明治二年に府縣に小學校を設け三年には、大、中、小學校規則を定め、五年には、小學教則及び中學教則略を發布した。而してすべての教育を通じて、實用知識を教授することを主眼とした。それは、福澤が率先して唱へた功利主義的な思想が、一般を動かしたからでもあつた。

斯うした風潮の下にあつた當時の人々は、渴するやうに新知識を要求した。それに應じて出た通俗的な學術書は相當に多かつた。明治初年から、西南戰爭前後の時代までに出たのを擧げると、文部省が出版したチヤンバーの『百科全書』を始め、福澤、中村の著述を中心若くは先縱として、理學、修身倫理、歷史、地理に關するものが二十數種出た。其のうちで、一番、流行したのは、理學に關するものであつた。川本幸民の『氣海觀瀾廣義』福澤諭吉の『窮理圖解』吉田賢輔の『物理訓蒙』後藤達三の『窮理問答』石黑忠悳の『化學訓蒙』小幡篤次郎の『天變地異』加藤宗甫の『化學入門』などは、其の主要なものだつた。それ等の書を通して、新知識が民衆の間に流布された。

（八） 新聞雜誌の啓蒙的勢力

新聞雜誌の發行は、文化開發に資すると同時に、一面、文學的にも、多少貢獻するところがあつた。新聞紙の嚆矢は、文久年間に出た『バタビヤ新聞』『中外新報』などであるが、毎月數回、定期に發行するやうになつたのは、元治元年、イギリス人ウェーランドが岸田吟香を主筆として出した『新聞紙』であつた。其の編輯助手には、本間潜藏、ジョン彥造の二人が居た。『新聞紙』は、單に世上の出來事を簡單に報道するだけで、時事を論評しなかつた。それに續いて外人宣教師ベリーの『萬國新聞』柳川春三の『中外新聞』などが横濱に發行された。其の他『江城日誌』『遠近新聞』『新聞事略』などが出たが、何れも月刊または週間で、編輯法も幼稚であり、印刷も木版に依つたから、不鮮明を極めて居た。現在發行されて居る日刊新聞のやうなものは一つもなかつた。

其の後、稍新聞紙らしいものが出たのは、明治元年、政府が、其の施政方針を知らせるために發行した『太政官日誌』の生誕後からであつた。それは、今日の官報の初めで、新聞熱を起させる上に幾分の力があつた。それに對して、福地源一郞(櫻痴)が、條野傳平(採菊)と提携して『江湖新聞』を發行し、岸田吟香が、横濱で『藻鹽草』を出した。

福地源一郞は、長崎の儒者福地苟安の子で、天保十二年三月、鄕里で生れた。最初、オランダ語を少年時代に學んだが、後、江戸へ出て硏學を續けた。萬延元年、外國人支配役となつたのが、彼れの後來、立身すべき

端緒となつて、前後二回、歐米を巡遊して、新智識を修得した。歸朝後、彼れは、幕吏をやめて、私塾を開いて、生徒を教へ、次いで『江湖新聞』を出した。其の後、彼れは再度、アメリカへ行き、また官吏となり、新聞社長となり、東京府會議長となり、後一轉して、劇作者小説家となつて、其の晩年を終へた。

福地が『新聞紙實歴』に於て、告白して居るやうに、慶應二年、幕府の使者に隨行して、イギリスフランスに十ケ月ばかり、滯在して居る間に、諸名士を歴訪して、新聞紙の性質及び勢力を知つたので、それに刺戟されて『江湖新聞』を出したのである。此の新聞は、木版刷で、毎號半紙二切を十枚乃至十二枚綴つた冊子風のもので、今日の雜誌の體裁に酷似して居た。內容は、雜報、寄書、時評などを收めたが、大抵、福地一人の筆になつたものだつた。彼れは、其の上、版下まで書いて、熱心に薩長政府攻擊の鋒先をゆるめなかつた爲め、政府の忌諱に觸れて、發行を停止された。

だが『江湖新聞』の活動は、漸く時人の注意を惹ゐて、新聞紙の讀者も、少しづつ、增加したので其の潮勢に乘つて『横濱每日新聞』(今の『東京每日』)『江湖新聞』の後身であるところの『東京日々新聞』、木戸孝允の保護を受けて居た『新聞雜誌』などが出た。續いて、明治六年には『郵便報知』(今の『報知新聞』)七年には『朝野』『讀賣』八年には『曙新聞』『東京繪入新聞』などが出た。此のうち『曙新聞』は『新聞雜誌』の改題したものであつた。其の他、大阪、大和、京都、山梨、茨城などにも、地

方新聞が出るやうになつた。

當時、福地は、少壯氣鋭の時代で、無冠王の意氣を以て、明治六年、官吏を罷めて『東京日々』に入つて、其の婉曲流麗な筆を揮つて、社說の原型を示すに及んで、彼れの顰みに倣うて、記者生活に入る名士が續々、現はれた。それで『朝野』には成島柳北『日々』には末松靑萍、岸田吟香、『曙』には末廣鐵膓、岡本武雄、『報知』には、藤田鳴鶴、矢野龍溪、栗本鋤雲、『横濱每日』には沼間守一などが居て、旺んに雄を爭ふた。けれども最初、卓越して居たのは、福地櫻痴と成島柳北との二人であつた。櫻痴は其の社說に於て當時の靑年を動かし、柳北は、輕妙な記叙の筆で、讀者を喜ばせた。

彼等は、概して、當時に於ける新人で、進歩主義者で、歐米文化を多少、理解したものばかりであつた。勿論、例外もないとは云へないが、大體、時代の先覺者として、歐米の新文化を鼓吹し、普及しようと力めた。從つて、其の思想も粗雜だが比較的に新しく、文章にも溌溂たる生氣があつたが、福澤流のやうな平民的な文體は、未だそれに手を付けるものが少くて、概して堅苦しい文章殊に漢文風の文章が多かつた。

（九）　新文化開拓に貢献した『明六雜誌』

雜誌は、明治七年に出た『明六雜誌』が其の嚆矢であつた。それは、月二回の發行だが、體裁は極めて整はなかつた。けれども其の同人には、其の前年、明六社を組織した有力な學者、文士が多いので、新文化開拓に資した點が少くなかつた。其の人々には、森有禮、福澤諭吉、津田眞道、西周中村敬宇、加藤弘之、箕作麟祥、同秋坪、杉享二、津田仙、大槻文彥、九鬼隆一、辻新次、西村茂樹などが居た。而して其の主腦は、福澤、森の二人であつた。森は、十九歲で、イギリスに留學して、三年の研學を積んで歸朝した若い人物で、其の思想は、大體、福澤と一致して居た、而して福澤よりも、急進的な、直截なところがあつた。また淸敎徒的なキリスト敎信者の風があつた。それで彼れは『廢刀論』や『男女同權論』『禁蓄妾論』などを『明六雜誌』に揭げて、論壇に一波瀾を捲起したことがあつた。其の他、西周の『羅馬字論』、神田孝平の『演劇改良論』、坂谷素の『萬國共通語の必要』の如き有益な論文が出たことがあつた。

『明六雜誌』のほかに『近時評論』『同人社文學雜誌』『草莽雜誌』『評論新聞』『柳橋新誌』『東京新誌』『花月新誌』『團々珍聞』『穎才新誌』などが、前後して、明治十年までに出た。其のうち、文學趣味を有した青年に最も喜ばれたのは、柳北の『花月新誌』『團々珍聞』などであつた。それに就て、島村抱月は當時を回想して、斯う云つて居る。

一方には『修風悲雨世路日記』といふやうな小說や、人から貰つた成島柳北の『花月新誌』の合本やか、種々の意味で、當時の田舍青年の夢をそゝる。『花月新誌』の小西湖佳話に、

盃觸二盃洗一丁東有レ響。酒到肴排。頃刻一妓上來。徐開二隔障一。跪拜一拜道。今夕各位萬福。銀燭光下照映視來妙齡可二十七八一。晚後更衣。裓是淡裝。藍褐間倭綃紗衣。裾曳余踵。紬膂黑八絲帶。纚余下垂二尺。透明玳瑁。淡紅珊瑚。櫛影釵光與二銀燭一相映燦煥。

など〻ある所は、天下の妙文として讀誦したものである。

今日の青年が見たら、支那人の文章と思ふやうなスタイルで、藝妓のことなどに書いたのが、當時の青年の眼に何等奇異に感じられないで、甘美な菓子のやうに喜んで讀まれたのである。それから考へても、漢文風の文章が、明治十年頃までは、殊に勢力があつたことを推測し得るのである。

第二章　舊套を離れざる文學

（一）　假名垣魯文の戯作と新聞小説

明治初年から西南戰爭前後の頃に至るまでの文學は、創作方面の收獲上、見るべきものが乏しかつた。當時の小說は槪して、前代に於ける一九、三馬、春水、馬琴らの餘唾を嘗めて居るに過ぎなかつた。脚本も、江戸演劇の諸要素を取り入れて、それを補綴したものが多かつた。蓋し江戸末期の頽廢時代には、脚本も、淨瑠璃も、俳句も、短歌も、全くデカダン風のものになつてしまつて、頓に生氣を失つたところへ、維新大改革から、西南戰爭前後の大混亂のために、純文學方面には、人材が集らなかつたのである。また新しい芽を吹き出すだけの機運も、熟しなかつたのである。當時の小說のうちで、稍見るに足るべきものは、假名垣魯文の『假名讀八犬傳』『西洋道中膝栗毛』『胡瓜扱』『安愚樂鍋』を始めとして、二代目春水の『時代加賀薦』禺亭應賀の『釋迦八相倭文庫』三世種彥の『白縫物語』『杉村春輔の『復古夢物語』『近世櫻田奇聞』などがあつた。其の他同時の作者には、鶴亭秀賀、山々亭有人（條野採菊）柳水亭種淸、笠亭仙果、梅亭金鵞などが居た。其の小說の大半は、勸

善懲惡主義の思想と讀本、草双紙、人情本、滑稽本などの結構を模した筋合のものばかりだつた。若し强ゐて、其の優秀なものを擧ぐるならば、僅かに魯文の『膝栗毛』や『胡瓜扱』を推するよりほかはない。

魯文は、貧しい肴屋の家に生れて、小僧生活を送るうちに、手當り次第に小說、雜書の類を讀んで、小說家となつたやうな人物で、勿論、何等の見識も、學殖もなかつた。けれども彼れの感受性は、比較的敏活で、新しい時勢に對して、皮相的にでも、適應してゆけるだけの能を持つて居たところから、福澤の『西洋事情』などに傾倒して、朧ろ氣乍ら近代文明に就ての概念を得たのである。彼れが『膝栗毛』十一篇の序に於て「方今文明開化一時に進み、余輩僥倖に學ばざる子曰の迂遠を去り、經驗究理の洋風に傾き、市街の兒童等に至るまで、芥子坊主の支那頭を殘藏の歐羅巴流に一變し、孔氏の遺書をペケにして英字、佛の歐文エビシ、四百余州は何のその、萬國世界五大洲、天地の理を知る開端に至るは、めでたき御代に新玉の春を待ちたる心地になん。而して癡審舊知事の公達子も無僕獨步に世間を見知り、歸農の扶持は飛鳥川、水に流して商法開業、父母在せども遠く遊び、艦砲一發三千里、旦に道を聽くとも、夕に死するを可なりとせず。牛を食し、ビイルを飲み、體を壯健にして壽を保ち、利を得て國を富ますを以つて、今日も報恩とす。」と云つて居るのは極め

て皮相的ではあるが、當時の戯作者として寧ろ時代の傾向に對して敏活だと云はねばならぬ。
魯文の『膝栗毛』は、畢竟、皮相文明の概念を滑稽本風の作品に表現したものである。大體は『西洋事情』に依り、當時、パリー博覧會を見て歸つた宮田砂燕の說などを取り入れて、魯文一流の空想を混入させたもので、文明開化でなければ、夜も日もあけない時代の人心に投合しようとしたのである。

『膝栗毛』は、神田の蕩兒彌次郎兵衛、北八の二人が、横濱の豪商大腹屋に伴はれて、イギリスのロンドンに遊ぶ道中記で、勿論、一九の『膝栗毛』を模倣したところが多い。けれども、魯文が、皮相ながらも、明治初期に於ける時人の風俗、嗜好、傾向、生活などを描寫して、其の矛盾と不調和とを見せたところは、他の作家に比較して確かに一歩を拔いて居た。高山樗牛は『明治の小說』に於て「明治四五年の交、魯文の滑稽物が當時の小說壇に獨歩したりし事實は、當代の粗笨な人心が如何に眞面目なる文學を味ふに堪へざりしか、又維新前後の創痍につかれたる國民が如何に鄙俚なる諧謔の中に其鬱悶を慰めしかを想見するに足る。其の西洋膝栗毛胡瓜圖解等は、西洋文明に眩倒せる當代人心を倒照するの鏡として見ることを得べし。」と批評して居る。

必竟、魯文が時勢粧に扮した低級な諧謔や滑稽は、文藝鑑賞の上に於て、尙ほ極めて幼稚だつた

當時の人心にぴたりと一致して、無條件に歡迎されたのである。彼れは『膝栗毛』の成功したのを見て、更に『胡瓜扱』を書いたが、これは、福澤の『窮理圖解』から思ひ付いたものである。彼れは、其の事について、「音通(ひゞき)を假用し、實學有益の確論を無用の戯編に翻案せる」ものと告白して居る。それで福澤が、風の事を說明して「空氣日に照らさるれば熱して昇り、冷氣これに交代して風のもととなる。」と云つたのを模して「吹けよ川風揚れよ簾れ、中の歌妓の能さ、三弦の絲の柳橋、四時の盛りも取り別て、夏來にけらし白妙の、肌をすきの衣手(ころもで)に、嬋娟(つん)とすました左褄、箱屋が供に立姿。』と洒落れのめして居る。要するに、低級な摸擬文學の範疇に囚はれたものである。

魯文以外の作家は、新聞に據つて、其の存在を續けて居た。當時、俗に續き物と云つた極甘い小說は、彼等の手によつて作られた。それは新聞が俗衆を引き付けようとした政策と作家が生活の資を新聞に依つて得ようとした希望とが合して、さうした作品を掲げたのである。

先づ流行兒の魯文が、明治六年『横濱毎日』につて滑稽物の筆を執ると、八年には三世種彦と稱した高畠藍泉が『平假名繪入』に入り、續いて、二世春水と稱して染崎延房も亦同じ新聞に入つた。十年には、梅亭金鵞が『團々』に入つた。其の他、新聞小說を書いた人々には、古川魁蕾、渡邊義方、伊東專藏、須藤南翠らがあつて、草双紙合卷物に代つて、當時の人氣を惹ゐた。其のうちで、魯文

と略ぼ同様の歡迎を受けたのは、二世春水であつた。勿論、何れも、舊套を脱しなつたけれども、今日の新聞小説の芽は、こゝから吹き出したものだとも見られる。

（二）　劇壇に於ける河竹默阿彌

小説界に比較すると、脚本方面は、江戸演劇の集大成と云はれた河竹默阿彌が居て、一大星座のやうに輝いて居た。彼れは、江戸末期から、明治の劇壇にかけて活躍した作者で、其の作品、「三百余篇の多數に上つて居る。而して彼れの傑作は、大正時代の今日も尙ほ東京大阪其の他の劇場に上演されて、看客を魅して居るのを見ると、其の劇的生命の長いことを思はせられる。

默阿彌は、江戸日本橋通の質屋吉村勘兵衞の長子で、文化十三年二月三日に生れた。彼れは、幼少の時から芝居好きで、稗史、院本の類を耽讀したが、また十四五歳の頃から茶屋酒の味を知つた早熟的な點があつた。一時、非常に放蕩に身をやつして、父から勘當されたこともあつた。天保四年、彼れが十七歳の時、京橋尾張町の好文堂といふ貸本屋の若い衆になつて、放蕩生活から稍遠のいて居るうちに、脚本や、雜書などを讀んで不規則ながら、劇的知識を養つた。さうしたことが動機となつて、知人の紹介で、脚本作者五世鶴屋南北の弟子となつた。それば、彼れが十九歳の時で、市村座の狂言作者見習のうちに加はつて、勝諺藏と名乘つたのが

作者生活の始めだつた。爾來、努力の功が見えて、天保十四年十一月、二世河竹新七の名を襲ぎ、弘化二年には河原崎座の立作者となり、それから市川小團次に其の作劇上の手腕を認められて互ゐに提携するやうになつてから、愈々其の特色を發揮して「白浪作者」の名を得たのである。彼れが世を去つたのは、明治二十六年だつた。

默阿彌の脚本は、時代、世話何れに於ても、相當に優れたものがあるけれども、其の長所は、一般の世評のやうに、矢張、世話物の上にあつた。それは、彼れ自身も、明白に意識して居たやうである。其の時代物は、能く纏つて居ると云ふだけで、彼れ獨自の面目が出て居ないが、世話物は、彼れでなければ、書けない旨味が充分に現はれて居る。勿論、それは、櫻田治助、四世鶴屋南北らの長所を學ぶと共に、それを輳合し、融化したものにはちがいないけれども、さうした江戸演劇の美を一つに集大成した丈でも、默阿彌の特色は充分にある。殊に彼れは、其の上に彼れ自身が實地に觀察した江戸末期の社會及び人物を寫して、それへ彼れの純化と美化とを加へたのであるから、唯江戸演劇の集大成たるに留まらないで、それに新しい生命と新しい色彩とを加へたものと云つて宜い。永井荷風は、默阿彌の世話物を嘆美して、「自分は、常に默阿彌翁を以て、佛蘭西劇壇の Engene Scrive または去年死んだ Victorian Sardow 以上の大劇作家と信ずるものである。翁は我が現

代に多く見られる青年作家の如く學問や小理屈から、乃ち偏狹淺薄なる理想から藝術に這入つた人ではない。藝術に對する狂愛の情から直ちに其れに身を投じて、不知不識の間に藝術の何たるかを悟つた人である。」と云つて居る。

(三) 惡の詩人としての默阿彌

默阿彌の世話物にも、長所短所はあつた。其の短所は勸善懲惡主義に囚はれ、善玉惡玉の傀儡を驅使する弊に囚はれて居たと及び俳優の柄に嵌めて書くために、無理なところや、單調に流れる傾きのあることだつた。其の長所は、内容がロマンチツクであると同時に描寫の上では寫實的で組織美、音樂美、色彩美に富んで居て、江戸末期から明治初年へかけての世相を巧みに表現すると同時に、すべての惡を美化する上にあつた。

彼れの世話物を讀むと、惡の詩人であることを思はせる。蓋し頽廢期の江戸の空氣や、情調は、新しい刺戟から、更に一層、新しい刺戟を追うて止まないと云つたやうな爛熟した官能を何人も持つて居たので、世話物の世界も、刺戟の弱い、平凡なものよりは、刺戟の強い、非凡なものを求めてやまなかつた。それの要求に當てはまる世界は、惡の世界、色慾の世界、情死の世界、幻怪の世

界であつた。默阿彌は、さうした世界から、人物や、事件を選んだ。

默阿彌が、特に惡の世界に人物を選んだことは、彼れが白浪作者と云はれ、其の世話物を白浪物と云はれたのでもわかるのである。伊原青々園の『近世日本演劇史』によると、默阿彌は自分で「三人吉三は、最も心を盡した作で、中にも、我が村井長庵は、終生の世話物中第一の出來だと思ふ。」と云つたさうであるが、此の二篇は、何れも、盜賊を主人公としたものである。ひとり、右の二篇ばかりではない、彼れの傑作と云はれて居る『鼠小僧』『白浪五人男』『鑄掛松』『十六夜清心』『髮結新三』なども、皆惡人を中心人物とした作品である。彼れは、斯うして、惡の世界に於ける人々を描くことを長所として居た。

それは、彼れが、惡の詩人であるところの傾向、本質を有して居た爲めにちがいないが、一つは當時の廢頽的空氣に感化され、一つは白浪物を演出する上に特技を以て居た市川小團次に當てはめるためでもあつたのだ。蓋し彼れは惡を惡として見なかつた。惡のうちに美があり、善があることを洞察するだけの藝術的な官能と深い同情とを持て居た。彼れの解釋によると、惡の美化、惡の詩化を實現するところに眞の詩人の本質があるのだ。人は、惡を恐れ、惡を咀ふけれども、其の皮相を排いて、核心に徹するならば、必然的に、そこに美なり、善なりを見出し得るであらうと云ふのが

默阿彌の自信であつた。彼れは、斯うした解釋と自信と詩人的氣禀とを以て、惡の世界に於ける人物を美化し、詩化して見た。

『白浪五人男』は、何れも、恐しい賊である。けれども濱松屋の場に於ける辨天小僧は、惡でなくて美の象徴である。『三人吉三』も亦大膽不敵の曲者らであるけれども、お孃吉三が創造した惡の華は、美そのものである。『十六夜清心』は、毒婦と惡漢との結合であるけれども、彼等の動作、風采は、美そのものを現はして居る。

以上は、惡の美化の一例であるが、更に惡の善化は『鼠小僧』『鑄掛松』などの上に現はれて居る。鼠小僧は、盜賊ではあるが、一面任俠な肌合を持つて居て、人に惠む善心の閃きを示して居る。鑄掛松も亦それと同樣の傾向を持つて居る。彼等は、勿論、惡の世界のどん底に沈んで居る人物だが、左樣した暗黑のうちにあつても、一片の人情味を忘れないで、表面、善を裝うて居る奸人よりも、遙かに人情的に善な一面を有して居ると云ふことが、默阿彌によつて、明かにされて居る。それ等は惡の純化である。

默阿彌は、盜賊と共に、好んで毒婦を描いて居るが、それ等の女も亦美しい寶玉のやうな魅力を以て居る。山猫おきつや、まむしのお市、妲妃お百などは、默阿彌式の毒婦を代表したものである

が、其の惡は、彼の女らが有する美によつて、淨化された趣がある。惡を惡として憎み得ない美がある。

以上のやうな意味に於て、默阿彌は惡の詩人である。彼れは、惡の世界から美と善とを見出すと共に、また美と善とを創造する。そこに、彼れの獨自の世界があつた。卽ち彼れは、デカダンス藝術の粹を示した詩人である、而して彼れが惡を中心として空想するところのロマンチツクな世界は殺人、脅喝、姦淫、情死、幻怪と云つたやうな場面である。

（四）　默阿彌の劇的技巧と其の强味

默阿彌は、惡の世界を描く上に於ては、何處までも寫實的であつた。彼れが意識して、精細に觀察した江戸末期及び明治初期の世相を取り入れて如實に描いた。そこが、彼れの第一の强味であつた。伊原青々園も、その點について「先輩の治助、南北よりも一層寫實を尙び、其の詩材を自己の目擊し、若くは感想せる實際より採りたりき。」と云つて居る。彼れが時人を動かしたのも、斯うして堅實な寫實主義の上に起つて居た爲めだつた。時人は、そこに生きた世相の縮圖を見ることが出來て、それに共鳴したのだ。

それで、彼れの作品は、一面に於て、江戸末期若くは明治初期の時代風俗史と云つたやうな特色があつた。永井荷風は、その點を嘆賞して「其の寫實的半面は、狂言の本筋に關係のない仕出しの臺詞や、其の折々の流行の洒落、又は狂言全體の時代と類型的人物の境遇等に於て窺ひ知られるのである。維新後零落した旗本の家庭、親の爲めに身を賣る娘、新しい法律を楯にして惡事を働く代言人、暴惡な高利貸、傲慢な官吏、淫鄙な權妻、狡猾な髪結等いづれも生々とした新しい興味を以て寫し出されてある。」と云つて居る。

次ぎに默阿彌の第二の强味は、其の材料を取捨按配して、巧みに結構、筋立てをするところの老巧な點にある。それは、彼れの世話物ばかりでなく、時代物にも共通の長所である。殊に世話物の代表作の一つである、『三人吉三』の如きは、結構の妙、配合の美を極めて居る。

彼れが『三人吉三』のうちに於て、和尙吉三、御坊吉三、お孃吉三の三人を先づ對照させたのが、宜い思ひ付きである。江戸式の墮落坊主、放浪的な武家惡、娘姿の若衆が、兄弟の誼を結んで、惡事を働く上に、庚申丸の短刀と百兩の金とが附いてまわつて、それが惡因惡果を生じてゆく筋合を可なりに自然に、而して複雜に開展して居るところは、恐らく、默阿彌自身も得意とした點であらう。場面の變化と云ふ上に於ても、淋しい場面の次ぎには陽氣な場面、陰惨な場面の次ぎには、花

やかな、目ざめるやうな場面を配合して、それに江戸末期の社會的色彩や、情趣をからませて居るところも宜い。人物も、過去の罪業をしみじみ懺悔して居ながら、いざとなると、昔の兇暴な意氣を示す土左衞門傳吉のやうな特異の老人を挿んであつて、淋しい、やる瀬ない人生の一角を髣髴させて居るのが宜い。要するに『三人吉三』は、其の結構、配合の上に最善をつくした傑作である。

默阿彌の結構、筋立の妙は『鑄掛松』を見ても『縮屋新助』を見ても『鼠小僧』を見ても『御所の五郎藏』を見ても、すべてに共通して居て、此の點では、現代の新しい作家も企及し難いやうに思はれる。『鑄掛松』の序幕に於ける兩國橋下の遊山船の場に於て、陽氣な絃歌の聲に聞き惚れた鑄掛屋松五郎が浮世の榮華を羨んで心機一轉して、盜賊となる刹那の氣持を見せたところなども奇拔だ。『御所の五郎藏』なども、獨創的ではないが、在來の江戸演劇に用ゐられた結構美を輳合してあつて、讀んだ丈でも、場面の面白味を充分に想像させる力を持つて居る。默阿彌物が長く飽かれないのは、半ば此の點から來て居るやうに思はれる程である。

默阿彌の第三の强味は、台詞の巧妙な點にある。そこには、彼れ獨自の技巧が、充分に現はれて居る。其の代表的作品にある台詞には、常套的であつたり、間伸びして居る點が殆どなくて、藝術味が豐かに流れて居る。『三人吉三』のうちで、大川端庚申堂の場で、美しいお孃吉三が、夜應のお

とせが持つて居た百兩を奪ひ取つて、どんと、おとせを川の中へ蹴込み乍ら、春の空を見上げて「月も朧に白魚の篝も霞む春の空、つめたい風もほろ醉に心持能く浮か〳〵と、浮かれ烏の只一羽塒へ歸る川端で、棹の雫か濡手で泡、思ひがけなく手に入る百兩。ほんに今夜は節分か、西の海より川の中落ちた夜鷹は厄落し、豆澤山に一文の錢と違つて金包み、こいつあ春から延喜がいゝわえ。」と云ふ台詞は、色彩的、音樂的の味が深い。其のお孃吉三の惡事を駕の中からそつと見て居たお坊吉三が、ぬつと現はれて、お孃吉三の立ち去らうとするのを呼び留めて「駕にゆられてとろ〳〵と一ぱい機嫌の初夢に、金と聞いては見遁せねえ心は同じ盜賊根生、去年の暮から間が惡く五十と纒る仕事もなく、遊びの金に困つて居たが、なるほど世間は難かしい、友禪入りの振袖で人柄作りのお孃さんが追落しとは氣が附ねえ、是から見ると己なざ五分月代に著流しで小長い刀の落し差し、一寸見るから往來の人も用心する打扮、金にならねえも尤もだ。」と云ふ台詞も、緊張して居て、遲緩したところがない。

『三人吉三』にあるやうな巧妙な台詞は、彼れの作品の隨所に往々、ダイヤモンドのやうに輝いて居る。『髮結新三』の深川閻魔堂橋の場で、彌太五郎源七が、新三に復讐するところの台詞も、きびきびした味があつて凄い色合を帶びて居る。新三が源七に向つて「丁度所も寺町に娑婆と冥途の別

れ道、其の身の罪も深川に橋の名さへも閻魔堂、鬼といはれた源七が爰で命を捨るのも、餓鬼より弱い生業の地獄のかすり取つた報ひが、手前もおれも遊人、一ツ釜とはいひながら、黒闇地獄のくらやみでも亡者の中の二番役、業の秤にかけたらば貫目の違ふ入墨新三、こんな出合もその內でてつきりあらうが淨玻璃の、鏡にかけて懷に隱しておいた此の匕首、刄物があれば鬼に鐵棒、どれ血塗れ仕事にかゝらうか。」と惡口を吐くと、源七も屹となつて「如何に所が寺町とて、まだ新盆の來ねえのに、聞き度くもねえ地獄の言立て、無常を告ぐる八幡の死出の山鐘三途の川端、あたりに見る目嗅ぐ鼻の人の來ぬ間にちつとも早く、冥土の魁さしてやらう。」と罵り返す臺詞にも、技巧の冴えがある。

　默阿彌が第四の强味は、音樂美を以て、劇中の情味を助けたところにある。彼れの世話物には所謂心中や殺し場が多い。其の殘忍な殺人を音樂の力で、美化し、緩和することについて、彼れは、細かい注意を拂つた。また心中の場に於ても音樂美を以て、其の情趣を助けた『十六夜清心』の心中場では『梅柳中宵月』と云ふ淨瑠璃を用ゐて、美しい若僧と艶な遊女との心中を美化した。「雲足早き雨空も、思ひがけなく吹き晴れて見かはす月の顏と顏」の文句が歌はれると、舞臺の上に月が出て「十六夜か」「淸心さまか」と相擁する男女の情味は見物に詩的快感を與へるやうに出來て居る。『鑄

掛松』でも、兩國橋船遊びの場に絃歌の聲を聞かせ、中程にある妾宅の場にも、合方の端唄を活用したのみならず、大詰に松五郎が自害する場に淨瑠璃『新版歌祭文』野崎の出と炙据の一段を用ゐて、松五郎とお唉とが此の世の別れに臨んでの哀愁を野崎村の連彈にからませて詩的情趣を添へて居るそれから彼れの作中に於ける悽慘な殺しの場には、度々伴奏音樂として獨吟が用ゐられてあるのも詩化の一手段として、强い功果を示して居る。

（五）默阿彌の短所

斯うして、彼れの强味のみを擧げると、彼れの作は完全で、缺陷がないやうであるけれども、必ずしも、左樣ではない。人物の性格を表現する上に於ては、善玉惡玉主義に囚はれて居て、少しも生きたところがないやうなものもある。『村井長庵』は、彼れの自慢の作であるが、其のうちに出てくる手代の久八は、絕對的に完全な佛のやうな善人として表現されて居る。强慾な主人、放埒な若旦那に對して、何處までも忠義を盡して、無實の罪をも背負ふところは默阿彌の善玉の觀念の具體化で、少しも生きたところがない。長庵の性格は、また惡玉の觀念の具體化で、人間味に缺けて居て餘りに冷たく、機械化され、人形化されてある。斯うした人物の微妙な暗い心理なるものが、少し

も現はれて居ない。畢竟、默阿彌は、久八によつて善玉の權化を代表させ、長庵によつて惡玉の權化を代表させて、其のコンツラストの上に妙を見せようとしたのであらうけれども、それは常套的な手段で、全く人間味が閉却されて居る。

それは、また場面や、筋を搬ぶ上の都合から、人物の性格を無視したり、虛構的、作爲的な人物を作つたりして、毫も顧みないと云つたやうなところがある。從つて、彼れが描く人物の中には、輕々しく人を信じたり、疑つたりして、無反省的に悲劇の種を作るものが多い。少し理智の眼を開けて見ると、直ぐに作者の魂膽がわかるやうな點が多い。『笠森おせん』の中に出るおきつと云ふ妾が、下僕市助の淺い虛言を信じて、主人今村丹三郎を疑つて自殺するのは、餘りに沒反省的な女である。『鼠小僧』の中に出る後家お高なども、自分の家とは關係のない少年の盜みを辯護するために強ゐて、自分が懸想した爲めに、忍び入つたのであると云つて、全然、自己の面目を破つてしまつて、平氣で居るのは、沒常識である。斯うした善人は、幕末時代にあつたらうか。如何に吞氣な昔の女でも、これほど沒常識な女はあるまい。畢竟、默阿彌が、芝居をするための道具に用ゐられたに過ぎないのである。以上のやうな缺點は、默阿彌の作を通じて、往々、見受けるところである。

伊原靑々園は、默阿彌の作中に以前あつた脚本を改作增補したのが少くないことを慊らないとし

て居るが、それは、當時の脚本作者の一般的な常習であつたらうから、深く咎むるに足りない。其の脚色化の巧妙さへあれば、それで宜いと思はれる。以上のやうに、默阿彌にも舊劇通有の缺點はあるけれども、寧ろ其の長所美所の方が遙かに多いので、それ等の缺點は、彼れの價値に左程、わるく影響しないのである。

（六） 默阿彌の代表的作品

坪内逍遙は、彼れを嘆賞して「默阿彌は、其前に往ける及び其左右に歩めるもののあらゆる長所を詳摭して、悉くこれをおのが藥籠中のものとなして、自在に配劑するの巧みなるは、沙翁近松の上に出でたり、前人の意匠脚色にして、或は其骨を換へられ、或はその胎を奪はれて、彼が作中に現はれ居らざるものは殆ど稀なりといはんも、甚しき誣言にはあらじ。」と云つた。即ち彼れを以て「江戸演劇の最後の集大成者」とした。私はそれと共に、彼れが、江戸演劇に新しい生命と新しい色彩とを附加して、そこに彼れの獨創的な技巧を示した老練な藝術家であると云ふことを云ひ添へたい。彼れは、長い間の修養と經驗とによつて、其の藝術的傾向を完成した優れた劇詩人であつた。

彼れの作品は、寧ろ明治以前に作られたものに優秀なのが多い。殊に小團次と提携して居た時代に傑作を出して居る。『鼠小僧』は安政四年一月、彼れが四十二歳の時の作で、當時、百餘日打續けて大當りを取つた出世作であつた。其の後『十六夜清心』(安政六年)を出し『三人吉三』『縮屋新助』(萬延元年)を出し、『白浪五人男』『村井長庵』(文久二年)を出して、彼れの特色は、略ぼ遺憾なく發揮された。明治に入つてからも、彼れは六年に『髮結新三』十四年に『島衛月白浪』と云つたやうな傑作を出して居る。『霜夜鐘十字辻占』(十三年)『水天宮利生深川』(十八年)なども度々上演された佳作である。『髮結新三』は江戸情調が鮮かに出て居る素直な作で、それを彼れが五十八歳の時に書いたことを思ふと、彼れの若々しい、水々した新鮮な心が、いつ迄も、失はれなかつたことを示して居る。

以上、擧げた『鼠小僧』『十六夜清心』『三人吉三』『白浪五人男』『村井長庵』『縮屋新助』『髮結新三』などを讀めば、略ぼ彼れの作風と長所とを窺ひ得られよう。要するに、默阿彌は、江戸末期から明治初年にかけて、劇壇に輝いて居た優れた作家で、江戸演劇の最後の一大殿將である。

(七)『東京繁昌記』其他

小說、脚本のほかに、當時行はれて居た短歌、俳句、漢詩、漢文の類があつたけれども、それ等は、時代と多く沒交沒なものであつた。さうした方面の作家には、相當知名の人々があつたけれども、彼等は、時代の潮勢を透かに離れて見て居るに過ぎなかつた。唯成島柳北と脈を同うして居た服部誠一の『東京繁昌記』は、稍時代に接觸した傾向を持つて居た。『東京繁昌記』の漢文は、日本化した變體のもので、「牛肉の人に於けるは開化の藥舖にして而して文明の良劑也」と云つたやうな調子であつた。『妾宅』と題した文章の始めに「方今女學の行るゝや専ら女子の道を明かにし、稍男女同權の說あり。然り而して別品の流行未だ曾て今日より盛んなる者あらざる也。妻に正權あり、妾に內外あり。一男にして能く一婦を守る者甚だ鮮し。」と論述してあるのも、眞面目なうちに滑稽味を帶びて居る。一種の東京印象記として、當時の風習、傾向の一面が、略ぼわかるところに『東京繁昌記』の價値がある。

要するに、明治初年から十年迄の文學は、僅かに默阿彌と魯文とによつて、面目を維持した丈で他は云ふに足りなかつた。時代の動搖、實利思想の跋扈に加へて、讀者の鑑賞眼の幼稚、作家に凡庸の徒が多かつたことなどが錯綜しての結果である。美術、演劇なども、矢張、文學同樣に振はなかつたのも當然である。

演劇は、不振ではあつたが、俳優には、坂東彦三郎、中村芝翫、尾上菊五郎(何れも五代目)河原崎權之助(九代目團十郎)澤村訥升(二代目)岩井半四郎(八代目)などが居て、實力の上では、決して前代に劣らなかつた。美術は、不振のうちに、一脈の新生氣が、かすかにほの見えぬではなかつたそれは、明治七年から九年へかけて、フランス人アベルゲリーを初め、イタリー人キヨソネ、フォンタネヂー、カルペルチー、ラグーザらが、わが政府の招聘に應じて日本へ來て、明治に於ける洋畫界の先覺者川上冬崖や、國澤新九郎らの努力に呼應して、西洋畫の趣味を注入する先驅となつたとであつた。國澤は、二年間、イギリスに留學して、洋畫を研究した新人で、明治七年歸朝すると、彰技堂と云ふ畫塾を開いたり、銀座に家を借りて、小さな洋畫展覽會を開いたりした。國澤と共に洋畫教授に熱心だつたのは、フォンタネヂーで、裸體の活人モデルを用ゐて、寫生すると云ふ具合で、その門下から、小山正太郎、淺井忠などが出た。

別に在來の舊生命を維持した有力な畫家には、歴史畫の菊池容齋、江戸氣分を代表した河鍋曉齋柴田是眞らが居た。他に文人畫家として、中西耕石、村田香谷、田能村直人、谷口靄山、安田老山奥原晴湖などが居た。また華山、椿山の系統を繼承した瀧和亭、野口幽谷らが居た。而して文人畫の流行は、明治十五六年の頃まで續いたのであるが、美術上から見て、時代の進運と何等關係した

點がなかつた。要するに、演劇も、美術も、文學とひとしく、舊套摸守の時代だつた。

さうした沈滯と萎靡の上に一道の靈活な火を點じたのは、西南戰爭であつた。

新人と舊人、保守と進步、士族と平民との鬪爭が、西南戰爭によつて、大きく破裂してからは、時代の動搖も、一寸靜まつて、新人の時代、平民が伸びる時代、進步主義の旺んな時代が來て、文學美術、演劇の上に新しい光彩を發生すべき機緣を與へることになつた。

第三章　飜譯文學と政治小說の流行

（一）政治思想の勃興と英佛獨の思想

西南戰後、急に猛烈な勢で、勃興したのは、新しい政治思想である。其の勃興の遠因近因について言ふと、遠因は、福澤の『西洋事情』などに刺戟された事、福地の『東京日々』に於ける社說などに啓發された事、一般的に歐米文化に心酔し初めた事などを敎へることが出來るが、殊に板垣退助が明治七年一月、副島、後藤、江藤らと共に、政府に對して、民選議院建立の建白を提出し、翌八年二月、愛國社を組織したことが、餘程有力な遠因となつて居た。

板垣らの民選議院設立の趣旨のうちには「方今政權の歸する所を察するに、上帝室に非ず、下人民に非ず、而して獨有司に歸す。夫れ有司、上、帝室を尊ぶと云はざるに非ず。而して帝室漸く其尊榮を失ふ。下人民を保つと云はざるに非ず。而して政令百端、朝出暮改、政刑情實に成り、賞罰愛憎に出づ、言語壅蔽、困苦告ぐるなし。」と記してある。また板垣らが組織した愛國社の『本誓』のうちに『我輩の斯の政府を視ること、斯の人民の爲めに設くる所の政府と看做するより外なかるべ

し。而して吾黨の目的は、唯々斯の人民の通義權理を保全主張し、以て斯の人民をして自主獨立不羈の人民たるを得せしむるにあるのみ。」と述べてある。畢竟、板垣らの思想は、ルソーの民約說を共のまゝ鵜呑みとしたものであることがわかる。今日から見ると、幼稚で粗笨であると云はねばならぬ。

けれども當時にあつては、新しい卓越した意見であるとされて居た。この事はやがてフランス思想が、イギリス、アメリカの思想と倂立するやうになつたのを意味して居る。イギリス、アメリカの思想は、全然、功利的で、社會の實利を計ることを主眼として、政體に關する問題については、比較的に冷靜な方であつたが。フランス思想は、ルソーの自由平等說を中心として、社會の根本的改革を實現するには、先づ政體の變革を第一義とすることを提示して居るところから、社會の實利と云ふ方よりも、寧ろ政治運動の方面に熱中する傾向を招致した。

フランス思想に共鳴した學者、青年らは、板垣らの主張に贊成したが、ひとり、ドイツ思想に傾倒して居た加藤弘之らは、それに對して、議院尙早論を唱へた。即ちイギリス、アメリカ、フランスの思想に對して、更にドイツ思想が倂立することになつたのである。加藤らは、近世ドイツの國家學者ビーデルマン、スタインらの說に共鳴して、あく迄、君主の無上權を尊重して、萬民平等の

權利を否定し去らうとした。フランス思想には、恰度直反對で、彼れが進歩的、積極的であるとすれば、これは、保守的、消極的の傾向を持つて居た。ところで、一般社會は、ドイツ思想よりも、フランス思想を歡迎すると云ふ風があつた。ドイツ思想は、官僚中の有力者や、官學の徒のみが共鳴したに過ぎなかつたのである。

斯うして、政治上の運動が、次第に目立つて來たところへ、西南戰爭が曝裂して、一時沈默したが、戰爭が鎭まると、自由民權説が急に非常の勢を以て、流行し初めた。それは、今まで腕力を以て、一氣に政府を倒さうとした士族が、却て政府のために抑へ付けられて、大抵滅落してしまつたので、殘存した士族の群は、腕力の無効を悟つて、平和手段を以て、政府に肉迫しようと考へた結果、政治上に於ける新運動の合言葉として、自由民權説を唱説し、高調し出したのである。而して其の唱首は、土佐の板垣退助であつた。

板垣の自由民權説に油を注いで、其の勢を强めたのは、新聞紙であつた。それは、福澤の國會開設論が、一週間ばかり續けて『報知新聞』に載せられたことで、それに對して、諸方の新聞は、各自旺んに論議をしたのである。此の氣勢に煽られて、新しい政治思想は、到所に勃興した。而して明治十三年の國會期成同盟となり、自由黨の結黨準備となり、其の盟約書中に(一)日本人民の自由を

擴充し權利を伸す(二)國の進歩を圖り、人民の幸福を增益す(三)國民の同權(四)立憲政體の樹立を主張するに至つた。斯うした氣運は、やがて熟して、明治十四年十月には、板垣を首領として自由黨が生れた、其の翌年には、イギリス風の政治思想を抱いて居た大隈重信を首領とした改進黨が生れた。以上は、政治思想の旺盛になつた近因と趨勢との大要である。

それ等の時代思想を背景として、文學、美術、演劇などの方面を見ると、矢張、相互に一脈の連絡を有することを見出すのである。此の書の主眼とするところの文學方面を見ると、强い歐化熱及び新政治熱の勃興に伴うて、飜譯文學、政治文學が、勃然として流行し始めて來た新趨勢を第一に擧げねばならぬ。

（二）　飜譯文學の種類及び文體

當時、流行した飜譯文學は(一)政治的(二)純文學的(三)科學的の三類に分つことが出來る。政治的なものには、中江兆民がルソーの民約論を譯した『民約譯解』を始め、宮崎夢柳、小室案外堂らの『夢戀々』『鬼啾々』『西洋血潮の荒波』『自由の凱歌』などがある。純文學的なものは、政治趣味乃至歷史趣味を加へたものと雜種との二種に分つことが出來る。前者は、リツトン、スコツト、ヂスレリ

ーなどの小說を譯したもので、織田純一郎の『花柳春話』關直彥の『春鶯囀』尾崎行雄の『經世偉勳』牛山鶴堂の『梅蕾余薫』坪內逍遙の『慨世士傳』藤田鳴鶴の『繫思談』などを數へられよう。後者は兆民の『維氏美學』外山ヽ山、矢田部尙今、井上巽軒の集作『新體詩抄』坪內逍遙の『該撒奇譚』井上勤の『全世界一大奇書』『狐の裁判』片上平三郎の『鷟璨逍囘島紀』末松青萍の『谷間の姫百合』などを擧げることが出來る。科學的なものには、フランスの科學小說家ジユールベルヌの作品が多く譯出された。其の最初に出たのは、川島忠之助の『新說八十日間世界一周』で、それに續いて井上勤の『六萬英里海底旅行』紅芍園主人の『鐵世界』福田直彥の『萬里絕域北極旅行』などが出た。其の他『學術妙用造物者驚愕試驗』『亞非利加內地三十五日間空中旅行』『月世界旅行』なども出た。斯うした飜譯が、二十年頃まで、續々出たのである。

以上に就て、細說すると、兆民の『民約譯解』(明治十五年)は、漢文體ではあるが、政治思想勃興の勢に乘じて、非常に歡迎された。板垣らによつて、漫然と鼓吹されたルソーの思想が、具體的に傳へられたのは、此の譯書のためであつた。宮崎夢柳の『自由の凱歌』は、デユマの作を譯したのであるが、『鬼啾々』その他のものと同樣に、自由民權思想を寓したもので、其の舞臺を、フランス革命に取つたものであつた。高山樗牛は、これ等の飜譯を見て、「當時の政治界の暗澹たる風潮を窺

ふことが出來る。」と云つて居るが、要するに、文學鑑賞の眼を以て、見るべき程のものではない。『自由の凱歌』の文章は、極めて舊式なもので、馬琴調を摸したやうに思はれる。

> ヴルバートと云へる街衢の中央より思ひも寄らず、忽然と鼓の聲天地に響き現はれ出し一彪の軍馬、スワ敵の我れに先だち寄せ來りしこそ健氣なれ、花々しき手始めの戰ひなし、革命黨が手並の程を見せ與れんと急に隊伍を立直し、今や遲しと控へし所ろ、是は全く敵にあらず、巴里の護衛兵の政府に負き、人民を援けん爲め、此邊まで來りしものなるにぞ、革命黨は愈々之れに勇氣を増し、ドット揚げたる鯨波の聲。

と云つたやうな調子である。ところが、其れはひとり『自由の凱歌』ばかりに留まらなかつた。純文學的な作品で、政治趣味乃至歴史趣味を帶びたものを譯した物にも、矢張、馬琴調が附いて廻つて居た。でなければ、漢文調に囚はれたもので、明治二十一年、二葉亭四迷の『あひびき』が出るまでは、すべて舊套を脫しなかつた。

それは、純文學的な範疇にあつた織田純一郎の『花柳春話』（リツトン）の如きも、明治十二年に出て、非常に歡迎されたのであるが、而して其の序文のうちに、「舊文を一變して、苟も四十八字を讀み得るの徒は、之を讀むで解せざるの感なからしめ、以て啓蒙英史の風俗圖に充んとす。』と云つては居るが、矢張 舊式に墮して居た。其の一節に、「花は散り、霞がくれを行く雁の影に春暮て、か

たみに殘すものとては、青葉かくれに宿かりて、昨日を謠ふ鶯兒の聲より外に跡もなし、然れども人情熱を去り、冷に歸するの理とて、春の後なる夏景色は亦一層の詠なり。』とあるのを見ても、舊文を一變すると云ふ譯者の意氣込を全く裏切つて居ることがわかる。

同じく、リットンの作を譯した藤田鳴鶴の『繫思談』は、實際、尾崎庸夫が譯述者であつた。これも「世の譯家、其構案のみを取りて、之を表發するの文辭に於て、總て心を用ゐる事なし……譯者竊に玆に慨するところあり、相謀つて、一種の譯文體を創意し、語格の許さん限りは務めて原文の形貌面目を存せん事を期し、これが爲めに瑣末に渉れる邦文の法度の如きは、寧ろ之を破るも、肯て顧みる所に非ず。」と告白して居るが、譯文を見ると「ケネルムは、累代培養せし樹林の下陰に傍ふて、我家へと返りたるが、其路は一面青草にて潺々たる溪流其側を通過し、今しも別れし吟客がたどり行ける塵埃滿眼の大路に比すれは、瀟洒清灑、同日の談に非ず。』と云つたやうな生硬なもので、頗る讀みづらく出來て居る。これは、當時の譯文に共通して居た弊害だつた。

蓋しそれ等の譯者は、主として政界の志士で、文學上の專門的な素養がないのみならず、譯文の上に微妙な味を出す丈の卓越した手腕もなかつたのであるから、優れた譯文を生み出すことが出來なかつたのだ。彼等は、序文に於て、大言壯語して、譯文の模範を示すやうな事を云つたけれども

それは常套的な誇張した御座なりの言葉に過ぎなかつた。而も專門家でなかつた彼等が、純文學的な作品を譯した動機は、何處にあつたかと云へば(一)彼等が歐米文化の一半を理解して居た眼には在來の小說が餘りに平凡無味に見えた爲め(二)政治趣味を鼓吹しようとか、乃至は新しい文學趣味を普及させようとか云ふ目的を以て居た爲めであらうと思はれる。

それ等の飜譯小說が、讀者に歡迎されたのは、讀者のうちにも、歐化熱や、政治熱に感染したものが多くて、在來の舊小說よりも、新しい歐米の小說を見たいと云ふ烈しい慾望を有して居た爲めだつた。而して彼等の文學的鑑賞眼の程度は、依然、進歩して居なかつた爲めに、粗雜な、生硬な譯文さへも、淸新な文字のやうに思つて、愛誦したのである。

以上のやうな趨勢の中で、稍例外とすべきは、坪內逍遙が譯したリツトンの『慨世士傳』である、それは流石に後來、『文壇第一流の地位を占めた人の手になつたものであるから、譯文はたとひ、馬琴調の色彩を帶びて居ても、流麗で、婉曲で、一異彩を放つて居た。

(三)　飜譯文學の功果

雜種の方には、文學上から、相當の價値があるものが比較的に多かつた。井上勤が譯した『全世

界一大奇書』の原本は『アラビアンナイト』で、片山平三郎の『鵞瓈皤回島記』は『ガリヴース、ツラベル』を譯したのであつた。また『狐の裁判』は、ゲーテ作品を譯したものだつた。それ等のなかに、特に見るべきものは、坪内逍遙の『該撒奇談』で、これは、シェークスピヤの『シーザー』を譯したものだつた。

其の他、兆民の『維氏美學』は、鷗外の『審美綱領』の出る前に於ける唯一の美學書で、原著者は、ユー、ジエーヌ、ヹロンであつた。此の書は、外山ゝ山等の『新體詩抄』と共に、後の新文學興隆の上に資したところが少くなかつた。

科學小說は、單に當時の讀者の好奇心を挑撥し、滿足させたに過ぎなかつたであらうけれども、一面、暗々のうちに科學思想を養成する機緣となつたにちがいない。それと同時にロマンチックな空想を湧起せしむる力もあつたやうに思はれる。

要するに、翻譯文學の流行は、西歐の新趣味、新知識を民衆の一部に與へて、新しい小說の興起を促がすべき一原因となつた。斯うした機運に應じて起つたのは、末廣鐵腸、矢野龍溪、藤田鳴鶴柴東海散史、須藤南翠などで、南翠一人を除くと、他は何れも政論家であつた。斯うして逍遙、鷗外、紅葉、露伴、二葉亭などが出るまでに、素人の手によつて、過渡時代を作られたことは、興味

ある現象であつた。

（四）政治小説の作者と技巧

當時の政治小説は、嚴密に文學上から見ると、政治小説とは云ひ難いものであつた。少くとも、藝術的な政治小説ではなかつた。單に著者の政治思想を小説の形式を假りて、露骨に發表した低級なものに過ぎなかつた。畢竟、此の種の作家は、在來の舊套に囚はれた小説の缺陷を補はうとする意志を朧氣ながらも、持つて居たのであらう。だが、それよりも尾崎行雄が云つたやうに「身を小說家に現して、錦心繡腸を鏡花水月の幻境に發露し、以て大聲をして俗耳に入り易からしむるが如きは今日我國の政治家たる者の最急方便なりとす。」との方針で小説を政治上の方便に利用したのみならず、其の文學的な素養や、藝術的氣禀にも缺乏して居た爲めに、今日から見ると、極めて幼稚なものとなつたのである。

政治小説として、最も早く出たのは、明治十六年に發表された矢野龍溪の『經國美談』であつた。次ぎに十七年には、藤田鳴鶴の『文明東漸史』、十九年には、末廣鐵腸の『雪中梅』、二十年には南翠の『新裝の佳人』鐵腸の『花間鶯』『東海散士の『佳人の奇遇』などが出た。此のうちで『文明東漸史』だけは、

一種の史論で、小說ではなかつた。高野長英、渡邊華山の生涯を描いたところが、幾分か小說らしいと云ふ丈のものだつた。

他の五篇は、先づ政治小說と云つて差支えはないが、其のうち『經國美談』と『佳人の奇遇』とは、史的ロマンスの風味が際立つて居た。『經國美談』はギリシヤの歷史を敷衍して、稗史的に作りあげたもので、『佳人の奇遇』は、近代歐米に於ける史上の出事事を網羅して、亡國の志士に同情を寄せたものであつた。

『經國美談』が覘つたヤマは、新興の日本にふさわしいと思はれるところのギリシヤの齊武の名士エパミノンダスとペロピダスとが力を合せて、國威の降祥を計つた勇しさにあつた。『佳人の奇遇』が覘つたヤマは、當時の自由獨立の思想に當てはまるべきアメリカの繁昌を叙して、時人の共鳴を得ようとしたところにあつた。『經國美談』は、事實そのものが、ロマンチツクである。『佳人の奇遇』は著者の空想から、アイルランドの一佳人幽蘭女史を點綴して、それに各亡國に於ける志士を配合して、ロマンチツクな空氣を作り出して居た。

『經國美談』の文章は、片假名交りの穩稚なもので、今日、見ても、左程、讀みづらくはない。『佳人の奇遇』は、漢文直譯體で美辭佳句を無暗に排列した誇張的氣臭の多いもので、今日、見ると、

隔世の感がある。この書は、表面、東海散士の手になつたとあるけれども、事實は、高橋太華の筆だと傳へられて居る。

以上の二書は、其の頃の青年に心から歡迎されて、洛陽の紙價を高からしめたものである。政治熱が強くて、漢文脈の誇張した文章を愛する風があつた當時の青年が『佳人の奇遇』を見て、どんなに驚喜したかは、今日の青年には、推測し得られないほどである。經國の志士を氣取つて居た昔の青年が、窃かにエパミノンダスや、ペロピダスに私淑して『經國美談』を始終、手から離さなかつた光景も、一寸、今から想像しかねるほどである。左に『佳人の奇遇』の一節を引用して見よう。

時に金烏既に西岳に沈み新月樹にあり。夜道朦朧なり。少焉ありて、皓彩庭を照し、清光戸に入る。幽蘭靜に起ち、窓を開て曰く、光景晝くが如し、郎君幸臨す、欄外風清花香人を襲ふ。良夜空く度り難く、盛會再び期すべからず。徒に相對泣する亦何の益かあらむや。氣を鼓し勇を奮ひ、歌舞吟咏自ら寛にすべしと。

當時は。斯うした文章が「巧妙だ、爽快だ。」と云つて、『旺んに愛誦されたのである。それに比較すると『雪中梅』『花間鶯』『新裝の佳人』などは、其の後に出た硯友社一派の小說などに稍近い文章となつて居た氣味があつた。換言すれば、寫實的傾向が、少しばかり出て居た。どうかして、新しい文章を作らうとした心持が、仄かに浮かんで居た。

けれども今日から見ると、『雪中梅』『花間鶯』などは、矢張、漢文脈が餘りに勝ちすぎて居て、俗語との調和が、うまく行つて居なかつた。『雪中梅』の主人公國野基が大演說をやる有名な章の發端にある一節を見ると「鐵道馬車ゴウ〳〵と轆り去つて、和合社の乘合馬車ガラ〳〵と馳せ來る、路狹く人多く往來雜沓す。忽ち見る橫巷の入口に高く數帳の表榜を揭ぐ。曰はく――來る二十八日不論晴雨書畫雅集、席上諸先生揮毫、會主蚵字園再拜。曰く――今二十日(日曜日)午後一時より井生村樓において正義社政談演說會、出席辯士某々。」とあるのを見ると、殊に漢語と俗語との不調和が目立つやうである。だが、左の一節などは、稍柔か味が加はつて居る。

少女は枕元にて悄然と物思はしげの顏付なるが、色は白雪を欺き、鼻筋通り、眉秀で、眼中も冷かにして何處となく愛嬌あり。數日前に結びしと思はるゝ島田髷は少し亂れて黑髮面に垂れ、母の寢顏を窺ひて、パラパラと淚を落し、手巾にて之を拭ふ有樣は梨花一枝春帶雨の風情なり。姑くあつて老母は、ヨンコンと咳をして目を開き「オヤお春はまだ其處に居るかい、ツイウトウトと睡つた………

だが、地の文と會話とが、また調和し得ないあとを歷然と示して居る。島村抱月が『雪中梅』の文章を評して「武骨漢がことさらに俗に碎けた事を言つたり、ことさらに細かい事に氣を付けたりするやうな所に、在來のいかめしい一遍の漢文から、一步新しい方へ脫出しやうとして居る所とはあ

るが、それが十分に物になつて居ない。」と云つたのは正當である。けれども鐵腸らを始め、當時の政治小説の作者は、却て其の不調和を以て、長所だと信じ切つて、得意になつて居たやうな氣味があつた。漢文直譯的な地の文から、平坦なやさしい會話に移つてゆく變化を一つの獨自的なやり方だとして居た。

『雪中梅』が『經國美談』などに次いで、相當な喝采を得たのは、主として、二十三年の國會開設と云ふ點にヤマを置いて居るからであつた。描寫が粗大であつても、事柄そのものが當時の人々を動かしたのだ。南翠の『新粧之佳人』は、歐化熱の有様を描くと云ふ上にヤマを置いた爲め、これも相當に讀書界を風靡した。それには、當時最も目新しく時人の眼に映つた舞踏會や、若い政治家や、美しい令嬢などが描かれてあつて、一々、モデルさへあつたと傳へられたところから、誰も好奇的な心持で『新粧之佳人』を見たのであらう。

（五）當時の青年と文學

田山花袋は、『東京の三十年』のうちで、其の時分の新知識ある青年が、どんな心持で、當時の文學に對して居たかを叙述して居る。其の青年と云ふのは、花袋の友人で政治家志望で、文學好きだ

つたと云ふから、一部の青年の心持を代表して居るやうに思はれる。

『僕も、もう少し文章が書けると、文學をやるんだがな、文學者、藝術家が何と言つても、一番すぐれた高尚な事業なんだからな』何處からさういふ智識をかれは得たらうかと思はれるほど、文學者、小説家に就いての新しい知識を持つてゐた。或はかれも紅葉や思案や眉山が養はれたその同じ空氣の中に住んでゐたためであるかも知れなかつた。かれは紅葉が豫備門で三馬研究をやつてゐる批評などをした。『でもな、君。今の奴等のやうに、三馬なんか研究してゐちや駄目だよ。西洋にはいくらでもえらい文學者がゐる。すぐれた小説がある。これからの文學をやる奴は、何でも外國のものを讀まなければ駄目だ。』かう言つては、かれは『デッケンス、サツカレエ、ユウゴオ、チユマ、ゲエテなどと言つて、昂然として、指を折つてその大文豪の名を擧げた。かれはまた政治と文學との一致に就いてはなやかな空想を抱いてゐた。かれはよくビーコンスフヰルド侯（チスレリー）の話を持ち出した。『議會に出てゝは議長、內閣に入つては總理大臣、そしてあゝいふ、小説を書く、實に理想的だ』などと言つた。ビイコンスフイルド卿の作をもかれは澤山に持つてゐた。“Venetia” “Vivian Gray” などの話を私によくして呉れた。『佳人の奇遇』や『雪中梅』などといふ新刊書をもかれは常に讀んだ。丁度須藤南翠が改進新聞にその『新粧之佳人』を連載してゐる頃で、その中には多少井上侯爵の舞踏熱の時分の空氣や人物が書いてあるので、かれは頗るそれを愛讀した。

今日から見て文學的價値の極めて貧しかつた政治小説が、殆ど政治熱、歐化熱そのものゝ爲めに

廣く讀まれた具合が、花袋の筆によつて察することが出來る。

結局、いつも、才子佳人を主人公として、露骨な政見を托した當時の政治小說は、單に其の時分の文壇に喝采された丈で、一時的生命を有したに過ぎなかつた。後の文學に對しては、殆ど交涉がないと云つても宜い位であつた。けれども間接の影響が少しはないでもなかつた。それは、飜譯文學と共に、舊文學の殘影を次第に驅逐し、葬り去つて、眞に文學的に幾分の價値ある新文學の興起すべき地ならしをやつたことであつた。畢竟、それ等は舊文學から新文學へ推し移つてゆく過渡期の產物だつた。

尙ほこゝに一言したいのは、當時の文壇が三田派によつて、一時、光彩を加へたことであつた。三田派の機關『時事新報』は、西南戰後に於ける新聞紙發展の機運に乘つて、明治十五年に創刊されて、福澤諭吉が、社說の筆を執ると共に、門下の人材を新聞界に入れた。藤田鳴鶴、矢野龍溪、末廣鐵腸、尾崎學堂らは、何れも、福澤の訓陶を受けた三田派の秀才で、政治家と新聞記者とを兼ねて居た。それ等の人たちが云ひ合はせたやうに、政治小說の方に手を付けて、一時、文壇を風靡したのであつた。當時未だ若かつた彼等は、恐らく、ヂスレリーのやうに、大きい政治家と文學者とを兼ねて、議會でならば議長、內閣へ入るならば總理大臣、而して傍ら、小說を書いて、才子佳人

の喝采を得たいと夢想したのであらう。それを幾分か、後日に實現し得たのは、唯尾崎學堂一人であつた。

（六）　劇界革新の微光

序に述べたいのは、當時の演劇と美術とのことである。それ等も、矢張、文學と同様、歐化的風潮の外に起つことは出來なかつた。其の氣運を眞先に感知したのは、劇界の策士と云はれた守田勘彌（先代）であつた。彼れは、十一年六月に新しく出來上つた新富座に始めて瓦斯を點じたり、有力な高官を開場式に招待したりなどした。而して當時の士で觀劇眼の優れた人たちの意見を入れて、リツトンの原作を默阿彌が飜案したところの『人間萬事金世中』と云ふ新狂言を上演した。『默阿彌脚本集』のうちには『金の世の中』について「一種の喜劇味を伴つて居る社會劇として見ても、默阿彌の作中別の味ひを持つてゐる特色あるものである。」と云つて居る。此の作中には、魯文や、『東京繁昌記』の服部誠一のやうに、矢張、文明開化熱に浮かされて、夢中になつて居た當時の社會狀態を巧みに採り入れてある。序幕に小僧の野毛松が、番頭蒙八に「これ〳〵野毛松、ふざけるな、小僧のくせに利いた風に、茶など呑むには及ばぬことだ。」と叱ると、直ぐに反抗して「いや小

倅だつて番頭だつて、開化の世界は同じ欄だ、さう安くして貰ひますまい。」と云ふところや、毛織の家に寄食して居る惠府林之助が「當時は開けて居る故、金さへあれば蒸汽にて早速行かれぬ事もないが、蒸汽どころか電信を掛ける錢さへ自由にならぬ。」と嘆息するあたりは、當時の見物に喜ばれたであらうと思はれる。

此の狂言が上演されると、横濱在留のオランダ人三十餘名が、驚喜の眼を瞬つて萠葱地テレンプの引幕を送つたりして、景氣を添へた。勘彌は、非常にそれを喜んで、鄭重に彼等を招待したと云ふやうな挿話さへあつた。

斯うして、新富座は、眞先に時代の新氣運に乘じて、働いたので、ドイツの皇孫ハインリヒ親王や、アメリカの大統領グランドが來朝された時は、第一に觀覽に供すると云つた風で、續いて十二年九月には、英米の俳優ダギツトソン、ウヰルソン、マカラン、ハノゲマン、レオン及びフランスの音樂家マダム・ハーリマンらを加へて、團十郎一座と共に内外人合同劇を催ほした。

けれども當時の觀衆は默阿彌が翻案した『金の世の中』に共鳴し得たであらうけれども、内外人合同劇に共鳴するほどの素養も、理解も持つて居なかつたので彼等の多くは、それを冷笑したり、譏つたりして、眞面目に外人の演技を見ようとしなかつた。其の結果、勘彌の新しい企ても、非常な失

敗に歸して、財政上に大きな打撃を受けた爲め、今まで執つて來た進歩主義に對して、懷疑的になつた。

爾來、劇彌は、保守主義に逆戻りして、劇界改革の意氣を頓に抑へてしまつたが、十三年一月には彼れの發意で、始めて新富座へ當時の新聞社の劇評擔當記者を招待して、今日のやうに、どの新聞も、劇評を載せるやうになつた例を開いた。

其の後、劇界革新のために設立されたのは明治十九年八月に發表された演劇改良會であつた。其の發起人のうちには、井上馨、森有禮、福地源一郎、外山正一、矢野文雄、依田百川、末松謙澄、澁澤榮一、藤田茂吉、和田垣謙三らが居た。賛成人のうちには、西園寺公望、田口卯吉、伊藤博文大隈重信、陸奥宗光、大倉喜八郎、千葉勝五郎らが居た。斯うして、當時の有力な名士を多數に網羅してあつたところから、一時は、社會の耳目を聳てさせる丈の力があつた。

それで、外山正一は『演劇改良私考』を出版して、新時代の演劇についての感想、要求を披瀝し、末松謙澄は、十九年十月、一つ橋の講堂で、劇界革新について演說を試みると云つたやうな風で、築地に於ける大椿樓の改良朗讀會には、伊藤博文も出て、依田學海、川尻寶岑合作の『吉野拾遺名歌譽』の朗讀に耳を傾けた。

當時の改良意見のうちには、女形を廢して女優を用ゐ、花道や、廻り舞臺や、チョボを全廢したいと云つたやうな歐化した要求があつた。だが、それは、未だ俳優そのものが、みな其處迄進んで居ない上に、劇場當事者も、左程、改良について熱心でなかつた爲め、いつの間にか、改良會も立消えとなつて了つた。

斯うした新風潮のうちにあつた市川團十郎は、未だ其の活歷風の技藝を完成する迄には至らなかつた。其の鷹揚な氣品ある藝風は、看客の一部から高尙ぶるとのみ誤解されて「活惚を踊れ」と云はれたことさへもあつた。菊五郎は、先代の藝風を守つて、巧緻なところが鮮かに觀衆の眼に映つて居たので、一般の見物には、團十郎よりも、より多く喝采されると云つたやうな有樣だつた。

(七) 美術界と歐化的風潮

美術方面を見ると、こゝにも、歐化的な色彩が相應に著しかつた。それは、二つの方向を執つて現はれた。其の一つは、洋畫の勃興運動、今一つは、米人フェノロサの提唱によつて、維新以來、全く閑却されて居た日本畫を復興させようとするに至つたことであつた。尙ほ他に浮世繪の復興もあつた。

純日本畫の復興は、極めて、重大な意義を以て居た。當時の顯官は、概して田舍武士の出身で、美術上の鑑識眼が殆どなかつた爲め、洋畫や、石版畫を新文化の象徴のやうに思つて、日本畫を輕視したので、古來有名な畫家の手になつた傑作さへも、顧みられないやうな有樣になつた。而も時人は、概してそれに雷同して、少しも、日本畫本來の價値を自覺しなかつた。斯うして、日本畫の命脈が殆ど稀薄になつた時、其の眞價を認めて、賞揚に力めたのは、米人フエノロサであつた。日本畫の眞價を發見した人は、必ずしも、フエノロサのみではなかつた。フランスの文學者ゾラゴンクール兄弟及びモネー、デガー、ホヰツスラー、マネーらの美術家も亦日本畫の讃美者で、ゴンクールには『歌麿傳』『北齋傳』の著述がある。けれども、それ等の事は、遙かに後になつて知られた事實で、明治初期にあつては、先づフエノロサを以て、最初の日本畫の嘆美者としなければならぬ。

アーネスト・フエノロサは、北米ボストンの人て、明治十二年、日本に招聘されて、政治經濟の教授に當つた。彼れは、日本美術に對して、深い興味を抱いて、狩野永悳について、鑑畫法を學んだ。その結果、日本畫が却て洋畫に優つて居ることを發見して、明治十四年、其の旨を世間に發表した。

フエノロサは、再三、日本畫を賞揚して措かなかつたのみならず、進んで、岡倉覺三、河瀨秀治

らと共に、明治十八年、鑑畫會を組織して、時人が、日本畫に冷淡なのを警醒するに力めた。それと同時に、開成所教師であつたドイツ人ワグネルや、イタリー人キヨソネや、アメリカ人ビゲローウも、口を極めて日本美術の尊いことを力說した。

若しそれが、日本人のうちから出た叫びであつたならば、誰も耳を假さなかつたであらう。けれども歐化熱の烈しい時代で、歐米人の云ふとは、無條件で共鳴した傾向のある場合なので、智識階級のうちにも、漸く反省して、靜かに日本畫のことを考へて、其の再興を計らうとする者が出て來た。明治十五年及び十七年に、政府が繪畫共進會を再度開いたのも、日本美術協會の前身である龍池會によつて、數度、觀古美術會を開いたのも、皆フェノロサ等の刺戟に基づいたのであつた。それが一歩を進めて、日本美術協會の新古美術の展覽會を生み、東京美術學校の設立が、明治二十年十月に勅令を以て、公布されるところまでいつたのである。

洋畫は、西南戰後、頓に勃興して、明治十一年には、淺井忠、小山正太郎らが、洋畫研究所十一會を神田に開いた。洋畫家のすべてが一致して、共同畫談會をも催ほした。それ等の形勢は順潮に推し進んだのであるが、十四五年頃から、日本畫復興の氣勢が急に昂ると同時に、衰微の兆候を帶び始めた。明治十五年に開かれた政府主催の繪畫共進會で、洋畫の出品を許さなかつたのは、それ

がためであつた。

斯うした不振狀態を見て、洋畫家の一團は、發奮して、明治十六年、兩國井生村樓に集つて、振興の方策を議した。而して其の翌年には、淺井忠、小山正太郎らが、十一會を發展させて、頻りに頹勢を盛り返さうと力めたけれども、一向、手答へがなかつた。此の不振は、日清戰爭前後まで續いた。

浮世繪は、一時、不振だつたが、此の期に入つて、世の中が、大分、落ち付いてくると同時に、其の需要を增して、復興の時代に入つた。それに、一方には、新聞紙が發展し始めて、其の方にも浮世繪畫家の需要があつたので、新しい壇場を得た形となつた。

當時、浮世繪の大家として知られたのは、豐原國周、月岡芳年、小林清親、小林永濯、落合芳幾らであつた。國周は俳優の似顏繪に於て、芳年は、洋風を加味した人物畫殊に美人風俗畫に於て、清親は新しい滑稽畫に於て、永濯は小兒などを描くことに於て、芳幾は江戶狹斜の風俗を寫すことに於て、各自、傑出して居た。其の後繼者としては、富岡永洗、尾形月耕、武內桂舟、右田年英、水野年方らがあつた。

尙ほ日本畫壇に於ける此の期の大家として、フエノロサと共に、邦畫復興に盡した狩野芳崖、橋

本雅邦の二人あることを忘れてはならぬ。彼等の事業は、第二期に入つてから、改めて略述したい。

第貳期　新文學發生時代

第壹章　當時の思潮及び文學の概勢

（一）歐米文學思潮と國粹的思潮

第二期に入つて、文學界は、始めて、正しい道を歩み始めた。其の現象を觀察すると、第一に擧げなければならぬのは、坪内逍遙が『小說神髓』及び『當世書生氣質』を著はして、明治に於ける新文學の黎明が近付いたのを知らせる曉鐘をつき鳴らしたことである。在來、江戶文學の余唾を甞めて居た文學界は、翻譯文學や、政治小說の刺戟によつて、昏睡のうちから、僅かに半眼を開きかけて居たのが『小說神髓』によつて、愈々兩眼を開いて、眠りから醒め始めたのである。それに續いて、長谷川二葉亭の處女作『浮雲』や、翻譯『あひゞき』が出るに及んで、黎明の光りが、鮮明になつて來たのである。

第二に擧げねばならぬのは、『小說神髓』の公刊と前後して、尾崎紅葉や、山田美妙、石橋思案らが硯友社を組織して、江戶文學の研究に熱中する傍ら、幾分か新しい英米の文學にも接觸して居たのが『小說神髓』や『當世書生氣質』などから強い刺戟を受けて、先つ美妙の主宰する女學雜誌『以良

都女』の發刊となり、硯友社同人の機關雜誌『我樂多文庫』の創刊となつたことである。

斯うして、一方に於て、小說界の黎明が來ると共に、一方に於て、評論界の黎明が近付いたことは、第三に擧げねばならぬ重要現象である。それは、德富蘇峯が、九州熊本から『將來の日本』を携へて上京して、忽ち世間に歡迎せられ、續いて二十年二月『國民之友』を發刊し『新日本の靑年』と題する有名な論文を公にして、一躍、評論界に於ける新しい重鎭となつたことであつた。蘇峯を中心として、民友社が組織されて、そこから德富蘆花、竹越三叉、山路愛山、國木田獨步らを出した。

以上三つの重要現象のほかに、歐化主義の反動から、三宅雪嶺、志賀重昂らが、明治二十一年、政敎社を組織して、國粹主義を宣傳すべき機關雜誌『日本人』を創刊したことや、落合直文らが新しい國文、短歌を始めたことなども、注目に價した出來事であつた。

右に擧げた四つの現象に於ける思想的、社會的背景について、こゝに一瞥を與へると、思想的には歐米に於ける文學及びキリスト敎思想が、大きい主潮となつて、小說界の革新と勃興とを促がしたことを見逃すことが出來ない。それに對峙したのは、江戶文學の余脈及び儒敎的、佛敎的な思潮であつた。歐米文學の一部は、玉石混淆ではあるが、旣に第一期の後半に入つて、續々飜譯されたのみならず、英米文學に精通して、そこから深い印象と感銘とを得た坪內逍遙が、小說革新に志し

て『小說神髓』を書いたのであつた。蘇峯の『將來の日本』も亦英米文學及びキリスト教に傾倒して居た彼れの腦裡に醱酵した產物で、それによつて、評論界の革新を促がさうと企てたのである。小說も、評論も、斯うして、英米文學の感化からして、革新を企てられたのだとすれば、それを以て、大きい主潮の一つと見做して、差支えないわけである。

蘇峯によつて組織された民友社は、一體にキリスト教的な傾向を持つて居たものが多かつた。蘇峯兄弟は勿論、獨步や、湖處子を始め、社中には、さうした色合を帶びたものが相當に居た。而して宗教雜誌ではあるが、文學趣味を多分に有して居た『女學雜誌』(二十一年十月創刊)なども、キリスト教思想を旺んに鼓吹して、新しい文學の搖籃となつた。

斯うして、歐米文學及びキリスト教思潮が文學界の新しい時代を色付ける主流となつて居た時、國粹主義の提唱によつて、新たに國文學や、漢文學の勢力が、幾分か復活した氣味合になつた。佛教なども稍勢を得て來た。而して雜誌『日本人』のほかに神儒佛の思想を宣傳すべき『大道叢誌』日本弘道會の機關『弘道會雜誌』陸羯南の儒教的思想と國家主義とを唱說する『日本新聞』などが出て、歐化主義、キリスト教などに對抗した。勿論、其の勢力は、歐米文化思潮に及ばなかつたけれども、文學界の一部分に影響した。佛教思想に根源を有して居た露伴が『風流佛』と共に、其の頭角を擡げ

たことや、紅葉と共に西鶴の文章に傾倒したことなどは、其の一例である。

（二）當時の社會思潮と文化

更らに社會方面を見ると、歐米文化の勢力は、依然として强かつた。少くとも、二十三年、敎育勅語が發布さるゝまでは、全盛を極めて居た。殊に其の最高頂に達したのは、明治十七年から二十年頃迄であつた。伊藤、井上らが、條約改正を早くするために、其の一方法として唱へ出した歐化政策によつて、鹿鳴館の夜會や、假裝舞踏會などが、旺んに催ほされて、はては日本人種改良を名として、日本の家屋、飲食、衣服をも、歐化して了はうとすることを唱へるものが出た。斯うして、歐化主義が極端まで推し進められると、愛國心を有する日本人の一部は、もう我慢し切れなくなつて、國粹主義を唱へ出したのである。

其の文學方面に於ける現象は、既に略述したが、政治方面に於ては、鳥尾小彌太の保守中正派、敎育方面では、川合淸丸の日本國敎大道社、西村茂樹の弘道會などの活動を見るに至つた。それがため、歐化主義は、社會に於て、幾分の打擊を受けて其の勢は、少しづゝ衰へて來た。拙著『明治大正五十三年史論』に於て、私は歐化主義と國粹主義との戰ひについて、斯う述べたことがある。

今左に引用しよう。

當時の歐化的傾向に對して、最も有力に國粹保存主義を提唱したのは、三宅雪嶺を中心とする『日本人』と陸羯南を中心とする『日本新聞』の一派であつた。彼等は、盲目的歐化主義を打擊すると同時に、日本特有の傳統的長所と精華とを保持しなければならぬことを雄健な力ある文章を以て力說した。此の叫聲は歐化熱に對して起つた反動的潮流と合して、强く民心を動かし、一部の識者をも動かし得たのである。これと前後して、同じく國粹保存の運動に參加した人には西村茂樹、川合淸丸、鳥尾小彌太、谷干城等があつた。西村は日本弘道會に據つて、日本固有の道德を說いた。川合は、大道社に據つて、日本固有の宗敎を高調した。谷は勝海舟、副島種臣等と時弊を痛論し、鳥居は『王法論』を著して保守的政法論を鼓吹した。斯うした思想界の動力は、やがて政治上にも、同一色彩を呈せしむべき潮流を導き出した。當時政府に壓迫されて居た自由黨の殘類と改進黨の人々は、今迄嫉視し反目したことを忘れて、一致して政府攻擊を始め、歐化政策の缺點を非難し、條約改正に對する政府の軟弱な態度を罵り、言論、出版、結社の自由を主張して、烈しく政府に挑戰した。

此の時、國家の危機を叫んで、大同團結を呼號したのは、政界の策士後藤象次郎であつた。彼れの大風呂敷は見事に多くの政客を魅して一時的成功を收めて、政府を脅かした。鳥尾小彌太の保守中正派も亦政府攻擊を續けたので、政府は大隈を引入れて、外相の椅子を與へ、後藤を誘惑して、遞相の地位に据えたけれども、民間黨は素より其の鋭鋒を柔げなかつた。而して其の鋒先は、最も鋭く、條約改正問題に對する反抗運動と共に、

大隈外相の身邊に差向けられた。其の結果、福岡玄洋社員來島恒喜が、大隈の車中に爆彈を投じた一個の悲壯劇となつて、一段落を告げたのである。何れにしても、歐化的大勢に對する反動は、保守的勢力の勃興となつて、政界も概して、保守主義者乃至國粹主義者の横行濶歩するところとなつた。

此の間に於て、特に記念すべきことは、黒田内閣の下に、憲法發布の大典が擧行されたことである。政界に於ける國粹的、保守的大勢は、右に述べた通りであるが、此の現象は、敎育、宗敎、美術、文學の方面にも鮮明に示された。敎育界に於ては、明治二十三年十月、敎育勅語の煥發を見たが、それに對して、敎育家も學者も、宗敎家も、我田引水的な解釋を下して、少しも進歩的な解釋を下すものがなかつた。此の際、井上哲次郎は『宗敎と敎育について』と題して、キリスト敎の趣旨は敎育勅語の内容に背いて居ると斷言して、キリスト敎徒と大論戰を開いたが、之は國家主義と歐化主義との葛藤的反射であつた。

其の他國粹發揮の現象は、井上圓了の東洋哲學研究の開始、幸田露伴の小說に於ける佛敎思想の發揮、文部當局者の國家的敎育の實施と國漢文及び日本的德育の奬勵などに現はれ、美術界に於ける雜誌『國華』の發行、日本畫復興を主眼とした東京美術學校の設立、寶物取調局の設置、帝室技藝員の制定などにも亦同じ潮流を見ることが出來た。

私は、略ぼ以上の概論によつて、歐化主義と國粹主義とが、戰ひ合つた狀態が、わかるであらうと思ふ。ところが、こゝに注意しなければならぬことは、當時の小說界では、矢張、歐化的風潮が、

社會に於けるよりも、强いと同時に、國粹主義の提唱によつても、中々衰へなかつたことである。田山花袋も其の點に言及して「歐化主義の反動として起つた政教社の國粹保存主義は、延いて落合直文等の國文學復興となつたが、文壇に對する感化影響は勿論民友社とは較べものにならない。その民友社の背後には、京都同志社のキリスト教思想なども大分働いてゐた。」と云つて居る。所詮、文藝の大勢は、社會的傾向と趣を異にして、歐米文學及びキリスト教思想が、比較的に長く勢力を保持して居たと見ねばならぬ。

（三） 歐米文學とキリスト教思潮の勢力

文壇に於て、ひとり、歐化的傾向が、長く續いて、容易に衰退しなかつた理由の一つは、新しい生氣あり、內容ある文學の模型を歐米文學のうちに求むるよりほかに、行くべき道がなかつたからである。勿論、西鶴、近松、芭蕉なども、明治文壇の一部に影響したにはちがいないが、大體の本筋は、歐米文學のあとを辿らねばならなかつた。小說でも、評論でも、今迄、日本文壇になかつた新しい考へ方、新しい見方、新しい表現法が、歐米文學のうちにある以上、文壇の先覺者は、どうしても、其の方に共鳴して、そこからいろ〳〵の暗示を得來ることにならざるを得なかつた。それで

坪內逍遙、森鷗外、長谷川二葉亭、內田不知庵、森田思軒及び民友社の人々は、歐米文學の紹介に力めることを以て、文學的進步を計るべき第一の要件と信じたのである。

逍遙は、つとにシエークスピヤの戯曲を翻譯したが、鷗外は、明治二十四年頃に、ドーデー、ツルゲーネフ、トルストイ、ホフマン、レルモントフ、シユビンらの作物を翻譯した。二葉亭は、ツルゲーネフの『獵人日記』の一節を『あひゞき』と題して譯出した。思軒は、ユーゴー、エツヂウオース、ポー、ホーソン、ジユール・ウユールヌ、ツエツケなどの作品を譯した。不知庵は、二十六年にドストエフスキーの『罪と罰』とを譯した。それから、民友社が企てた『十二文豪』に於ける『マコーレー』（竹越三叉）『トルストイ』（德富蘆花）『エマーソン』（北村透谷）『ワーズワース』（宮崎湖處子）なども出た。其の他、黑岩涙香の譯したボベスコや、カボリウの探偵小說、博文館から發行した『世界文庫』なども、歐米文學の一半をわが文壇に傳へた。若い人々は、何れも、それに共鳴した。

それから、キリスト敎思潮が、文壇の一部に強い感化を與へたわけは、當時の儒佛兩敎が、其の傳道上に於て、全く保守的で、惰眠的で、新代の青年を動かすべき力が、極めて稀薄になつて居たにもよるが、今一つは、キリスト敎の經典であるところの『聖書』が、新しい文學味、新しい詩的色彩を帶びて居て、青年の心眼にフレツシユな感じを與へたにもよるのであらうと思はれる。藤村の

自傳小說『春』や『櫻の實の熟する時』を見ると、さうした心持が、能く出て居る。

（四）新島襄のキリスト教宣傳

明治に於けるキリスト教思潮の宣傳者として、第一に記憶すべきは、京都に同志社を創立した新島襄である。彼れは、德富蘇峯が嘆稱したやうに、一面、國民的自覺を有する下に、德育の基本として、キリスト教を日本に弘布しようと決心した人物である。蘇峯は、彼れの人物について「彼は宗教の神聖なることを敎へ、深く之を信仰せんことを論したりと雖も、然も之が爲めに國家を忘れ國體の精華を傷くるが如き人物を養成せざらんことに努力せり。是を以て彼は宗教家としては、啻に祈禱讃美を爲す宗教家たるのみならず、併せて上帝の眼中に於て、正義、人道とせらるゝ所を堅持する宗教家たらしめんと欲し、之を政治家としては、獨り㣲巧なる政治家たるに止まらず、併せて民を愛し、國を愛するの政治家たらしめんと欲し、之を文學者としては、獨り能文雄筆なる文學者たるに止まらず、併せて正義を愛し、眞理を敬する誠實眞摯なる文學者たらしめんと欲し、之を事業家としては、獨り經營勞作の事業家たるのみならず、併せて公共の福祉を增進する事業家たらしめんと欲し、之を人民としては、獨り其衣食住に汲々たるのみならず、併せて其思想、精神品行

に於て、最も文明化せられたる高尙醇美の生活を得せしめんことを欲したり。」と云つたのは、穩健な見方である。

新島襄は、上州安中の藩士で、元治元年六月、二十一歲の時、國禁を破つて、アメリカに渡航し、約十年間、彼の地に留まつて居た。彼れはウイリヤムス大學、アムハルスト大學などで、神學を硏究して、明治七年、日本へ歸り、京都に同志社を創立した。彼れの門から出た人材には、德富蘇峯、浮田和民、海老名彈正、小崎弘道その他、有力な人々が多い。

新島が日本へ歸つた時分は、福澤、中村らが、英米の功利思想を鼓吹して、時人も亦それに共鳴して、內的敎養を閑却して居た。新島は、その點に對して、頗る慊らなかつたのである。其の缺點を補充して、正義を愛する人、眞理を欲する人を作るため、神の福音を宣傳しようと決心した。同志社を立てた目的は、そこにあつた。

彼れの高潔な人格と熱誠をこめた努力とは、彼れの事業を次第に擴張せしめた。彼れの感化を受けた人物は、彼れの主義、精神を尊重して、宗敎界、敎育界に活動した。それが動機となり、下地となつて、キリスト敎が、日本に於て、旺んに傳へられるべき時代が來たのである。此の意味に於て、彼れは、明治時代に於けるキリスト敎界の先覺者であつた。彼れが歸朝する以前に、クラーク

や、チエンスなどの人々が居て、キリスト教宣布の上に於て、相當の功果を殘したが、新島襄が出て、始めて、キリスト教的教育が、擴張され、廣布さるゝ芽を吹き出したのである。

彼れは、比較的に短命で、明治二十三年、四十七歳で歿したけれども、彼れの感化は、長く後まで殘つて居た。而して其の遺風を繼承した海老名、小崎、浮田、德富らを始め、新渡戸稻造、内村鑑三、本多庸一、押川方義、井深梶之助、宮川經輝らが、キリスト教の宣傳や、キリスト主義の教育に力を入れたのみならず、新島の同志社が出來ると間もなく、それに刺戟されて、青山學院、明治學院、東北學院、關西學院、鎭西學院を始め、明治女學校、英和女學校などが、キリスト教の精神を基調とした教育を弘めた。それは、主として明治十二年頃から二十一、二年頃までに出來たのである。

それ等の影響は、やがて文學上にも波及して、其の反映の一つとして現はれた民友社は、即ちキリスト教的思想を背景とした文學的結社とも云ふべき風を帶びて居た。民友社一派よりも、大分遲れて現はれた『文學界』の一派のうちにも、キリスト教的思想を有したものがあつた。二十一年に出た『女學雜誌』は、殆どキリスト教の色彩を以て滿されて居た。斯うした有樣で、文學をやらうとする若い人々は、一度、キリスト教の門を潛つて、其の洗禮を受けたと云つたやうなのが多くなつて

來た。少くとも、日清戰爭前後の時分までは、さうした風があつた。私は、斯うした點から、キリスト教的思想が、文學の上に可なりに影響を與へたことを認めたい。第二期時代の文學を理解するには、以上の社會的思想の傾向を背景として觀照しなければならぬのである。

第二章　新文學の黎明

（一）坪内逍遙の小説神髓

坪内逍遙が『小説神髓』及び『當世書生氣質』を出したのは、明治十八年の春から初夏へかけてであつた。卽ち四月に『小説神髓』を出すと直ぐ其の翌月、逍遙の持論、主張を裏書するために、新しい小説の模型として『書生氣質』を出したのである。

逍遙は明治十六年、東京大學文學部を卒業したのであるが、平生、好んで英米の小説や、脚本を見て、在來日本に行はれて居る小説と對照して、眞面目に考へた結果、そこに新しい世界を發見した。卽ち勸懲主義、皮相的寫實の傾向を一排して、外的よりも、內的に人情の機微、心理の活動を描寫するのが、小説の本務だと信じた。此の所信を披瀝したのが『小説神髓』である。

『小説神髓』は、畢竟「小説とは何ぞや。」と云ふ問題に對する新解釋である。小説の意義、描寫の原理、方法を平明に敎へた新しい文學論である。其の內容は、二卷十章から成立つて、上卷には、小説の本質及び起源、變遷を述べ、小説の主要目的が人情の描寫にあつて、勸善懲惡にない旨を明

示し、小說の種類及び効能を列擧してある。下卷には、先づ小說の方則を說いて、日本在來の小說を批判し、作家の規準とすべきところを敎へて、文體、脚色、性格から描寫の事に及んで、最も親切を極めて居る。

當時、文學に志した人々は、逍遙の『小說神髓』を讀んで、始めて小說の意義、目的の那邊にあるかを意識したことと思はれる。勿論、多少、心あるものは『小說神髓』に先立つて出た中江兆民の『維氏美學』や、外山、矢田部の『新體詩抄』や、菊池大麓の修辭學の譯書などで、幾分か朧氣ながら、文學の定義乃至小說の概念を知得したであらうけれども、それが具體的にも、理論的にも、明確になつて居なかつた。それを明確にすべき必要が迫つて居たところへ、『小說神髓』が出たのである。

『小說神髓』のうちに於ける主要點として、何人も能く引用するのは「小說の主腦は人情なり、世態風俗之に次ぐ。此人情の奥を穿ち、心の中の內幕をば漏す所なく描き出して、周密精到なるを小說家の務とす。和漢に名ある稗官者流が、ひたすら脚色の骨髓に入らん事を力めたりしも、人情の皮相を寫して足れりとす。憾むべき事ならずや。夫れ稗官者流は心理學者の如し。宜しく心理學の道理に基きて其人物をば作るべきなり。苟にも己の意匠を以て强て人情に悖戾せる、否心理學の理に戾れる人物などを作り出さば、其人物は、既に人間世界の者にはあらで、作者が想像の人物なる

から、其脚色は巧なりとも、其譚は奇なりとも、之を小說と言ふべからず。」と云ふ一節である。
逍遙は、以上の意を更に明かにするために勸懲主義の本元である所の馬琴の小說に言及して「彼の曲亭の傑作なりける八犬傳中の人士の如きは、仁義八行の化物にて、決して人間とは言ひ難かり(中略)されば小說の作者たる者は專ら其意を心理に注ぎて、我作りたる人物なりとも、一度篇中に出でたる以上は之を活世界の人と見なして、其感情を寫し出すに、已の意匠を以て善惡邪正人の情感をば作り設くる事をなさず、唯だ傍觀して有りの儘に模寫する心得にてあるべきなり。」と斷定した。當時にあつては、眞に空前の卓見とすべき言であつた。

されば、田山花袋は『小說神髓』について、「寫實を敎へ、心理描寫を說き、主觀を沒したる客觀的態度を奬め、從來の小說の悉く邪道なることを道破した點は、たしかに逍遙の偉勳である。」と賞讃した。高山樗牛も亦「逍遙一度出でゝ其の小說神髓と書生氣質とを著して勸懲主義の誤謬を極論し寫實小說の嚆矢を開きてより一世靡然として之に赴き、小說文壇の旗幟爲めに一變せり。是れ素より時勢のおのづから然らしめし所なりと雖も、そも〳〵又世を擧げて舊習の夢中に昏睡し、一人の能く舊圈套を穎脫するもの無き時に當り、滔々たる時に逆ひて、一世の木鐸となりたるは、逍遙其人の識見亦た非凡倫を絕えたるものあるに因らずむばあらず。」と云ひ。『明治文學史』の著者(岩城

準太郎）も「小說神髓は、啻に小說のみならず、文學全體に向つて革新を促したる文壇有數の著書なりき。」と推讃した。

唯楞牛は、それと同時に『小說神髓』にも聊か徵瑕あることを述べて「其寫實の意義の偏狹に失したる、傳奇及びノベルの並立を認めざる、心理的描寫を過重したる、又心理的描寫の通用せられ得べき小說の如何なる種類なるかを究めざる、理想小說の眞價を認むることを欲せざる、今日より見れば疑はしきふし少からずと雖も、是れは舊來の小說に對する反動として已むを得ざるの弊なりしならむ。」と云つて居る。思ふに、逍遙も、それ等の點について、相當の見解を有したであらうけれども、何よりも先づ大體の上から、革新的鐵槌を揮ふことの切要を痛感して、樗牛が擧げた點にまで、論及するに遑がなかつたのであらうと思はれる。要するに『小說神髓』は、明治文學の新聲を眞先に齎らした曉鐘であつた。

（二）　新文學の模型としての『書生氣質』と寫實主義

逍遙は、啻に小說に對する新見を披瀝したに留まらないで、其の主張を具體化したところの處女作『當世書生氣質』を續いて發表した。當時の社會は、小說家を戲作者として輕侮して、新しい敎

育を受けた學士が、小說の筆を執るであらうとは夢にも思はなかつた。ところが、逍遙は、さうした社會的慣習を打破つて、自ら進んで小說家となつて、『書生氣質』を書いたと云ふことは、當時の社會に強い感動を與へたであらうと思はれる。今日の人々は、赤門を出た文學士が、小說を書いても、珍しいとも、意外だとも、思はないけれども、明治十八九年頃は、文學士の肩書を有したこと其の事が既に大家であるやうに解されて居た時代であるから、さうした大家の地位にある新人が、小說に筆を染めたと云ふ新しい現象に先づ深い興味と好奇心とを挑撥されたにちがいない。

殊に『書生氣質』は、當時にあつて、最も新しい書き方をしだものゝ一つで、たとひ、今日から見て、多少、不滿なところがあるにせよ、極めてフレッシュな感じを當時の讀者に與へた。蓋し書生と云ふことは、今日の新人を意味した言葉で、其の生活も亦舊來の生活とちがつたところがあつたこの事も亦當時の社會の注意を惹いたにちがいない。殊に學生らは、自分に親みある生活が描かれて居ると云ふことに對して、先づ共鳴したであらうと考へられる。例せば、左の一節の如きは、當時の書生々活の一面が能く出で居る。

（編）そいつは我輩の願ふ所だ。親父の供給が絶えてからは我輩も實に窮したから何か金儲をしなくては。下宿の拂もできやしない。早速周旋してくれたまへ。それじやア今朝ッからやつて居るのは。即ち其 Translation〔翻譯〕

か(山)さうヨ、見たまへ雑と如斯體裁さ(纜)どれ〳〵ト言ひながら山村譯しかけたる原稿をとつて見る(纜)ヤア隨分亂暴な翻譯だな。ヱトなんだ……是ニ因テ之ヲ觀レバ陪審裁判トイフ制度ノ因テ以テ原因セシ所以ノ道理ハ蓋シ遠隔ナルサキソン時代ノ王政ノ頃ニアリシヤ。決シテ疑フ可キ事ハ非ラサルナリト余輩ガ信ゼザルヲ得ズト斷言セザル可ラザル事トイフ可シ……ハ、、、イヤニ冗長な曲りくねアつた變に讀惡い文章だなア。羊の腸よろしくたア如斯文體をいふンだらう就中「因テ以テ原因セシ所以ノ道理」なんざア實に重複極るじやアないか。なぜこんなに文を延ずんだらう反語ばかりいやに重なつて讀惡くツて。解りにくゝツて是れじやア素人にやア解りしやアしないぜ(山)ハ、、、、ぶつゝけかきだものを、文はどうせ無茶苦茶さ。しかし長くしたは此方の策さ。反語を澤山つかツたり。同じ事を繰返して居りやア。骨がちつとも折れないで以て直に一枚だけ出來るだらう。何々せずんばあるべからざるなりと歟。それ然り豈それ然らんやなりとやつて居ると。十行二十字は二十分位に一枚かけツちまふ。是之を Economy of labour (ほねをりの儉約) といふ(纜)ヤレ〳〵斯いふ翻譯者の手に成た。翻譯書を買ふ奴は可憫だ。しかし我輩も其法でやらかさう。二三枚原書の散亂になつたのを貸たまへ(山)ヲツト承知だ。それじやアペイジ、トエンチー(二十葉)から、かうツト。ページ、サルチー(三十葉)まで、君にやろう汗手堂へ明後日ゆくからなるべくせいだして譯したまへ。十枚で二圓五十錢にやアなるから(下略)

斯う云ふ風に書生々活を描寫した『當世書生氣質』は、十八年五月に第一卷を出して、翌年一月に完結した。全部十七卷で、春のやおぼろ戯著としてあつた。私は明治二十五年頃、田舎に居た時、

緣日の夜店で、それを見たが、妙な名があるものだと思つた。けれども「春のやおぼろ」と云ふ優しい名が、未だ十四歳位の私の頭に何となく、なつかしい印象を與へたことを未だに忘れ得ない。

『書生氣質』の內容は、某英學塾に居る數名の書生の氣質を寫すことを主眼として、彼等が、各自境遇と運命との糸に操られて、いろ〳〵に轉變し行く徑路を描くと同時に、彼等の有する新思想と在來、社會に行はれて來た舊思想との衝突を標示して、それを彩るに、守山父子の奇遇や、小町田粲爾と云ふ青年と田之次と云ふ藝妓とのロマンスとを挿んだものである。

逍遙が新しい描寫法によつて、其の表現しようとした人物、事件は、ある程度まで、鮮かに浮び出て居る。其の序言にある意味のやうに、全編の趣向は專ら傍觀の心得で寫眞を旨とし、勸懲主義を排して、之を訓誨の料とすると之を奬誡の資とするとは、讀者の心に一任したと云ふ心持をも充分に看取することが出來るのである。

だが、此の書が出た時、いろ〳〵の批評があつたやうに、後の明治文學の評論を書いた人々のうちにも、亦是非の評がある。私は、此の書に對しては、歷史的に評價するのを至當とする。何となれば、逍遙は、未だ何人も、新しい小說の模型を示さない時代に、先づ自ら率先して、模型を創造したところに人知れぬ大きい苦心と努力とが伴つて居たからである。それに全部十七卷から成立つ

て居て、約九ケ月間追次出したのであるから、讀者を次ぎへ又次ぎへ引付けてゆく呼吸、按配をも要したであらうと思はれる。だから、逍遙も、幾分か穩健になつて、思ひ切つた試みが出來なかつた點もいくらかあるだらう。さうした點を考へて、評價するのが正しからうと考へる。

それで歷史的評價の上からすれば、在來の勸懲的、戲作的、皮相的、方便的の弊から離れて、地の文にも、會話にも、大分新味が加はつて、人情の表裏、心理の働きなども、寫し出されて、敎養ある人が讀むに適した眞面目な作品であると云はねばならぬ。高山樗牛が「明治小說の新紀元を開きたる過渡時代の產物として、重大なる歷史的意義を有す。」と云つたのも、このためである。だが歷史的評價を離れて、嚴正に批判することになると勿論、多少の不滿があらう。それは、止むを得ないことで、田山花袋が「勸懲主義の戲作を排して立つた作でありながら、まだ其の根本から戲作の臭味を脫し切らないものであつた。」と云つたのも、一應の道理はある。けれども、それを以てしても、『書生氣質』が齎らした明治小說史上に於ける重大な地位は決して消滅しないのである。

（三）　ロシヤ文學と『浮雲』を書いた二葉亭

逍遙が『小說神髓』と『書生氣質』とによつて、文學上の新しいムーヴメントを起したのに刺戟され

て、處女作『浮雲』を書いて、略ぼ『小說神髓』の說いた目的を、さながらに實現したのは、長谷川二葉亭である。

二葉亭が、明治、大正文學史上に於ける地位は、可なりに宜いところにある。だが、彼れは、どうも、眞劍になつて、文學者として終始しようとはしなかつた。ひよつくり作物や、翻譯を出したかと思ふと、直ぐにいつとなく、韜晦して、もう大方、文壇を去つたらうと思ふ時分に又ひよつり現はれて、何か書くと云つた風であつた。斷續的な働きをしながら、彼れの創作も、翻譯も、可なりに立派なものを殘した。

二葉亭の生涯は『長谷川二葉亭』に詳しいから、こゝには、傳記を略するが、彼れの生涯についでは『予が半生の懺悔』を見ると、一番、早わかりがする。彼れは「私が文學が好きなぞになつたかといふ問題だが、それにはロシヤ語を學んだいはれから話さねばならぬ。それはかうだ――何でも露國との間に、かの樺太千島交換事件といふ奴が起つて、だいぶ世間がやかましくなつてから後、『內外交際雜誌』なんてのでは、盛んに敵愾心を鼓吹する。從つて世間の輿論は沸騰すると云ふ時代があつた。すると、私がずつと小供の時分からもつてゐた思想の傾向――維新の志士肌ともいふべき傾向が、頭を擡げ出して來て、卽ち、慷慨愛國といふやうな輿論と、私のそんな思想とがぶつかり

合つて其の結果、將來日本の深憂大患となるのはロシヤに極つてる。こいつ今の間にどうにか禦いで置かなきやいかんわい――それにはロシヤ語が一番に必要だ。と、まあ、こんな考からして、外國語學校の露語科に入學することゝなつた。」と先づロシヤ語學習の理由を述べ、次ぎに「で、文學物を見るやうになつたのは、語學校へ入つて、右のやうな一種の帝國主義に浮かされて、語學を研究してゐる内に自らその必要が起つて來たので、といふのは、當時の語學校はロシアの中學校同様の課目で、物理・化學、數學などの普通學を露語で敎へる傍、修辭學や露文學史などもやる。所が、この文學史の教授が露國の代表的作家の代表的作物を讀まねばならぬやうな組織であつたからである。する中に、知らず識らず文學の影響を受けて來た。尤もそれには無論下地があつたので、いはば、子供の時からある一種の藝術上の趣味が、露文學に依つて油をさゝれて自然に發展して來たので、それと一方、志士肌の齎した慷慨熱――この二つの傾向が、當初のうちはどちらに傾くともなく、殆ど平行して進んでゐた。が、漸く帝國主義の熱が醒めて、文學熱のみ獨り熾んになつて來た。」と告白して居る。

　彼れが志士の精神と熱情とを抱いて、文學に關係した徑路は、以上でわかるが、彼れは職業を文學に求めようとしなかつた。彼れが云つて居る通り、官報局の翻譯係、陸軍大學の語學教師、海軍

省の編輯書記、外國語學校の露語教師なぞといふ順序で進んで、一時は警務學堂に居たこともあつた。大體、文學とは緣の遠い方ではなかつたけれども、彼れのやうな職業的行徑を辿つたものは、文壇に少い。それに生理心理學と云つたやうな學問を十數年研究したなども、一風變つて居た。晩年『東朝』記者として、ロシヤに赴いたのは、彼れが生來持つて居た二つの傾向——文學的、志士的と云つたやうなものが、併行的に現はれたのだと見て宜い。

（四） 浮雲を書くについての苦心

斯うして毛色の變つて居た二葉亭が『浮雲』を出したものは、彼れの告白したやうに、生活費の一部を得たい爲めであつたが、然し彼れが、可なりに苦心を費したことは、左の一節を見ると明かである。

「浮雲」には、モデルがあつたかと云ふのか？」それは無いぢやないが、モデルはほんの參考で、引寫しにはせん。いきなりモデルを見附けてこいつは面白いといふやうなでは勿論ない。さうぢやなくて、自分の頭に、當時の日本の青年男女の傾向をぼんやりと抽象的に有つてゐて、それを具體化して行くにはどういふ風の形を取つたらよからうか。といろ〳〵工夫する場合に、誰か余所で會つた人とか、自分の豫て知つ

てる者とかの中で、稍々自分の有つてゐる抽象的觀念に脈の通ふやうな人があるものだ。するとその人を先づ土臺にしてタイプに仕上げる。勿論その人の個性はあるが、それを捨てゝ了つて、その人を純化してタイプにして行くと、タイプはノーションぢやなくて、具體的のものだから、それ、最初の目的が達せられるといふ譯だ。

卽ち二葉亭は、寫實の意義を具體化するためにモデルについて、相當に苦心したのである。而して其の思想及び形式については、逍遙が主として、イギリス文學の影響を受けて、そこから學び得たところがあるに對して、二葉亭は、主としてロシヤ文學の影響を受けて、そこから暗示を得た。また逍遙が、文章上、馬琴、一九、三馬などの小說から稍影響を受けて居るやうに、二葉亭も、風來、三馬、全交、篁村あたりから、少し影響を受けた。だが、大體は、二葉亭が告白したやうに思想上では、ベーリンスキーの評論などを讀んで居たところから、日本文明の裏面を描き出さうと企てたと同時に、『浮雲』の中卷から以下の文章、形式、表現は、主としてドストエフスキー、ガンチヤロフなどの書き方を學んだのである。

二葉亭が、今一つ苦心したのは『浮雲』を言文一致で書くについて、どう云ふ言葉を用ふるかと云ふ點であつた。當時は言文一致の創始時代であるから、勿論、彼れが參考とするやうなものはなか

つた。彼れは、其の點に於て、逍遙、蘇峯らの說を聞いては見たが、結局、彼れ自身、一家の見識を立てゝ「どこまでも今の言葉を使つて、自然の發達に任せ、やがて花の咲き、實の結ぶのを待つとする。支那文や和文を强ひてこね合せやうとするのは無駄である。」と決心して、成語、熟語などは、凡て取らないで、最初は、三馬の小說のうちにある深川言葉「べらぼうめ、南瓜畑に落こた凧ぢやあるめえし、乙うひつからんだことを云ひなさんな」と云つたやうな言葉を參考にして、幾分の便りとしたのである。この點は、二葉亭の卓見にちがいなかつた。斯うして、いろ〳〵の苦心を經て『浮雲』が生れたのである。

『浮雲』は最初、無名文士だつた二葉亭の名で出すことが出來ないので、第一編は彼れが指導を受けた先輩逍遙の名を借りて出版した。第一編は、明治二十年六月に、第二編は、二十一年二月、第三編は二葉亭の名で二十二年秋『都の花』に出た。此の傑作――逍遙の『小說神髓』を略ぼ具體化した作品は、花袋が云ふ通り「當時『浮雲』の精細な心理描寫に眼を聳てたのはほんの小數の有識者に止まつて、あの作はたゞ單に妙なもの、不思議なものとして世に迎へられ、決して當時の反響を呼起したものではない。』のであつた。蓋しそれは『浮雲』の內容が、二十年ばかり餘計に進步し過ぎて居た結果で、止むを得ない運命だつた。若し『浮雲』が當時の文壇に於て『書生氣質』のやうに歡迎され

たとしたら、恐らく、二葉亭の生涯も、どうなつたかわからぬであらう。或は純然たる作家となる決心をしたかも知れないのである。

『浮雲』の内容は、靜岡の方から東京へ出て、叔父の家に寄寓した某省の判任官である内海文三と叔父の娘お勢とを中心にして、それに叔父の妻お政や、内海の友人本田などを搦ませて、戀のロマンスや、新舊思想の衝突などを描いたもので、筋は極めて單純で、在來の小說とは、全然ちがつて居た。だが、二葉亭が覗つたところの日本文明の裏面を現はすことや。乃至人物の性情心理を描寫する上では、見事に成功したのである。

『浮雲』が出た時分の日本、殊に東京などでは、文明開化と云ふことにかぶれて、其の皮相に溺れた若い男女が往々あつた。それに對して、一概に保守的な考へを以て臨む中老時代の男女も亦往々あつた。一は新時代を代表し、一は舊時代を代表するもので、それが縺れ合ふと、葛藤を惹き起して居た。二葉亭は、此の點を現はさうとして、お勢に新時代を代表させ、其の母のお政に舊時代を代表させて、家庭に於ける小さな衝突を見せた。そこに日本文明の裏面の縮圖と云つたやうなものがあつたのだ。

（五）　浮雲の新著想と新描寫

當時の作家は、二葉亭が覗つたやうなところには、勿論、眼を附けようとはしなかつた。畢竟、二葉亭が、斯うした著眼點を得たのは、ベーリンスキーの評論によつて、啓發させられたからであつた。而して其の著眼點が特異であつたのみならず、在來の筋の複雜、錯綜を倘んだのに對して筋の單純、人物の多數を出し入れしたに對して少數の人物、偶然や突發の出來事を構成したに對してあく迄自然に事を搬んだのは、ドストエフスキーや、ガンチャロフの作品から暗示を得た結果だつた。江戸文學の殘影を夢みつゝあるものには、到底、夢想だもし得ない境地だつた。

既に彼れの行き方が、全然、在來とちがつて居た上に、其の性格と心理との表現の上に於ても、自然の描寫に於ても亦全然ちがつた手觸りを持つて居た。彼れは、『浮雲』の中心人物お勢の性格を描くことと内海文三の戀の心理を描くこととの上には、全力を傾倒した。お勢の輕噪な、快活な文明かぶれのした性格は、徹底的に描かれて、些の缺陷もなかつた。お勢は、何かと云ふと、漢語や、英語を用ゐたがつたり、眞理とか、男女交際とか云ふことを口にした。母の無教育で、保守的なことを輕蔑して、下等動物の名を與へて居たほどの生意氣な女學生風のところがあつた。それと同時

に、文三の溫和な優柔な偏人らしい性格に共鳴するかと思へば、また文三の友人本田の輕佻な才子風に共鳴して、少しも、操守がなかつた。左樣した點を、二葉亭が、はつきり描寫した。左の一節は、文三とお勢とが對話して居るところであるが、お勢の文明かぶれした輕噪なところが、能く出て居る。

「母ですか、母はどうせ下等の人物ですから、始終可笑しな事を言つちやアからかいますのサ、其れでもね、其たんびに私が辱しめ〳〵したら、あれで些とは恥ぢたと見えてね、此頃ぢやア其樣に言はなくなりましたよ。」

「へー、からかふ。どんな事を仰しやツて。」

「アノ——なんですツて、其樣なに親しくする位なら、寧ろ貴君と……(すこしもぢもぢして言ひかねて)結婚して仕舞へツて……。」

ト聞くと等しく文三は、駭然としてお勢の顏を見守める。されど此方は平氣の體で、

「ですがネ、敎育のない者ばかりを責める譯にもゆきませんよねー、私の朋友なんぞは、敎育の有ると言ふ程有りやしませんがね、それでもマア普通の敎育は享けてゐるんですよ。それでゐて貴君、西洋主義の解るものは廿五人の內に僅四人しかないの。その四人もネ、塾にゐるうちだけで、外へ出てからはね、口

程にもなく、兩親に壓制せられて、みんなお嫁に往ッたり、お婿を取ッたりして仕舞ひましたの。だから今まで此樣な事を言ッてるものは私はッかりだとおもふと、何だか心細くッて〳〵なりません。でしたがネ、此頃は貴君といふ親友が出來たから、アノ――大變氣丈夫になりましたワ。」

文三はチョイと一禮して、

「お世辭にも嬉しい。」

「アラお世辭ぢやア有りませんよ、眞實ですよ。」

「眞實なら尙ほ嬉しいが、しかし私にやア貴女と親友の交際は到底出來ない。」

「ヲヤ何故ですエ、何故親友の交際が出來ませんエ。」

「何故といへば、私には貴孃が解らず、また貴孃には私が解らないから、どうも親友の交際は……。」

「さうですか、それでも私には貴君はよく解ッてゐる積りですよ。貴君は學識が有ッて、品行が方正で、親に孝行で……。」

「だから貴孃には、私が解らないといふのです。貴孃は私を、親に孝行だと仰しやるけれども、孝行ぢやア有りません。私には……親より……大切な者があります……。」

ト、吃りながら言ッて、文三は差俯向いて仕舞ふ。お勢は不思議さうに文三の容子を眺めながら、

「親より大切な者……親より……大切な……者。親より大切な者は、私にも有りますワ。」

文三はうな垂れた頸を振揚げて、

「エ、貴嬢にも有りますと。」

「ハア、有りますワ。」

「誰……誰れが。」

「人ぢやアないの。アノ眞理」

「眞理。」

ト文三は慄然と胴震ひをして、脣を喰ひしめた儘、暫らく無言。

お勢を戀して居た文三は、母よりも、お勢を大切なもの、戀を大切なものと思つて居たに對してお勢は、未だ左程にも思はず、眞理が大切だと云つたので、文三は意外に感じたのである。文三のお勢に對する戀は、極めて眞實なものであつた。だが、お勢は、稍曖昧で、輕はずみで、眞實味に乏しかつた。殊にお勢の母は、文三が判任官を勤めて、幾分の貯蓄が出來て、靜岡から母を迎へようとした時代は、お勢を文三の妻としようとまで思つたけれども、文三が、課長の機嫌を損じて、免職されると、直ぐに文三を輕蔑して、却て文三の友人本田にお勢を嫁せしめようと思ふになつた而してあらゆる虐待を文三の上に加へる。お勢も亦文三に對して冷かになる。けれども文三は、お

勢に執着して、ちつと隠忍した、其の間に於ける文三のの優柔さと複雑した心理とを二葉亭が巧みに描いて居る。

あれほどまでに、お勢母子の者に辱められても、文三はまだ園田の家を去る氣になれない。但だ、そのかはり、火の消えたやうに、鎭まツて仕舞ひ、いとど無口か、一層口を開かなくなツて、呼んでも捗々敷く返答をもしない。用事が無ければ、下へも降りて來ず。只一間にのみ垂れ籠めてゐる。餘り靜かなので、つい居ることを忘れて、お鍋が洋燈の油を注がずに置いても、それを吩咐けて注がせるでもなく、油が無ければ無いで、眞闇な座敷に悄然として、始終何事をか考へてゐる。

けれど、かう靜まツてゐるのは表相のみで、其胸奥の中へ立入ツてみれば、實に一方ならぬ變動。恰も心が顚倒した如くに、昨日好いと思ツた事も、今日は惡く今日惡いと思ふ事も、昨日は好いとのみ思ツてゐた、情慾の曇が取れて、心の鏡が明かになり、睡入ツてゐた智慧は、俄に眼を覺まして、決然として斷案を下し出す。眼に見えぬ處、幽妙の處で、文三は——全くとは云はず——稍生れ變ツた。

眼を改めてみれば、今まで爲て來た事は、夢か將た現か……と しまれる。

と云つたやうな文三の心理、戀に亂れた心理、お勢を本田に奪はれさうなのを憂慮して、絕望的に傾かうとする心持、それ等が到るところに描かれてある。殊に左の一節は餘程、精緻に表現され

て居る。

ふと又例の妄想が働きだして、無益な事を思はせられる。時としては妙な氣になッて、總て此頃の事は皆一時の戯れで、お勢は心から文三に背いたのでは無くて、唯背いた風をして、文三を試みてゐるので、其證據には、今にお勢が上ッて來て、例の華かな高笑で、今までの葛藤を笑ひ消して仕舞はう、と思はれる事が有る。が、固より永くは續かん、無慈悲な記憶が働き出して、此頃あくたれた時のお勢の顏を憶ひ出させ、瞬息の間に、其快い夢を破ッて仕舞ふ。またかういふ事も有る。ふと氣が渝つて、今から零落してゐながら、其様な藥袋も無い事に拘ッて、徒らに日を送るを、極めて愚のやうに思はれ、もうお勢の事を思ふまいと、少時思ひの道を絕ッて、まじ／＼としてみるが、それではどうも、大切な用事を仕掛けて罷めたやうで、心が落居ず、狼狽へて、またお勢の事に立戻ッて悶え苦しむ。人の心といふものは、同一の事を間斷なく思ッてゐると、遂に考へ草臥れて、思辨力の弱るもので、文三もその通り、始終お勢の事を心配してゐるうちに、何時からともなく注意が散ッて一事には集らぬやうになり、をり／＼互に何の關係をも持たぬ零々碎々の事を、取締もなく思ふことも有ッた。曾て兩手を頭に敷き、仰向けに臥しながら、天井を凝視めて、初は例の如くお勢の事を彼此と思ッてゐたが、その中にふと天井の木目が眼に入ッて、突然妙な事を思つた。「かう見たところは、水の流れた痕のやうだな。」かう思ふと同時に、お勢の事は全く忘れて仕舞ッた。そして尙ほ熟々とその木目を視入ッて「心の取り方に依ッては、高低が有るやうに見える

な。ふゝん、オプチカル、イリユウジヨンか。」ふと文三等に物理を敎へた、外國敎師の立派な髯の生えた顏を憶ひ出すと、それと同時に、また、木目の事は忘れて仕舞ッた。續いて眼前に、七八人の學生が現はれて來たと視れば、皆同學の生徒等で、或は鉛筆を耳に挾んでゐる者も有れば、或は書物を抱へてゐる者も有る。又は開いて視てゐる者も有る。能く視れば、どうか文三も其中に雜ッてゐるやうに思はれる、今越歷(エレキ)の講義が終ッて、試驗に掛る所で、皆エレクトリカル、マシーンの周邊に集ッて、何事とも解らんが何か頻りに云ひ爭ひながら騷いでゐる。かと思ふと、忽ちそのマーシンも生徒も烟の如く痕迹もなく消え失せて、ふとまた木目が目に入ッた。「ふん、オプチヤル、イリユウジヨンか。」と云ッて、何故ともなく莞爾(にっこり)した。「イリウジヨンと云へば、今まで讀んだ書物の中で、サリーの『イリユウジヨンス』ほど面白く思つたものは無いな。二日一晩に讀切つて仕舞ッたッけ、あれほどの頭には如何したらなれるだらう。餘程組織が緻密に違ひない……。」サリーの腦髓とお勢とは何の關係も無ささうだが、此の時突然お勢のことが、噴水の迸る如くに、胸を突いて騰る。と文三は腫物にでも觸られたやうに、あッと叫びながら跳ね起きた。

斯うして、二葉亭の心理描寫は、ロシヤの小說卽ちドストエフスキーあたりの俤を髣髴させて居た。だが、當時、此の味を理解したのは、少數の讀者殊に文學上に相當の識見あるものに

限られて居た有様で、二葉亭の苦心も、遙かに後でなければ、一般に認識されなかつた。

（六）『浮雲』の欠點と特長

『浮雲』は、以上のやうに成功した作品であるが、勿論、多少の缺點は免れなかつた。その第五回にお勢母子の爭ひを叙して「此を親子喧嘩と思ふと、女丈夫の本意に背く。どうして〳〵親子喧嘩……其様な不道徳な者でない。是れはこれ辱なくも、難有くも日本文明の一原素ともなるべき新主義と、時代遲れの舊義と。衝突する處。よくお眼を止めて御覧あられませう。」と云つたのは、無用の說明で、此の種の語氣が、所々に散在して居た。時には、洒落味を帶びて、註釋なども挿入してあつたが、それ等は、當時の文學界では、止むを得ない缺點であつたらう。左樣した點を除けば、今日、見ても、相當な藝術的作品として、推讃し得るのである。

それに文體、形式の上から見ると、破天荒と云つて宜いほどだつた。彼れは、言文一致で、地の文と會話とを繋ぐと共に、會話と地の文とは行を改めて書き、はつきり双方を區別させて、會話の頭に話す者の名を附けることを全廢した。また其の言文一致は、山田美妙らのよりも、迥かに自然で、ずつと進んで居たところがあつた。言文一致の試錬時代にあつて、山田美妙が、第一にそれを

唱說したに對して、事實の上にその覘つたところを體現したのは、二葉亭だつた。卽ち逍遙が唱へた內容の革新、美妙が唱へた文章の革新、此の二つを『浮雲』の上に略ぼ具體化したのである。

第三章　德富蘇峯を中心とした民友社

（一）『國民之友』の文學的勢力

『小說神髓』『書生氣質』『浮雲』によつて、小說界に黎明の色が動いたとするならば、民友社の創立によつて、評論界――一種の文明批評――の黎明が來たと云つて宜い。民友社の中心人物は、德富蘇峯である。蘇峯ほど早く文名を成したものは、誠に少かつた。蘇峯は、熊本出身で、鄉里の英學校と同志社とに學んで、キリスト敎の感化を受けると同時に、英文學、漢文學の素養を積んだ。彼れが『將來の日本』と題する一書を携へて、上京した時は、白面の一書生に過ぎなかつたのであるが田口卯吉、島田三郞らに認められて、忽ち文名を馳せて、評論壇の勇將となつた。それは『將來の日本に於ける彼れの新思想、新文體が、歐化的傾向に投合して、靑年の間に多くの共鳴者を得たからであつた。

蘇峯は、此の機に乘じて、其の新銳の氣と潑剌とした新精神とを以て、民友社を組織して、明治二十年二月『國民之友』第一號を發行した。當時の靑年が、それに對して、どんなに强い感銘を得た

かは、抱月、花袋らの回想を見れば、明かである。

其時分の青年の愛讀書が Macaulay の『英國史』や『ピット傳』であつたのでも、その當時の狀態を彷彿することが出來る。又一方政治法律に心をそゝぐ青年の多かつたことも事實である。丁度この時分だ、德富蘇峯氏が『將來の日本』といふ本を提げて田舍から出て來て、あゝ國民の友生れたりと言つて、平民主義を提唱したのは……國民の友……あの女神のペンを持つて立つてゐる黄がゝつた表紙、殊に忘れられないのは、その最初の春季附錄に出た山田美妙齋の裸體の繪を口繪にした小說であつた。(花袋『東京の三十年』)

其の冒頭に『嗟呼國民の友生れたり、何が故に生れたるか、現今日本の時勢其の必要を感ずればなり』と云ふ文句があつて、維新の大變革『其の運動は火の如く、花の如く、雷の如く、電の如く』といふ風に今日では何でもない句を列べられても、當時の我々は、恍惚として面ほてりを覺える程の、幼稚にして鋭敏な感納を得たゝのである。(抱月『新文章論』)

蓋し蘇峯の文章は、全然、歐文脈を中心として、漢文學から得た豐富な文字を巧みに驅使して、マコーレー張りのところを持つた居たのであるが、斯うした文體は、當時、未だ誰も試みたかつたのである。此の點が、既に獨創的であつた上に、平民階級が漸く擡頭した機運と一致して、多數民衆の幸福と進步とを計るべき平民主義を高調したことが、また深く青年の心を動かした。即ち內容

の上にも、形式の上にも、民友社風と云ふ一つの新しいスタイルを作つた。

嗟呼改革の健兒たる諸氏は、或は煩惱の夢に驚かされざる幽靜なる黃泉に於て安眠し、或は禁殿に於て顧問官となり、元老院に於て評議官となり、或は世襲の爵を給ひて貴族に列し、皆天恩の隆渥なるに浴し、優游殘年を樂み、以て安息なることを得たり。然らば則ち改革彼れ自身も亦た安息することを得べき乎、曰はく否、改革よ、改革よ、汝は決して安息なることを得ざるなり。

斯う云ふ。『國民の友』の文章は、忽ち流行し始めた。蘇峰の隨喜者は、到るところに出來た。而して其の第二の著書『新日本の青年』が、前後して出ると、誰も彼れも爭うて眞先にそれを讀んだ。

（二）　評論家としての先驅者櫻痴と兆民

蘇峰が、雜誌主筆として、立身したについては、文章上、マコーレーに私淑したことは、誰も知つて居るところであるが、別に福地櫻痴の論文に傾倒したことを知るものは少いのである。櫻痴は其の後半生を脚本作者として送つたが、前半生殊に明治初年から、十九年頃までは、政論家としての第一人者を以て目されて居た。彼れが「私は」と云ふべきを「吾曹は」と云つて「吾曹子」と稱された

時代は、政治上、彼れの反對に起つて居たもの迄が、櫻痴の莊重な氣品の高い、情理共に盡した文章を愛讀した。蘇峯も亦其の一人であつたことは、『蘇峯文選』に於て、「眞に予を啓發し、予をして半夜屢々衾を蹴りて起たしめたるものは、福地櫻痴の主筆たる『東京日々』たりし也。予は當時の新聞を耽讀したるのみならず、學校の科程を休みて、私かに自から京都書籍館に赴き、明治七・八年以降の『東京日々』を繰り返し、其の重なる社說中、最も予をして興味を感ぜしめたるものを謄寫したり。」と告白したのを見てわかる。櫻痴の論文中、最も見るべきは『幕府衰亡論』であるが、これには、彼れの長所がよく出て居るのである。

德川幕府が諸侯伯を制御せしは、一に幕府の武威に由れり。而して其武威は寬文延寶以來已に衰弱に赴きて復當初の實力あるに似ず。漸く元祿享保寬政の政を以て、時々是を更張して其外面を裝飾したるに過ぎざりしのみ。而して諸侯伯が之を窺知るも、尙幕府に抵抗する事を敢てせざりしものは、一は法令格式に牽制せられたると、一には各自の武威も亦幕府と同じき度數を以て衰弱したるが故なりしのみ。然るに癸丑甲寅亞國使節の渡來以後は盛に武備を修め士氣を養ひたるに由り、諸强藩には幕府の上に出るの實力を蓄へたるが故に之に抵抗するの狀況を喚起せるを更に怪しとするに足らざりしなり。況や夫れ開鎖の國論の如き、原來鎖國を唱へ初たるも幕府なり、開國を議し初めたるも幕府なり。其二者の衝突は幕府内に於

て初め自ら之を起し、遂に鎖國說を以て開國說を天保年間に既伏して、其國是の模範を天下に示したるに係らず、癸丑甲寅に至りて俄然自から是に反對して開國の方向を執り、尙これを粉粧するに鎖攘の假面を以てし開にして開にあらず、鎖にして鎖に非ざるの迷路に彷徨したり。之を奈何ぞ人心の乖離なきを得んや。

櫻痴の論文は、今日見ても、相當の價値を有して居るやうに思はれる。殊に當時にあつては新聞社會を風靡して、蘇峯が現はれる前までは、靑年間にも持て囃された。櫻痴が文章上蘇峯に刺戟と暗示とを與へたことは少々でなかつたやうだ。

櫻痴と共に今一人、蘇峯が新しい文章を創始する迄に活躍して居たのは、『民約譯解』の筆者中江兆民である。彼れは、西園寺公望、松田正久、光妙寺三郎、酒井雄三郎らと共に、フランスの自由民權說をも高調した先驅者で、彼れが晚年『一年有半』を出す迄に世に公にした著書には『維氏美學』『三醉人經綸問答』『泰西理學小史』『理學鉤玄』『佛蘭西革命前二世紀事』などがあつた。

彼れは『自由新聞』『東雲新聞』『日刊政論』『立憲自由新聞』『民權新聞』などの主筆をした時代に共の雄勁な論文を書いた。彼れは、フランス語に堪能であると同時に、漢文學や、佛學にも通じて居たので、一字一句、引締つて居て、而も時々、奇警な語が見出された。

民權是れ至理也、自由平等是れ大義也、此等理義に反する者は竟に之れが罰を受けざる能はず。百の帝國主義有りと雖も、此の理義を滅却することは終に得可からず。帝王尊しと雖も、此の理義を敬重して玆に以て其尊を保ち得可し。此理や漢土に在ても孟軻柳宗元早く之を覩破せり、歐米の專有に非ざる也。

兆民の文章は、斯うした風であつた。兆民のほかに『日本開化の性質』を書いた田口鼎軒がある。鼎軒も亦垢拔けのした論文を書いた。要するに、明治の新しい評論文は、福澤によつて始められて櫻痴、兆民、鼎軒らを經て、蘇峯に及んだのである。而して其の歐化的色彩に於ては、蘇峯の新時代に入つて、最も顯著となつたのである。

民友社の蘇峯に對して、別に國粹的思想から出發した一團の政治文學的結社を組織したのは、三宅雪嶺志賀矧川らの政教社であつた。雪嶺は蘇峯と對立した論評界の一勢力で其の雄健な奇聳な文を以て『眞善美日本人』『僞醜惡日本人』などを發表した。此の一派は、思想的には、稍强い影響を社會の一部に與へたけれども、文學的には、唯漢文學、佛教、國文學の復興に資したところがあつた丈だつた。而して哲人的風格ある雪嶺が、新聞雜誌の上に於て、其の光彩を放つたのは、それより少し後の事であつた。

民友社は、一時、キリスト教思想を背景とした平民主義の思想を以て、多くの青年に強い影響を與へたばかりでなく、文學的にも、新人を社會に紹介したり、海外文學思潮の流入を計つたりして可なりに有力な印象を文壇に刻み込んだ。

（三）當時續出した雜誌

當時、蘇峯の下に集つた人々は、山路愛山、竹越三叉、德富蘆花、宮崎湖處子、塚越停春、人見一太郞、矢崎嵯峨の家、角田浩々歌客、松原二十三階堂らで、國木田獨歩は、遙かに遲れて、二十七年頃に、『國民新聞』へ入社したのである。また民友社の客員には、森鷗外、山田美妙、二葉亭四迷、內田不知庵、森田思軒、依田學海、石橋忍月、中西梅花らの人々が居た。

それ等の才人たちによつて『國民の友』の內容は、今日の『中央公論』『改造』『太陽』『解放』などのやうに、政治、文學、宗教、社會の各方面に向つて、新しい評論を加へたのであるが、それと共に文學欄を設けたり、春夏二期に文學附錄へ添へたりしたので、文壇で名を爲さうとする人々の登龍門となつて居た。其の文學附錄に出た作品には、明治初期の文壇を飾裝つたものが少くなかつた。鷗外の『舞姬』『逍遙の『細君』露伴の『一口劍』一葉の『わかれ道』透谷の『宿魂鏡』鏡花の『琵琶傳』を初め、文

學的翻譯の試みだつた森田思軒の『探偵ユーベル』も、二葉亭四迷の『あひゞき』も、二十一、二年頃の文學附錄に出たのである。

斯うして『國民の友』は、雜誌界に新興の氣運をも與へた。『國民の友』以前には、今日の『中央公論』の前身であるところの『反省雜誌』が、十九年一月に出たのであるが、其の影響は、未だ著大でなかつた。『國民の友』が出ると共に、其のハイカラな體裁や內容が、何人にも、フレッシュな感じを與へて、それと前後して『哲學雜誌』『以良都女』『出版月評』『日本人』『我樂多文庫』『文』『都の花』『新著百種』『女學雜誌』『少年園』『小說萃錦』『大和錦』『新小說』『史海』などが續出した。二十二年十月には、鷗外の主宰した『柵草紙』二十四年十月には、逍遙が主宰した『早稻田文學』などが出て、文學界は色めいて來た。

以上のうちで、文學的に最も密接な關係があつたのは『都の花』『柵草紙』『早稻田文學』『新著百種』『我樂多文庫』などであつた。『都の花』には、二葉亭の『浮雲』第三編を始め、矢崎嵯峨の屋の『初戀』幸田露伴の『露團々』山田美妙の『いちご姬』尾崎紅葉の『二人女房』などが載せられた。『新著百種』には紅葉の『色懺悔』露伴の『風流佛』柳浪の『殘菊』などが出た。

『柵草紙』と『早稻田文學』とは、當時に於ける文藝評論を主として載せた點に於て、文壇の思想を

導くことに盡した上に於て、好いコンツラストとなつて居た。勿論、此の二雜誌が出るまでにも、文學評論の筆を執つた人たちはあつた。私は、森田思軒や、石橋忍月や、高瀨文淵や、正直正太夫（齋藤綠雨）や八面樓主人（宮崎湖處子）などの人々が、夙に評論を書いたことを知つて居るけれども眞に文藝上に於ける嚴密な正しい意味の批評を最初に書いたのは、どうしても、逍遙と鷗外の二人であつたと云ひたい。

（四）文學評論の創始時代

在來の明治文學史には、小說を主として、それに併行すべき文藝評論のことを閑却して居るけれども、それは、大なる誤りである。

『柵草紙』と『早稻田文學』が出るまでは、矢張『國民の友』などに於ける文學評論が、一番、有力であつた。蘇峯は、啻に政治に對して興味を有して居たのみならず、哲學、歷史、文學、美術の方面に於ても、相當の興味を有して居たので、どの方面にも、評論を試みた。文藝評論の專門化は逍遙鷗外が、文壇に相角逐するまでは、未だ實現されて居なかつた。それで蘇峯の評論は、文學方面にも及んで、其の最初の時代にシリーズとして出した『國民叢書』には『進步乎退步乎』『人物管見』『靑

年と教育』『靜思餘錄』『文學斷片』『天然と人』などがあつて、到る處、蘇峯が文學に對する一家見を洩らしたところがある。さうした方面には、創見はないが、セント・ブウウや、マシュー・アーノルドなどの文學論などを讀んで得た文學上の新知識を普及した功果は、慥かにあつた。湖處子の『歸省』のやうに、蘇峯の紹介や、批評によつて、文壇に認められた作品や、翻譯なども往々あつた。

政治記事の新しい書き方、新しい人物評、さうしたものは、蘇峯の趣味限に映じて、始めて、文學化され、生彩を帶びて來た。それは、イギリスなどの新聞から暗示を得て、彼れが、何人よりも早く試みて成功したのであつた。人物論も、勿論、昔からあつたにはちがいないが、其の新しい見方、精細な性格の解剖法などは矢張、蘇峯によつて、始めて模型を示されたのである。

蘇峯は、また一種の新書翰體を以て、其の意見を發表する樣式を發明した。『國民新聞』の『東京だより』は、その結果の一つであるが、『熱海だより』に於て、賴山陽の歷史及び文章を論じたなどは、其の一例であつた。明治十九年頃から、日清戰爭前後迄は、蘇峯が文學的に、最も油の乘つた時代で、才思が泉のやうに湧いて出て、抑へることが出來なかつた有樣を想像し得る。

今日から見ると、蘇峯の文學批評は、新聞記者の文學觀を披瀝したもので、素より專門家の批評と同一視することは出來ないけれども、未だ文學批評の振はなかつた當時にあつては、文學の進步

に裨補するところがあつた。其の著『文學斷片』に於て、「著者文學者にあらず、又た文學者たるを願はず。然れども文學を愛する、若し人間の通有性ならしめば、著者に於ても亦た之れなくんばあらず。」と云ひ「非文學者の文學談、固より粗枝大葉なり。」と告白して居るのは、必ずしも、表面の謙遜のみとは思はれない。遠慮なく言へば、粗枝大葉の譏なきを得ない。けれども、蘇峯が明治二十年七月『國民之友』に於て、政治小說の弊を論じ、次いで文學の目的、愛の特質に論及して、文學者に眞面目な態度を執るべきことを說いたのは、決して無益の言ではなかつた。たとひ、粗枝大葉でも、意義ある敎訓であつた。

殊に『基督敎の文學』を論じて、聖書の詩的價値に論及したことは、當時の文學界にキリスト敎思想を流入して、淸新な風趣を添へるべき一つの力となつた。蘇峯は、其の論文の一節に於て「試に新約聖書を繙け、主の祈禱文、山上の敎訓、保羅の手簡等、何れ其れ質素なるや。野の百合花、空飛ぶ鳥、葡萄蔓、子羊の譬喩、何ぞ其れ優美にして趣味多きや。」と述べたのは、今日に於ては珍しくないけれども、明治二十年代にあつては、新しい考へであり、新しい刺戟であつたにちがいないのである。

（五）蘇峰が創始した人物評論と政治記事の文學化

蘇峯が、人物評論の新しい模型を示したのは、明治二十一年三月發表した『新日本の二先生』であつた。それは、福澤と新島との二人物を對照して、評論したものである。其の書き方は、當時に於て、最も新しく、且つ情理を盡したものに庶幾かつた。

蓋し福澤君の教育上に於ける事業は、既に芽を發し花を開き實を結べり、新島君の事業に至つては、纔かに芽を發したる迄なり。故に福澤君の事業を論ずる時には、吾人は歷史家の資格となり、新島君の事業を論する時には、吾人は預言者の位地に立たざる可からず。斯の如く二君の事業は、其前後する所あれども吾人は二君を以て我邦教育世界の重なる感化力と謂はすんはあらず。何となれば、二君は實に明治年間教育の二大主義を代表する人なればなり。即ち物質的知識の教育は、福澤君に依つて代表せられ、精神的道德の教育は、新島君に依つて代表せらる。

（前略）福澤君は鐵道の技術師にも非す、電氣學者にも非す、而して君が常に鐵道電信を云々して、口に絕たざる所以の者は、鐵道電信を愛するに非ず、鐵道電信を成就したる物質上の文明を愛するものなり。新島君は純乎たる僧侶に非す、而して其の基督教を主張して止まざる者は、啻に基督教の傳播を欲するに非

す、基督教の主義を人事に適用せんと欲すればなり。（下略）

斯うして、新しい人物論は、蘇峯によつて、開始されたと云つて差支えない。それと共に、政治論や、政治記事の新しい書き方も亦彼れによつて、始められた點があつた。二十年代に書いた『外交の憂は外に在らずして内にあり』『支那を改革する難きにあらず』『隱密なる政治上の變遷』の如きは、蘇峯獨自の新しい政治論であつた。『隱密なる政治上の變遷』は、可なりに長論文で、第一から第五に亘つて居る。其のうちに於て、中流社會の新勢力の勃興に論及して「我邦に於て從來中等民族無し、而して是れあるは實に今日に始まる。吾人は實に此の民族の社會に生ぜんとするを見て我邦の爲めに祝せさるを得す。何となれば、此の民族の生するは、我邦が漸く平民社會に入るの兆候にして、此の民族が愈々勢力を得るは、我邦に於て平民主義が愈よ勝を制するの兆候なれはなり夫れ中等民族とは何物ぞや、獨立自治の平民なり、故に彼等は自治自活の社會に非されは、決して生長する能はす。若し社會の制度にして、唯た主人と奴隷との二階級を以て組織するの時に於ては中等民族なる者は、決して存在すること能はす。何となれは、一は他を役し、一は他に役せられ、二者共に與に自活自立の人民たる能はされはなり。我邦從來の制度實に斯くの如くありしなり、焉ぞ之れに向つて、中等民族の生するを望まんや。而して現今に於て中等民族の生長せんとするは、

即ち新日本の生長する所以にして、吾人は實に此の民族の生長を以て、我日本の新らたに蘇生したるを認む。」と論定したのは當時の卓見であつた。

新しい政事記事は、第六議會の傍聽傍觀を書いた『解散！ 嗚呼解散！』などに徵することが出來る。其の冐頭に於て、

詔勅！ 詔勅！ 伊藤總理大臣の演說！ 來れ！ 直ちに、直ちに！

余は倉皇車を飛ばして衆議院に赴く。例に仍りて傍聽滿員の謝絕札は掛られぬ。但た余は院內通行の特許劵を有したれば、直ちに議長室に徑して、議場に沿うたる廊下に出づ。青簾を隔てゝ議場を瞥見すれは、異形の人は、議長席を占めたり。果然鰲貌矜嚴なる楠木は參內し、豐頤平骨なる片岡は之に代れり。議場人少なく天下人多し。議員三三五五寓語するを見る。

と記した一節なども、歐文的で、當時の光景を簡約に、而も印象的に表現してある。乾燥な政治記事を文學化したのは、蘇峯の功であつた。

彼れは、斯くして、隨所に新聞文學の新領土を開いた。而して一方に於て、極力、平民主義の鼓吹に力めた。日淸戰爭頃迄は、彼れの感化の下にあつた青年が少くなかつた。民友社の同人も亦多く、蘇峯の感化の下にあつた。すべての新機軸、新流風は、蘇峯が先づ作つて、他人に及ぼすと云

ふ有様だつた。民友社が、有力な文士を輩出したのは、正に當然だと云はねばならぬ。

（六）民友社中の文學的秀才

當時民友社の諸才人中に於て、蘇峯に酷似して居たのは、竹越三叉、山路愛山の二人であつた。二人は共に、後に史論家として、其の長所を發揮したが、『政論に於ても亦、各自、一家見を示した。愛山は、蘇峯と同じく、多方面で、時としては、文學論をも試みて、北村透谷と論戰したことさへもあつた。だが、純文學方面に於て、當時專心、努力して居たのは、矢崎嵯峨の屋、宮崎湖處子德富蘆花の三人で、後に國木田獨步があつた。蘆花は、民友社の初期時代には、海外文學の翻譯や紹介に力めて、未だ文名を馳せるところ迄行かなかつた。けれども一部の人々は、既に蘆花の存在を認めて居た。花袋は、それについて「國民之友に出た蘆花君の翻譯になつた六號活字の外國文學の紹介、それは殊に私には有益であつた。まだ十分に外國の雜誌を讀むことも手に入れることも出來ない私に取つては、未知の外國文學に入つて行く唯一の手引草であつた。」と言つて居る。

矢崎嵯峨の屋の『初戀』は、二十二年一月『都の花』に出たが、在來の戀愛小說とはちがつて、筋は單純だが、純な、あど氣ない、フレツシュな感じを與へる短篇であつた。嵯峨の屋も、二葉亭もひ

としく、ロシヤ文學の研究者であつたから、自然、その方面の感化を受けて居た。殊にツルゲーネフの影響が、著しく現はれて居た。その他、彼れの作には『流轉』『夢幻境』『腐玉子』などの詩味豐かな佳篇があつた。其の文學は、言文一致で「ありません」調を始めたのは、彼れであつた。

嵯峨の屋の『初戀』よりは、一年餘遲れて湖處子の『歸省』が民友社から出た。それは、二十三年六月であつた。湖處子は、獨步、花袋らと共に、後年『抒情詩』を出した人で、最初から、詩人的傾向を多分に有して居て、ワーズワースに私淑した。『歸省』は、彼れが故鄕に歸つて居た時の山水、風物人情を精寫した散文詩篇で、勿論、歐文を摸したものであつた。此の書が當時、非常に愛誦されたのは、故鄕に對する淸新な詩的情味が橫溢して居た爲めであつた。其の『山中』の一章に於て、「徵かに痴き唐碓の響きに、吾體は悠然として眠ると同時に、靈魂は戶外に忍びぬ。天上の月を探らん爲に、地上の星を拾はん爲に、淸き流を嘗めん爲に、圓かの夢を捉へん爲に。」の句は、當時、蘇峯が激稱したものであつた。

斯うして、民友社は、蘇峯を中心として、主として、文明評論に貢献したのみならず、傍ら純文學の方面にも、相應に寄與したところがあつた。其の背景となつて居たキリスト敎思潮は民友社が文壇に勢力を增大しゆくに從つて、文學的靑年の頭腦を支配する力を增大した。而して其の影響は、

硯友社のやうに、小説にのみ限定せられないで、後には、各方面に分流して、日本の新文化建設の上にも、新聞文學、雜誌文學乃至小說、新體詩の上にも、廣く、影響したのである。

第四章　尾崎紅葉を中心とした硯友社

（一）言文一致の創唱者山田美妙

硯友社が、明治文壇に於ける貢獻は、最も顯著なるものゝ一つであつた。硯友社の創立は、明治十八年三月で、恰度、逍遙の『小說神髓』が世に現はれる一ケ月前のことであつた。其の最初の同人は、尾崎紅葉、山田美妙、石橋思案らで、彼等は、何れも、當時、大學豫備門に居て、文學研究に熱中した結果、廻覽雜誌を作つて、互ゐに其の才藻を競うたのである。

其後、間もなく、川上眉山、江見水蔭、巖谷小波らが加はつて、二十一年五月には、機關雜誌『我樂多文庫』を出すやうになつた。大橋乙羽、中村花瘦、廣津柳浪らが、加入したのは、稍後のことで、それは、山田美妙が、硯友社を去つてからであつた。

硯友社が、勃興して、文學上の新運動を開始するやうになつたのは、『小說神髓』『書生氣質』などによつて、强く新精神を刺戟された爲めであるが、今一つは、新時代が新しい小說を要求しつゝある風潮を自覺して、それについて舟を乘り出さうとしたのであつたらう。唯彼等の出發點が、江戶

文學の系統を中心として、西歐文學の片影を加味したのは、ロシヤ文學から出た二葉亭、イギリス文學から出た逍遙乃至歐化的傾向の旺んだつた民友社一派に對して、餘程、變つた色合のものだつた。勿論、山田美妙のみは、最初から、純然たる歐化派で、紅葉その他が、西鶴、三馬などに傾倒して居たのとは、大分、趣を異にして居た。

硯友社の初期に於て、最も活動したのは、山田美妙と尾崎紅葉とであつた。美妙は、紅葉が『新著百種』に『色懺悔』を出して、始めて文壇に於ける地歩を確保し得たのにくらべると、遙かに早く活動を始めて居た。彼れが、最初、文壇に現はれた時は、水際立つて見えたほどの技倆を示して、大きい反響を得たが、それは、主として、彼れが言文一致體を主唱し、創始した上にあつた。

山田美妙は、東京の人で、通稱を武太郎と云つた。明治元年の出生である。彼れは大學豫備門にある頃から、既にイギリス文學について、相當の造詣を有して居た。彼れが文學生涯は、明治二十年、女學雜誌『以良都女』の編輯主任となつた頃から始まつた。最初の文壇的成功のブリリヤントなるに比較して、中途、挫折して、晩年、不遇のうちに埋もれて了つたのは、紅葉と手を分ち、且つ其の夫人稻舟女史のことについて『早稻田文學』などで、嚴正な指彈を受けたのによる所が少くなかつたであらう。逍遙の『文學その折折』のうちに收めてある『小說家は實驗を名として非義を行ふの權利ありや』と云ふ文章が、それで、美妙

非難の聲を揚げて居る。時は、明治二十七年十二月のことであつた。彼れが歿したのは、明治四十三年十一月二十四日で、享年四十三歳だつた。

山田美妙が、始めて、言文一致體の文章を創造した以前、其の伏線になつたのは、明治十七年に出來た「なかのくわい」及び十八年に創立されたローマ字會などの運動である。當時、帝國大學の教授チャンバーレンは『羅馬字雜誌』に於て、文明と言文一致との離るべからざる關係を說いた。また物集高見は『言文一致』と題する一小冊子を公にして、言文一致體の文章の必要を說いて、其の書中の上欄に源語、平家などの文章を揭げ、下欄にそれを言文一致に譯した文章を收めた。美妙は、それ等から刺戟を受け、また『イギリス文學史』などに啓發されて、愈々言文一致時代が近付いたことを痛感した。それで彼れは、明治十九年『風琴調一節』と題した言文一致體で書いた處女作を出して見た。それは語尾を「何々したのだ。」「……がそれだ。」といふ調子にしたのであるが、未だ舊文體を夢みつゝあるものが多かつた當時にあつては、それを、俗惡とか、下品とかの嘲罵の下に葬り去らうとしたので、今度は、語尾を「です」とするやうになつた。それ等の試みの作品を集めて世に出したのが『夏木立』であつた。

（二一）　美妙の『夏木立』と『胡蝶』

『夏木立』には、『柿山伏』『籠の俘囚』『花の茨』『武藏野』『仇を恩』『贋金剛石』の六篇を收めてあつた『柿山伏』は、當時の若い政治小説の作者を主人公として、政治小説の淺薄と非文學的な點とを諷刺したもので、その他は、抒情的散文詩乃至お伽話のやうなものであつた。二葉亭の『浮雲』の現實的で、文明批評があり、自然主義の正脈を有して居たのにくらべると、美妙の作はロマンチツクで、詩的色彩が多かつた。所詮、內容に於ては、『浮雲』に及ばない稚氣を持つて居た。

『夏木立』の價値は、矢張、文體の上にあつた。高山樗牛は、その點について「意匠嶄新にして文字亦瑰奇富豐を極む、其景物を叙するや、盛に聯合、照繳の巧を盡して之を修飾し、切りに直喩、隱喩若しくは活喩等を使用して讀者の奇を好むの心を樂ましむ。」と云つたが、稍過褒の傾きがある勿論、宜い方から見れば、文字の瑰奇と富豐とがあるけれども、どうしても、作り物と云ふ感じがぬけ切らないところがあつて、多分のアフェクテーションが纏ひ付いて居た。

夜は根城を明け渡した、竹藪に伏勢を强つて居た村雀は新に軍議を開き始め、閨の隙間から斫り込んで來る曉の光は次第に四方の暗を追ひのけ、遠山の角には穹の幕がわたり、遠近の溪間からは朝雲の狼煙が立

昇る。(『武藏野』)

當時にあつては、勿論、餘程の苦心を重ねたフレッシュな書き方であつたらうが、今日から見ると、どうしても、幼稚であり、氣障であるも云はねばならぬ。早曉の光景を戰爭に喩へたのは、美妙の才氣のあるところではあるけれども、唯表面の美しさのみあつて、少しも明瞭な印象を與へないのである。これを二葉亭の叙景に比較すると、遙かに劣つたところがある。『浮雲』のうちに、月夜の光景を叙して「月夜見の神の力の測りなくて、斷雲一片の翳だもない蒼空一面にてりわたる清光素色、唯亭々皎々として雫も滴るばかり。初め隣家の隔ての竹垣に遮られて庭の半より這初め、中頃は縁側へ上つて座鋪へ這込み、稗蒔の水に流れては金瀲灔、簷馬の玻璃に透りては玉玲瓏、座賞の人に影を添えて、孤燈一穗の光を奪ひ、終に間の壁へ這上る。涼風一陣吹到る毎に、ませ籬によろぼい懸る夕顔の影法師が婆娑として舞ひ出し、さては百合の葉末にすがる露の珠が忽ち螢と成つて飛び迷ふ。」とある方が、餘程、自然で、アフエクテーションの分子が殆ど無い。唯「金瀲灔」とか「玉玲瓏」とか、漢詩のうちにある文句を形式的に用ゐたやうな點が、幼稚に感ぜられるばかりである。

だが、歴史的に評價するならば、一概に非難し得ないかも知れない。當時、美妙は『夏木立』に於

て、文壇的地歩を占取したのであるが、更に明治二十一年『都の花』に『花車』の一篇を出し、翌年『國民の友』春季附録に『胡蝶』の一篇を公にするに及んで、彼れの名聲は頓に昇つた。『花車』には「です調」の特色が、善悪共に出て居た。

「しかし、なァ」……

何が「しかし、なァ」です。友禪の長襦袢に男靴は「ぶる」の脉體です。連絡の無い無理な楔子は轟く胸の兆候です。「見」と云ふ趣は言葉の外に髣髴として居る工合。悟ツたか、相手の書生の眼には微笑の雲。

「目と眉とは宜いかはり口が如何にも見苦しいな。けれど後から見れば」……

思はず敲くなる力造の鼓膜。

と云つたやうな調子である。當時、批評家正直正太夫(齋藤綠雨)か、美妙の文章を嘲つて『美妙宗』と云ふ題目の下に、「この宗には秘藏のお經あり。言文一致と名く。飽迄お經に醉つて衣紋をつくらう外見上戸なり。」と云つて、左の如く口調を摸して居るのは、適切である。

この宗の初級はマア斯うなるべし「向ふから來たのは男です、下駄を穿て居ます、が跡が減つて居ます、そして頭は刈込前の散髮です、フケの雪が襟の麓に積つて居るさうです、是が女ならどうでせう、髷を結つて居るに相違ありません」又時々千古未發の新說を挿むことあり、その雛形は下の如し「酒は猪口に注

げば猪口の形です、酒を桝に注げば桝の形です。實に酒は方圓の器に隨ひます。水も亦其通りです。が水は醉ひません。けれども酒も水も流動體です」

美妙の言文一致には、斯うした弊と癖とがあつたが、『胡蝶』は、より多く、彼れの美所を含有して居た。內容は、平家の末路時代に於ける一少女が、愛と忠義との板挾みとなつて苦悶する可憐の運命を詩的に描いたものである。其の文致は左の如く豐麗を極めて居た。

夕日の紅を解かして揉碎いて居る波の色、その餘光を味はふといふ有様で反射の綾模様を浮織にして居る苫屋の板びさし、しかも春夜過ぎた春雨の足跡をば銀象篏とも見立てられる蝸牛のぬらりに見せて居ながら、それで尙ほ水際立つて見える工合の美しさ餘情は以心傳心です。

當時の文章としては、可なりに巧緻なところがあるけれども、今日の文章とは、大分調子が變つて居る。『浮雲』の文章が、略ぼ今日のと變らないのにくらべると、幾分稚氣があるやうに思はれるだが言文一致の上に於ては『浮雲』と相竝んで、新興の機運を助長した功果が少からずあつた。殊に『胡蝶』が出た時は、其の挿繪に初めて裸體畫を添へてあつたので、作品の優秀なのと相俟つて、評判が高かつた。中には、裸體畫を攻撃したものもあつた。また森鷗外のやうに、匿名で『讀賣』紙上で裸體畫美を論じて、保守主義者に一擊を加へたものもあつた。さうした評判を別として見ても、『胡

蝶』は、歴史的に相當の好地位を占取すべき佳作と云はねばならぬ。

美妙は、其の後『いちご姫』『ぬれ衣』『此の子』などの作を發表したが、『胡蝶』や『武藏野』ほどには優れて居なかつた。『いちご姫』などは、會話に「侍る」「候ふ」と云つたやうな文章語を用ゐて、地の文を言文一致としてあつた、妙な不調和のあとがあつた。蓋し美妙には『胡蝶』を得意の頂點として、次第に緊張味を失つてゆくと云つた趣があつた。

（三）　紅葉の出世作『色懺悔』

美妙に對立して居た尾崎紅葉の出世作とも云ふべきは『二人比丘尼色懺悔』で『都の花』第一編に出た。紅葉は、それ以前に『我樂多文庫』へ『風流京人形』『江島土產貝屛風』『紅子戲語』『娘博士』『怒氣鉢卷』などを出して、一九、三馬の口吻を模した輕妙な文章を出して、夙に彼れの才藻の非凡を示したけれども、未だ少數者の間に認められて居たに過ぎなかつた。彼れが比較的に廣く知られるやうになつたのは『色懺悔』を出してからであつた。

紅葉は、イギリス文學などを幾分か讀んで居たであらうけれども、彼れが最も興味を以て讀んだのは一九、三馬、西鶴らの作品で、殊に西鶴には、餘程深く傾倒して居た。西鶴が、當時の新人を

動かしたについては、抱月の『明治文學略史』のうちにあるやうに「文藝の方面に於ても必ずしも歐洲の思潮のみが永く其の源ではなく、此の頃からして元祿文學の復興と云ふことが唱へられて來た殊に最初に其の中心となつたものは西鶴で、後には近松が之れに繼いだ。此の西鶴熱勃興に關しては、淡島寒月などいふ人が最も與つて力があつたと聞く。併しそれが新文學の源を開かんといふ明かな自覺から來たものであつたか、否かは知らない。兎に角、西鶴を埋れた趣味の中から掘り起こした爲に、明治の新文學は色とりを變へて來た。勿論其の西鶴も一面には德川末の馬琴以下の拾収すべからざる空想文學に飽きた目には自ら『小說神髓』が唱へた寫實と云ふ精神の在る所を面白く感じたのであらう、結局は寫實の大勢に合するものとして西鶴は勢力を得たのである。」と見たのは、穩健な解釋だと思はれる。紅葉が西鶴に共鳴したのも、畢竟、寫實的傾向に於て、新文學の範とすべき點があつたからであらう。それと同時に、國粹主義の提唱が、國文學復興の氣運を促がしたことも亦、かすかに影響したらうと思はれるのである。

『色懺悔』の有した價値は、『胡蝶』などとひとしく、內容よりも、文章、體裁の上にあつた。卽ち紅葉は、二葉亭、美妙の言文一致に對して、紅葉獨自の新しいスタイルを『色懺悔』の上に試みて、ある程度まで成功したのである。彼れが、こゝまで來るには、文體について、餘程、苦心もし、研

究もしたにちがいなかつた。それは藝術家らしい性格を最も鮮明に有して居た彼れとしては、勿論、當然のことであつたらう。

高山樗牛は『明治の小説』中に於て「美妙が國民之友附錄に掲げたる『蝴蝶』、紅葉が『新著百種』に掲げたる『色懺悔』、皆之れ二氏が當年の傑作、一時世人の喧傳せし所のもの、而して其文體を問へば、何れも言文一致ならざるは無かりき。」と云つて居るのは、誤謬である。『色懺悔』の文章は、言文一致の範疇に加へ入れるべき種類ではない。紅葉獨自のスタイルだ。

『色懺悔』の内容は、『蝴蝶』と同じやうなロマンチックな史的哀話である。「時代を説かず、場所を定めず、ある時ある處にて、ある人々の身の上譚」として、木枯寒く吹きすさぶ山里の荒れた庵に主客二人の美しい尼が、一夜、偶然話し合つて、主人の尼は夫が戰死したロマンスを、客の尼は、戀人が戰場に歿した悲みを語り合ふに及んで、其の人は主客二人の尼が互ゐに思つて居た愛人と知れて、驚く時、夜は、ほのぼのと明け離れたと云ふ筋である。その篇中の人物は、在來のロマンスのうちに、いくらもある類型的な物で、結構も亦殆ど舊套を脱しないけれども、其の文章は、紅葉が、西鶴脈と歐文脈とを巧みに按配したもので、簡潔な文句を種々の句讀、記號を以て繋いだり、餘韻餘情を讀者の胸に殘すやうに省略法を用ひたり、？の記號を以て、ロマンスを一夜の出來事のうちに

うちに縮めたりした點は、全く紅葉の獨自のものであつた。島村抱月は、『色懺悔』が出た時分、其冒頭にある文句の美と清新とに驚嘆して、それを手帳に書き留めたと云つて居るが、其の一節は、左の如くである。

　蕭寂はそも如何ならん。片山里の時雨あと。晨より夕まで。昨日も今日も凩の烈く。あるほどの木々の葉――峯の松のみ殘して――大方吹落しぬれば。山は面瘦せ衰え、森は骨立ちて凄じ。茶の煙だに擧らずば。山賤も知らぬ谷蔭に誰か住む庵ぞ。かくても尙捨難き浮世の面影のこす蔦垣。疎に結ひ繞し、竹は蝕み。繩朽ちたれど、枯蔦の名殘惜しく縋れるまゝに倒れもやらず。二本の黑木を入口の標に茅葺の屋根は歲に黑み。落懸る檐風に傷はしく。風情は月にばかりの破壁。强くは踏れぬ竹椽。切株の履脫より左に三尺。其處に筧の、水ほどにもなく絕えせぬ雫。閼伽桶に滴る音の、やう〳〵幽に疎に成りゆくは樋の口凍るにやあらん。夕暮の風寒し。

明治二十二年頃に書いたものとしては、立派な文章で、優麗な雅健な趣のある、鍜鍛を重ねたものだ。紅葉が獨自の書き方、記號が最も著しいのは、左のやうな點である。

　高きは林か。低きは野か。唯一面に白く。なほちら〳〵名殘をふらす曉の空。岡の片蔭に破れ硝子の薄氷に。椽を取せし小澤近く。古りたる梅樹。下は幹を染分け――上は（紅蕋を包む――雪。誰……此美を亂

し――此美を傷く……こは何事。低き梢に。切口より血汐を落す生首三つ結び付けて。こぼれ齒の長刀の朱に染れるを幹の二叉に寄掛け。諸膝組んで雪を掬ふ若武者――鎧は……草摺。小袖の下二段を萠黄に威し。上を白糸――其華美さ卯花威。いかに手痛き合戰やしつる。射向の袖の菱縫の板はちぎれ。『草摺の板をほつれて、下る匂の糸。胴の威毛には。血液斑點に染むる散紅葉。鉢卷もなく鬢髮大童にふり亂し。額から眉を劃つて斜に左眼の上を行くは斬疵か。紫ばめる脣の下に。三寸ばかりかすられて。朱ににじむ眼……うす青む面色。雪一口ごとに呼吸せはし。

（四）　紅葉の人物と優れた藝術的氣禀

紅葉が、藝術的な氣禀は、既に此の時分から現はれて居たのだ。花袋も此の點を認めて『色懺悔』を許して「その文章に至つては言文一致でもなく、普通の雅俗折衷でもなく、また飜譯調でもなく全く一種オリジナルなものであつた。文章なども現今でこそ、全く和文漢文の領域を離れて立派な整つた體をなしてゐるが、『色懺悔』當時に於ては作家は文章の苦心といふことが大變であつた。」と云つて居る。蓋し紅葉は、言文一致の冗漫に流れ易いのに滿足せず、飜譯調のゴツゴツしたのを喜ばず、さればとて、在來の讀本、滑稽本にも慊らない結果、西鶴の警拔な寫實的な含蓄の多いスタ

イルに共鳴して、それに歐文學の風味をも少しばかり加へて、一新體を得たのである。
斯うして、紅葉の『色懺悔』は、美妙の『蝴蝶』と匹敵し、若くは、それを凌ぐとの評判を得て、間もなく、二十二年五月の『新著百種』第三編の附錄に『風雅娘』を出し、續々その後も新作を提供したが、明治二十三年中は大した作を見せなかつた。二十四年になつて一月には『新色懺悔』八月には『二人女房』十月には『伽羅枕』などの佳作を書いた。

尾崎紅葉は、名を德太郞と云つて、慶應三年十二月十六日、東京に生れた。彼れは、三田英學塾、大學豫備門を經て、大學に入り、法學及び文學を各一年つゝ修めたが、明治二十二年『色懺悔』を出して、文壇に認められると同時に、大學を去つて、文學者生活に入つた。彼れは、生粹の江戸ツ兒で、快活な洒脫な肌合の人であつた。その作品から想像して、色男を氣取る人のやうに誤解したものもあつたが、其の實、彼れは義理を重んじ、友人を愛し、淸貧に安んじ、いろいろの好尙な趣味を持つて居た紳士で、また門下の人々にも、親切な指導を與へて倦まなかつた。其のうちから、鏡花、風葉、秋聲、春葉らを出したのは彼れの文勳の一つであつた。彼れが早く世を去つたのは、無暗に濃い茶や、煙草や、菓子を愛用した爲めだと云ふが、其の一半は寧ろ文章上の慘憺たる苦心、努力が、彼れの健康にわるい影響を及ぼしたものと見なければなるまい。彼れが胃癌て世を去つたのは三十六年十月三十日で、年僅かに三十七だつた。十一月

二日、彼れを青山の墓地に葬つた時、會葬者は二千人に上つた。花袋の『東京の三十年』には『紅葉山人を訪ふ』と云ふ一章がある。其の他『十千萬堂日錄』や、紅葉書翰集の類や、彼れのことに關する記述、評論はいろいろある。本間久雄著『尾崎紅葉』國木田獨步の『紅葉論、』後藤宙外の『美妙、紅葉、露伴の三作家を評す』巖谷小波編『紅葉より小波へ』などは其の主要なものである。

私は、紅葉の『二人女房』『伽羅枕』などを紹介し、批評する前に、作家としての紅葉について簡短に概論して置きたいと思ふ。紅葉の作品には、頗る慊らない點とまた頗る敬服する點との二つがある。私が慊らないのは、紅葉が自己の趣味に囚へられ、若くは戀愛、色慾の世界にのみ取材して、それ以外に力めて出ようとしなかつたことである。換言すれば、小主觀のうちに彷徨して、高大な理想、深刻な人生觀、社會觀乃至人間觀を有しなかつたことである。それに彼れの描寫も純粹な寫實主義に徹底せず、其の態度も、戯作者風のところを脫し切らなかつたやうな點に、稍不滿を感ぜざるを得ない。

私が紅葉に敬服する點は、天禀の藝術的な肌合を以て居て、一生文章に忠實で、倦まず、撓まずに、其の努力を續けて、『多情多恨』のやうな立派な文章を產出すると共に、今日の新文章の基礎を作つたことである。文章上の才能は、勿論、夙に彼れの有した特徵であるが、而も彼れは、一日と

雖も、彼れ自身の文章に滿足しないで、次ぎから次ぎへ新しい工夫を案出したのみならず、其の鍛錬や、推敲に多くの時間を費すことを惜まなかつた。此の點に於て、彼れは、明治文壇の第一人者と云つて差支へないほどの業績を殘した。

私が紅葉に慊らない點については、彼れも晩年に、それを意識して『金色夜叉』の大作を書いたのであるが、矢張、これも、形式の方に餘計に苦心して、内容の方は、紅葉の意圖のやうに行かなかつた。當時の時代精神や、社會狀態を皮相的に描いた丈で、其の肉を抉り、髓を穿つと云ふところまで行かなかつた。けれども彼れが、こゝ迄辿りついたに就ては、彼れの藝術家としての努力と向上とを認めないわけに行かない。

だが、紅葉が、もつと嚴肅な内觀を有して居て、哲學や、思想の方面にも、心を向けるやうであつたならば、彼れの文學は、もつと深味を有し、痛切な内容を有したかも知れないのである。ところが、彼れの交友、彼れの周圍には、彼れの趣味に一致し、若くはそれに共鳴するものばかりで、哲學や、思想の方に踏み込もうとしたものは一人も居なかつた。さうした傾向を有したものが稀れにあつても、紅葉一派乃至硯友社派に容れらるべき可能性がなかつた。そのため、紅葉は、深い省察も、内面的苦悶も、宜い加減にして置くと云つたやうな有樣のうちに一生を終つた。彼れが小主

觀に囚はれて居たのは、止むを得ないのである。

（五）紅葉の『新色懺悔』と『二人女房』

更らに彼れの作品については、私は凡そ三期に分つて見たいと思ふ。第一期は、略ぼ西鶴の影響の下にあつた時代、第二期は西鶴の影響から離れやうとした時代、第三期は略ぼ自家特有の內容とスタイルとを構成し得た時代である。

第一期は初期から二十七年頃迄の作品である。第二期は二十八九年頃から三十年頃迄である。第三期は三十年頃から三十六年迄である。第一期の主要な作品は『色懺悔』『新色懺悔』『二人女房』『伽羅枕』『心の闇』『三人妻』などである。第二期の主要な作品は、『不言不語』『多情多恨』『靑葡萄』などである。第三期の主要な作品は『金色夜叉』『八重襷』などである。勿論これは、大體の區分であつて第一期のうちでも、二葉亭の『浮雲』と似た『二人女房』のやうな作品がある。また『心の闇』のやうな自然味のある作もある。だから、以上は、大まかな區分と云はねばならぬ。けれども西鶴一流の色慾世界を主とした內容の上から見ると、以上の區別は、大まかではあるが、必ずしも不當ではない。

『新色懺悔』は、宇治の美しい少女が、思ふ人に嫁することが出來ないで、思はぬ老富豪の許に嫁して、次第に青春時代の去りゆくのを悲みながら、いつしか自分も老ひて了ふと云ふ筋であつた。紅葉の著眼は、慥かに宜いところを覗つたのであるけれども、さうしたはかない運命の女を描くのに、輕い調子の文章を以てしたので、少しも悲痛な味が出て居なかつた。表現の上に於て、失敗した作であつた。

『新色懺悔』の後に出た『二人女房』は、紅葉が、始めて言文一致體を以て書いた佳作であつた。花袋が、當時紅葉の直話だとして傳へたところによると「どうも山田美妙のでも面白くない、又「だ」調では、ぶつきら棒だし、「ありません」調は丁寧過ぎるし、どれにも滿足し得ない。」と云ふ意味を語つたさうである。畢竟、紅葉は、それ等の不滿足を除いた言文一致を創始する意氣込で「である」調を案出したのである。

勿論、試みの時代であつたから彼れも「である」調を以て「二人女房」を一貫して居るかと云ふと、さうでないところもある。「なり」「あり」と云つたやうな文章體の語尾も往々、用ゐて居る。要するに、それも亦紅葉の苦心から出たことで「である」ばかりでも、單調だとして、語尾をいろいろに變へて見たのだらうと思はれる。

其の內容は、ある小官吏の娘二人を中心にして、運命や、境遇や、氣質から、自然、二人が、ちがつた方向を執つてゆく徑路を描いたもので、姉は美貌で、ある相當な官吏の妻となつて、一時、家庭の風波に惱み、妹は美しくないため、著實な職工の妻となつて、平和な家庭を作ると云ふ結末になつて居る。而して此の二人の娘の父母、姉の夫と其の母、妹の夫となる人などをからませてあるが、何れも類型的で、際立つて描かれてあるのは、矢張、二人の娘である。

姉娘は、お銀と云つて、快活な悧巧な愛嬌ある女として描かれ、妹のお鐵は、無口で、苦勞性のある女として描かれて居る。さうした氣質は、ある程度迄、出て居るが、心理描寫の點になると『浮雲』ほど深く突込んで居ないのが物足りない。それに說明の多いことも目障りである。「若き女子は箸の轉けだも可笑く。笑ひ興ずる心の中にも仍苦勞絕えずして、老けぬ間に緣附きたや。好き婿取りたや。世帶持つとも苦勞なきやうにと、金持も容色美しもいづれか身のおさまりを案じて。朝暮の憂慮とせざるはなし。」と云つたやうな說明が、往々出て居る。

だが、お鐵の嫁入する時の心理を描いたところなどは、適切で、娘から妻にならうとする女の哀愁が、泌々出て居る。「姉様が澁谷樣へ嫁く時には。別れるのが悲しくつて。袂につかまつて泣いたらば。姉樣も泣いて。私の手を握つて放さなかつた。今日は家を出る時、誰も殘つてゐる人が無か

つたらう。それほどでは無かつたけれど。隨分可厭な心持だつた。よく考へて見れば。かうして、御父樣や御母樣と一緒に來たやうなものゝ。今後は私一人置いて行かれるのだ。明朝から石黑の家の人になるのだ。」と描いたあたりは、紅葉の宜いところが出て居る。けれども全體から見ると、作爲のあとがあつて、『浮雲』の自然味を缺いて居た。殊に『浮雲』のやうに、當時の文明や、時代精神を描くといふところまで、進んで居なかつた。

(六) 紅葉の文學上に於ける一進步

『伽羅枕』は『二人女房』を發表すると間もなく書いた作であるが、これは、雅俗折衷風の文體で、意地と張の強い一遊妓の生涯を告白させたものである。西鶴の『一代女』などを思はせるやうな趣のものだが、而して文章も、西鶴の匂ひが強くするものだが、單にそれ丈で、紅葉の表現上の苦心を示したものに過ぎなかつた。

ところが『心の闇』になると、素直な作で、盲人佐の市が、千束屋と云ふ旅館の美しい娘お久米に戀した心持が、比較的に同情を寄せて書かれてある。お久米が、佐の市に對する心の働き方、佐の市がお久米に對する煩悶、それが相應に表現されてある。お久米が愈々榮居と云ふ家へ嫁すると聞

いた時の佐の市の絶望狀態とお久米がそれについて佐の市を憐む心持とが、左のやうに描いてある。

佐の市は茫然として千束屋を出でぬ。其態は大晦に金遣せし人の住所無く、生死二者の分別に彷徨ひたらむ如く、涙を出さぬ泣顏も哀れに、やう／＼暇乞せし聲音の悲しさ、歸りて後までも耳の底に殘りて、お久米は枕に就けども眠られず、心に懸る佐の市が變りし樣子を念ふに、その理由は少しも分らず、不審の積る間に、明白に其とも無く、我身に罪のあらむやうに覺えて、異しう心快からぬを、そんな理は無けれども、今夜に限りてどうしたものか、口も碌にきかなんだのは私が惡い。不具者といふものは直に僻見を出して、些少の事をも氣に懸けるとやら。其中にも明の失いものは不便も一入なれば、何かに就けて優しう劬つてやれ、と平素から父樣のおつしやりつけ。明日の晩は機嫌好く話して、平生のやうに嬉しがらせてやりませう、十何年のあひだ出入して、顏を見ぬ日の無い佐の市なれど、私も近々に片附いてしまへば、今でものやうに會ふこともあるまい。（中略）と思ひつゝ寢れば夢に佐の市は、寢間の窓より覗きこみてお久米樣おめでたうございます。へゝへと三聲の笑聲肝頭に徹へて凄じく、聲立てむとすれば吭塞がり、夜衣引被がむとすれば釘附のごとく、顏に袖して俯けば、佐の市は窓より入らむとして、下駄の齒に菰を踏ならす音、（中略）あ貴孃に見捨てられては生効の無い、佐の市、長らへてゐれば、言替はした女の他へ適くに、祝の喪を持て來ねばなるまい。いつそ死なう。死ぬ覺悟をした。其代り此恨は忘れぬと振放して

飛鳥の如く窓より躍り出づるを、追蒐けむとする後より、お久米と呼ばれて振向けば、意氣なる洋服扮裝の藥居喜一郎、慚かしやと思ひながら挨拶すれば、男も山高の帽子を脱るに剃立の坊主頭！　それはと見る顏は佐の市。餘りの事に仰天して、僵るゝ拍子に夢は覺めけり。

『心の闇』は、全體として、能く纏つて居るのみならず、人物の結末を强ひて附けないで單に「言はずして思ひ、疑ひて懼る。是も戀か、心の闇。」としたのは、當時にあつて、新しい書き方であつた。

（七）『三人妻』の文章及び內容

『三人妻』は、興味中心の作品で、紳商葛城奈五郎の愛妾才藏、紅梅、お艶の三人を、それぞれ氣質の上から、巧みに書き分けた作である。またある一面から見れば、明治の紳商が、女色に耽つた內部生活を發露したものだと云へないことはない。其の文章は、華麗と濃艶とを極めて、錦繡をひろげ出したやうな感じを與へる。恐らく、紅葉が、西鶴風の文致から出發して、自己の文章を略ぼ完成した錬熟の極致に達したものと云つて宜いであらう。要するに、第一期時代に於ける第一の大作と見るべきものである。だが、內容に於ては、依然、西鶴のやうに色慾世界に彷徨して居たと同

時に興味中心で書いた爲めに、場面の變化に氣を取られたり、誇張したところがあつたり、例の說明澤山の箇所があつたりしたのは、缺點であつた。

けれども、其の文致の華麗は、紅葉でなければ、到底、書けない妙趣がある。彼れが、此の長篇をタルミのないやうにするために、鍛へた上に鍛へた文章の味は、左の園遊會の一節を見てもわかるのである。

> 曙の空曇りて如何を氣遣ひしに。風少し出でゝ、麗なる日和を定めぬ。音羽なる笑靑莊の門へは、翠柳の綠濃に、二十餘間の流水露地、垣の外なる密竹に暗く、此に心を籠めて幽情の體に造り、奥庭の木戸を入れば、華美さに目覺むる一面の櫻林、何千本の枝頭重く、人は雲の中を行くがごとし、西の隅に一拱もあるべき普賢櫻の下に錦の幕を張りて、伶人袖を聯ねて妙なる音を立つれば、門を入るもの多時は此處を去らず。休憩の床几を幾處か木間に据ゑて、各十一二なる女童の眉目麗しきを擢りて茶の給仕に附け、少しく距りたる物蔭の小屋に煮茶點心を司どるものあり。ほの〴〵と茶煙を落花の風に颺げたる、いと心悄し。（中略）或は黑の紋附袴裝の五七人、美男揃ひにて來るもあれば、母を劬り、子の手を牽き、妻を伴れたる殊勝なるもあり。衣香、帽影、簪の光、黃金の鎖、マニラの煙、薔薇の風、女の顏は白く、男の髭は黑く往來織るが如く、笑語の聲の中を、反古染の袖無羽織に淺黃頭巾打冠りて、白酒や白酒を賣行くは、第四

商廛の番頭清水某、これは御趣向と褒るものには、格別の大茶碗にて振舞ひ、向鉢卷にて難波鮓と箱擔げ行くは第二商店の會計、老妓の島田ほどの擲包を行遣ふ童女ごとに一つ宛くれて通りぬ。チヤリネの道化師様に装束きたる男、首筋にその數二百許色々の風船球を結びつけて、西洋唱歌謳ひつゝ、道化女に装りたる侶にヴイオリンを彈かせ、拍子をかしく舞ひながら糸を斷れば、寶珠の玉の天上のごとく、小氣球天に滿ちて、之も興になりけり。此外に種々の思附人笑せとなりて、いづれも花は餘所に、此上はお妾様は何處におはします、と足は皆掛茶屋に向きて急ぐ折柄から、木蔭より白鳥片手に衝と走出てたる女房あり。手織縞と見せたる京御召の小袖に、紋縮緬の赤前垂、淺黃縮緬の平絎を片襷にして、横櫛露に置手拭したるは、茶見世の娘が酒買ひにゆくと見せて、水際の立ちたる美人、彼は誰と吃驚せぬもの無し。跡を追けよと口には出さねど、其心に違ひ無き一群、燕尾服着て目尻の垂れたる男か、先達になつて花の雲間に分入れば、池の畔の鏡花亭の主、煮染の品々を砂鉢に盛りて、外見を不味々々しく、念の入りなる生稻が庖丁、酌に付けたる小女郎の馴れたる擧止は其の筈、一粒撰にしたる柳橋の半玉ぞかし。三間の出店にも各客滿ちて、主婦は八方を販持に、面白半分の仇口きゝて、應對の上手と姿の意氣なるに識らぬものも此の女こそ才藏と目を着けぬ。(下略)

園遊會に於ても、才藏が柳橋藝妓としての本來の俠な氣質を現はすと共に、紅梅とお艶とについても「此處は紅梅の受持と聞けば、察する所、自身は姫君の扮裝にて、彼几帳の蔭に小陰れ、今に

現はれて、驚かされむ。」と記し「心閑に茶筅を拮りて、颯々たる釜の松風に耳を淸ます女はお槇なり。」と記して、自然、其の性格趣味を仄かせて居る。三人三樣の女が、結局迄、いろ〳〵に開展してゆく戀のロマンスは、興味中心的に成功して居る。要するに此の期に於ける紅葉は、色慾及び女性を描寫する上に特殊の優れた技倆を示したけれども、結局共通的な女性の普通心理若くは情緖を描き得たが、特殊の個性を描き得なかつたのは、著しい缺點であつた。紅葉も亦『三人妻』を一轉機として、何等か異つた方へ進まねばならぬことを心に感じて居たやうである。そこで、彼れの第二期時代が來る。

（八）硯友社同人の文壇的活動

紅葉を中心として居た硯友社同人の文學的收獲を見ると、廣津柳浪は『殘菊』に於て、巖谷小波は『妹脊貝』にて於て、川上眉山は『二おもて』に於て、大橋乙羽は『露小袖』に於て、石橋思案は『乙女心』に於て、何れも、文壇に認められた。

けれども彼等は、紅葉のやうに、際立つた藝術的收獲を示さなかつた。石橋思案の如きは、腦を病んだ爲めか、作家としては、一番早く進歩を中止して、文壇の圈外に出て了つたやうな有樣だつ

た。巖谷小波は、最初から御伽話の作家たるべき傾向を有して居て、少年少女の可憐な面目を描き出す上に於て、特殊の才能を持つて居た。だが、小說方面に於ては、餘りに淡白な洒脫な性質が、作品の內容に於ける深さ、表現上に於ける鋭さを缺如させたやうで、どうも、伸び得べき可能性を見出し得なかつた。果然、聰明な彼れは、早く御伽話の方に轉じて了つた。

川上眉山は、當時、許六、也有などの俳文に傾倒して、洒落な輕い味のある美しい文章を書いて其の才能の豐かなことを示したけれども、小說作家としては、未だ何等の特色を發揮しなかつた。日淸戰爭後、觀念小說の時代がくる迄、彼れは、唯文壇の一方に籍を置いて居るに過ぎない有樣だつた。

ひとり、廣津柳浪のみは、『殘菊』に於て、將來、所謂深酷小說乃至悲慘小說を以て著はれるであらうところの可能性を示して居た。元來、彼れは、山田美妙よりも早く言文一致體で、小說を書いたほどで、美妙が、夙に聲名を馳せたのにくらべると、遙かに遲く認められるべき損な運命の下に置かれて居たやうだつた。『殘菊』は、ある病める女の悲痛な心理を描寫した點に、他の硯友社同人とは、全く異つた傾向や、味を持つて居た。紅葉の如きは、流石に柳浪の力量を早く見拔いて、其の比較的に澁味のある書き方を賞揚して、市川團藏の藝と風格を同じうするやうに云つた相である

が、そこに、柳浪が、後來、めきめきと發達して、一時、紅葉を凌がうとする迄になつた本質が、略ぼ芽を吹き出して居たことを見るのである。

以上のほかに、江見水蔭、中村花瘦などが居たが、水蔭は、眉山とひとしく、日淸戰爭頃までは未だ其の才能を充分伸ばさなかつた。中村花瘦は、發達し切らないうちに、早く世を去つて了つた其の他、丸岡九華、岡田虛心亭なども居たが、一時、創作に筆を染めた丈で、中途、文壇を離れたので、文學的に何等の足痕をも印しないほどであつた。

第五章　紅葉に對峙した幸田露伴

（一）詩人としての露伴と其の作品の特質

紅葉と略ぼ同時に文壇へ出て、其の聲名も亦紅葉と併行的に喧傳されたのは、幸田露伴であつた彼れは、紅葉のやうに、硯友社と云ふ一つの背景を持つて居ない孤立獨往の人であつた。其の文學生涯は、明治二十二年二月、處女作『露團々』を『都の花』に發表した時から始まつた。

だが、彼れの出世作とも云ふべきは、同じ年の九月新著百種第五篇に出した『風流佛』であつた。『露團々』は、今日、見ても、可なりに風變りな作で、アメリカの老富豪が、其の愛孃のために婿の候補者を新聞紙上に廣告して求めると、多くの應募者があつて、老富豪が、それ等の人々を試驗する、結局、其の愛孃は、相思の男と結婚すると云ふ筋である。興味中心の作で、少しも、露伴の特色が出て居ない。單に其の漢文の素養が現はれて居ると云ふ迄のものである。唯露伴が、當時の歐化熱にかぶれて、頻りに、アメリカの風物などを敍して、異國情調を漂はせようとした點が、珍しいと云へば云へるであらう。

『風流佛』になると、露伴が、獨自の天地を開いて行かうとした意氣が能く見える。彼の特色は、それから漸次、發揮されて『一口劍』『緣外緣』『ひげ男』『艶魔傳』などから『血紅星』『五重塔』に至つて正に高潮に達した趣があつた。それは、二十二年から二十五年の秋頃迄の文學的收穫であつた。日清戰爭前に於ける『風流微塵藏』なども、露伴の意氣精力が正に旺盛であることを示して居た。

露伴は、紅葉と並稱されたけれども、それは單に文壇的地位の上にのみ留まつて居て、其の人物性行、作品は、全然、ちがつてゐた。紅葉も、露伴も、略ぼ同年の出生で、共に生粹の江戸ツ兒であつたけれども、紅葉は、都會情調を熱愛した通人肌の傾向を有し、露伴は田園情調を嘆美した詩人肌の傾向を有して居た。紅葉は、西鶴の小說に傾倒して、其の文章內容までも、西鶴の影響を受けて、始終、色慾の世界から離れなかつたけれども、露伴は、西鶴に傾倒し乍らも、單に文章上に於て、其の影響を受けた丈で、內容は、全く異つた風味を備へて居た。

それで、露伴に對する批評家は、紅葉を現實派としたについて、露伴を理想派として、其の小說を理想小說だと云つたものもある。けれども私は、露伴に對して、別な見解を持て居る。所詮、露伴は詩人だ、徹頭徹尾、詩人だ。彼れの小說は、其の詩想を披瀝しようとして假りた一個の形式に過ぎないと信ずるのである。勿論、彼れは、詩人として、佛敎的な思想を具備してそれを表現しよ

うとする傾向を有して居た。換言すれば、一種の意力若くは藝術的情熱の强さを憧憬して、それ等にふさわしい材料を採り入れて、それを詩的表現の上に浮べようとする特殊的な傾きを持つて居たそれは、現實派の眼から見ると、餘りに狹く、餘りに空想的、主觀的で、どの人物も、露伴式の類型に鑄込まれて居て、單調で、實感的でないにちがいない。けれどもそれと同時に、現實派の有しない一個超越的な詩の世界を有して居たのだ。斯うした見解の上に起つて、露伴の作品を眺めると彼れ獨自の詩的情熱と詩的色彩とが、紅葉を中心とした硯友社一派に對して、燦として輝いて居るのを見るのである。

在來、明治文學史の上に於て、露伴を論じ、若くは、紹介するものは、唯時代的に有名な作品を批評する丈で、露伴の詩人として小說以外の形式を假りて發表した紀行文や、小品の類を見逃して了つて居る。それは、畢竟、露伴を小說家の型に入れて、頭から、小說家として、彼れを律しようとするからである。若し彼れを詩人として見るならば、小說以外の形式を假りて發表した彼れの詩的小品の類にも言及しなければならぬのである。卒直に云ふと、私は、露伴の小說としては『五重塔』その他二、三篇を讀めば、それで宜いと思つて居る。他は寧ろ歷史的評價の上に置くべきものが少くない。ところが、露伴の紀行文を集めた『枕頭山水』や『夢日記』などを今日も愛讀することを禁じ

得ない。露伴も、小説と云ふ形式を離れて了つて、斯うした方へ出て、自由に其の詩想を披瀝したならば、今一層、顯著な成功を收め得たであらう。

（二）出世作『風流佛』の思想、文章

以上は、露伴の作品についての槪觀であるが、さて『風流佛』が、露伴の出世作となつた所以は、珠運が、一篇のヤマは、珠運と云ふ彫刻家の藝術家氣質にまつわる淸純な戀を描いた點にあつたが、お辰と云ふ花漬賣る女に戀したところが、其の女が實は子爵の落し胤とわかつて、戀仲を割かれても尙ほ其の美しい佛が忘れられないで、それを風流佛に刻み込むと云ふところにあつた。卽ち戀の執念、藝術の一念が、一緒にからまつたところに露伴獨自の味があつた。

其文體は、西鶴風で「室香はお吉に逢ひてより三日目、我子を委ねる處を得て氣も休まり、爰ぞ天の惠み、臨終正念違はず、安らかなる大往生、南無阿彌陀佛は嬌喉に粹の果を送り三重、鳥部野一片の烟となつて御法の風に舞ひ扇、極樂に歌舞の女菩薩一員增したる事疑ひなしと樣子知りたる和尙樣隨喜の淚を落されし。」と云つたやうな文致を示して居る。だが、珠運が風流佛を刻むあたりの描寫は手に入つたもので、感興に乘つて書いたものだと思はれる。

珠運は段々と平面板（ひらいた）に彫浮ぶるお辰の像、元より誰に頼まれしにもあらねば細工料取らんとにもあらず、唯戀しさが余りての業、一刀削りては暫く茫然と眼を瞑けば花漬めせと嬌音を洩す口元の愛らしき工合、オ、それ〳〵と彫を促へて再一ト力、一ト鑿笑いては跡じさりして眺めながら、幾日の恩愛、扶けられたり扶けたり、熱に汗蒸れ垢臭き身體を嫌な様子なく優しき手して介抱し呉たる嬉しさ、今は風前の雲と消えて、思は徒に都の空に馳する事恐しく、なまじ最初お辰の難を助けて此家を出てし折、留められし袖思ひ切て振拂ひしならばかく迄切なる苦とはなるまじき者をも、戀ひしを恨む戀の愚痴。吾から吾を辨へ難く、恍惚とする所へ現るゝお辰の姿、眉付媚かしく生々として、睛、何の情を含みてか吾與へし櫛にチッと見とれ居る美しさ、ア、此處なりと幻影を寫して又一鑿、漸く廿日を越えて最初の意匠誤らず花漬賣の時の襤褸をも着せねば子爵令嬢の錦も着せず、梅桃櫻菊色々の花綴衣麗しく引纒はせたる全身像。（下略）

斯う云つたところに露伴の特徴が能く現はれて居た。其特徴を、彼れは更に『緣外緣』と『一口剣』に示した。『緣外緣』は『對髑髏』とも題した一種の散文詩風のもので、ある詩人が、日光の山奥から上州へ行く山の中で、髑髏の假相だつた美人と一夜、語り明かしたことを書いたものである。色即是空若くは邪淫戒と云つたやうな佛教から出た思想が、明かに『緣外緣』の中軸となつて居たのであるが、それを露骨に現はしたのは、露伴の作品に共通した缺點で折角の詩的幻想を破り易かつた。

それに用のない記敍の筆や、感慨的な詞句が混じつて居て、ともすれば、うるさい感じも起せるのである、けれども山中の髑髏に對して、詩的空想を逞うした點は、露伴でなければ見られない味があるので、『風流佛』と共に、彼れの名を馳せしめた。

（三）　藝術家氣質を描いた『一口劍』

『一口劍』は『緣外緣』よりも、優れて纒つて居た作品であつた。而して『風流佛』とひとしく、藝術家氣質を描寫したものであつた。それは、刀鍛冶正藏が戀した女房お蘭のために主人の家を出て了つて、不遇の境涯に落ちたところが、大名に見出されて、銘刀を鍛えあげると云ふ筋である。正藏の變人で、貧乏に安んじて、藝術家らしい氣品と自信とを有する性格が力を入れて描かれてある。此の作でも、『風流佛』の珠運が佛を彫むところのやうに、刀を鍛えるところの描寫に最も見るべきものがあつた。

作れ、作れ、作るべし。當代第一の一刀を打つてあぐべし、古今無双の良刀を鍛ひ出すべし。我折れ、かたじけなくも御ンなさけ厚き仁君の恩命を頭に戴き、御家老樣庄屋樣がやさしき親切を身に締め、十餘年來師匠樣が胸より我胸へ吹き込で下されし敎の爲に、鈍いながらも勁くなりし此腕をふるつて、あはれ魂

魄を金輪際生へ抜きの鐵砧と据ゑ堅め、陽の鎚には恩に酬はん陰の鎚には義に背かじと齒をくひしばつて力を籠め打ち、未練の思ひは横に切り目、卑怯の心は縦に切り目の鏨を入れ、折りては返し割ては合はせ十五度鍛つて四を一に錬りつゞめて、滿身の熱血を地金と丸め、無垢の一念を刄金と乘せ、此腹中の猛火熾んに幾度か爍したて爍したてゝ結び付け、水打ち銑透し謹み／＼油斷なく、刄土を削つて扨其後こそ一期の大事の燒刄わたし、湯玉を跳らす誠の涙に唯願ひ奉るは神力の加護、假令此身は卽座に生命召さるゝとも露惜しからず、名利のために祈るにはあらざれば、あはれみ玉へ神も佛も。

斯うして出來上つた名刀を大名の前に差出した時、「美しいが能く切れるか。」と問はれて、正藏が我を忘れて、勃然と緣の上に躍り上つて、仁王立ちに突立はたかつて、便々とした腹を叩いて「切れ、たしかに二つになつて見せむ。」と云ふところで終つて居る。此の結末は確かに力があつたので當時有名な文句だつたとして知られて居る。露伴は、此の一篇を作るためには、可なりに苦心したその消息は、彼れの『地獄谷日記』に出て居る。それによると、百枚以上になりさうだつたのを、一晩かゝつて、三十七枚に書き縮めたのである。卽ち六十三枚を抹殺し、削除して了つたのである。當時の露伴が、どんなに藝術的良心に鋭かつたかを想ひやる事が出來よう。

「これは、餘計のことだが、私は露伴の紀行文が好きだ。『地獄谷日記』には、當時の彼れの文學生活

が、「はつきり出てゐる。左に『一口劍』を書いた頃の日記の一部を拔萃する。

七月五日。民友社に送るべきもの書かではと筆を取り、憤發して原稿書き初む。蟬の聲しづかなり。頭痛烈敷して泣きたきほどなれど、讀賣新聞社へも原稿送らねばならず、やがてこれをも認め終る。

七月六日。朝やゝ曇る。昨夜よく眠るあたはざりしが、此日は極めて早く起出づ。日いまだ出でざる山中の景色何ともいふべきことの葉もなく、淚さそはるゝほど物淋しく嬉し。夜また驟雨きたる。山中のわたくし雨といふものなるべし。

七月七日。一日靜座す。

七月八日。朝九時に起きいづ。昨夜寢ることおそかりし故なり。昨夜雨大きに降り、樹間遠近に「土鶯」の啼けるをきゝしに、降雨聲中に赤子の呱々と啼くが如く、極めて悲しかりし。雨ふる時鳴くものなるよし。

七月九日。朝早く起きて散步す。「サゴの樹」といふものをとる。實赤く美しく、葉に細く白き短き毳毛あり。「紅蕈」といふものゝ木より生ひたるを初めて視る。色は烈火の如くして形は「猿のこしかけ」の如し。食ふべし、味美ならず香なし。

七月十日。一日靜座す。

七月十一日。天氣變りやすく、晴れては雨ふり雨ふりては晴る。夜土方人足と共に語る。極めてをかし。越後柏崎の話をきく、此者自らいふ、幼年の時、油を買ひにやられし途中、油壺をもつたるまま、ふと心

かはりて故郷を去りたるより今に歸らずと。

（四）代表作としての『五重塔』と佳作『血紅星』

露伴の『風流佛』と云ひ、『一口劍』と云ひ、彼れの佳作であるが、結局は、『五重塔』に至る過程に過ぎない。藝術家氣質、名匠氣質乃至其の一念の强さ、意力の强さと云つたやうなものが『五重塔』に最も鮮かに最も渾成的に表現されたのである。『五重塔』は『血紅星』と共に明治二十五年十月『尾花集』のうちに收められて出た。『血紅星』は『緣外緣』と似た詩的幻想と一種の佛敎的思想とを結合させた短篇である。私は『緣外緣』よりも、寧ろ『血紅星』が好きだ。其の冒頭の「一も非なり二も非なり、三も非なれば四も非なり、五六七八九十、乃至百千萬億悉皆非なり、唯今は素より非今日も又非明日は又々非に極まつたり。」と云ふ書きかけも逸氣奔放してゐる。此の作は、萬事を非とし、虛無視する皆非居士と云ふ詩人が、二十年來、山中にひとり草庵を結んで、今迄辿つて來た人生行路の回想や、氣焰を吐き、ある夜、幻想に耽つた末、月界の嫦娥に詩思を寄せて、月宮殿に遊ぶと云ふ趣向である。

勿論、此の『血紅星』にも、露伴に共通する說明的ならさるさう言葉や、議論めいたこともあるけ

れども、一篇の散文詩と見れば、比較的に纏りが附いて居た、主人公皆非居士の幻想に對して、ある程度まで、同感させるのである。其の結末に「皆非先生御自身を題にして御鎚揮ふていたゞきたし、さあ月宮ものゝ望み無理ではござりますまい、題は人間、皆非様と、柔和い聲にて云はるゝや否、腦沸え心裂け膽破れ、畏懼の氷胸に結び、無念の火腸肚を焦がし、鬱悶に半身の筋脱け力亡び憤怒に半身の肉動き脈躍ると齊しく、熱血霧となつて八萬四千の毛孔より飛び、黒烟頭上に發つて奥齒の軋る音烈しく、見る〳〵眼は輝き渡り五體に火燄の燃え立つ途端、呀と一聲叫ぶ殺那、身を躍らすこと八萬由旬、血紅の光りを放つ星となつて流れ陷つる無邊際空。」としたところなども、文字の奇聳を衒つた氣味もあるが、露伴の狂熱的なところが、閃めいて居て、一種の暗示的な味を帶びて居る。

『五重塔』は、露伴の名を不朽ならしめた傑作であり、彼れの代表作である。紅葉は、後になつて『多情多恨』『金色夜叉』のやうな大作で、代表作であるものを示したが、露伴は、寧ろ其の初期の時代に優れたものを出した。『五重塔』以後、それに匹敵するやうな作品は、出なかつたやうに思はれる。

露伴が『五重塔』を書いたについては、彼れが、當時、どんな生活をして、どう云ふところから、

さうした着想を得たかを述べる必要がある。其の時分、彼れは、『讀賣』に於て、紅葉と對抗したがどうも、面白くないので、『讀賣』から漸次離れるやうになつて居た。それに、彼れの友人で『梅花詩集』を出した中西梅花が狂氣したりなどしたことで、精神的に動搖して、谷中の草庵に獨棲した一時は、全く斷食、座禪の生活を送つた。斯うした境遇にあつた彼れの心は、唯ひとり藝術的に烈しく燃えて居た。其の時、彼れの眼に深い印象を與へたのは、雨の夜でも月の夜でも、高く樹間に聳え立つ五重塔の姿だつた。彼れは、そこに藝術の永遠性が明かに象徴されて居ることを感じた。人間は、はかないものだ、亡び易いものだ。けれども藝術の優れたものは、ひとり亡びない。さうしたことから、彼れは、暗示を得て、『五重塔』を書き始めたのだと傳へられて居る。

『五重塔』は、明治二十五年。『國民新聞』に連載されたのを、後に一冊としたのである。篇中の主人公のつそり十兵衞の藝術的な性格は、鮮かに描かれてある。十兵衞の周圍に現はれる人物は、十兵衞の性格を鮮明にするための道具に用ゐられたやうで、一般に類型的であるが、大工の棟梁源太及び其の子分の淸吉などは、一通り能く描かれてある。畢竟、露伴は、十兵衞に其の全心を傾倒して、他には、割合に力を入れなくても宜いとしたのかも知れない。

十兵衞は、のつそりとまで綽名された大工で、動作が遲鈍で、世辭が下手で、どこまでも一徹で

あり、頑固である。而して其の技術にかけては、專心一意、造詣するところが深い名人肌であつた。彼れが、感應寺の五重塔を作るについての希望は、火のやうに燃えてやまなかつた。彼れは、平生世話になつて居る親分川越源太が其の工事を引受けたことを聞きながら、尙ほ我慢が出來ないで、感應寺の朗圓上人に面會して、自分ひとりで建立して見たいと云ふ望みを述べた。朗圓は、十兵衞の名人肌に心を動かして、十兵衞に建立のことを擔當させようとした。それと聞いた源太は、十兵衞と協力して、五重塔を作らうとしたが、十兵衞は、一切、この事ばかりは、源太の親切にも背いて、獨力、塔を仕上げようと決心した爲め、源太の感情を害した。源太の子分淸吉は怒つて、十兵衞に負傷させた。けれども十兵衞は、唯五重塔の完成に夢中になつて、到頭、立派にそれを仕上げた。落成の式が近付いた頃、大嵐が吹いたが、五重塔は、見事に其の自然の偉力にも壓倒されないで、藝術の永遠性を示した。十兵衞は、嵐の荒れる夜、萬一、五重塔に事があつたら、塔の上から眞逆樣に身を大地へ投げ出して死なうと思つたが、幸ひに無事なることを得た。源太を初め、十兵衞の周圍のものは、始めて藝術家としての十兵衞を嘆美したと云ふのが一篇の要領である。

（五）『五重塔』の名文章

以上のやうな十兵衛の性格は露伴が得意の人物である。其の面目が、生動するのは當然である。讀者は十兵衛の言動に對して、深い同情と共鳴とを感ずるにちがいない。それと同時に、嵐の夜に於ける五重塔上の十兵衛については、一種の崇高美を感ぜさせられよう。自然の大威力に對する人間の意力及び藝術的努力との爭闘、それから來る最期の勝利、それが十兵衛の一身に體現されて居るところには、確かに崇高な趣が見える。此の點は『五重塔』のヤマで、露伴も、此の一點に向つて其の筆力を集中させたやうに思はれる。恐らく、これこそ、不滅の名文章であらう。

（前略）夜半の鐘の音の曇つて平日に似つかず耳にきたなく聞えしがそも〳〵、漸々あやしき風吹き出して眠れる兒童も我知らず夜具踏み脫ぐほど時候生暖かくなるにつれ雨戸のがたつく響き烈しくなりまさり、梢に搽まる〻松柏梢に天魔の號びものすごくも、人の心の平和を奪へ、浮世の榮華誇れる奴等の膽を破れや、睡りを攪せや愚物の胸に血を濤打たせよ、僞物の面の紅き色奪れ、斧持てる者斧を揮へ、矛もてるもの矛を揮へ、汝等が鋭き劍は饑えたり汝等劍に食をあたへよ、人の膏血はよき食なり、汝等劍に飽まで喰はせよ、飽まで人の膏膩を餌へと、號令きびしく發するや否、猛風一陣どつと起つて、斧をもつ夜叉、矛もてる夜叉、饑えたる劍もてる夜叉、皆一齊に暴れ出しぬ。

長夜の夢を覺まされて江戸四里四方の老若男女、惡風來りと驚き騷ぎ、雨戸の横柄子緊乎と挿せ辛張棒を

强く張れと、家々ごとに狼狽ゆるを、可憐と見ぬ飛天夜叉王、怒號の聲音たけ〴〵しく。汝等人を憚るな汝等人間に憚られよ、人間は我等を輕んじたり、久しく我等を賤みたり、我等に捧ぐべき筈の定めの牲を忘れたり、這ふ代りとして立つて行く狗、驕奢の塒巢作れる禽、尻尾なき猿、物言ふ蛇、露誠實なき狐の子、汚穢を知らざる豕の女、彼等に長く侮られて遂に何時まで忍び得む。我等は長く侮らせて彼等を何時まで誇らすべき、忍ぶべきだけ忍びたり、誇らすべきだけ誇らしたり、六十四年は既に過ぎたり、我等を縛せし機運の鐵鎖、我等を囚へし慈忍の岩窟は我が神刀にて扯斷り棄てたり崩潰さしたり、汝等暴れよ今こそ荒れよ、何十年の恨の毒氣を彼等に返せ一時に返せ、彼等が驕慢の氣の臭さを鐵圍山外に攫むで捨てよ、彼等の頭を地につかしめよ、無慈悲の斧の切味の好さを彼等が胸に試みよ、慘酷の矛嗔恚の劍の刄糞と彼等をなし臭れよ、彼等が喉に水を與へて苦寒に怖れ顫かしめよ。（中略）暴れよ進めよ無法に住して放逸無慚無理無體に暴れ立て進め進め、神とも戰へ佛をも擲ち、道理を壞つて壞りすてなば天下は我等がものなるぞと、叱咤する度土石を飛ばして丑の刻より寅の刻、卯となり辰となるまでも毫も止まず勵ましつれば、數萬の眷屬勇みをなし、水を渡るは波を蹴かへし、陸を走るは沙を蹴かへし、天地を塵埃に黄ばまして日の光をもほと〳〵掩ひ、斧を揮つて數奇者が手入れ怠りなき松を冷笑ひつゝほつきと斫るあり、矛を舞はして板屋根に忽ち穴を穿つもあり、ゆさ〳〵〳〵と怪力もてさも堅固なる家を動かし橋を揺がすものもあり。手ぬるし〳〵酷さが足らぬ、我に續けと憤怒の牙嚙み鳴らしつゝ、夜叉王の躍り上つて焦躁

ば虚空に充ち滿ちたる眷屬をたけび鋭くおめき叫んで遮に無に暴威を揮ふほどに、神前寺內へ立てる樹も富家の庭に養はれし樹も髮振り絞つて泣き悲み、見る〳〵大地の髮の毛は恐怖に竪立なし、樹は倒れ竹は割るゝ折しも黑雲空に流れて樫の實よりも大きなる雨ばらり〳〵と降り出せば、得たりとます〳〵暴るゝ夜叉、垣を引き捨て塀を蹴倒し門を破し屋根をもめくり軒端の瓦を踏み碎き、唯一ト揉に屑屋を飛ばし二タ揉み揉んでは二階を捻ぢ取り、三たび揉んでは某寺を物の見事に潰し崩し、どう〳〵と鬨をあぐる……

……(下略)

暴風雨を擬人的に描いて、一種の佛敎的思想を托したところに、露伴の妙所がある。此の嵐のために「折角僅に出來なりし五重塔は揉まれ揉まれて、九輪は動ぎ、頂上の寶珠は空に得讀めぬ字を書き、岩をも轉ばすべき風の突掛け來り楯をも貫くべき雨の打付り來る每度撓む姿、木の軋る音復る姿、又撓む姿軋る音、今にも傾覆らずん樣子」に十兵衛は驚いて駈付けて「上りつめたる第五層の戶を打明けて今しもぬつと十兵衛半身をあらはせば、礫を投ぐるが如き暴雨の、眼も明けさせず面を打ち、一つ殘りし耳までも扯斷らむばかりに猛風の、呼吸さへ爲せず吹きかくるに、思はず一足退きしが屈せず奮つて立出でつ、欄を握むで屹と睥めば、天は五月の闇より黑く、たゞ嘈然たる風の音のみ宇宙に充て物騷がしく、さしも堅固の塔たれど虛空に高く聳えたれば、どう〳〵どつと

風の來る度毎ゆらめき動きて荒浪の上に揉まるゝ棚無し小舟のあはや傾覆らむ風情。」に十兵衞も驚いて「流石覺悟を極めたりしも又今更におもはれて一期の大事死生の岐路と八萬四千の身の毛を竪たせ牙を咬定めて眼を睜り、いざ其時はと手にして來し六分鑿の柄忘るゝばかりに引摑むでぞ天命を靜かに待つ。」と云ふところは、呼吸をつがせずに讀ませる。イギリス文學、ロシヤ文學から來た新味とは、全く異つて、東洋的な味が漲つて居る名文章の一典型である。露伴でなければ、誰も書き得ない獨自の妙趣に滿ちて居る。勿論、誇張のあとが幾分あるにしても、矢張、價値を減ずることはないと思はれる。

（六）『五重塔』の缺點及び其の他の作品

田山花袋は『五重塔』について「空想と誇張と作爲の多いものだ。」と言つて居るが、露伴の作品中では、比較的に渾然と纏つて居る方である。勿論、『五重塔』は、空想を土臺としたものだが、其の割合に現實味にも觸れて居て、其の作爲も誇張も、うるさい程度に達して居ない。それに露伴の常習であるところの說明や、敎訓めいた言葉も、少くなつて居て、目ざわりになるやうなところは無い。どの點から見ても『五重塔』は、露伴の長所、宜いところのみを集めた觀があるので、代表作と

見て差支えない所以である。
其の他、此の期の作品には『艶魔傳』『風流悟』『ひげ男』がある。『ひげ男』は、紅葉の『伽羅枕』に對抗して書いた歷史小說で、武田勝賴の亡滅前後と其の時代に甲州勢のために氣を吐いたひげ男笠井大六の勇俠な俤を描いたものである。當時の評判は、可なりに宜かつたやうだが、其の實、露伴の作品としては、寧ろ平凡であり、常套的である。長篠の戰が始まる前に於ける武田方の老將が述懷するあたりは、幾分か詩的な感味があるけれども、他は普通の歷史小說に比して、特異のところもない。今日『五重塔』を讀むのは退屈でないが、『ひげ男』を讀むのは、退屈である。だが、歷史的評價の上から見たら、或は當時の評判の宜かつたわけを肯定し得られよう。
以上は、此の期に於ける露伴の主要な作品に對する概觀である。彼れは、紅葉のやうに一般に歡迎されなかつたけれども、紅葉や、硯友社の人々が、到底、開拓し得なかつた方面を獨力で切り開いた。明治の文壇は、露伴によつて、始めて佛敎的思想を背景とした詩的作品を新たに得たのである。

第六章　評論壇に於ける逍遙と鷗外

（一）二大評論家

紅葉、露伴の他に、作家として、饗庭篁村、齋藤綠雨、須藤南翠、矢崎嵯峨の屋、依田學海、宮崎三昧、矢野龍溪などを數へることが出來るが、それ等の人々を紹介する前に、當時文壇に掉した二大先覺者坪內逍遙と森鷗外の文學的業績について概略、論述せねばならぬ

坪內逍遙は、既に『小說神髓』『書生氣質』などを出して、鷗外よりも少し早く文壇に現はれたが、鷗外は、ドイツから歸朝すると間もなく、明治二十二年、『國民之友』附錄に譯詩『面影』を發表し、續いて同年十月、文學雜誌『柵草紙』を出して、評論に、創作に、飜譯に各方面に向つて、其の新銳の手腕を揮ふた。

紅葉と露伴とが、作家として、對比して評論されるやうに、逍遙と鷗外とは、評論家として、對比して、論ぜられる場合が多かつた。紅葉、露伴は略ぼ小說家として始終したが、逍遙、鷗外は、學者で、評論家で、飜譯家で、小說家、劇作者でもあつた。それに鷗外は、多年官吏として生活し

逍遙は半生を教育家として生活した。二人の文學的生涯は、多方面であり、多角的である。從つてある時期は、評論に力を入れ、ある時期は創作に主力を注ぐと云つた具合で、いろいろに變化して居るが、鷗外の前半生は、評論と飜譯とが主要部分を占め、逍遙の前半生は、評論と創作――前半は小說、後半は脚本――とが主要部分を占めたやうである。而して鷗外の文學的活動の源流となつたのは、ドイツ文學思潮であり、逍遙の活動の源泉となつたのは、イギリス文學思潮であつた。斯うして、文壇に於ける二大先覺者が、趣味、色彩を異にして居たのは、興味深い對照である。

鷗外の『柵草紙』は、明治文壇に於ける文學評論を主要部分としたものとしては、恐らく、其の最初のものであつたらうと思はれる。勿論、その以前に『國民之友』の文學欄があつたけれども、眞に文藝評論に充分の力を入れたのは『柵草紙』であつた。文藝評論の最初の形式、內容が敎へたのは、坪內逍遙であるが、それに啓發せられて、石橋忍月、內田不知庵などが眞先に出た。續いて齋藤綠雨、森田思軒なども、評論の筆を執つた。此の四人は、批評家としても、各自、特色を具有して居た。忍月は雄健、不知庵は鋭利、綠雨は皮肉的、思軒は君子的であつて、皆相當の働きを見せたにちがいないが、眞に文藝評論の巨頭となつたのは、逍遙と鷗外とであつた。

玆に一言して置きたいのは、思軒を翻譯家として知つて居る人が多いが、思軒の長所は、翻譯ではなくて

寧ろ批評の方にあつたことだ。綠雨も、小說家として一時名を馳せたが、此の人の長所も、批評にあつた。綠雨の『あられ酒』を見ると、初期の批評文などを收めてあるが『大に笑ふ』『酒の上』『一家言』『正直正太夫死す』などの短かい物にも、既に彼れの特色が出て居る。勿論、彼れの批評は、一種の寸感錄で、皮肉の連續で、論理的に堂々の陣を張つたものではないが、鋭い直覺的判斷に、中々、侮り難いところがある。

(二) 談理を好んだ鷗外

鷗外は、ドイツ文學に精通すると共に、一面、漢文學、國文學についての素養を重ねることにも力めた。彼れは、ドイツの哲學、美術をも研究して、其の精確な論理的方面、究理的方面の影響を受けて、文藝評論の上にも、それから來た影響を現はした。彼れの頭腦は一面、知力(インテレクチユアル)的に能く働くと同時に、一面、情感的(エモーシヨナル)にも能く働いた。其の知力的に働いたのが評論となり、情感的に働いたのが創作となつた。だが、何れの分子が多いかと云へば、勿論、知力的分子が、稍情感的分子に勝つて居た。鷗外が談理を喜んだのは、畢竟、彼れの長所であつたからだ。

鷗外が『柵草紙』に於ける談理の筆は、當時の日本文學に及んで、作家及び評論家を啓發したが、また新しい思潮や、美術などの紹介に於ても、時人を指導した。彼れは、何人よりも早くハルト

マンの美學や、レッシングの思想及び其の有名な『ラヲコン論』などを紹介した。繪畫、彫刻についての新しい意見をも發表した。小說に於けるローカル・カラーと云ふことも、鷗外が、ドイツのロカアル・コロリットと云ふ言葉を使用したのが、其の最初だつた。

鷗外が、批評、論理の筆を揮つた頃の最初の文章は、『今の諸家の小說論を讀みて』などを見るとわかるが、それには、馬琴の七五調の如きものが當然、新しい小說に於て存在し得ないことに論及して「余等は散文の音響を借らずして心を動かすものを以て、詩學上比較的に純なるものとなせり此純なるものは十載の久き何れの國にてもかの狼然憂然たるものに掩はれたるが如き迹なきにあらず。故に余は近世に至りて散文詩の勃興せるを觀て、此純詩體の漸く將に暗黑裡より顯れんとするを喜ぶものなり。往時曲亭馬琴と云ふものあり。小說を以て一時鳴り、之れに繼續するもの皆その式を追ひて還ることを知らず。然れども其の得意の文は純正なる散文にあらず。美妙子の慧眼早くこれを看破したり。」と云つたやうな調子で、ドイツ仕込の頭で、漢文の素養を活用して、精嚴な文致を示して居た。

鷗外が、評論家としての力量を充分に發揮したのは、坪內逍遙の沒理想論に對して、批難を加へて、長い間、論戰を續けた時分であつたらうと思はれる。勿論、それ以前に於ても、文壇の識者は

鷗外の實力を認めて、其の評論を敬重したのであるが、一般的に鷗外の評論の價値を認めさせたのは、逍遙と議論して、得意の談理を試みた時分からだつたらうと私は考へる。

在來鷗外は、逍遙と論戰する迄に、石橋忍月や、內田不知庵にも、鋒先を向けたことがあつたのだが、彼等は、一溜りもなく、鷗外に突き倒された。當時、鷗外の矢面に起つて、實力相比しい地位にあつたのは、逍遙のみであつた。鷗外のドイツ風の文學論、詩論に對して、逍遙はイギリス風の文學論、詩論を以て、對抗し、鷗外の談理を重んじたに對して、逍遙は記實を重んじたと云ふ具合で、雙方好適の論敵を得たわけであつた。

（三）『沒理想論』についての論戰

沒理想論の由來に就ては、在來出た文學史には、殆ど記されて居ない。逍遙、鷗外が戰を開いた最初の動機は、『マクベス評釋の緒言』に於て、逍遙が、シェークスピヤの作の內容が優れて、萬般の理想を入れて、餘りあるとに就て沒理想の新造語を以て、それに當てはめようとしたにある。「若しシェークスピヤを稱美せんとせば、其人間の性情を活動せしむる技倆を賞するは固より可かるべく、其の比喩の妙、其の想像の妙、其の著想の妙、これをほめて空前といふも可く、絕後といふも

可かるべし、只其の理想をほめて大哲學者の如く高しといふは信け難し、むしろ其の沒理想なるをたゝふべきなり。』と逍遙は云つて、沒理想に就て、左の如く言明した。

有と無とは二にして一ならざればにや、古人多くは沒理想の作を、やがて大理想と解釋して、其の作者を神の如く、聖人の如く、又至人の如く評したるものあれど、沒理想必ずしも大理想なるにはあらず、小理想もまた沒理想と見ゆることあり。嬰兒の欲の極めて小なる、是れ有欲(惡)とも見るべく無欲(善)とも見るべし。鬼貫が一句、「なんで秋の來たとも見えず心から」、此十七字、强ひて解釋の辭を作らば、或は佛教をも掩ふべく、或は東西哲學の幾體系をも埋むべし。木內宗吾が一時の義擧も、若し花々しきマコーレーが筆を借りて傳を作らば、ハムデン、ワシントンの輩のと肩を比ぶる義擧ともなりなん。必竟するに、鬼貫等俳人の作には、當人の註釋無く、木內宗吾の義擧には詳傳無く、嬰兒の口には言語無きゆゑ、解釋見る者の心次第なり。恐らくはシエークスピアと雖も、若し散文にて悲劇を綴らば、悉しくいへば、小說の體にて綴りしならば、幾段か値段を下しゝなるべし、其の敍事の中に、おのが理想のあらはるゝことを避けがたがるべきが故なり。例へば『キング、リアー』の悲劇は、馬琴の作に似て、勸懲の旨意いといちじるく見えたれども、作者みづからが評論の詞絕えて篇中に無きゆゑ、見るものゝ理想次第にて、强ち勸懲の作と見做すを要せず、別に解釋を加ふること自在なり。しかるに、曲亭の作を見れば、例へば、蟇六夫婦の性格の如き、頗る自然に背て活動したれども、吾人はこを沒理想とは許せずして、勸懲の旨に成れり

といふ、作者が叙事の間に明に然いへればなり。芭蕉が『古池』の句に、樣々の解あるも、同理なるべく、『源語』の本意をいろ〳〵に臆斷ずるも、同理なるべし。此の例證尙甚だ不足なれども、沒理想の、必ずしも大理想にあらざることゝ、小理想の、時としては沒理想とも見ゆる由は、之れにてほゞ知らるべし。兎に角に、予は沒理想の作を、理想をもて評釋することの、いと〳〵要なかるべきを信ずるが故に、此のたびの評釋にては、主として打見たる儘の趣を描寫することを力め、我が一了見の解釋をば加へざるべし、但し右とも左とも見らるゝ如き場合には、止むを得で故人の評釋をも引用し、予が卑見をも叙ぶることあらん。若し夫れ全體の解釋は、讀者みづから之れをなせ、理想、日本大ならん人は、日本國を『マクベス』の脚本中に見出だすべく、理想萬古に亘らんには、Eternity を『マクベス』の中に見出だすべし。沒理想の詩の無限の興味は、實に其の度量の大洋の如き所にあるなり。

逍遙の沒理想の新造語は、以上のやうに解釋されたのであるが、語義の上から、沒理想について は、多少、異つた見地を有して居た鷗外は、烏有先生の名の下に、『しがらみ草紙』に於て、先づ論難の矢を放つた。それに對して逍遙は『沒理想の語義を辯す』『烏有先生に答ふ』などに於て、其の意見を明かにした。爾後、双方、論難を繼續して、こゝに評論壇の巨觀を呈するに至つたのである。

蓋し逍遙か、イギリス風の文學論乃至美學說と鷗外のドイツ風の文學論や、美學說は、互ひに相

容れない點を持つて居た。それで、鷗外は、啻に沒理想の意義若くは語義について、逍遙とは、別種の解釋を有して居たのみならず、『しがらみ草紙』に續いて出た『早稻田文學』が、談理を後にして記實を先にすると云ふことに對しても、矢張、慊らず思つて居たのである。從つて、論戰の二要點は(一)沒理想について(二)談理を先とすべきか、記實を先とすべきかにかゝつて居た。

逍遙は『沒理想の語義を辯ず』と云ふ論文に「我が謂ふ沒理想は、沒却理想または不見理想の兩義を含めり。之れを無理想の義に解しても差支なけれど、我が旨は理想絕無、本來無理想といふとはおのづから別あり。而して彼の造化に對して用ふると、詩文に對して用ふるとの間に、本意に於て別を立てたり。造化に對しては、專ら方便の名目としてこれを用ひ、詩文に對しては目的即ちドラマの本體の一面を代表する名として用ひたり。』と述べ、更らに進んで「漠々たる大造化は古今の萬理想を容れて(沒却して)余あり、若し理想といふ語をもて今人が思議し得たる極致の名とせば、造化を名づけて沒理想といふも、不可なからん。沒理想といふ語は、今人の衆理想を沒却し、即ち埋沒して、尙余地ありといふ義に解せらるべければなり。」と說いた。而して詩文に對して沒理想と云ふ語を用ふるについては「作家沒却して見えずといふ義なり。必ずしも作家に理想無しといふ意には非ず。此段大むねは、造化に對していふ時と異なることなければ、聊か差別あり。』と云つて、左

の如く述べた。

例へば、シエークスピアを沒理想といふは、勿論無理想の意にあらねど、さりとて人間以上の理想若しくは大理想ありとの義にもあらず、多數の批評家が彼れの理想なりとする所のものは、彼れの理想にあらず彼れが理想は見ること難しの意なり、されば ドラマを沒理想といふは、ドラマの本體を說きたるにあらで寧ろ其の客觀を評したる詞とも見るべし。我れ以爲へらく、ドラマは活きたる差別相と活きたる平等相とを兼ねたるものなりと。我が謂ふ活きたる差別相とは、個々の人物、おの〳〵その特質を有し、作家の性情を脫離して云爲するをいふ、活きたる平等相とは、取も直さず、活きたる差別相の裏面をいふものにて作家の性情を脫離するといふことに外ならす、即ち沒理想なり、作家の性情を見る能はずの意なり。人間を支配すべき因緣果報の理法の一貫するを見れども、絕えて作家の小天地を現ぜずとの意なり。これを換言すれば、作家能く自己を脫離して個々差別の人物を描けるもの即ちドラマなり、といふ義なり。(下略)

以上によつて、略ぼ逍遙が、沒理想と云ふ新造語を用ゐた理由、意味を知ることが出來るのである。ところが、鷗外は逍遙に反對して「世界はひとり實なるのみならず、また想のみち〳〵たるあり、逍遙は沒理性界(意志界)を見て理性界を見ず、意識界を見て無意識界を見ず、意識生じて主觀と客觀と纔に分かるゝ所以をおもはず、老、莊、楊、墨、孔丘、釋迦、其他古今の哲學者が觀得た

る世界を小なりとして自ら片輪なる世界を造らむ果敢なきすさみならまし、後天にのみ注げる眼はダルキンが論を守りても事足るべけれど、それにて造化は盡されず、孔雀の羽のいろ〳〵は、その輸より受くる養おなじきに、色彩の變化は一本ごとに殊なりその相殊なる色彩の合して渾身の紋理をなすは先天の理想にはあらざるか。」と云ひ、美の理想及びそれに適へる極致あることを主張し、「破かねならぬ祇園精舍の鐘を聞くものは待人戀ひしとおもひ、寂滅爲樂とも感ずべけれど、其聲の美に感ずるは一なり、沙羅雙樹の花の色を見るものは諸行無常とも觀じ、また只管にめだたしとも眺むれど、其色の美なりとは耳ありて能く聞くために感ずるにあらず、目ありて能く視るために感ずるにあらず、先天の理想はこの時暗中より躍りいでて此聲美なり、此の色美なりと叫ぶなりこれ感納性（レチエプチヰテエト）の理想にあらずや。」と述べた。

（四）　鷗外の逍遙の説に對する論難

鷗外は、また、逍遙が詩文に對する沒理想についても、論難を加へて「若し沒理想を說く人のいへるが如く、言葉のうちにおのが理想あらはれざる戲曲に長ずるためにシエ丶クスピヤ大なり、おのが理想のあらはるゝ敍情詩若くは小說に長ずるためにバイロン、スヰフト小なりといはば、これ

シエ、クスピヤとバイロンとスヰフトとたま〳〵其詩體を殊にせしために大小の別生じたるのみにてその本來の才分境地には大小なかるべし。」と云ひ、左の如く、結論した。

英吉利古今の文士の戯曲を作りしもの幾百千家ぞ、その作りし戯曲幾千萬篇ぞ、この幾千萬篇か知れぬ戯曲は戯曲の體裁として作者自らが評論の詞を挿まざりしならん、皆所謂沒理想なりしならん、さるに彼數百千家はその名骨と與に朽ちぬ、ひとりシエ、クスピヤが威靈今にいたるまでいやちこなるは何故ぞ、彼數百千家は小家數にしてひとりシエ、クスピヤの大詩人たるは何故ぞ、叉叙情詩と小說とには作者の理想あらはるといひ、沒理想に至ること能はずといはゞ、叙情詩に長ずる大詩人、小說に長ずる大詩人は果して生ずべからざるか、叉叙事詩の旨は純粹なる客觀相にあれば、その沒理想に至り易きこと適に戯曲の上にあらむ、叉沒理想を說く人の戯曲を取りて叙事詩を取らざるは何故ぞ、おほよそ是等の問に答ふる人なき間は、シエ、クスピヤに理想なしともいはせず、理想なきを大詩人の本相なりともいはせじ。

鷗外の見方は、ドイツ風の哲理的、美學的の上に立脚したもので、逍遙のイギリス風の經驗的、美學的の上に立脚したのとは、自然異つて居た。逍遙は、鷗外の非難に答へて『梅花詩集』を評した時の語を引用し、「詩人の筆に上る世界二つあり、心の世界と物の世界となり。甲は虛の世界にして理想なり、乙は實の世界にして自然(ネチユーア)なり。理想を宗とする者は、我を尺度(ものさし)として世間を度り、自然

を宗とする者は、我を解脱して世間相を寫す。前者は總稱して叙情詩人(リリカルポエト)といふべく、後者は總稱して世相詩人(トラマチスト)といふべし。前者能く大なることを得ば、或は天命を釋し得て、一世の豫言(プロヘツト)たらん、後者能く大ならば、或は造化を壺中に縮めて、長永(とこしなへ)に不言の救世主(サキヨール)たらん。理想家の作の大なるには作者著大にして乾坤を吞み、造化派(ナチユラリスト)の作の大なるには、造化活動して作者其の間に消滅す。されば叙情詩人には、理想の高大圓滿ならんことを望むべく、世相詩人には、理想の全く影を藏して、單に世態の著からんことを望むべし。又太だ小ならば、二者共に現在を離れ得ずして、叙情家は一身の哀觀を歌ひ、世相派は管見の小世態を描かん。」と云ふことを以てした。要するに、鷗外の見地、立脚點が異つて居て、何事もドイツの美學原理によつて律し且つ哲學的に論じようとしたところから、出發して、結局、重に語義上の爭ひとなつた形があつた。勿論、鷗外の云ふところにも一理はあるが、逍遙の眞意を辯明したところを見ると、イギリス風の美學に依據した其の說にも一理がある。鷗外は、先づ歸納から出て、演繹に行き、逍遙は演繹を先にして、歸納を後にしたと云ふ差異はあるが、彼れの哲學的とこれの經驗的とを輳合したところに、正しい歸一があつたのだ。當時はそれが、別々になつて、各一派の見方を爲して居たのである。

（五）　談理と記實との問題

以上とひとしく、鷗外が談理を先にすると云つたのも、逍遙が記實を先にすると云つたのも、此の二つを綾合したところに、正しい歸一があつた。だが、當時の文壇に於ける狀態から云ふと、逍遙が、記實を先としたのは、確かに卓見であり、有益のことであつた。鷗外のやうに、高く文壇に標置して、ひとり、高遠の說を吐く人にあつては、寧ろ談理に力點を置くことの必要を感じたであらうけれども、逍遙のやうに一般的に著實を旨として、文壇の大勢を指導して行かうとするには、記實の必要が殊に痛感されたであらうし、また記實を先とするのが、正當だつた。それについて、逍遙は『早稻田文學』第三號に於て「博識卓見の學者は世間に其人いと多かり、佛人獨人の長ずる所は、吾人之れを悉く彼の人々に委ね去りて、みづからは諄々として現實の報道を旨とし、偏にアングロサクソンの著實なる常見を師とすべし。」と云つた。鷗外は、それを知らぬのではなかつたであらう。けれどもドイツ流に何事にも、談理を好んだ彼れは、アングロサクソン風の常見に慊らなかつた。それで、彼れは斯う云つた。

羅馬なる聖(サント)、彼得(ペエトル)寺塔を觀てミケランジエロが作りし雛形の美に驚くは建築を視る眼あるものゝ皆能くす

るところなるべし、これを美なりと記さば、記實者の役濟むべけれど、談理者はそれにて足れりとすべからず、かの佛蘭西人それがしが如く、高等靜論(スタチック)の算法によりて古人が不用意にして、靜性(スタビリテート)の極處に至れるを看破してこそ、その美なる所以を知るべきなれ、若し美の義(こゝろ)を碎いて理に入ることあらずば、審美學は起らざるべし、逍遙子が記實の文を讀むには大歸納の力を具へざるべからず、予が談理の言を聞くものには普通の理解力あれば足れり。

最後の言は、鷗外の誇張である。逍遙の記實の文は、自然、文壇の主流を讀者に會得せしむるよう、平明周到に出來て居たから、大歸納の力なくとも、讀んでわかるのである。鷗外の談理の方が寧ろ大理解力を當時の人々に要したと、これも主張して云へるであらう。結局、談理を高調した鷗外の説も、當時には必要で、文壇のレヹルを高める上に多少の力があつた。けれども逍遙が、記實の上に於て一般的に文壇の潮勢を導いた事の方が、大きく、廣く、文學的進歩の上に貢獻した。經驗的であり、現實的であり、かねて穩健な理路を追ふた『早稻田文學』の彙報が、長く文壇に尊重されたのは、畢竟、逍遙の卓越した先見から生れた有力な收穫の一つであつた。だが、談理を主として、思想的に淺い常識から解放された文學見を樹立し、進んで、美學の勃興を促がさうとした鷗外の功績も亦公平に認めねばならぬ。其の當時に於ける鷗外の論文は『月草』に收めてある。

（六）評論界に於ける緑雨

論壇に於ける逍遙と鷗外とは、斯うして、火花を散らして、勇ましく戰つたので、當時の文壇の人々は、いろいろの方面から、それに啓發された。鷗外、逍遙を中心として評論の筆を執つた人々のうちで、稍傑出して居たのは、内田不知庵(魯庵)であつた。彼れは、石橋忍月と併立して、文藝評論の方に力を入れたが、其の筆は深棘で、諷刺的、嘲罵的なところがあつた。『文學者となる法』の如きは、當時の文人の弱點を鋭く抉つたものであつた。だが、彼れは、一方に於て『文學一斑』の如き眞面目な研究的なものをも書いた。文學の定義、分類などが、未だはつきりしない時代(明治二十五年)にあつては、『文學一斑』の與へた功果は、沒すべからざるものがあつた。畢竟、不知庵は、最初から、文學に對して、極めて眞面目な考へを抱いて居たのだが、他の不眞面目らしく見える當時の文士の一半に對して大に慊らなく思つたことが、諷刺、嘲罵となつて、自然、彼れの胸中から吐露されたのである。

齋藤緑雨は、正直正太夫の名の下に、批評の筆を揮つたが、非科學的な、隨筆風のものであつた論理や方式に拘泥しないで、自己の江戸趣味や直覺を土臺とした皮肉な嘲罵諷刺を恣まに吐露した

勿論、そこには、狭小な主觀があつて、獨斷的、感情的の弊を免れなかつたけれども。其の鋭い直覺や、忌憚のない言葉のうちには、偶まには、巧みに作家、批評家の弱點を突いたところがあつた。

綠雨は、純粹の江戸ッ兒で、慶應三年に東京本所區綠町に生れた。彼れが江東みどりの雅號を用ゐたのはそれがためであつた。彼れは最初、假名垣魯文の門に入つて、文學的素養を積み、明治十七年『都新聞』の前身だつた『今日新聞』に入つて、社長小西義敬に愛せられて、花柳界などの様子を熟知して、一種の通人的素質を作つた。而して單純な人情話などを書いて居た。だが、眞に彼れの特色を示すやうになつたのは明治二十三四年頃『讀賣』などへ、文學批評を寄せて、皮肉な諷刺を試みた時からである。それと同時に『かくれんぼ』『油地獄』『門三味線』などの小説を發表して、文壇に於ける一方の大家となつた。彼れの著書で其の後に出たのは、『あられ酒』『雨蛙』『みだれ箱』などで、彼れの江戸人のとして個性と特色とは、此の三種の小册子のうちに最も能く反映されて居た。彼れが不遇のうちに世を去つたのは、明治三十七年四月で、年齢三十八歳だつた。

綠雨の文藝批評は、以上のやうに特色を有しては居たが、畢竟、皮肉を云ひたい爲めの批評と云つたやうな趣があつて、文學上に積極的に貢獻した點が少かつた。それよりも後年に於ける『おぼ

え帳』『ひかえ帳』などにある一種の鋭い、皮肉な社會的觀察の方に、より多くの長所を備へて居たそれは、別に紹介し、批評したい。

森田思軒の文藝批評は、一體に穩健であつたが、一面、稍保守的な傾向を帶びて居た。それは彼れが餘りに漢文學に拘泥して、漢文趣味に傾いたからだつたらうと思はれる。明治二十四年頃、文體の成行について、いろいろの論議が起つた時、思軒は、當時、漢字漢語に昏い著作家が、奇妙な新造語を捻出することを非難して「詞は物に隨て生ず、駸々たる社會は日に幾多の未だ曾て有らざりし新物を齎す、則ち必ず之に應ずる新詞を出ださざるべからず、余輩は未曾有の新物に加ふるに未曾有の新詞を以てするを異しまず、亦徒らに新詞の帆影を望で駭走する亞米利加土人にあらず、唯だ元來本然の詞あるに之を索めず、一知半解の漢字を積累して不穩當熟せざるの熟字を私する者を咎むるなり、現時著作者が需用する所の詞は一部の史記若くは一部の東坡集、若くは一部の陽明集只だ手に觸るゝ所をとりて之を開かば雅馴妥當の熟字簇擁して其の眼下に現れ來らむ、且つ新物に逢て新詞を作るにも、先づ一應のエテイモロヂーは略ぼ之を知らざるべからず、苟も詞の本義上と由來とに就て糸毫の知る所なく、叨りに詞を變化して經緯せむとする者あらば、唯か其膽の大にして顏の厚きに驚かさらむ、而して現時著作者高等官の中には、實に幾個の斯の大膽と厚顏とを見

るなり。」と云つたのを見ると、穏健な考へのうちに、保守的なところがあることがわかる。

（七）評論家としての北村透谷

其の他、稍遅れて出た文藝批評家として、北村透谷が居た。彼れは、浪漫主義、主情主義の運動を開始した先驅者だつた。其の評論は、主として、其の運動についての宣傳であつて、人生と文學との交渉について、眞面目に考へたところに、彼れの態度の眞劍さがあつた。だが、それは、自然主義者のやうではなくて、高踏的超越的なものだつた。それは浪漫主義的傾向がある彼れとしては止むを得ないことだつた。其の思想は、一體に悲調を帶びて居たが、文學の權威を高調し、實利を以て、文學を律しようとする一派の說を斥けたのは、彼れの一見識を示した點であつた。また彼れの評論は、其の詩的空想を托したものもあつて、獨自の色彩を以て居た。

北村透谷(門太郎)は、相州小田原の人で、明治元年に生れた。十四の時、東京へ出て、京橋の泰明小學校に學び、明治十六年、早稻田專門學校政治科に入つた。一時、政治家として起たうとしたことがある。だが、後、小說家にならうと思つて、同志と雜誌『文學界』を創刊した。それは明治二十六年一月である。同人には、島崎藤村、馬場孤蝶、上田柳村、星野天知、戶川秋骨、平田禿木らが居た。透谷は一面、キリス

ト教會に關して、其の方のことにも關係して、雜誌の編輯、傳道、飜譯などの仕事をした。其の文學生活は僅々二三年ばかり續けた丈で、二十七年五月十五日、自殺して二十七歲で世を去つた。原因は、主として家庭上の不和や、生活難や、本來の神經過敏などが錯綜して居た爲めだと傳へられた。其の小說、新體詩、評論などは、何れも、浪漫主義、主情主義の色彩を帶びて居て、彼れ獨自の領分を開いたものであつた。

透谷の評論中、其の代表的なものは『富嶽の詩神を懷ふ』及び『內部生命論』などであらう。前者は優れた詩的論文で、藝術の永遠性と富嶽の不朽美とを謳歌したものである。「寤果して寤か、寐果して寐か、我是を疑ふ。深山夜に入れて籟あり、人間晝に於て聲なき事多し。寤むる時人眞に寤めす寐る時往々にして至樂の境にあり。」と云ひ「詩神去らず、この國なほ愛すべし。詩神去らず、人間なほ味あり。」と云つたところなどは、透谷にして始めて云ひさうなことである。

透谷は、また『內部生命論』に於て「內部の自覺と言ひ、內部の經驗と言ひ、一々其名を異にすと雖、要するに根本の生命を指して言ふに外ならざるなり。詩人哲學者の高尙なる事業は、實に此の內部の生命を語るより、外に出づること能はざるなるなり。」と述べたのは、當時に勢力を有した一部の詩文人の群と全然立ち場を異にして、藝術の心核に觸れようとした透谷の思想にまつわる主情

主義の閃きがある。

以上で、文藝評論家の主要な人々は、略ぼ盡きて居るが、尙ほ他に寺山星川、德富蘇峯、高田半峰、山路愛山、饗庭篁村らの人々も亦評論の筆を執つて、文學上の事に論及した。蘇峯の新問題を提供したことや、篁村の創作に對する批評などは、幾分かの影響を當時の文壇に與へたやうに思はれる。また寺山星川は、哲學的傾向を有した點に一異色を有し、半峰は、政治家としての文學的意見の上に穩健な色合を示し、愛山は、史論家として、功利主義の上から文藝を論じたりなどした。

斯うして、當時の文藝評論は、主として、逍遙、鷗外を共の中心勢力として、徐ろに進歩の道程を辿つたのである。而して科學的な專門的な批評が徐ろに生れつゝあつたのである。

第七章　硯友社以外の作家及び作品

（一）逍遙の『細君』及び『一圓紙幣の話』

逍遙と鷗外とは、ひとり、評論の上に於て活動したばかりでなく、小說及び飜譯の上に於ても活動した。逍遙は『書生氣質』を出してから『內地雜居未來の夢』『妹背鏡』などを書き、二十二年の『國民之友』第一春季附錄には『細君』を發表した、田山花袋は『細君』を評して「これを先の『書生氣質』などに比べると作としての價値は一層この方にある。一人の女中を點出して、その女の眼に映じ心に映つたその頃の紳士の家庭なるものが、よく書かれてある。周圍も見えてゐる。心理もある、作爲のあとも少なく、文章も滑脫自在な雅俗折衷體でさほど厭味がない。」と云つて居る。『細君』に次いで『壹圓紙幣の履歷ばなし』が二十三年二月『讀賣』に出た。これは、後に『春酒家漫筆』のうちに收められた。花袋が「逍遙は『細君』以後、小說に筆を絕つた。」と云つたのは間違ひである。『壹圓紙幣の履歷ばなし』以後に及んで、筆を斷つたわけである。

『壹圓紙幣の履歷ばなし』は、夏目漱石の『吾輩は猫である』と略ぼ同趣のもので、其の先驅となつ

たのである。一圓紙幣の自敍傳と云つたやうな形式の下に、輕妙な筆で當時の紳士の家庭生活や社交生活を寫し、時々、諷刺的な味を含ませてある。當時にあつては、極めて新しいものであつた。

（一）鷗外の處女作『舞姫』

鷗外の小說は、處女作『舞姫』を第一に數篇を發表した。『舞姫』は二十三年の『國民之友』春季附錄に出て、鷗外が創作に於ける鮮かな手腕あることを示した。此の一篇は、同年夏に發表した『うたかたの記』及び『文づかひ』などと共に、鷗外の洋行土產から出た作品だつた。恰度、永井荷風の『あめりか物語』や『ふらんす物語』の一部に似たやうなものだつた。だが、荷風は、小說として書かなかつたが、鷗外は、小說として書いた。

以上の三篇は、『水沫集』に收められてあるが、流石に鷗外の靑春時代に書いたものだけに、全くの戀物語だつた。けれども其の書いた態度は、極めて眞面目で、其の描寫は、和文體を以てしたに關らず、洋文脈を加へて雅醇な風味と清新な趣致とに豐かであつた。單に讀んで面白いと云ふに留まらないで、人生の一面を暗示して、何となく、考へさせるところがあつた。二葉亭の『浮雲』が、當時の文明を描いたと云ふことが出來るならば、これは戀を中心とした人生の一斷面を略ぼ如實に

描いたと云ふことが出來た。斯うした作風は、鷗外が、ドイツ文學に精通すると共に、ドイツ語を透ほして、歐洲文學の大體を知つて居たところから暗示を得たり、影響を受けたりした爲めだらうそれは二葉亭が、近代ロシヤ文學の感化を受けたやうに――

『舞姫』は、今日から見ると、稍自然主義的な傾向を持つてゐるが、大體に於て、『うたかたの記』『文づかひ』と共に、浪漫主義的傾向を持つたものだと云ひ得られよう。戀のはかなさ、戀のなやみさうした點を咏嘆したやうなところが多い。そこにも、鷗外の青春時代の若々しさを、さながらに、象徴して居るやうに思はれる。

鷗外が云つて居るやうに『舞姫』はベルリン留學の記念、『うたかたの記』はミュンヘン在留時代の記念、『文づかひ』はドレスデン在留時代の記念である。『舞姫』は「小なる人物の小なる生涯の小なる旅路の一里塚」と謙抑して云つて居るが、作品としては、必ずしも、さうした貧小なものではない。ある日本の若い官吏太田豐太郎が、ベルリンに留學中、不圖、女優エリスと熱い戀に落ちて子供を胎ませたが、結局、友人の計らひで、エリスに別れて涙を飲みながら、歸東することとなり、エリスはそれに絶望して發狂すると云ふ筋である。鷗外は可憐で一本筋なエリス、多感で、意志の弱い豐太郎の性格を、略ぼ描かうと力めて居るが、卒直に云へば、エリスだけが最も鮮かに表現さ

れて居る。私は、殊に左の一節が宜いと思ふ。

老媼は慇懃におのが無禮の振舞せしを詫びて、余を迎へ入れつ。戸の内は廚にて、右手の低き窓に、眞白に洗ひたる麻布を懸けたり。左手には粗末に積上げたる煉瓦の竈あり。正面の一室の戸は半ば開きたるが内には白布を掩ひし臥床あり。伏したるはなき人なるべし。竈の側なる戸を開きて余を導きつ、この處は所謂「マンサルド」の街に面したる一間なれば、天井もなし。隅の屋根裏より窓に向ひて斜に下れる梁を、厚紙にて張りし下の、立たば頭の支ふべき處に臥床あり。中央なる机には美しき氈を掛けて、上には書物一二卷と寫眞帖とを列べ、陶瓶にはこゝに似合はしからぬ價高き花束を生けたり。そが傍に少女は羞を帶びて立てり。彼は優れて美なり。乳の如き色の顔は燈火に映じて微紅を潮したり。手足の纖く裊なるは、貧家の女に似ず。老媼の室を出し跡にて、少女は少しく訛りたる言葉にて云ふ。「許し給へ。君をこゝまで導きし心なさを。君は善き人たるべし。我をばよも憎み玉はじ。明日に迫るは父の葬、たのみに思ひしシヤウムベルヒ、君は彼を知らでやおはさん。彼は「ヰクトリア」座の座頭なり。彼が抱へとなりしより、早や二年なれば、事なく我等を助けんと思ひしに、人の憂に附けこみて、身勝手なるいひ掛けせんとは。我を救ひ玉へ、君。金をば薄き給金を折きて還し參らせん。縱令我身は食はずとも。それもならずば母の言葉に。」彼は涙ぐみて身をふるはせたり。その見上げたる目には、人に否とはいはせぬ媚態あり。この目の働きは知りてするにや、又自ら知らぬにや。

和文體ではあるが、女優エリスの美しさが、常套的ではなく、清新な手法で表現されて居る。鷗外が『舞姫』によつて、其の創作上に於ける手腕を認められたのは、當然であつた。だが、私は『舞姫』よりも『文づかひ』の方が、一段優れて居ると思ふ。「うたかたの記」は、作爲的なあとが著しいけれども、其の女主人公マリイの性格は、『舞姫』のエリスよりも稍複雜で、一風變つて居て、强く心をひかれるところがある。而してそれを取卷く情景も極めて詩的である。

（三）　鷗外の『文づかひ』

『文づかひ』の女主人公イ、ダ姫は、父が强ひて纒めた、許婚の年少士官メエルハイムに眞の愛情を感じないで、孤獨を守らうとする淋しい氣分に浸つた美人である。其の淋しさが、能く描かれてある。而して此の姫の周圍に於ける姉妹、貴族の家庭、質撲な軍人などの取合せも宜い。姫を慕ふ牧童を點出したのも詩的な味を加へて居るが、稍わざとらしく思はれぬではない。

最初に騎乘のイ、ダ姫を點出し、次きに食卓に於けるイ、ダ姫の事を描いて、其の特殊の性質を有した點を讀む者に印象させたところにも、鷗外の冴えた技巧が窺はれる。冒頭に馬上の姫たちを描いて、さて「すこし引下がりて白き駒控へたる少女、わが目がねはしばしこれに留まりぬ。鋼鐵

ぐろの馬のり衣裾長に著て、白き薄ぎぬ卷きたる黑帽子を被りし身の構けだかく、今かなたの森蔭より、むら〳〵と打出でたる獵兵のいさましさ見むとて、人々騷げどかへりみぬさま心憎し。」と叙して、其の名を明かさず、ビユロウ伯の晩餐會のところで「食卓に就きてみれば、五人の姬達みなおもひ〳〵の粧したる、その美しさいづれはあらぬに、上の一人の上衣も裳も黑きを著たるさま、めづらしと見れは、これなんさきに白き馬に騎りたりし人なりける。」と照應して左の如く、イ、ダ姬を描いたところは、優れた手際を見せて居る。

外の姬たちは日本人めづらしく、伯爵夫人のわが軍服褒めたまふ言葉の尾につきて「黑き地に黑き紐こけたれば、ブラウンシユワイヒの士官に似たり、」と一人いへば、桃色の顏したる末の姬「さにではなし、」とまだいわけなくもいやしむ色を包までいふに、皆をかしさに堪へねば、あかめし顏を汁盛りし皿の上に低れたれど、黑き衣の姬は睫だに動さゞりき。暫しありて稈き姬、さきの罪購はむとやおもひけむ「されどかの君の軍服は上も下も黑ければイ、ダや好みたまはむ、」といふを聞きて、黑き衣の姬振向きて睨みぬ。この目は常にをち方にのみ迷ふやうなれど、一たび人の面に向ひては、言葉にも增して心をあらはせり。いま睨みしさまは笑を帶びて叱りきと覺ゆ。われはこの末の姬の言葉にて知りぬ、さきに大隊長がメエルハイムのいひなづけの妻ならんといひしイ、ダの君とは、この人のことなるを。(中略)イ、ダといふ姬は

丈高く痩肉にて、五人の若き貴婦人のうち、此君のみ髮黑し。かの善くものいふ目を餘所にしては、ほかの姬たちに立ちこえて美しとおもふところもなく、眉の間にいつも皺少しあり。面のいろの蒼う見ゆるは、黑き衣のためにや。

斯うして、イヽダ姬が、メエルハイムとの許婚についての惱みから、始終不滿がちであることを、ほのめかして居る。編中の日本人は、鷗外その人でもあらうか。それが、イヽダ姬と塔上で話すところは、殊にロマンチックである。終にイヽダ姬の惱みを告白させて、淡白に結末を付けて、其の歸着をはつきり述べて居ないのも宜いと思はれた。だが『舞姬』でも『文づかひ』でも、氣品がある代りに、情熱に乏しいのは、鷗外の作品に共通するところの大きい缺點である。

(四)　小說家としての綠雨と篁村

他に、小說の方で、當時の文壇に異色を添へた人々を數へると、齋藤綠雨(正直正太夫)、饗庭篁村、原抱一庵らが居た。また傳奇小說の作家として、俄かに頭角を擡げ出した村上浪六を始め、矢野龍溪、村井弦齋、遲塚麗水、宮崎三昧、依田學海、須藤南翠などの人々が居た。それから探偵小說の方面に於て、先驅者となつた黑岩涙香が居た。二十六年『讀賣』の懸賞歷史小說に當選した高山

椰牛が居た。その他、西村天囚、矢崎嵯峨の屋、堀紫山、宇田川文海、井上笠園、渡邊霞亭、南新二、武田仰天子、幸堂得知、岡野半牧、半井桃水、田邊花圃、石橋忍月、本吉欠伸らの人々をも數へることが出來る。

綠雨は、作家として、際立つて新しい境地を開いたとは云へないけれども、其の皮肉な調子が、矢張、小說にも現はれて居て、紅葉、露伴以外に、彼れ獨自の天地を持つた。花袋は其の代表作として『油地獄』と『かくれんぼ』を擧げて『かくれんぼ』については「彼の特色の最も顯著なもの、文章は舊式な雅俗折衷體で今から見れば不思議なものだが、內容は皮肉な痛快な面白いものであつた。」と云ひ、『油地獄』については「これはお坊ちやんが藝者買を始めてだん〳〵と深味に入つてゆく心理的傾向を書いたもので、頗る細緻を極めてゐた。文章も彼としてはめづらしく言文一致で、例の皮肉な筆でえぐるところは飽くまでもえぐつてあつて面白い。」と賞讃して居るが、それは畢竟、歷史的評價で、そこにまた綠雨の著しい短所があつた。

彼れの『油地獄』も『かくれんぼ』も題は奇拔であるけれども、共に無垢な青年が、藝妓買ひに浮身をやつす墮落的行徑を描いたもので『油地獄』の主人公の心理描寫とても、『浮雲』などに及ばない。唯當時にあつては、比較的に細かいと云へる迄のものだ。而して篇中の主人公とても、綠雨の皮肉

を云ふ材料に供せられた形があつて、少しも、同情したところがないから、綠雨の筆に深酷さが少しはあつても、時には、それが嫌味に感ぜられる事も少くなかつた。痛快な諷刺、皮肉の味が却つて邪魔となるやうなところも、見受けられた。『油地獄』の冒頭で『大丈夫當さに雄飛すべしと、入らざる智慧を趙溫に附けられたおかげには、鋤だの鍬だの見るも賤しき心地がせられ、水盃さも仕兼ねない父母の手許を離れて、玉でもないものを東京へ琢磨きに出た當坐は、定めて氣に食はぬ五大洲を改造するぐらゐの畫策はあつたらうが、一年が二年、二年が三年と馴れるに隨て、金から吹起る都の腐れ風に日向臭い横顔を漸々かすられ、書籍御預り申候の看板が目につく程となつては、得てあの里の儀式的交通の下に雌伏し、果斷は眞正の知識と、着て居る布子の裏を剝いで、其夜の鍋の不足を補はれることは、今初まつたでもないが困つた始末。』と書いたやうな皮肉な口調が、諸處にあつて、時には、痛快だが、時には、嫌味で、諷刺の痕も見えすいて居て、面白くない場合も多い。結局、綠雨は、批評家、雜文家としての方が、遙かに顯著な成功を收めたのである。小說家としては、充分、伸び得なかつた。それで、私は『かくれんぼ』などと前後して出た『小說評註』などの方に、より多く、彼れの才分を認めるのである。

饗庭篁村は、魯文や、金鵞の末流を追たう舊式の作家を代表して居た。彼れの小說の長所は、嫌

味の少い滑稽味、洒落味乃至、輕い諷刺の味にあつた。彼れは平生江島其磧に私淑して『當世商人氣質』を書いたが、要するに、其磧の模倣以上に出なかつたやうに思はれる。けれども、紅葉、露伴が出現する迄、彼れが江戸文學の流派を繼承した最期の殿將として、一寸文壇を賑はした功績は沒すべからざるものがある。彼の特質を知るには『當世商人氣質』のほかに『むら竹』と云ふ叢書を一讀すべきである。

篁村と略ぼ同じ系統に屬すべき人々は、南新二、幸堂得知などである。坪内逍遙は、當時『滑稽家』と題して「竹のや(篁村)の諷刺、幸堂の滑稽、南の詼謔、正太夫の冷嘲、いづれも獨得の風あり。皮相を評せんか、竹のやはちやかすが如く、正太夫は訐くが如く、幸堂は胴樂、南は洒落、竹のやは澁味あり、南に酸味あり、正太夫に苦味あり、何の味とも無くて味あるは幸堂が黄表紙ぶりの滑稽か。竹の屋の諷刺は婉曲、正太夫の冷嘲は直截、幸堂と南とに至りては、强ち諷刺に拘らぬ所に俳諧あり、好笑の趣味は時として前二家を凌ぐ。」と云つた。南新二には『新作十二番』などがあつた。要するに、南、幸堂の二人は、篁村に比して、稍劣つて居るが、明治文壇に好笑の趣味を添へて、幾分、上品な味を示したのは、其の一長所であつた。

けれども逍遙は、彼等の滑稽趣味に滿足しないで、寧ろ尾崎紅葉の『二人女房』に於て、も少し進

歩した滑稽趣味を見出した。それで、逍遙は、其の事に論及して「紅葉山人が諷刺の本事は、吾人之れを『我樂多文庫』時代に其些影を認めたりし外には、『都の花』なる『二人女房』に於て、見たりしのみ。其の技倆の如何に優なるか、未だ詳悉する能はずと雖も、吾人が見る所、大なる誤なくば、東西の美を折衷せる小說家、戲曲家として、明治の文壇にユーモリストの名を擅にせんもの、此の作家の外にあらざるべし。『二人女房』のみによりて窺ふも、客觀的記叙の簡にして能く盡したる、諷刺に皮肉の原素尠うして、愛嬌のこぼれたる、無邪氣なる戲謔の、毎に人情に纒綿したる、ユーモリストたるに合はんとす。殊に滑稽の筆の輕妙なる、時として落語めく嫌なきにあらねど、尠くとも、小さん、圓遊、以上の口吻、モリエールが滑稽の間々落語めくを咎めずば、豈ひとり此の作者の筆のみを咎めんや。」と云つた。少しく、餘事に渉るやうだが、逍遙の本意も亦眞のユーモリストを得やうとして、其の希望を述べるために、篁村、新二、得知を引合に出した趣が見えぬでもないのである。

（五）　關西文壇の人々

以上の諸家に對して、傳奇小說派、探偵小說派などを記す前に、『浪華文學』『浪花がた』『葦分舟』

などによつて關西文壇を代表して居た大阪の文士について、一言したい。今日では、大阪文壇は、『朝日』『毎日』に於て、其の閃影を示して居るに過ぎないけれども、明治二十四、五年頃には、大阪に相當の文星が集つて、浪華文學會を組織し、其の機關雜誌として『浪華文學』を出した。其の會員中には、武田仰天子、西村天囚、渡邊霞亭、井上笠園、岡野半牧、木崎好尙、本吉欠伸らが居た。菊池幽芳なども、矢張、會員であつたやうに記憶する。他に宇田川文海、堺枯川(利彥)なども、新聞に據つて、創作を發表して居た。當時の枯川は未だ餘程若かつた。

西村天囚(時彥)は、『屑屋の籠』と云ふ寓意小說を出して、其の手腕を認められて、一時、小說家として起つたが、後、論文家、漢文學硏究家となつた。本吉欠伸は、堺利彥の兄で、『大朝』に小說を發表して、最も其の前途に囑望された一人だつた。何となく、露伴のやうな風趣があつて、ある一つの觀念を有して居て、それを人物の上に表現しようとする風が見えて居た。だが、彼れは、大成しないうちに早世した。

其の他の諸作家は、概して新聞小說家として、通俗的なものを書いて居たが、菊池幽芳は、其の中で、最も若かつた。而して英文學の素養もあつて、ロシヤ文學などにも注意して、ドストエフスキーの小說に傾倒して居た。當時にあつては、新知識を有した新人の一人だつた。而して一時、飜

譯や、翻案物を續けたり、『小簾の戸』とか云ふ小說を書いたりして、やがて『己が罪』の時代に到達したのである。渡邊霞亭は、主として、歷史小說を書いて居たが、幽芳とちがつて、外國文學には余り注意しなかつた。

第八章　傳奇小說、探偵小說及び歴史小說

（一）　行詰つた寫實小說に對する新要求

傳奇小說派、探偵小說派が文壇に擡頭して、一勢力を作るやうになつたのは、硯友社一派の小說を始め、寫實主義の旗幟の下に現はれた小說が、概ね單調に陷つて、振はなかつた爲めだつた。逍遙が『早稻田文學』に於て、『某に答へて小說不振の因緣を論ずる書』を發表して、其の不振の原因として、大家ぶる事、怯氣の事、一安心の事、懶惰の事、入念の事、不平の事、種切れの事、高く占位の事、舞臺のなき事、糊口に多忙の事、厭氣の事、眼ばかりパチクリの事、自脉の事、蓄積の事氣ぬけの事、インスピレーションの拂底、チョコマカ熱の流行などを擧げたうちで、當時其の最大弊とも云ふべきは、作家に文學上の素養が乏しくて、人生の經驗が淺いに關らず、早く大家ぶつて安心して、一方では生活に迫はれ、一方では材料の窮乏に迫はれて、些の餘裕を存しない點だつた。

それで、金子筑水は『明治二十六年文學界の風潮』のうちで、時弊に論及して「そも一昨年（二十

五年）の前半期より、世間は已に千篇一律の「戀愛小說」に倦ありき、而して昨年に及びては、作者はた倦怠し、讀者はいよ〳〵倦めりき。讀者の或者は欠伸の間に間々注文して曰はく、社會上の問題を畫け、政治社會を寫せ、人生の神祕を歌へやと。思ふに、此等の注文は幕合の拍手にひとし、彼等は樂屋の魂膽を知らずして、徒に幕開を催促せしのみ、甚しきに至りては、緞帳に團洲の活歷を見んことを願ひ、春木座に東京劇の粹を望みき。畢竟、世間が昨年の創作界に滿足する能はざりしは、其の思想の調子の、當時の創作の調子と合はざりしに因るなり。世間は小家庭の寫實よりも更に新鮮なる、更に高遠なる、或物を得んと欲しき、戀愛以外の描寫を望みき、而も彼等は此の別種の或物を得ざりしなり。」と云ひて當時の小說が千篇一律に流れたることが、甚しく、讀者の不滿を買ひたることを述べ、續いて「探偵小說、浪六小說の流行せしが如きは、此の長き幕間の Interlude（間劇）たりしに外ならず。」と斷言して、新歷史小說の出現を要求した。

高山樗牛も亦『明治の小說』中に於て、筑水と同樣の見地に起つて、當時の小說の千篇一律であることに論及した。其の非難は、筑水に比して、深酷だつた。彼れは、當時の寫實小說の代表者と目すべき紅葉に筆鋒を向けて、「さしも全盛を窮めたる紅葉一流の寫實小說は、今や漸く衰頽すべき機運に迫りたり。そは所謂寫實小說其の物の凋落せるにはあらずして、當時の小說に現はれたる、言

はば似而非寫實が、自家破滅の原因を其中に包藏したればなり。」と云つて、寫實の眞意義を述べ、一轉して「今夫れ明治二十年より二十五年頃までの小說家は、そか先頭たる紅葉を初めとして、多くは狹隘なる主觀を有せる寫實家なりき。其觀察いかにも從前諸作家に較ぶれば疑ひも無く、自然實際の域に近けり。又そが作意の中にもあらはに勸懲褒貶の意を寓せざりき。然れども是れ極めて偏窄なる主觀の眼孔を通じて見たる自然實際なりき。故に其作中に表はれたる人生世相は、殆ど作家が主觀をば自己の貧少、且つ偏頗なる閱歷に倒照したる小人生觀に外ならざりき。是れ豈永く經驗教育ある世人の嗜好を繫住して、能く恒久なることを得べきものならむや。其の無味放埒に、浮艶淫靡なる製作に對して社會は漸く倦厭の色を示し來りたりき。」と斷言した。

要するに、寫實派の作家が、閱歷に乏しく、小主觀に偏し、皮相的寫實に流れて、取材が單調となつたと云ふのが、當時の非難で、また實際、左樣した傾向が多かつたのである。それで、讀書界の要求は、何か變つたものに憧憬して、一時傳奇小說、探偵小說を歡迎すると共に、進んで、歷史小說に及び、更に後には觀念小說などにも及んだのである。前の二者は槪して藝術的な味に乏しかつた。けれども後の方は、觀念小說に於て、藝術味の閃きを見ることが出來たのである。前者は、文學的進步に貢献するところが少かつたが、後者は、幾分か進步の上に貢献するところがあつた。

畢竟、當時の傳奇小說の大部分、探偵小說などには、より多く民衆的な嗜好が加はつて居るのを免れなかつた。

（二）傳記小說の代表的作品

當時の傳奇小說については、高山樗牛は、（其の文學的價値を認めて「傳奇小說に與するものは、當代の寫實小說を以て規模偏僻にして雄渾跌蕩の姿無しとなし、寫實小說を賛くるものは、以爲らく形骸の大なるもの、精神必ずしも大ならず、性情の幽微を盡したるものにして、初めて大小說と謂ふべしと。當時の世評は概ね寫實派に傾き、未だ二者各々獨得の長所を有して、永く小說界の双闘たるべきものなるを覺るに至らざりしに似たり。」と云つた。傳奇小說本來の價値は、必ずしも、低いものではなくて、寫實小說と對立して、同等の地位を保ち得る筈であらうけれども、當時の傳奇小說は、寧ろ藝術味に乏しいものが多かつた。單に奇を衒つたり、俗衆の嗜好に媚びようとする傾向が少くなかつた。樗牛の意も、斯うした點にあつたのだらうと思はれるけれども、若し當時の傳奇小說について云ふならば誤つて居ると云はねばならないのである。

傳奇小說の中で、比較的に知られた作品は、村上浪六の『三日月』『女之助』矢野龍溪の『浮城物語』

須藤南翠の『朧月夜』『荒海實一』、宮崎三昧の『桂姫』末廣鐵腸の『南洋の波瀾』などであつた。其の中最も評判が高かつたのは、浪六の『三日月』であつた。浪六は、堺のある役場の書記であつた。それが出京して、『報知』の校正係となつて生活するうちに、突如として、『三日月』の一篇を公にして、其の手腕を認められたのである。其の内容は、仁俠と粹との權化である俠客三日月次郎吉を主人公として、誇張した筆で人物を描いて、興味中心的に波瀾と變化とに富んだ場面を展開したものであつた。讀書界が、珍しさうに喝采して、『三月日』を迎へると、浪六は、興に乘つて、更らに『井筒女之助』『奴小萬』『將の自休』『深見笠』などを續けて出した。だが、最初は一時的に文壇を驚かせたけれども、どれもこれも、千篇一律で、文學的價値には乏しい弱點があつた。讀書界が、無暗にそれを喝采したのは、嚴正な文學眼の上から價値があると認めた爲めではなくて、寫實小說の單調と沈滯とに久しく、倦怠し切つて居たところへ、浪六によつて全然、味の變つたロマンスを提供された からだつた。それに、一般民衆の頭には、尙ほ江戸時代に於ける仁俠性及び通若くは粹と云ふやうな趣味とが深く印象されて居て、それに對する一種の憧憬的傾向をも有して居たのに投合した爲めでもあつた。

勿論、最初は、文壇の識者も、好奇の眼を以て『三日月』や『井筒女之助』に對したけれども、其の

後に出た作品が、矢張、同じやうな境地に彷徨して單に筆の先きで讀者を操りつゝあるのを見ると最早、其の存在に對して、重きを置かなくなつた。而してさうして種類の小說が、撥鬢小說の名の下に流行してくると、藝術的見地の上から、其の反對に起つに至つた。逍遙、鷗外、不知庵、忍月らは、云ひ合せたやうに、其の撲滅を計ることに力めた。當時逍遙が『小說學校撥鬢科の敎則』と題して諷刺したのは、最も適切に、浪六らの缺點を穿つて居た。

一　本科の生徒たらんとする者は、其の平生の生活に於て、本科の理想を實現とせん力むべきこと、卽ち其の言行、服裝等の撥鬢的たるものにして、はじめて撥鬢小說を作り得べきこと、

一　奇矯と風流とは本科の大主眼たるべきこと、而して所謂奇矯は、之れを古今の奇人傳中に於て、其の模範を發見し、所謂風流の例は、之れを隨筆、傳紀、逸話、口碑、講談等に見えたる歌妓、遊女、乞食等の言行中に求むるを通則とすること、

一　人間の性格は剛柔の二大別より成ることを記憶すべきこと、而して男子は、表あくまでも剛にして、內に女子の如き情あるを理想的とし、女子は表あくまでもやさしく美しくして、內に男子を凌ぐべき凜然たる張あるを理想的とすること、

一　本科の作家たらんものは、筆先にて人を殺すこと、練馬大根を切るが如く心得べきこと、總じて死、自殺

血、美女、意氣地、磊落、不羈なといふ想像を斷えず念頭に籌ふべきこと、

一　總じて寛活なること、すごいこと、すばらしいこと強いことに心を注ぎ、兼ねてやさしいこと、あはれなることに留心すべきこと、所詮剛柔の二面を常住の心得といたすべきこと、

一　「鬼の目に涙」「一寸の蟲にも五分の魂」「武士は喰はねど高楊枝」「柔能く剛を制す」などいふ諺を、毎朝百遍づゝ唱へて、よく〳〵服膺すべきこと、

一　言葉使ひはモサ言葉を男子の理想的とすれども、今更に死語を恢復すべきにもあらねば、只精神のみを彼れに取りて、今様の言葉を用ふること、

一　總て奴といふ尾語を添へ用ひて、憎くしげに物すべきこと「うぬ美人め」「うぬ天人め」「うぬ神め」「うぬ幸福め」「うぬ風流め」「うぬ文學め」の類なり、總じて喧嘩言葉をよしとなること、

浪六のロマンスのほかに、稍文學的價値を有したロマンスは、龍溪の『浮城物語』及び南翠の『荒海實一』などである。『浮城物語』は、科學的知識を應用した冒險小説で、局面の雄大と事相の變化とに於て、優れて居た。南翠の『荒海實一』は『朧月夜』と共に、彼れの代表作とすべき佳篇である。逍遙は『荒海實一』を評して「現に『おぼろ月夜』と『荒海實一』とを比べても、吾人は『荒海實一』の文勢といひ、結構といひ、双つながら一層自然に近くして、流麗暢達なるを認むるが故に、むしろ彼

れをもて經營慘憺の結果たる『おぼろ月夜』の上に置かまくす。『荒海實一』は自傳體にものしたる、言文一致風の小說なり。其の前篇といふ『行路難』は、ヂッケンスの作『オリヷル・トヰスト』より脫化したる所多きが如く、此の篇はむしろカピテン・マリアットの作などにありたげなる趣向なり。脚色の複雜にして、哀歡悲喜の入り交りたる、面白し。」と云つた。けれども、それと共に缺點に論及して、「ヴェルネ的脚色の中に、ホウソオン的心理をも併寫せんとし、馬琴的趣向の中に、近世の寫實主義を混用せんとす。」と云つて、其の近世諸小說の長所を悉く採收せんとして、却て大きい破綻を來たして居ることを指摘した。要するに、南翠は、わが國のアレクサンドル・デュマの風格を有して居たのであつたが、中途挫折して大成しなかつたのである。

當時、ロマンスは、一時讀書界を風靡したが、矢張、南翠や、龍溪らのものも、概して事件の發展や變化に重きを置いて、人物の性格や、人生に於ける運命については、深く考へるところがなかつたために、皮相なものになつて、藝術的色彩が稀薄だつた。從つて、浪六の撥鬢小說とひとしく、文壇に於ける壽命は、極めて短かつた。斯うして、不振の小說界は、ロマンスによつて、單に讀者の倦怠を支え得たに過ぎなかつた。而して第二の馬琴すらも得ずに終つた。

（三） 探偵小説の流行

撥鬢小説が漸く衰頽し始めると、それに代るべき通俗な小説が現はれた、それは、探偵小説である。私は當時の撥鬢小説及び探偵小説のことを叙するについて、つくづく『歴史は繰返す』と云ふことと、其の繰返さるゝうちに、幾分の進化を示すことを感知せざるを得ない。と云ふのは、明治二十四五年頃の文壇の不振が、ロマンスと探偵小説とを要求したやうに、大正九年乃至十年頃の文壇の不振が矢張、ロマンスと探偵小説とを要求して居るからだ。

蓋し小説界が行詰り、衰頽して、讀者が倦怠すると、どうしても、さうした要求の起ることを免れない。大正時代に於ける自然主義末派の小說の如きは、最早、行詰り、衰頽して、餘程、邪徑に陷つて居る。而してそれが文壇の大半を占めて居るために、今まで我慢して讀んで居た高級讀者――新知識を有し、學術を理解し得る程度の人々――にも倦かれて了つた結果、民衆文藝の名の下に探偵小說や、ロマンスが要求されるに至つたのだ。『歴史は繰返す。』と云ふのは、こゝの事である。

現時の文藝評論家は、探偵小說について、寧ろ勸奬的態度を執つて居るやうだが、勿論、彼等とても、探偵小說の藝術的價値を左程重く見て居るのではない。要するに、低級な講談物よりは、探

偵小説の方が稍優つて居ると云ふことを認めて居る迄だ。さうした意味で、探偵小説が相當に行はれることは、わるくはあるまい。だが、それを藝術化すると云ふことは勿論、本質的に困難であるコンナ・ドイルにしても、モーリス・ルブランにしても、アーサー・リーヴにしても、オペンハイム、ルルウ、チエスタトンにしても、彼等の作品に於て、藝術味の多くを要求することは出來ない。結局、彼等の作品は、讀者の好奇心を滿足させ、知的追究心を魅惑すれば、それで宜いからである。これは、ひとり、探偵小説のみならず、冒險小説にも、當てはまることである。要するに、探偵小説は、美學上から見ると、高級美を含有して居ないで、只管娯樂的な作物に過ぎないけれども、一般讀者には、勿論歡迎されるべき可能性を充分持つて居るのであるから、それを新代の要求に應じたものに改めてゆくことは、當面の必要であらう。

今日の探偵小説は、大分、進歩したが、此の原流を創始して、我國の文壇に流入したのは、黑岩涙香である。勿論、涙香以前にも、探偵小説風のものがなかつたのではない。江戸時代に行はれた講談物には、自雷也、天一坊、矢代騷動、宇都宮釣天井などのやうなものが、相應にあつた。だが近代の科學的知識を巧みに利用して、讀者の好奇心を唆るところの妙趣に乏しかつた。涙香は、さうした方面に着眼して、歐米に於ける探偵小説を翻案して日本風の物に消化した。それは、カボリ

ウや、ボベスコなどの作品であつたが、少くとも、わが明治文壇に於ける一つの新味として、寫實小説に倦怠し切つた讀者や、撥發小説に不滿を感じ始めた人々の間に歡迎された。

涙香の探偵小説の代表作は『鐵假面』『死美人』『大金塊』『人耶鬼耶』などであつた。彼れは、外國小説の原意を翻案するに巧みで、また其の文章亦平明で、老實であつたところから、巧みに普通讀者を魅してゆく力を持つて居た。それが彼れの探偵小説を一番、有力ならしめた主要素であつた。

黑岩涙香（周六）は、文久二年、土佐に生れて、大正九年、世を去つた。彼れは、明治十三年頃に新聞記者生活に入つて、二十五年『萬朝報』を創刊した。多年の新聞記者をして居るうちに、彼れは、探偵小説及び政治的、哲學的論文の上に主力を傾注した。而して相當の成功を收めた。後年、ユーゴー、デューマなどの作品も亦、涙香の手で、翻案されたことがあつた。其の中でユーゴーの『哀史』が殊に名高い。

（三） 探偵小説に對する非難

當時、文壇の識者は、槪して、涙香らの探偵小説に反對して、それが撲滅を計つた。硯友社の人々は、皮肉な策略を考へ出して、讀者を早く探偵小説に飽きさせるのが一番だとして、其の叢書を春陽堂から出したが、それでも、讀者は、中々、倦怠しなかつた。而して涙香物の勢力は、依然と

して衰へなかつた。けれども其の讀者は、一般に低級で、知識階級は、次第にさうした作品から離れていつた。

それには、島村抱月の『探偵小說』と題した論文などが與つて力があつた。抱月は『早稻田文學』に於て、理論上から、探偵小說に痛撃を與へた。勿論、當時は、未だ民衆文藝と云ふやうな提唱のなかつた時代であつたから、抱月は、全然、探偵小說の反對者の位地に起つて、其の辯難は、聊か峻烈であつたが、また探偵小說の本質を一貫するところの缺點を鋭く穿つたところがあつた。

試に幾種の探偵小說を取りてそが結構を檢し、類同の點に就きて抽象せんか、最も先づ心に留まるは累篇積册いづれも其の面白味の根底を智力に置くこと、すなはち索究的快樂を興味の根本とすること是れ也。實に探偵小說の主なる命脈は智力的快樂に訴ふるの邊にあり。さて如何にして之を成就するか。他なし發端第一に或疑問を揭げ來たり、讀者をして好奇の心を起さしめ、譬へば數學家の或問題を解釋すらん時の如く、逐次回を追うて疑を解き、竟に結局の答案に達せざれば止まざらしむ。隨うて其の第一に望む所は單に疑團の氷解にあり之れに達すべき順路の如きは、右するも左するも、問ふ所にあらず、されば探偵小說にありては、手續みづからは往々何の意味もなし、唯面白き結局を誘致し來たらんの料なるのみ。例へば財産家の寡婦を殺して巧に跡を晦ますものありとせよ、吾人はまづ此の罪人の何者なるかを知らんと欲す、此に於てか情なく血なき探偵吏

あり、法吏あり、朋友を賣り良心を喪し、詐謀術數至らざるなく百方して僅に當の罪人を捕らへ、以て吾人の知力的心識に滿足を與ふるに至る。吾人が探偵小說を讀みて快樂を感ずるは、讀み行く事柄の全局、もしくは部分に悅樂あるが爲ならずして、一步々々最後の滿足に近くを知ればなり。(中略)本より作者に多少の小說的技倆ある限は、幾分か人物の性癖をも描き得べきが故に、探偵吏が機敏の働き、若しくは局面の波瀾變化等の上に、若干脚色的面白味（プロツト・インテレスト）以外の面白味を具へしむることなきにあらねと、こはむしろ附屬的條件、即ち二の町の面白快にして倦厭を來たさゞらんの用意のみ。又は作の興味を豐富ならしめんの粧飾のみ結果を追求する念に伴ふ　味だに强からば、必しも此等の補充的結構を要せざるも、探偵小說たるを失はざるべし。疑ふものあらば去りて實際に徵せよ。一部の探偵小說を取り、讀むこと半にして殘卷を翻し、結尾の一齣を讀了せよ、必ずや前に感じたる興味の多分は忽然として銷失し、更に後半を讀み繼がん心なきに至るべし。縱令經過の事柄其の物に多少の妙味ありとするも、到底祕密の解釋を除きては、探偵小說本來の面目を保つこと難かるべし。既に疑問の說明以外に詩的快樂を與ふる。探偵的小說ありとするも、そはこゝに謂ふ純粹の探偵小說にあらず、そは只事件の性質配合等に於てのみ探偵小說的なるものなり、而して其の本質は已に探偵小說の範域を脫したるものなり。夫れ詩的快樂、即ち世態人情の趣味に伴ふ快樂と索究的快樂即ち祕密の解釋に伴ふ快樂とは、互角の勢力を持して並立すること難し、假令客觀なる小說其の物の上には、兩者の元素相當して存するとも主觀なる讀者の心は必らずや何れかに偏せざるを得ざるものなり。而して探偵小說の精髓は此の索究的快樂を主と

し、詩的快樂を從とす、されば一たび此の所例を轉倒して詩的快樂を主なる地位に立つるに至れば、探偵小説は形骸を遺してその實を失ふものといふべし。（下略）

（五）文壇に於ける歷史熱

斯うして、ロマンスも飽かれ、探偵小説も排撃されると、今度は、歷史小說が、それに取つて代らうとした。蓋し歷史文學流行の勢は、既に明治二十二三年頃に其の萠芽を發して居た。それは、歐化主義に對する國粹顯揚運動の余流で、金子筑水が云つたやうに「過古の我れを回顧して現當の我れを知らんとした爲めであるにちがいない。其の心象について、筑水は「單に過古を慕ふ好古の心より、又は普通の愛國的精神より、或は單純なる學者氣質より、或は歐化主義の反動より、或は浮淺庸劣なる小說類に厭けるより、或は空漠たる好奇心より或は其の他種々の因緣より、一時の流行を招致せしに過ぎざりしならんか。」と云つて居るが、蓋し適切の推斷であらう。

思ふに、歷史文學流行の先驅を爲したのは、民友社、博文館の史的出版物乃至、田口鼎軒が二十十四年五月に出した『史海』などであらう。鼎軒は、政治家として、經濟學者として、一方に頭角を擡げて居たが、其の本領は、寧ろ史學にあつたかも知れない。彼れには、『日本開化小史』『支那開化

小史』のやうな著書がある」今日で云ふ文化史の最初のものであらう。彼れは、數理的な頭腦と卓拔な史眼とを有して居て、其の平淡暢達な垢拔けのした江戸ツ兒的文章を以て、日本史や、支那史に關する新見解を述べた。それは、單なる妄斷や獨斷ではなくて、史料により、事實によつて推定を下しのだから、專門學者にも、共鳴者を有した。さうした地位に居た彼れの『史海』が、歷史文學の方面に新しい開拓をして、淺薄な小說に飽きはてた讀者を吸收したのは、當然のことであつた。

斯うして歷史熱が煽り立てられると、二十四年の暮れから、二十五年にかけて、其の影響が新聞雜誌の上に反映されると共に、過古に於ける史實についての討究乃至人物の評傳が、續々、踵を接して現はれるやうになつた。而して其の余勢は、二十九年頃まで續いた。卽ち裳華房から出た『偉人史叢』を殿りとして、自然に立ち消えるやうになつた。

（六）文學と史傳の調和

此の種の著述として、最も有力であつたのは、德富蘇峯の『吉田松蔭』『竹越三叉の『新日本史』及び『二千五百年史』、德富蘆花の『グラッドストン』民友社の『十二文豪』などであつた。また文學的價値

は乏しいけれども、一時、讀者に歡呼された『世界百傑傳』『日本百傑傳』などが博文館から出た。裳華房の『偉人史叢』も、同樣に讀書界を風靡した。今日、嚴密にそれ等の著作を批判すると、結局、三叉の『二千五百年史』及び『新日本史』と森田思軒の『賴山陽』內田不知庵の『ジョンソン』、北村透谷の『エマアソン』、蘆花の『トルストイ』、湖處子の『ワーズワース』、愛山の『新井白石』などが、文學的價値の上から、尙ほ捨て難いところがある位のものかも知れない。

今日の若い文學者は、『二千五百年史』程度の歷史を書くことには困難しないであらうけれども、明治二十八九年頃には、さうした史眼を具へたものもなければ、また三叉式の新しい書き方をするものもなかつた。それを、あれ丈に纏めて、文化史的に體系を立て、章節を分つて、器用に要領を包括したのは、三叉の功であつた。

思軒の『賴山陽』は、二十六年初夏から『國民之友』に連載されて、二十七年七月に完結した史論であつた。蘇峯は、それを評して「此篇は、獨り題目の主公を發揮するのみにあらず、著者彼自身を發揮して、亦聊か遺憾なきに庶幾し。銳利にして、寬宏なる批評眼、時代の精神を會得する識見、多角的の趣味、比較的公正にして偏頗少き判斷。」と賞讃して居る。恐らく、思軒の翻澤小說に不滿を抱くものも、『賴山陽』に對しては、相當の滿足を感ずるであらうと私に思はれる。蓋し思軒の『北

京紀行』『歐洲通信』などを見ると、紀行文や隨筆に長所を有するを知るのであるが、更らにより多くの長所は、批評の上にあつた。當時の史論家として思軒は傑出して居た。其の頃行はれた人物評傳は、概して獨斷的なものが多かつたのだ。齋藤綠雨は、『鷗外漁史に與ふ』のうちで、それを諷刺して「民友社の十二文豪は勿論、小說に深見重左あり塙團右ヱ門あり、芝居に大久保彥左ヱ門あり、人の名をやたらに引張出すこと近來の流行に候。若しあの連中に、斯くの如き細字（綠雨の手紙は、いつも細字で認められてあつた。）の書面など見附けられては、彼は小心なりし、然り、彼はけちな男なりし、などゝきめつけらるゝ事ありては、太だ迷惑に付、この埋合せは封筒の上書に致しあり候。能々御覺被下度候。かうして置けば、あの連中は曰く、彼は大膽なりし豪氣なりし、豁達なりし云々。さて英雄になるには、色々の心掛が入ることに候。』と云つたのは、確かに一面の弊を穿つて居た。後年、史論家として官學以外に重を爲した山路愛山ですら、ともすると、獨斷的に流れるところが少くなかつた。彼れの『賴襄を論ず』の如きも、其の弊が少くなかつた。彼れは賴山陽を推讃して『彼は斯の如く天下より景慕せられたり、書生は皆賴氏の門に向つて走れり、文運は賴氏に因りて一變せられたり。彼は實に精神世界の帝王となれり。』と云つたやうな口吻が到處にあつた。僅少の史料によつて、誇張した獨斷をくだして居たのだ。思軒はさうした獨斷的、誇張的

の臭味を脱し切つて居た。それに彼れは頼山陽通であつたから、愛山の獨斷說に論難を加へて、相互數回の論戰を交へたことがあつた。

ところが、思軒の『頼山陽』は、豐富な材料を整理して、穩健な批評を下してあるから、獨斷、妄斷に陷らないで、情理一和したところに、傳記文學としての價値があつた。それは、三叉の『二千五百年史』と共に、歷史熱が生んだ文學的收獲として推重すべきものである。

（七）歷史文學と傳記文學の價値

私は、歷史文學、傳紀文學に於ける優秀な著述は、創作と同樣の價値を有するものだと信ずるのである。二十五六年當時の文藝批評家は、現今のやうに、創作の月評や、評論に沒頭して、他の著作や、評論に對する批評を閑却するやうな偏狹なところが見えなかつた。殊に『早稻田文學』の如きは、此の點に於て、最も公平であつた。

それで、坪內逍遙は、創作と共に、他の著作中の優秀なものを紹介することに力めた。內田不知庵の『ジョンソン』の如きも、創作の月評や、評論にのみ偏する現今の批評家の手にかけたら、恐らく冷かに一瞥し去つたであらうけれども、逍遙は、特に傳記文學の優秀なものとして『ジョンソン』

を推賞した。私は、今の文藝論家が、小說や、脚本の批評にのみ沒頭することをやめて、廣く文學上の價値あるものを紹介することを切に望みたいと思ふところから、こゝに、逍遙の『ジョンソン』に關する批評を拔萃する。

民友社出版、不知庵主人內田貢氏著「十二文豪」集中の錚々たるものと評すべし。まづ第一章に、十八世紀を評論し、其の如何に墮落したりし時代なるを明にして、此の腐敗中に立ちて毅然節を持せし本篇の主人公が情操と其の汚きバックグランドとの照對を敍し、第二章に入りて彼れか幼少期の經歷を詳述し、第三章に其の著作第四章に其の性行、習癖、及び交遊を語り、第五章、終焉の記に擱筆せり。

著者は其の例言に、頗る博く諸書を參考せし由を語り、且其の主なる目的はジョンソンの思想を明にするよりはむしろ其の行實を明にするにあり、といへり、然れども吾人の見る所によれば、著者の意向別に存するものゝ如し。蓋し著者は十八世紀の腐敗を論じて暗に明治の今日を諷刺し、ジョンソンの行實を錄して暗に明治の文士を誡めんとしたる跡歷々たり、隨つて此の傳論は正當の傳論といはんよりは、寧ろ史傳を材料として物したる時論とも評すべきもの也、現世の爲に物したる傾あり。文章も、爲におのづから Oretorial となり、誇張となり、諷刺百出、慷慨淋漓たり、隨つて、褒貶双ながら妥當を缺くものあり、ゆゑに之れを時論として見れば、文字に活氣ありて面白けれど、嚴正緻密なるべき正當の史傳としては、如何あらんかとかたぶかるゝ所尠

からず、何となれば、著者は間々誠世家として激語せるカーライルの口吻を、そのまゝに採用し、若しくば崇拜家としてジョンソンに隷侍せしボスウェルの感嘆を、そのまゝに受納し、若しくはテーン等の華文的評論を敷衍して更に之れを誇張せる如き趣あればなり。然れども少瑕疵あるが爲に吾人は此の書を貶す能はず、不知庵主人の二長所の著く此の編に現はれたればなり。二長所とは何ぞや、曰はく、逸事瑣談に博通して之れを語るに巧なること、曰はく、事に觸れ物に應じて嘲世諷俗の評論を物するに巧なること、是れ也。讀者若し此の著によりて十八世紀の狀勢とジョンソンとの操行に關して、幾分か事實よりも醜き物と事實よりも美しきものとを見ることありとするも件の二長所の與ふる興味は此の短を補うて餘あらん、否、讀者は此の小カーライル的誠世編によりて、或は其の懶眠を攪破せられ、尠からず啓發せらるゝ所あるべし。（下略）

當時、民友社は、人物評傳に關して一家見を有した健筆家の集合所と云ふ觀があつた。蘇峯、蘆花、愛山、三叉のほかに『カーライル』を傳した平田久、『ユーゴー』を傳した人見一太郎『近松門左衞門』を傳した塚越停春らは、何れも、民友社風の直譯的な文體で明快な書き方をした傳記文學の一新生面を開いた。だが、結局、此の方面に於て、後日、大成したのは、山路愛山のみであつた。三叉は『二千五百年史』時代以後、次第に下り坂になつた。『日本經濟史』は到底『二千五百年史』以上に出ない。經濟事情を調査して、それを歴史的に書いたと云ふ一點に、其の特色があるけれども、

其の史家としての識見や、叙事の背後に潜む文化史觀乃至一種の哲學的思想が缺如して居るために徒らに尨大なだけで到底『二千五百年史』の如く、卓出して居ないのは、愛山が、歷史文學に專心したに對して、三叉は、一時、それから遠ざかつて了つた結果でなからうかと思はれる。

『十二文豪』の中で、愛山が當時書いたのは『荻生徂徠』『新井白石』の二冊である。『新井白石』は、詩人として、政治家として、歷史家としての白石を觀察したもので、殊に『歷史家としての新井君美』の一章は、愛山が史家としての見地と筆力との平凡でないことを示して居た。而してそれについて「彼れは政治家として歷史を書けり、政治家として歷史を詮索せり、彼れの歷史の硏究は政治的現象として人間を論ずるに在り。彼れが歷史の題目は政治界に於ける人也。」と云つたのは卓見だつた。

（八）　歷史小說の出現と其の作家

史傳の流行は、やがて歷史小說の提唱となつて、文壇の一問題となつた。金子筑水は『早稻田文學』に於て「昨年(二十五年)の末に及びて、次第に著くなり來たりしは時代物(歷史小說)を要求するの聲なり、之れより先、新聞紙の續物は常に時代物を「世間受け」よき作とせしが、昨年末の要求

は之れと其の源を異にしたり、疑ふらくは、上にいへる回顧熱の結果にして、またこれ自然の要求なるべし。（中略）吾人は昨年末の世間の要求の甚だ穩當なるを認むるが故に、本年の詩界に向かひては、吾人はむしろ歷史小說の出でんことを望まんとす。」と勸奬した。

だが、これは、どう云ふ風の歷史小說を要求したのであるか、坪內逍遙は、『讀賣』の紙上に於て『歷史小說につきて』と題して、其のうちで第一條件として「歷史小說は其の國の特性を發揮すると同時に、其の當時の人情及び風俗を反映するを要す。」と定義した、此の點に於て、今日の新人が書く歷史小說とは、幾分か異なるところがあつた。今日の歷史小說は、現代の新精神を以て、古き史實を解釋し、若くは假空的な事件をさへ、構想することがある。而して著しく抒情的なものが多いところが、當時一般に批評家が要求したのは、略ぼ逍遙が定義した意味の歷史小說であつた。それで逍遙は「小說といふ本領よりいへば、歷史といふ肩書はホンの借物も同然なれば、小說の本領に叶ふ以上は、たとへ人物が現今の人物にても、又全篇を貫ける理想が現今の理想たりとも、單に美術といふ一點よりいへば、必しも咎むまじきことならめど、尙歷史といふ肩書の添はれるだけに、かゝる根本の不都合は、兎角に讀者の幻想を破り、美術たるの價値を損ずるの悔あるべし、故に予は歷史小說と自稱せる作に向かつては、尠くとも當代の人情、風俗、理想及び人物の影を見んことを

を望むなり。夫の歴史的舞臺及び外飾を單に方便として用ひたる作は、之れを假粧的散文抒情詩、若しくは抒情的歴史小說と名けんと欲す、方便とおとしめらるゝときは歴史といふ肩書は無意義同然となり、殆ど全く尊厳なきものとなるべければなり。」と云つた。畢竟、當時の歴史小說には、回顧的の感じ、過去の我れを振返つて、現當の我を觀照しようとする感時が强かつたので、文學上に於ても、其の意味合ひを强めたところの歴史小說を要求したのである。

當時、此の歴史小說の風潮振起と共に、塚原澁柿園(蓼州)遲塚麗水、村井弦齋らが作家として、其の頭角を擡げた。多能な福地櫻痴も亦此の方面に筆を着けて『山縣大貳』『天竺德兵衞』などを出した。けれども文學上から見て、價値あるものに乏しかつた。さうした中にあつて、稍見るべき內容外形を有したのは、高山樗牛の『瀧口入道』であつた。

『瀧口入道』は、二十六年『讀賣』で、坪內逍遙、尾崎紅葉、幸田露伴らを選者として、懸賞で、歴史小說を募つた時に當選した佳作であつた。樗牛が、自ら告白した通り、それは、一篇の抒情的小說で、平家の衰亡を背景として、瀧口時穎と横笛の悲戀を精細に描いたものであつた。

樗牛は、評論家として成功したが、一面、彼れには、センチメンタルなところがあつた。『平家雜感』や『わが袖の記』などは、其のセンチメンタルな一面の發露である。『瀧口入道』も亦此の方面の

一發現で、優雅な文章を以て、悲戀を咏嘆的に叙述して居る。今日見ると、勿論、稚氣を脫しなくて、文學の修飾に心を傾け過ぎたところがあるけれども、當時の作品としては、これ位の情味に豊かなものはなかつた。それに態度が眞面目で、篇中の人物に深く同感したところがあつた。

だが、『瀧口入道』のみが、歷史小說の佳篇で、他に注目すべき作品がなかつたことは、どの位、文壇の識者を失望せしめたであらう。唯塚原澁柿園のみが、後日の大成を期待されたが、これとても、卓拔した史眼も、詩人としての情熱もなくて、唯漫然として、歷史上の風俗と言語とを臚列するの風があつたところから、勿論、後日も、私等に印象を殘すに足るだけの作品を殆ど出さなかつた。

畢竟、當時の歷史小說は、徒らに其の呼び聲のみ高くて、實質は、これに伴はなかつたのである蓋し歷史小說は、誰でも作り易いけれども、眞に充實したものを製作し、創造するには、史的見識に長じ、文化史的知識と其の哲理とに通じ、加ふるに、時代と人物とを活寫するところの手腕の冴えを具へなければならぬのであるから、これほど、むづかしいものはないのである。當時の作家は誰ひとり、斯うした資格の一部分さへ有しなかつたのであるから、全然、失敗した作品のみが提供されたのは、當然の歸結であつたらう。

（九）當時の文藝批評と作家に對する要望

此の期の小說界は、以上のやうな現象を以て、沈衰裡に幕を閉ぢて、日淸戰爭時代に及んだ。當時、文藝批評家は、作家に對して、いろいろの注文を發したのであるが、其の注文は、一も實現されなかつた。蘇峯が、二十六年五月、『國民之友』に於て、『今や我邦の文界は荒れたり、探偵小說、鐵道小說は、我が社會に於ける精神的糧食として、糟糠にだも如かず、我が國民は頭を擧げて、國民の血管を沸騰せしめ、國民の脊髓骨に强震を與ふる生命ある文學を望み居れり。』と云つたやうな不滿は、ひとしく、批評家の感じたところであるけれども、當時の批評家が提供した注文は、大體に於て、漠然として居たのが多かつた。

其の注文のうちには、「宇宙人生に關する自已の理想を發揮すべし。」とか、「活きた社會問題を材料として取扱ふべし。」とか云ふやうなことであつた。結局、批評家の多くは、在來のやうな、戲作的な小說を排して、眞面目な作品を要求する上に於て、一致して居たが、云ふところが、漠然たる抽象的なものであつたから、作家も亦其の模索に苦んだのである。

だが、こゝに一言したいのは、當時の文藝批評が、次第に美學を批評の尺度とし、哲學、心理學

などの知識をも參照して、漸く科學的批評を試みようとする一脈の傾向が、若き批評家の間に根ざしかけて居たことである。鷗外、逍遙の二家は、夙にこの點に注意して、自ら文藝評論の典型を示したのであるが、二十五六年頃には、其の刺戟を受けたことや、一般に哲學、科學の知識が、少壯學徒の頭腦に流入して居たことなどから、在來のやうに、何等、批評の規準を美學に求めず、或は非科學的に自己の主觀批評を述べると云ふやうな風が、少しづゝ減少して來たのである。而して逍遙が唱道したところの客觀的科學的批評が、テーン、ボスネツト、モールトン、ダウデンらの紹介と共に、文壇の新人を動かしたのは、注目すべき一現象で、やがて文藝評論の進歩を意味するものであつた。而して『早稻田文學』の彙報は、當時の文壇的潮勢を客觀的に公平に記述して、一貫した理路推移のあとを明かにする上に於て、少からず、文壇の進歩を助けたのである。

第九章　翻譯文學の曙光

（一）最初に出た藝術的翻譯

明治に於ける新文學發達の上に最も重大な關係を有したのは、當時の翻譯文學である。硯友社の人々其の他、文壇の作家が、相當な作物を提供しつゝあつたことは、勿論、進歩の上に一光明を投射したにちがひないけれども、尙ほより多く、歐洲文學について學ばねばならぬ狀勢にあつた時代には、日本の作家の傑作よりも、寧ろ有力な歐米作家の一斷篇をも尊重し、熟讀せねばならなかつた。それによつて開發され、指導され、向上させられる必要が、あり過ぎるほどにあつた。

斯うした時に、藝術的に見て、有價値な翻譯文學を第一に提供したのは、長谷川二葉亭であつた彼れは、明治二十一年七月に『國民之友』へツルゲエネフの『獵人日記』の一節を譯した『あひゞき』を寄せ、同年十月『都の花』へ『めぐりあひ』を載せた。此の二篇は、縮刷『二葉亭全集』の編者が「今より三十年前、ツルゲエネフの名未だ英獨にだも猶ほ知られざりし時、此の極東の幼稚なる讀書寰に之を翻譯紹介したるは恰も山間鄙人の前に琴を彈ずるの感あり。而も此の秀麗なる高調が當時の新

人を如何に感激せしめて、後の文藝上の新萠芽を胚胎したるかは知るべからず。」と云つた通りである。

當時の新人で、未だ何も書かないで、無名の文學書生だつた田山花袋が、二葉亭の『あひゞき』を見た感想を記して「一層、私を驚かしたものは、その一二號前に出てゐる二葉亭譯の『あひゞき』であつた。粗大な經書や漢文や國文に養はれた私の頭腦や私の修養は、この細かい不思議な叙述の仕方をした文章に出つて一方ならず動かされた。これが文章かとも思つて惑つた。しかしさういふ細かい叙述法は、外國の文章の特長で、日本の文章は、これからは是非さうなつて行かなければならないと思つた私は、それから注意して、雜誌や新聞を見るやうになつた。」と告白して居る。恐らく花袋と同じやうな感じを起した文學書生が、他にいくらかあつたらう。國木田獨歩なども、矢張、其の一人だつたらしい。

二葉亭の翻譯は、其の處女作『浮雲』と同樣に極めて眞面目な、熱心な態度を以て、從事したやうだ。それは、彼れの『余が翻譯の標準』を見ればわかることだ。それによると、「外國文を翻譯する場合に、意味ばかりを考へて、これに重きを置くと原文をこはす虞がある。須らく原文の音調を呑み込んで、それを移すやうにせねばならぬと、かう自分は信じたので、コンマ、ピリオドの一つをも

濫りに棄てず、原文にコンマが三つ、ピリオドが一つあれば、譯文にも亦ピリオドが一つ、コンマが三つといふ風にして、原文の調子を移さうとした。殊に翻譯を爲始めた頃は、語數も原文と同じくし、形をも崩すことなく、偏へに原文の音調を移すのを目的として、形の上に大變苦勞をした。と云ふことを述べて居る。二葉亭は、一方に於て叉原作者の詩想を會得することの必要を說き、バイロンの詩をロシヤ語に意譯したヂユコーフスキーのやり方に論及して「ヂユコーフスキーはロシヤーの詩人であるが、寧ろ翻譯家として名を成してゐるが、バイロンを多く譯してゐるが、それが妙に巧い。尤も當時のロシヤは、其の社會狀態が小バイロンを盛んに生んだ時代で、殊にジユコーフスキーの如きは、鐵中錚々たるものであつたから、求めずしてバイロンの詩想と合致するを得て、大に成功したのか知れねが、兎に角其の譯文は立派なロシヤ文となつてゐる。けれども、これをバイロンの原詩と比べて見ると、其の言ひ方が大變違ふ、原文の仄起を平起としたり、平起を仄起としたり、原文の韻のあるのを無韻にしたり、或は原文にない形容詞や副詞を附けて、勝手に剪裁してゐる。卽ち多くは原文を全く崩して、自分勝手の詩形とし、唯だ意味だけを譯してゐる。(中略)兎に角、原詩よりも譯の方が、趣味も詩想もよく分る。」として、左樣した心持をも稍參酌したことをも述べてある。それで、ツルゲエネフを譯したについては、斯う述べて居る。

實例をツルゲーネフに取つてこれを云へば、彼の詩想は秋や冬の相ではない、春の相である。春も初春でもなければ中春でもない、晩春の相である。丁度櫻花が爛熳と咲き亂れて、稍々散りそめやうといふ所だ。遠く霞んだ中空に、美しくおぼろ〳〵とした春の月が照つてゐる晩を、兩側に櫻の植ゑられた細い路を辿るやうな趣がある。約言すれば、艶麗の中にどつか寂しい所のあるのが、ツルゲーネフの詩想である。そして其の當然の結果として、彼の小說には全體に其の氣が行き渡つてゐるのだから、これを翻譯するには其の心持を失はないやうに、常に其の人になつて書いて行かぬと、往々にして文調にそぐはなくなる。此の際に在ては、徒らにコンマやピリオド、又は其の他の形にばかり拘泥してゐてはいけない。先づ根本たる詩想をよく呑み込んで、然る後、詩形を崩さずに翻譯するやうにせなければならぬ。實際自分がツルゲーネフを翻譯する時は、力めて其の詩想を忘れず、眞に自分自身其の詩想に同化してやる心算であつたのだが、どうも旨く成功しなかつた。

（下略）

（二）　二葉亭の『あひゞき』と『めぐりあひ』

斯うした彼れの苦心談を讀むと、其の翻譯が、最初から、成功して、藝術的に光つて居たことの偶然でないのを感ずる。蓋し翻譯の方法について、文藝批評家が論議し始めたのは、二葉亭の『あ

ひゞき』や『めぐりあひ』が出て後のことだ。勿論、其の以前にも、多少の論議はあつたけれども、幼稚な見解が多かつた。さうした時代に、寧ろ文壇の門外漢だつた二葉亭は、却て專門文士よりは翻譯について細緻の工夫と卓越した見解とを有して居たのだ。それに、彼れは、ロシヤ語に精通し漢文學英文學の大體にも通じて居て、小說家としての豐かな才能をも有して居たのだから、翻譯方面にも適當な資格を具へて居たと云つて宜い。

それで『あひゞき』『めぐりあひ』の二篇は、在來の生硬な粗笨な翻譯とは、全くちがつた手觸りを以て居た。翻譯と云ふよりは、一種の創作と云つて宜いほどの風調を帶びて居た。そこに、二葉亭の獨自の長所があつた。『あひゞき』にある冒頭の叙景文は、國木田獨歩が愛誦して『武藏野』の中に引用したのを見ても、其の書き方の鮮新と精緻とが、獨歩に深い印銘を與へたことが知れると同時に、それは、二葉亭の譯文の成功を證據立てゝゐることにもなる。

秋は九月中旬の事で、一日自分がさる樺林の中に坐つてゐたことが有つた。朝から小雨が降つて、その霽間にはをり〳〵生暖かな日影が射すといふ氣紛れな空合である。耐力の無い白雲が一面に空を蔽ふかとすれば、ふとまた彼處此處一寸雲切がして、其間から朗かに晴れた蒼空が美しい利口さうな眼のやうに見える。自分は坐つて、四方を顧眄して、耳を傾けてゐると、つい頭の上で木の葉が微かに戰ひてゐたが、それを聞いたばかり

でも時節は知れた。春のは面白さうに笑ひさゞめくやうで、夏のは柔しくそよ〳〵として、生温い話聲のやうで、秋の末となると、おど〳〵した薄寒さうな音であるが、今はそれと違つて、漸く聞取れゐか聞取れぬ程の睡さうな、私語くやうな音である。力の無い風がそよ〳〵と木末を吹いて通る。雨に濡れた林の中の光景が照ると曇るとで間斷なく變つてゐたが、或時は其處に在るほどの物が一時に微笑でもしたやうに燦爛となるとむら〳〵と立つた樺の細い幹がふと白絹のやうな柔しい光澤を帶びて、其處らに落散つた葉が急に斑に金色に光るそこで頭の茸々したパアポロトニク(蕨の類)の美しい長い莖までが最う秋だけに熟え過ぎた葡萄のやうに色づいて、際限もなく纏れつ絡みつして目前に透いて見えるかと思ふとまた四邊一面に急に薄靑くなつて、瞬く間に煌々した所が滅くなつて了へば、樺の木立も光澤が失せて、宛然まだ冬の冷たい閃つく日光を受けぬ降りたての雪か何ぞのやうに白々となると——小雨が音のせぬやうに、忍んでぱらぱらと降り出す。(下略)

此の一節だけ見ても、二葉亭の譯文の風味が、ツルゲエネフの詩想と情趣とを、さながらに浮び出させようとしたことが、歷々としてわかる。

(三) 思軒の漢文調と鷗外の國文調

ところが、二葉亭と略ぼ同時代に出て、翻譯文學に於て、一頭角を出して居た森田思軒の技倆は

今日から見ると、大分、二葉亭に劣つて居た。思軒の長所は、寧ろ批評にあつて、翻譯にはなかつた。勿論、思軒自身は、翻譯について一家見を有して、其の譯文には、漢文の風調を加味して、一字一句苟くもしないと云つたほどの苦心をしたのであるが、其の結果は、決して宜くなかつた。思軒に對して、深い同情を以て居た蘇峯さへも「思軒の翻譯は餘りに念入り過ぎて却つて粘皮の痕あり。」と云つたほどであつた。

それにも關らず、一時、思軒の翻譯文學が文壇の一部に推重されて、其の模倣者さへ出したのは當時、歐洲文學が珍重されたと同時に、漢文風の文章をも合せて愛誦する風が靑年間に倚存して居たからである。ユーゴーの『死刑前六時間』の如きも、思軒の譯文によると、餘りに思軒化して、ユーゴーの風韻を沒却して了つた傾きがある。

然り、死なる哉、死なる哉。且つや余が心理の聲は反覆余に向つて縱ひ余が死、死を求むるも、余は到底死を得るの憂へ無き者なる事を、擔保せり。凡そ死刑を申し渡さるる者の、寒き、雨多き、冬の夜半、濕りたる陰欝の室の内にありて、炬火の下に於てならで、他の時他の處に於て、之を申渡されし者ありや。今や八月の月に於て、此の如き美はしく晴れたる日の朝の八時に於いて是等寬仁慈愛の相を具へたる陪審官上にありて而かも余を有罪と斷ずることあるべきや。余の眼は再び、かの太陽の光を浴びて立てる黃色の小花の上に注ぎ

て、復た他に轉ぜず。

思軒の翻譯小說中、特に世に知られた代表的のものは『探偵ユーベル』『瞽使者』『十五少年』などである。二葉亭、思軒に續いて、翻譯文學に新生面を開いたのは、鷗外、逍遙、不知庵らの人々である。鷗外は、ドイツ文學に精通してドイツ語を透ほして、歐米文學を譯したが、矢張其の長所はドイツ文學の翻譯にあつたのは云ふ迄もない。

思軒が漢文調を以て翻譯したに對して、鷗外が國文調を以てしたのは、妙なコンツラストであつた。當時未だドイツ歸りの壯年氣鋭の新人だつた鷗外が、國文調を尊重したのは、今日から見ると、不思議なやうだが、當時は、『文學界』一派の新人であるところの藤村、孤蝶、透谷らさへも、矢張、國文調で、其の詩想を表現したのであるから、鷗外が國文調を選んだのは、畢竟、時代の影響によつたものだ。恰度、國粹顯揚の風潮によつて、新しい國文が、落合直文、小中村義象(池邊)らによつて創作された時代で、讀書界は、さうした文學的運動に共鳴したのだ。それ等の事情を考へると、鷗外が國文調を以て、翻譯に當つたことの偶然でないわけが察せられよう。

(四)　鷗外の『水沫集』と翻譯小說

二十五年七月に出た『水沫集』には、十六篇ばかりの飜譯が收められてある。その中で、特に評判が宜かつたのは、オシツプ・シュビンの『埋木』、クライストの『地震』『惡因緣』などであつた。『埋木』は、薄倖な天才的音樂家ゲザが、戀に破れ、藝術的に破滅する末路を抒情的な調子で描いたもので鷗外は巧みに、其の情趣を國文調の上に現はした。其の調子は、典雅で、淸麗であつた。だが貴族的な匂ひがするのと情熱の缺乏とが、其の缺點だつた。左の一節は、ゲサが、少年音樂家として、其の天才を發揮した時の狀態である。

(前略)ゲサは自ら奮起して、「君だ辱にならぬやうに、一曲試みて止まじ。」と口の裡につぶやきしか、面の色は眞蒼になりて、身うち慄ひ、手に「ヰオリン」取りし時、眼一たび輝きて、忽又黒き睫毛の背にかくれぬ。その時童が目の前には、火の雨降るやうに見え胸の中には鋏うづまき起りて、狂へる如く戀ふる如き物の音耳を衝きたり。

あはれ此曲、夢中にや成りし、さらずば、遠き父のふる里より木がらしや吹き送りし、さらずば又、悲しげなる救世主の見卸し玉ふ、あやしき街の戸口にて、戯兒を眠らせむと歌ひし母が、夫より傳はりたる節々を、また此童に傳へやしけむ。

唯聞く、ゲサか手中より「ヰオリン」は、乍ち歌び、乍ち泣けるを、匈牙利生れの「チガン」ならで、かゝる醉音

を出し得るものあらんや。

人を醉はしむる節奏、遊るやうなる音の曲折、情と樂との亂狂へる風雨雷電。さて最後の一聲は虚空に向ひて放ちたる歡呼なりき。

ゲサは目をみはり、息を凝らして立てり。彼は自ら力限の技を奏せしを知りたり。彼は耳を欹てたり。されど公衆の前にて受けし如き喝采は、此上等社會に無きものにて、唯秋風枯葉を捲く如き聲坐に滿ちて、遙か後の方より。面白し。珍らし。人の猶くならず。「チガン。」などゝいふ語聞ゆるのみ。(下略)

鷗外が、國文調のうちに漢語を混用して、原作の風韻、語調を表現しようと力めた苦心が歴々と見えて居る。それは、他の追隨を許さないほどに成功して居る。而して二十六年頃に譯し始めた、『卽興詩人』に於て、斯うした翻譯振の妙をつくしたことを示したが、それは後に云はう。唯こゝに二葉亭が言文一致を以て、より以上の成功を收めたのに比較すると、鷗外は、餘程、國文調そのものゝために累せられたことがわかる。若し言文一致體を以て、同一の苦心をしたら、より多くの成功が得られたらうと思はれる。

鷗外の翻譯に關する說は、曾て『國民新聞』に發表したことがあつた。それによると、『凡そ戲曲の譯は力めて其意を失はざらしむとするものなれば、字を追ひて原文を寫出ださむとする時は、我國の人の解し得ざる怪癖

の語となるべし。されば古より歐洲諸國の民の相互譯述して殊邦文學の趣味をおのれが鄕に遷したる蹟をたづぬるに、一として逐字の譯あること無し。」と述べ、其の理由については「蓋し戲曲を譯するものゝかゝる自由をなす所以は、戲曲といふもの彼反覆咀嚼して其味を知るべき哲學書などゝはおのづから殊なればなり、哲學書に於ては、作者に人と同じからざる用語例ありて、一字といへども動し易からず、その譯者は宜しく字を追ひて、これを譯し、文の或は難澁となることも厭はざるべきものなれど、戲曲はこれを讀みこれを聞きて、その幻象直に讀者聽者の目前にあらはれざるべからざればなり。」と斷定した。鷗外の說は自由を尊重するにあるが事實上では、愼密をも忘れなかつた。

（五）內田不知庵の『罪と罰』

內田不知庵は、評論家として知られて居たが、ドストエフスキーの『罪と罰』を譯するに及んで、彼れが飜譯家として、卓越した手腕を有する事を明かにした。それは、二十五年の暮から、二十六年の夏へかけてのことで、第一卷、第二卷だけ出て、第三卷は出なかつた。と云ふのは、當時の讀者には、未だ『罪と罰』を味ふほどの理解力、玩賞力がなかつたからだ。二葉亭の『あひゞき』『めぐりあひ』さへも、僅かに一部の文學書生に味解されたやうな有樣だつたから、『罪と罰』の賣行が惡

かつたのは當然のことであらう。

だが、翻譯として卓越したものであつたことは、逍遙が『早稻田文學』に於て、口を極めて激賞したのでもわかる。其の第一卷が出ると、逍遙は「譯文は、すべて『浮雲』一流の言文一致にして、剛柔自在、男女、老少、都鄙、上下の口吻、まのあたりに聞くが如く寫し出だされたり。其の譯文の尤も巧なる處に至りては。讀む者、その譯文たるを忘れて『浮雲』中の未だ出版せられざる一節に撞着したる思あるべし。不知庵主人の、否、近時の傑作也。』と云ひ、其の缺點については、「疵瑕を求めば、稀に見出ださるゝ直譯の口氣と、無要なる原語の挿入と、調和せざる雅語の混用とに於て、不調和の感を生ずべけれども、これはた前にいへる、最も巧妙なるあたりと照映するが爲の故にして、絕對の疵瑕といふ限にはあらず。」と評した。

第二卷が出ると、逍遙は、また特に親切にそれを紹介したが、既に賣行の惡かつたことは、「不知庵主人が經營慘憺の翻譯、ドストエフスキーが傑作は、諸新聞、雜誌はいふに及ばず、其の他の讀書社會の批評家にも歡迎せられたること事實なれど、買ふものと批判する者とは、格別の社會にありと見えて、好評の割合には、此の書の捌口あし、といへり。」と述べたのをも見てもわかる。逍遙は其の理由を究尋して、「主なる理由は、此の作の長篇なるを一卷二卷と切れ〴〵に出だしたれば

探偵小說一流を喜ぶ買手の末を危みて二の足を踏めると、叙狀描寫の至精至緻なるがフウハリとしたるをのみ悦べる國俗の嗜好に叶はざると、露西亞名前の記えにくきと、分量の割合に價の貴きと新聞紙上に廣告せざると、旨味の高尙なると、趣向の陰氣なると、などにやあらん。」と述べた。ドストエフスキーの小說が續々翻譯され、非常に歡迎されて居る今日のわが讀書界の嗜好と對照すると、今昔の隔絕が餘りに甚しいのを感ぜずに居られない。

第二卷は、第一卷よりも翻譯に於て、一層不知庵の手腕の練熟を示した。逍遙は、「譯文の上よりいふも、たしかに明治の傑作の隨一にて、第一卷はさまでにも覺えざりしか、此の卷に至りては、おぼえず妙と呼ばざるを得ざる箇所數ふべからず。人情風俗こそ露國のものなれ、讀み〳〵て興に入りては、我れみづからラスコーリニコフと化したらんやうの感生じ、其の周圍に談笑悲喜するものは、皆血あり皮ありと感ぜられ、いつしか譯文たるを忘るゝに至るなり。試に、譯文らしき窮窟の跡の殘りたるに、鉛筆もて目印を附しもてゆきしに、讀み了へて後、其の目印のありか容易くは見いだしかたし、さる箇所のいと稀なる故なり。」と激賞した。

要するに、不知庵の翻譯振は、第二卷に及んで、二葉亭の『あひゞき』などゝ略ぼ同樣の程度に達した。東京の俗語を巧みに驅使する點も、兩者能く似て居た。唯不知庵は、二葉亭のやうに、ロシ

ヤ語其の物について直接譯しない點が、物足りないだけだつた。若し不知庵が、二葉亭のやうに、直ぐに原作について、其の風趣、情韻、詩味を會得して、其の苦心と才氣とを以て、翻譯に當つたら、一層見るべきものがあつたにちがいない。

斯うして、翻譯文學は、二葉亭、思軒、鷗外、不知庵を得て、次第に生彩を加へたが、逍遙が、シェークスピヤの翻譯と其の鼓吹に力を入れた事や、藝術的翻譯の要件を再三論じたことも亦翻譯文學の進歩の上に貢献した點が少くなかつた。

（六）　逍遙の『マクベス』評註

逍遙の『文學その折々』には『英語と英文學』『外國語學と外國文學』『翻譯すべき外國文學』等が載せてある。殊に逍遙が勸奬して止まなかつたのは藝術的な翻譯の興隆であつた。それで「吾人が渇望するは外國美文の良翻譯なり。而して美文學の翻しがたき所以は、前に略いへるが如し。さらば如何にせば、此の渇望を醫するを得べきか。此の問題もまた甚だ答へ易からざるものなり、蓋し良翻譯に達すべき手段に關しても、古來種々の議論あり。昔しベン・ジョンソンのホレースを譯せしや、原文の一語は一語もて譯せざる可からずと思ひ、フエルタムもまた一行の句は、須からく一行に譯

すべしと思ひき。又サンデイスが『メタモルフォーセズ』を譯せしや、原詩と譯詩とは、其の句の數の數すらも同じからざる可からずとて、痛く心を惱ましきときこゆ。これら皆直譯風の必要を主張するものなり。デンハム嘗て嘲りて曰はく「直譯家は猶若干の遊子のごとし、自國の語を外に遊べるうちに失ひて歸る、而してもたらし歸りし語は國人に通せず」と。述べ、ジョンソンの原作者の意を發揮せよとの說、ドライデンの「語を失ふとも、意を失ふ勿れ」との說などを引用して、藝術的翻譯の參考に資した。逍遙の『マクベス』評註は、卽ち其の一典型を示さんがために『早稻田文學』に揭げられた。シエークスピヤの藝術的翻譯は、逍遙によつて始められたのである。

其の他、原抱一庵が、思軒の門下として、矢張、漢文調の翻譯を始めたが、これは、殆ど云ふに足りないものであつた。思軒に似て更に非なるものであつた。けれども矢張、歷史的に評價するとすれば、雄健な文勢を以て外國文學紹介に力めた功を認めねばならぬ。

從來、翻譯文學には、日露戰爭前後から、新人が出たが、在來の大家だつた二葉亭、逍遙、不知庵、鷗外の四家は、依然として其の重鎭だつた。卽ち二葉亭は、ロシヤ文學の各篇を折々紹介して昇曙夢、片上伸らのロシヤ文學硏究者の先驅としての役目を完全に了へた。不知庵は、トルストイの『復活』に於て、名譯を示し、逍遙は、シエークスピヤの翻譯を大正の今日まで續けて、偉大な

劇作の邦譯を完成せんとし、鷗外は、近代劇の翻譯を一時、續刊して、劇壇のために盡した。それ等は、何れも源頭を明治二十四五年頃から發して居るのである。而して當時の活躍が、文壇の新人を刺戟して、進歩の機緣を作つたのは、云ふ迄もない。

第十章　新體詩、戲曲及び新國文

（一）『新體詩抄』と初期の詩壇

當時飜譯文學の一部として、發達の芽を吹いたのは、新體詩である。其の嚆矢は、明治十五年四月、井上巽軒、外山、山、矢田部尙今らが、新しい日本には、新しい思想を發表すべき新詩形を要するとして、『新詩體抄』を出したことである。巽軒は、それに就て、斯う述べた。

從來詩壇を占有したりし漢詩と和歌とは共に吾人の情志を發舒するに足らず。漢詩は以て支那の詩たるべし。本邦の文學として發達すべき者に非ず。和歌は本邦學として尊むべき者なり。然れどもこは過去の文學たるべくして、新日本の大潮流に棲息する國民が、依つて以て情志を發舒せんには、現時の國語を以て作れる歐風の詩形を取らざるべからず。平々坦々の言語を以て成れる長大の詩形を選ばざるべからず。

斯うしたことを痛感したのは、巽軒らが歐米文學は接して、自然、其の感化と啓發とを得た所からである。所謂新體詩の名稱は、矢田尙今が「西洋の風に模倣し、一種新體の詩を作り出せり。」と云つたのに基づくのである。

『新體詩抄』は、さうした意氣と抱負との下に世に出たが、其の內容は、今日から見ると、藝術的芳香に乏しかつた。巽軒らの自作も、譯詩も、幼稚なものだつた。けれども新體詩の名稱及び其の創始に力を盡した功勞は滅却すべからざるものがある。

『新體詩抄』の反響は、文學的に中々、現はれさうになかつた。それが漸く醱酵して來たのは、明治二十年頃のことである。それは、尾崎紅葉、山田美妙らが『新體詩選』を出して、遙かに以前の『新體詩抄』に呼應したのであつた。それと前後して、『國民之友』にS・S・S（新聲社の約語）の同人であるところの森鷗外、落合直文や、またキリスト敎文學に造詣を有した湯淺半月らが、新體詩を發表した。續いて、矢崎北邙散士（嵯峨の屋）中西梅花、宮崎湖處子らが、其の作を寄せた。かうして、當時の少壯文人が、詩壇のために努力したので、譯詩なども、バイロン、ハイネ、シルレル、ゲーテ、レナウらのものをも見ることが出來るやうになつた。

森鷗外の譯詩は、『水沫集』の『於母影』の中に收められてゐる。それには、バイロンの『マンフレツト』を漢詩に譯したやうな器用さを示したのもあつた。其のうちに、ハイネの詩を譯した『あまをとめ』などは、鷗外の優雅な調子によつて快く誦ずることが出來た。

浦つたひゆくあまをとめ

舟こぎよせこわがたてる
ほとりにきたれわれと汝
手に手とりあひむつびてむ
こゝろゆるしてわが胸に
なが頭をばおしあてよ
浪風あらきわたつみに
まかせたりてふ身ならずや
そのわたつみにわがこゝろ
さもにたりけり風はあれど
汐のみちびはありといへど
こゝらの玉もしづみつゝ

鷗外の提携した落合直文の新體詩のうちで代表的に名高かつたのは、『孝女白菊の歌』であつた。其の優艶な、流麗な調子は、流石に新國文を創作した人だけあつた。

中西梅花の『新體梅花詩集』は、二十四年三月に出版された。彼れは、狂熱的な詩人で何となく、

透谷と一味相通じたやうなところがあつた。蘇峯が云つたやうに「君自から奇骨を負ふ、飄蕩淸逸天馬空を行き、尋常規矩を以て律す可らざるものあり。」と云つた風があつたが、詩集を出してから間もなく狂死して了つた。

(二)哀世詩人としての北村透谷

新體詩の初期は、斯うした風に進んで來たが、『文學界』の創刊と共に、同人中には、島崎藤村を第一として、北村透谷、馬場孤蝶、戶川殘花らが、新體詩の領域を開拓することに力めた。

北村透谷は、其の厭世的思想の哀調を以て、特に『文學界』の詞壇に異彩を放つた。彼れは、將來を期待さるべき詩人で、其の狂熱と冥想とは、彼れ自身のほかに、見出されない深酷さを有して居た。『蓬萊曲』の如きは、三齣八場から成つた詩劇で、彼れの天才の閃きを反映して居た。だが、多くは、未製品的なところのあるものが少くなかつた。完成された詩人ではなくて、完成の途中にある詩人だつた。そこに又水々しいところ、潑溂たる熱氣があつた。

思ふに、彼れの一生それ自身が悲調に滿ちた詩であつたから、彼れの詩が、假令、形式や辭句の上に於て鍛錬を缺いて居たにしても、自然、彼れの內部から湧き上る詩的生命を以て、人を動かさ

ねばやまない强味があつたのだ。左に彼れの『蝶のゆくへ』を引用しよう。

舞ふてゆくへを問ひたまふ、
　心のほどぞうれしけれ、
秋の野面をそこはかと、
　尋ねて迷ふ蝶が身を。
行くもかへるも同じ關、
　越え來し方に越えて行く。
花の野山に舞ひし身は、
　花もなき野邊も元の宿、
前もなければ後もまた、
　「運命（かみ）」の外には「我」もなし。

×　×　×　×　×

透谷によつて、詩壇は、一時異彩を放つたが、透谷の死と共に、暫く個性の優れた詩人を見なか

つた。藤村らは、修養の一路を辿つて、正に其の詩的才能の醱酵を待ちつゝあつた。それで、日清戰爭がすむ迄は、詩壇も、藝術的に見るべきものを得ない形であつた。

次ぎに、落合直文らによつて企てられた所の新國文の創作は、彼れの短歌革新の運動と前後して其の文學的活動の著しいことを示した。直文は、勿論、歐洲文學に通じた人ではなかつたけれども森鷗外らと、新聲社を結んで、自然、新しい文藝思潮に觸接する機會を有して居た。それで、彼れが國粹顯揚の風潮に乘じて、池邊義象らと提携して、國文學復興のために努力した仕事は、可なりに、世人の共鳴を得た。彼れは、『日本文學全書』を出したり、『柵草紙』『歌學』『國文』などの雜誌に新味ある國文を以て、叙事、叙情の文を書いたり、野中至の富士登山のことを叙した單行本『高嶺の雪』を出したりして、頻りに、新國文の風味を宣傳した。

勿論、それは、一時、讀書界を風靡して、彼れの模倣者を出したが、短歌の革新運動のやうに、後まで引續いた功果はなかつた。けれども國文學復興の上に於ける彼れの業績は、佐々木信綱の『日本歌學全書』の刊行と共に、文學的に必ずしも無意義のものではなかつた。美文と稱する散文詩風の一體が、後に大町桂月、武島羽衣、鹽井雨江らによつて作り出されて、非常な流行を示したのも直文の感化に負ふところが尠少でない。

落合直文は、仙臺出身の人で、明治十八年帝大古典科を卒業した。彼れは國文、短歌のために半生を捧げたほどの熱心家て、其の文學的才能も亦傑出して居た。彼れは三十六年、四十三歳て世を去つた。其の著書には、『萩之家遺稿』『萩之家歌集』などがある。

(三) 劇文學開拓と學海、櫻痴

此の期の文學中、默阿彌ら江戸演劇のあとを受けて、新時代の人々が指を染めたのは、戯曲革新の仕事であつた。其の最初の音頭取となり、指導者となつたのは、坪内逍遙、森鷗外であつた。勿論、逍遙鷗外に先立つて、依田學海らが、官人らと共に、劇界革新を企てたが、それは、寧ろ無意義に近かつた。何となれば、學海は、史劇や、歷史小説の眞正の意義さへ理解し得なかつた舊時代の教育で頭を固めた保守的人物だつたからである。彼れは、二十二年、篁村、南翠らと提携して、演藝協會を組織して、脚本の改良、劇場の革新を計つたが、失敗に歸した。當時、彼れは、『文覺上人勸人帳』『拾遺後日連枝楠』を川尻寶岑と合作した。それは、正史通りのもので、史劇として何等新しい味がなかつた。而してそれを上演した時にも。外題を改めることを餘義なくされて、『文覺上人勸人帳』を『那智瀧誓文』として、表面では、作者を竹柴其水としたやうな有樣だつた。蓋

し學海が、演劇改善に關する熱意は、多とするに足りたけれども、識見、素養に於て、新代に適應してゆく作者の資格に乏しいところのあつたのが、彼れの志を爲さしめなかつた主要素の一つであつた。

學海と同じやうな地位に起つて、兎も角も作者として、團十郎と提携して、其の新作を實演することの上に於て、成功したのは、福地櫻痴であつた。櫻痴は、多能多方の人で、最初は、政論家として、政治家として、其の才名を博したが、政界に失脚すると、筆を小說、戲曲に着けて、進んで梨園の人となるに至つた。彼れは、二十三年十月、小說『不平の掃溜』を書き、續いて、歷史小說數篇を書いたが、小說に於ては、殆ど見るべきものがなかつた。畢竟、それは彼れの餘技に過ぎなかつた。唯尋常作家とちがつて、史的智識に富み、世態に通じ、政界の裏面を知つて居ると云ふやうな長所はあつた。而して脚本に於て、彼れは小說よりも、より多くの成功を收め得た。

それは、彼れの作品が、學海らに比較して稍優れて居たと云ふことにもよつたが、其の主因は活歷物の風潮の旺んな時代に乘じて梨園に入り、團十郎に對して、協和的、漸進的の態度を以て接し且つ團十郎の技藝と調和すべき脚本提供したによるのである。彼れの作は、『春日局』『大久保彥左衞門』『日蓮記』『關原譽凱歌』等が、當時の主要なものだ。何れも藝術的芳香に乏しいものであつ

た。けれども在來の夢幻劇に現はれたやうな不自然や、突飛や、殘忍なところはなかつた。約言すれば、上演に適した穩健な作品だつた。從つて詩的情熱も、強い藝術的魅力も缺けて居たのは、止むを得なかつた。

だが、局外から、梨園に入つて、歌舞伎座の立作者となり、其の新作乃至改作を續々、上演させることは、當時にあつては、極めて至難の問題であつたのを、福地櫻痴の人物と手腕とによつて、第一に打破し始めたことは、演劇史上に於ける有意義のことであつた。それによつて、文壇と劇壇とが始めて接近し、握手するところの第一歩に入り得たのである。

櫻痴の全盛時代は、二十六七年頃迄續いた。然し、彼れの有力な作品は、寧ろ其の以後に出た。櫻痴、團十郎の提携時代に、依然、劇界に居て、先進者として尊敬されて居た河竹默阿彌は、矢張彼れの本領を維持する一方、團十郎のために老巧な活歷物を書いた。坪内逍遙も、彼れに對しては敬意を拂つた。二十五年には、彼れの傑作を收めた『狂言百種』が、春陽堂から出版された。それは八卷まで出た。

（四）新しい有意義な演劇論

斯うした時代に當つて、眞に有意義な演劇革新の意見を發表したのは、坪内逍遙、森鷗外であつた。蓋し當時の知識階級の中堅を以て自任した、學者らの革新意見は、何れも、極端に馳せて居た彼等は、自己の趣味、嗜好、智識を標準として、其の意見を樹てゝ、或は舊劇の物の殘忍と卑猥とを排して、高雅な新脚本を要求したり、或は劇の脚色、人物、臺詞衣裳をも略ぼ事實通りにしようと望んだ。それ等は、勿論、一面の弊を穿ち得た說であつたが、結局、革新の正徑を目ざしたものでなくて、其の旁徑に過ぎなかつた。何となれば、高雅な脚本を要求しても、それが藝術的に如何なる內容を有しなくてはならぬかについて、彼等に何等有意義な意見がなかつたからである。また史劇の考古癖や舊劇の寫實化も勿論、ある程度迄必要であるけれども、極端に馳せると、藝術味を破壞したり、減損したりする恐れがあつたのだ。

ところで、鷗外逍遙は、それ等の學者とは、別種の見地に起つて居た。鷗外は主として、『柵草紙』に於て、其の革新意見を發表したが、彼れは、所謂改良論者の極端な要求の妄を一排すると共に、すべての革新は、先づ脚本を第一として、始められねばならぬことを主張して、在來の作者が俗衆に媚びることを戒めた。而して、脚本革新に資するために、カルデロンの『ザラメヤ村長』を『調高矣洋絃一曲』として、二十二年『讀賣』に發表し、續いて『柵草紙』にレッシングの『エミリヤ・

ガロチイ』を『折薔薇』と改題して掲げた。

鷗外の翻譯した脚本は、歐洲劇上演の氣勢を作る上に於ては、未だ何の反響をも得なかつた。恐らく、當時、それを讀んで、價値を認めたのは、少數の識者に過ぎなかつたであらう。だが、鷗外は上演に適するやう、其の臺詞などを、在來の舊劇物に調和することに力めた。異國的な言葉を日本化する上に可なりの苦心を費した。だから、『洋絃一曲』の中へ出るある陸軍大尉の臺詞にも『日を重ねたる行軍なれば、定めて孰れも勞れつらん、聯隊長がユエナより來られし上ならでは、聯隊揃うてグアデロオへ行進は爲し難し。それには餘程時間もあれば、今番號の札を渡せば、非番付の順序に因り、ザラメア村に宿を求めて休憩せよ。何んと結構な命令であらうがな。」と兵卒に云ふところがある。これほど、舊劇式の臺詞を用ゐてあつても、歐洲劇となると、殆ど當時の俳優の誰れもが理解すべき知識を持つて居なかつた。

坪内逍遙は、劇界革新について、鷗外よりも、一段の熱烈な意義と執着力とを持つて居た。逍遙は、既にシエークスピヤの『シイザア』を淨瑠璃體に譯して、明治十六年に發表したほどであるのみならず、年少時代から觀劇趣味に於ては、非常に進歩して居たので、夙に劇界革新の希望を抱いて居た。それで逍遙は、鷗外と呼應して、脚本の主要點が、人情描寫の上に自然味を具備するにある

ことを主張して、劇壇を警醒した。而して明治二十六年十月、『早稻田文學』に『我國の史劇』と題した有力な論文を發表して、史劇の革新について、大聲疾呼した。此の論文は、小說界に於ける『小說神髓』にひとしい革新の宣言書であつた。

（五）　逍遙の新史劇についての意見

今、其の大要を紹介すると、逍遙は、藝術的批判の上から、巢林子、默阿彌、學海、櫻痴の史劇に於ける缺點を指摘して、「蓋し脚本の精髓は個々人物の性格を因となし、境遇を緣となし、此の因緣によりて、成れる著大なる業果を描き、以て人事の眞相を現はすに在り。從つて史劇は件の人物を過古の特殊なる境遇の中に立たしめ、以て人事の眞相を過古事實の上に表現せんと力むる者のみ。さればかの史上の事相と人物とを寫實的に舞臺上に現はすが如きは抑も末なり。史劇の過古相は普通の觀者をして過去の幻影を起さしむれば則足る。」と述べ、進んで其の改良策に及び、從來の劇の根本的缺點が、（一）敘事詩の體と劇詩の體との混淆（二）性格を無視して事件を主とする事にあるを指摘し、何を措いても、先づ此の點に改良を加へなければならぬ旨を痛論して、歐洲風の性格劇の必要を主張した。

蓋し逍遙は、古來の夢幻劇は夢幻劇として存在せしめ、別に性格表現上に力點を置くところの藝術的新味ある史劇を要求したのである。夢幻劇の新名稱は、沒理想の新語と共に逍遙が創造したのであるが、筋の不統一及び、不自然、不現實、變化自在を通有性とした時代劇が、すべて夢幻中の觀を呈するのを見て、夢幻劇としたのは、極めて要を穿つた新語であつた。畢竟、逍遙は、さうした夢幻劇を論破し、且つそれ改作するとも、何等の功果なく、却て其の長短、美醜を合せ失ふべきを知つて、新史劇の創造を提唱したのである。

勿論、評論壇上に於ては、それに對する反響はあつたが、實際の劇界當事者及び在來の劇作家らは、逍遙の新說を解する丈の頭腦を持つて居なかつた。而して依然として、舊風を撲守した史劇が上演されて居た。それで、逍遙は、自家の所信を裏書するため、脚本革新の實際に資するため、暫く沈默して、『桐一葉』の執筆を始めたのである。

第拾壹章　文化思潮の特相と美術及び演劇

（一）文明批評の先驅者大西操山

第二期に於ける文學的進步の結收を爲すに當つて、見逃がすことの出來ないのは、評論の進步である。文藝評論は、『柵草紙』及び『早稻田文學』によつて、其の新典型を示さるゝと同時に、進步の緖に就いたが、それと同時に、一般の思潮評論も亦漸く進步的潮勢を呈して來た。

此の先頭に起つて、文化批判の筆を逸早く執つたものは、蘇峯、雪嶺のほかに、大西操山（祝）が居た。他に詩的感想を宗敎味に一致させた巖本善治が居た。キリスト敎文學の紹介者として、社會批判の先驅者として起つた內村鑑三が居た。西洋哲學の紹介者乃至文化的現象の考察者としての井上哲次郞、井上圓了らが居た。

評論家として、大西操山の功績は、最も偉大であつたと云はねばならぬ。彼れは、哲學者としては、『西洋哲學史』『良心起源論』『論理學』『倫理學』等の名著を出したが、文化批評の方面に於ても學究の臭味を脫して、夙に其の溫稚な文章と明透な見解と多角的な趣味とを以て、嶄然として、其の

卓拔な力を示して居た。『美術と宗教』『和歌に宗教なし』『日本人は美術心に富める乎』『宗教小說と女流作者』『詩歌論一班』などの論文は、明治二十年から二十三年頃迄に諸雜誌に發表したものであつた。また美學的論文としては、二十四年頃に『滑稽の本性』『悲哀の快感』などを書き、政治、道德方面に於ては『英國政黨の起源』『政黨の利害』を二十年頃に論じ、『方今思想界の要務』倫理學は哲學が將た科學か』『忠孝と道德の起本』『敎育勅語と倫理說』『基督敎々的敎育と國家』などを二十六年迄に發表して居る。斯うして、操山は、歐洲留學時代迄、殆ど文化批評の筆を絕たなかつた。

彼れは、如何なる問題に對しても、自由な、進步的意見を有した批評家であつた。從つて保守的な思想、獨斷的な見解に對しては、あく迄反對して、論戰を交へることを辭しなかつた。勿論、其の論戰は、君子的態度を以て終始して居た。彼れの意見の述べ方は、穩當で、婉曲で平明であつたが唯高山樗牛のやうな情熱の力、鼓吹する力に欠けて居た。彼れの見識が、遙かに樗牛を拔いて居たに關らず、割合に彼れの文化批評が、青年に熱讀されず、却て識者や、眞面目な學徒の間に尊重されたのは、それがためであつたらうと思はれる。

彼れが、二十三年十二月『日本評論』に於て發表した『詩歌論一班』のうちには、既に新しい脚本について、豫言した一節がある。それによると、「戲曲はもと舞臺にて演ずる爲めに作りしに相違なき

が、今となりては、必ずしも演ずると定限りたるものにあらず。專ら讀む爲めにのみ作るもあり。此の類の戲曲を獨逸にては「ブーフ・ドラーメン」と名けて、別に一種の名稱さへあり、又專ら讀む爲めにのみ作りしと云ふにはあらざるも、古今の傑作と許さるゝものの中舞臺にて演ずるよりも、寧ろ書齋の中にて熟讀玩味するに適したるもの無きにあらず。或人はゴエーテの「フアウスト」を評して此の種の作と云へり、又コールリツヂは、シエーキスピヤーが傑作の一なる「キング・リアー」を評して舞臺で演じては主人公（卽ちリアー）の可憫なる狀態に餘りに目もあてられぬ樣あれども之を熟讀して其妙所を深く玩味するには、此上もなく好き戲曲と云へり。我國の淨瑠璃作者などが此迄作りしもの中には意味深長にして專ら熟讀玩味に適したるものとては至て稀なれども、今云ふ如き戲曲は、我國文學の進むに從ひ、必ず一種の著作として現はれ來るべきものと信ず。」と述べたがそれは、日露戰後に於ける文壇の新人が、續々、讀むべき脚本を書いたことに適中して居る。而してさうした脚本の價値を彼れは、斯う肯定した、

戲曲はその起は舞臺にて演ずる爲めに作りしなれども、今はしか演ぜざるものもありて、それを戲曲の一種と見做さゞる理由はなし。舞臺にて演ぜぬ戲曲と云へば、其本來の目的を失ひたる樣にて、奇異に思ふ人もあらんかなれども、是れ只た物の最初の有樣を見て始終その有樣にのみあるべしと考ふる過なり。縱令ひ舞臺にて

演ぜさるも、戯曲には他の詩歌文章になき妙趣ありて、別に一種の有力なる（寧ろ最高等の）文學として永久に存するならん。（下略）

文學の門外漢だつた操山の意見が、如何に自由で、進歩的であつたかは、此の一節に於ても窺ひ得るのである。彼れは、歐米に於ける女流作家のことについても、相當に精通して居た。

千七百四十年、リチヤードソンが其傑作「パメラ」（書名）を著してより、著名の小説家踵を接して出現し、爲に英國の文學界に一層の美觀を添へたり。小説の歴史を閲するに、吾人か注意を喚起する一事あり。即ち小説家中女流作者の多き事是なり。（中略）英國女流小説家のおびたゞしき、固より茲に之を枚擧するの遑あらず。ミス・ボルネーの世態を寫すに妙なる、ミツセス・ラツドクリフの奇異譚に名を得たる、ミス・オーステンが爽快なる筆の讀者を悦ばしむる、ミス・エツヂウオルスが愛すへき著作の世敎に益ある、シヤルロツト・ブロンテか感情的の小説に才名を轟したる、ミス・マルチノーが政治小説に高評を博したる、是皆英國文學を讀む者の熟知する所なり。インチボールド。オーピー。ゴール。ガスケル女等に付きては茲に陳述せずして可なり。（下略）

斯うして、操山は、どの方面にも、相當の素養を有して、文化批評の執筆者としては、最も適當な資格を具へて居た。島村抱月、金子筑水、綱島梁川らは、一面、逍遙の指導、感化を受けると同時に、多面、學窓に於て、操山の感化を受けたところが少くなかつた。而して操山の論文が、文藝

評論振興の上に重要な好果を與へたのは、云ふを俟たかつた。

大西操山(祝)は、元治元年八月、備前岡山に生れた。明治十年、京都同志社に入り、十七年、神學科を卒業すると、上京して、東京大學豫備門に入つた。二十二年七月、彼れは大學院學生となり、其の卒業論文として、『良心起源論』を書いた。二十四年九月から、三十一年二月迄、早大の前身である所の東京專門學校で哲學心理論理、倫理、美學などを教授したが、其の人格、識見、熱情は、深く學生を感化した。其傍ら、操山は、『六合雜誌』に執筆して、當面の時事問題に向つて、進步的意見を洩らした。三十一年二月、歐洲留學の途に上つて三十二年八月、病のため歸朝すると間もなく、文學博士の學位を受けた。其の頃。彼れは、京都文科大學の長となることに內定されたが、到頭、其の地位に就かないで、三十二年十一月二日歿した、年三十六歲であつた畢竟、彼れの短命は、主として、其の過度の勉學が、弱い身體に禍した爲めで、誰も痛惜しないものはなかつた。

(二) 哲學の民衆化的傾向

當時に於ける文化思潮の特相は宗教味、哲學味の要求にあつた。キリスト教の發展や、佛教の復活や、哲學の民衆化的傾向は、畢竟、其の要求に應じた現象である。曩きに、民衆知識の稍進步し

た共に、現當の我を過古の我のうちに觀照すべく、勃興した歷史研究の思潮は、更らに二十五年から二十六年にかけて、一步を進めて、今度は、現當の我の內容、我の安心立命について、若くは其の心的活動について、考察を加へようとする風潮を誘起した。それには、勢ひ、宗教、哲學の研究によらねばならなかつた。宗教味、哲學味の要求は、强い勢を以て、勃興した。

哲學の民衆化と云ふことは、國民の思想を深めてゆくことや、考察力を强くすることの上に、勿論、相應の好果があつた。だが、其の民衆化の程度は、未だ庶民的色彩や、調子の上に稀薄な點はあつたが、先づ西洋哲學研究が起り、次ぎに東洋哲學が二十七年前半に入つて研究され、惹ゐて漢文學の興起ともなつた。それについて、大西操山、井上巽軒(哲次郎)三宅雪嶺らは、左樣した方面に相當の寄與をした人々であつた。

殊に操山の哲學的講演は、趣味があつて、平明で、誰にも、わかり易かつた。『ショーペンハウエル』『先哲スピノーザの性行』などそれである。彼れは、ショーペンハウエルの哲學を說くに當つても、先づ一般人の興味を惹起させるために、「其の哲學は頗る佛敎に類似せる所あり、我等は久しく佛敎的思想の裡に養はれて、厭世的世界觀は知らず識らず、我等日本人の心地に侵架せり。佛敎には大乘小乘の差別あれど、要するに其の著く厭世的傾向を有する者なることは蔽ふ可らざる所なり。

故に我等がショーペンハウエルの哲學に接すれば、全く見知らぬ他人に逢ふが如くならずして、恰も知己朋友に會するの感あり。」と云つたやうな調子で、哲學の民衆化の上に極めて有力な說き方をした。

三宅雪嶺は、後年、政論に主力を注ぐやうになつたが、二十六年頃は、哲學研究に非常な興味を以て居て、『我觀小景』を著はした。それは、雪嶺一家の哲學見を述べたもので、勿論、今日から見れば、獨斷的なものであり、幼稚なところもあるが、當時にあつては、兎も角も、一異色ある思想で、フエヒネルの『死後の生活』などに共通した點があつた。而して其の長所は、奇想の閃きと文章の優れて居た點にあつた。それで、『我觀小景』は、さうした點に於て、哲學の民衆化に幾分か貢献したところがあつた。

井上巽軒は、哲學者の能文家である。而して豐かな常識と多方面の趣味を有する點に於て優れて居た。彼れは、明治十七年、帝大から歐洲留學を命ぜられて、ハイデルベルヒ、ベルリン、パリー、ライプチヒなどの地で、哲學、理化學などを修めて、二十三年、歸朝すると、文學博士の學位を受けて、其の哲學的造詣を續々發表した。滯歐中、條約改正問題に對する一家見を披瀝して、『內地雜居論』を公にして世論を動かしたのは、有名な話である。彼れの雄健で、多彩な文章は、哲學趣味を

普及する上に特殊の力があつた。殊に二十四年十一月、『教育時論』に於て『宗教と教育の衝突』と題した論文を公にするに及んで、論壇に大波瀾を惹起したことは、文化批評の興起を促かすべき一動因となつた趣があつた。

（三） キリスト教の發展と佛教の復活

キリスト教の發展、佛教の復活と云ふことは、當時の重要な一現象であつた。キリスト教の發展は、新島襄及び其の門下の活躍や、キリスト主義の教育の鼓吹と宣傳とによつたが、一つはそれが新代の文學と結合した事が、殊に若き人々の心を動かす上の大きな力となつた。例せば、キリスト教徒は、文書傳道に力を入れるため、いろいろの雜誌を發行した。其の主要なものには、『同志社』『文學』『青山評論』『女學雜誌』『三籟』『青年文學』『評論』『裏錦』『六合雜誌』『心海』『自由基督教』『眞理』などがあつた。而して『國民之友』は勿論、キリスト教趣味の文學を傳へる上に於て、力を盡した。キリスト教趣味を鼓吹した文士には、巖本善治、海老名彈正、內村鑑三、横井時雄、植村正久、松村介石、高橋五郎らがあつた。かれ等の人々は、勿論、嚴密なる意味に於て、文壇の人々と云ふことは出來ない。けれども、キリスト教思想を文學的に宣傳する上に相當の力を盡した人々たつた。

殊に巖本善治の感想錄は、清新な幽雅な味があつて、何となく、人を魅する神韻を以て居た。內村鑑三は、『地人論』『宗教と文學』などに於て、警拔な言論を發表し、松村介石も雄健な筆で、人道を說いた。高橋五郞の博識を衒つた言論も亦當時の一異彩たるを失はなかつた。

斯うして、キリスト教は、文學と結び付いて、二十六年頃には、其の方面の文學批評に於ても、相當見るべきものを出して、各地の進步的な靑年を風靡した。井上巽軒のキリスト教攻擊のことは拙著『明治大正五十三年史論』に於て、敎學上の重要問題として、詳細に論述、批判して置いたからこゝでは、述べない。

佛敎の復活は、主として井上巽軒が、キリスト敎の趣旨が、勅敎の精神に反するものとして、痛擊した時に佛徒が一齊に井上に身方して蹶起したことに原因して居る。其の他、シカゴに於ける萬國宗敎會議があつたことや、歐洲に於ける印度哲學の流行したことなども、間接の原因となつたと思はれる。『佛敎講義錄』なども、佛敎徒の覺醒と共に、發行された。要するに、今まで惰眠を貪つて居た佛徒は、二十五年の初頭から漸次、活動の元氣を出して、『明敎新誌』『佛敎文學』『佛敎公論』『反省會雜誌』『佛敎』『淨土新報』『同學』等の雜誌は筆を揃へて、世間に其の敎旨を宣傳しようとするに至つたのである。それはキリスト敎徒のやうに、巧妙でなかつたのみならず、直ぐに文學上

に何等影響しなかつたけれども、文化的現象の一つとして見逃すわけに行かない。而して思想上に於ては、東洋哲學及び漢文學の新研究熱と相俟つて、西歐文化に對する東洋文化の宣傳となつた。

こゝに一言したいのは、佛教を哀世教と思ふものが、當時の有力な學者中にもあつたことで、大西操山さへ左樣思つたのである。だが、方便門たる小乘は兎も角大乘の教へは、最早、哀世的てはなくて、樂世的である一念三千の哲理に味到すれば、過、現、未の三界も、自他も、現世も、佛化して、歡喜と法悅とのうちに包まれるのだ。私らの住む國、家、土地が佛化するのだ。「三界は皆これ佛の國なり。」との感じが生ずるのだ。私はこれを以て、佛教は、斷じて、哀世教てないと信ずるものだ。釋尊の本懷たる『法華經』によれば、明かにそれを知ることが出來よう。

（四）此の期の劇界と新舊勢力

此の期に於ける演劇の事は、戲曲の進步的行徑を叙論したうちに、略ぼ盡きた感があるけれども一言、劇界の大勢を述べよう。此の期の主要現象の一つは、二十一年七月、田邊太一を會長とした演藝矯風會が、其の發會式を鹿鳴館で擧行したことだ。其の時、團十郎、菊五郎も、矯風會の趣旨を贊成して、出演した。だが、『鞘當』や『先代萩』を演じたことは、そこに、何等の新しい意義が

認められなかつた。

矯風會が進化したのが、二十二年九月に出來た日本演藝協會だつた。其の會長には、田邊太一に代つて、土方久元（當時の宮相）が選ばれた。其の幹部員のうちには、岡倉覺三、高田早苗、關直彦森田思軒らが居た。文藝委員には、尾崎紅葉、坪內逍遙、河竹默阿彌、山田美妙、依田學海、森鷗外饗庭篁村、川尻寶岑らが居た。技藝委員には、團十郎、菊五郎、左團次を始め各方面の名流を網羅して居た。

斯うして、大體の組織は、整つて居たけれども、其の方針は、逍遙、鷗外の說示したやうではなかつたので、何等の新境地を開くことが出來ないで、有耶無耶のうちに、消滅した形となつた、だが、それが、幾分か惰眠中の劇界を目ざしめる小刺戟となつたやうに思はれる。

當時の舊劇に於て、主要な地位に起つたのは、團十郎と菊五郎とであつた。菊五郎は、世話物に於て、其の名人肌を發揮して、巧緻な藝を示したが、團十郎は、假名垣魯文の所謂『活歷』に成功して、其の技藝の上に獨自の境地を開いた。『活歷』に用ゐられた脚本は、藝術上から見ると、寧ろ邪道に陷つたもので、時代物を正史の通りに演じ、扮裝、科白を其の時代の風習に近似させることを主眼としたが、團十郎の內部的な傾向は、彼れ一流の『腹藝』によつて、さうした邪道に落ちたところ

の脚本を活用し得た。換言すれば、そこに、團十郎の有する創造力を働かせて、史上の英雄、烈婦を如實に自己の藝の上に再現した。俳優としての團十郎の偉大なところは、さうした點にあつた。彼れが自撰した『歌舞伎十八番』は、何れも、彼れ獨自の藝術であつた。而してそれは、彼れ以外のものが、漫に模倣すべきものではなかつた。

斯うして、當時の劇界は、主として、菊五郎と團十郎とによつて裝飾されたが、他に舊劇に對して、挑戰したところの新劇が、時代の要求に應じて生れたことは、注目すべき一現象であつた。それは、在來、大阪で、壯士出身の落語家として知られて居た川上音次郎や、新聞記者の角藤定憲によつて、壯士芝居なるものが、始められたことである。

此の壯士芝居を眞先に始めたのは、須藤定憲であつた。角藤は、大阪で、中江兆民が主筆をして居た『東雲新聞』に居たことがあつたが、大體に於て、政治運動をして居た壯士生活を續けて居た。彼れが板垣退介中江兆民らの贊助を得て、二十一年十二月、大阪の新町座に於て、始めて壯士芝居を演じて、『豪膽の書生』及び『戰爭餘談上野曙』を上場したのは藝術的自覺に基づいたよりも、より多く政治上の自由思想宣傳のためであつたやうに思はれる。

川上音次郎が、畢竟、角藤の壯士芝居に刺戟されて、雜誌記者生活をして居た藤澤淺次郎らと提

携して、堺の卯の日座で、書生芝居を演じたのである。其の上演脚本は、『板垣君遭難實記』と矢野龍溪の『經國美談』を脚色したものだつた。勿論、角藤も、川上も失敗したけれども、彼等は、それに屈しなかつた。川上は、二十四年六月、東上して、淺草の中村座で、三回ばかり、興行を續けて依田學海の『双葉楠』や、福地櫻痴の『平野次郎』などを演じた。

川上の書生芝居に刺戟されて起つたのが、伊井蓉峰らだつた。彼れは、洋畫家水野好美らと提携して、濟美館を起して、二十四年の冬、淺草の吾妻座で、『男女合同改良演劇』を見せた。男女合同と云ふのは、葭町の藝者だつた千歳米坡が、一座に加はつたからだ。其の上演脚本のうちには、學海の『政黨美談淑女操』があつた。だが、要するに、彼等の芝居は、藝術味がなくて、一時、好奇的に迎へられたのに過ぎなかつた。彼等は、何れも失敗して、旅廻りに出なければならなかつた。けれども新しい芝居を要求する精神は、既に觀衆のうちに動いて居たので、彼等が再起すべき根が絶えたのではなかつたのである。

（五）　日本畫の勃興と雅邦芳崖

此の期に於ける美術界の主要現象は、國粹顯揚の思潮と呼應して、日本畫が勃興の勢を盛返した

ことである。美術學校が二十年十月、勅令を以て、其の設立を發表されて、二十二年二月、濱尾新を校長として、授業が開始したことは、日本畫振興の上に最も有力なものとなつた。二十三年には岡倉覺三が、濱尾に代つて校長となつて、繪畫、彫刻、鑄金、彫金、漆工らの諸科を整備するやうになつた。他の學科は別として、日本畫には、岡倉覺三、橋本雅邦が、主力を注いで、其の初期の卒業生として、横山大觀、下村觀山、菱田春草らを出した。

雅邦は、二十一年十一月、世を去つた芳崖と共に、在來の舊様を離れて、明治の新日本畫を創造しようとする抱負を持つて居た。芳崖は、それがため、急進的態度を執つて、一氣に目的に向つて邁往した。其の代表作は『悲母觀音』で、それを完成するために、十八度も、改描したと云ふ一事を以てするも、彼れの熱誠と苦心とを推測することが出來る。而も其の表現は、舊様を離れて、端嚴な觀音の慈容を如實に描き出した點に於て、傳彩の優麗なる點に於て、新時代の名畫たるべき質を示して居た。

其の他『仁王捉鬼の圖』『不動明王像』『猛鷲』『龍虎』『羅漢』など、概して雄健の致を具へて居て、どの作品にも、彼れの藝術的に緊張した精神が充實して、筆端に溢れて居た。

雅邦は、芳崖の遺志を空しくしまいとして絕えず、岡倉と提携して、後進を指導した。而して各

自の才能を大成せしむることに力めた。彼れの日本畫に於ける主義は、「畫は人の心にあつて、描法の如きは、それを現はす一方便に過ぎない。神興が先づ動いて、筆が之に從ふのだ。」と云ふにあつた。要するに、畫の神韻を重んじて、形像を輕く見たのである。外形よりも、內在の美を尊んだのである。それで、彼れは、始終『心持』と云ふことを後進に說いたが、『心持』は、一種の氣分である。畢竟彼れは、表現法を輕視したやうではあるが、其の實、輕視したのではなくて、重視したのだ。だが、本末と云ふ上からして、精神、氣分を本にして、技巧、表現を末としたに過ぎない。斯うしなければ、明治の新畫を創造し得ないからであつた。

雅邦ほど、諸流派を研究したものは少かつた。彼れは、西洋畫や支那畫や、日本のあらゆる流派の長短を究めた。而してそれ等の長所を執つて、自已獨得の新天地を創造しようと力めた。彼れの畫が、多種多樣で、いつも、向上的で、沈滯しなかつたのは、それが爲めだつた。

斯うして、美術學校は、新日本畫の先驅者としての雅邦と邦畫の鑑識に長じて居た岡倉とを得て藝術的に進んだ。岡倉は、天心と號して、畫家ではなかつたが、始終、其の頭の中で、新しい畫を描いて居た人だつた。精神的畫人だつた。而して日本美術の振興に對しては、最も熱心で、二十一年に發行された美術雜誌『國華』は、彼れが、フエノロサ、九鬼隆一らと共に協力して出來たのだ。

また二十二年に臨時寶物取調局が設けられた時も、特にそれに力を盡し、古社寺保存法の制定にも參與した。日本古美術が海外に流出することを防ぎ得たのは、寶物取調局が設けられたからであつた。此の岡倉が、雅邦と提携したのであるから、大觀、觀山、春草、孤月のやうな英才を美術學校から出したのは、當然の理勢だつた。

（六） 靑年繪畫協會と明治美術會

日本畫勃興の氣運は、美術學校のほかに、新しい靑年畫家の團體から成つた靑年繪畫協會を生んだ。其の會員は、寺崎廣業、山田敬中、尾形月耕、梶田半古、村田丹陵らであつた。彼等は、在來の舊式な日本畫に不滿を感じて、彼等獨自の新畫を創造しようとして起つたのである。彼等は、曩きに設立された美術協會の情實に囚はれつゝある弊風から解放されて、其の淸新な天地を別に築きあげようとしたのである。この新運動は、年を追うて、潛勢力を作つて、漸く彼等の新飛躍を見ようとするに至つた。

其の他、二十三年、宮內省に帝室技藝員制が設けれて、先づ橋本雅邦、田崎草雲、森寛齋、守住貫魚、柴田是眞、狩野永悳の六人が、技藝員に選任された。二十六年には、瀧和亭、幸野梅嶺、野

ロ幽谷らが、選任された。この事も、日本畫勃興の上に、宜い影響を賦與したのである。

唯ひとり、不振の狀態に陷つたのは、西洋畫であつた。國粹顯揚の聲は、洋畫の發展を阻止し始めて、二十一二年頃は、非常に沈衰の形となつだ。此の時、始終、洋畫の維持と伸張とに力めたのは小山正太郎であつた。

彼れは、明治二十年駒込團子坂に不同社と稱する私塾を起して、後進を誘導した。他に五性田芳柳の光彩會、山本芳翠の生巧館、原田直次郎の鐘美館などがあつて、矢張、子弟を養成したけれども、小山の不同舍が、最も有力で、其の塾から、下村爲山、小杉未醒、中村不折、石川寅治、中川八郎、吉田博、坂本繁次郎、鹿子木孟郎、滿谷國四郎らを出した。

當時の衰勢から拔け出ようとして、二十二年に小山正太郎、淺井忠らの發企で、外山正一、矢野文雄、菊池大麓、花房義質、田中不二麿らの後援を得て、明治美術會を組織した。而して其の秋、第一回西洋畫展覽會を開いた。けれとも世人は、それに對して反感的誤解を抱いて、殆ど何等の好反響をも得なかつた。而して靜かに、其の復興の時を忍耐して待つよりほかはなかつたのである。

第三期　ロマンチシズムの時代

第一章　思想界の大勢

（一）日清戰爭に對する文化的考察

明治二十七年七月に開始された日清戰爭は、日本文化の進歩の上に重大な影響を與へた。それは惡い意味での影響ではなくて、宜い意味の影響であつた。單にそれを文學方面に限定して考へて見ても行詰まりつゝあつた創作は、此の戰爭の勝利と共に、新しい一轉機を得て、在來とは別種な方面を開拓し始めた。評論も亦、漠然たる斷片的、隨感的のものから、論策的、科學的なものとなつて文藝專門の批評を事とする新人が續出した。日清戰爭を分水嶺として、文壇は、有望な轉向を爲したのである。

それについて、私は、此の期に於ける文壇の大勢を叙論する前に、日清戰爭に於ける文化的意義について、一言しなければならぬ。日清戰爭に於ける表面上の目的は、弱小な朝鮮の獨立を助けて、暴横な淸國に膺懲を加へるにあつたのだが、當時の政論家は、一歩進んで、其の內在的意義に考へ及んで、畢竟。藤田東湖、橫井小楠、橋本景岳、佐久間象山、吉田松蔭らが鼓吹した帝國主義を時

勢の潮に乘つて、實現したものだと解釋した。勿論、それも一解である、だが、私は、それ丈の解釋では、滿足することが出來ない。

私の文化的考察に依ると、日清戰爭は、近世的文化に目ざめて、在來の東洋文化を消化した上に更らに西歐文化を積極的に吸收したところの日本と近世的文化に目ざめないで、在來の自國文化に囚はれて、消極的に西歐文化を吸收することに懶かつた清國との文化的葛藤だと見るのである。換言すれば、東洋に於ける新文化を代表する日本と舊文化の殘骸であつたところの清國との新舊勢力の衝突にほかならぬのだ。而して近世文化の勢力は、世界的大勢の趨くところの正道であり、合理的な行徑である以上、主として舊文化に固着したところの淸國が敗北したのは、勿論、合理的な結果に到達したわけである。

だから、日本は開戰する前から、文化的大勢の上に於て、當然勝利を得べき地位に起つて居たのだ。而して其の勝利の個的要素については、拙著『明治大正五十三年史論』に於て、指摘した通り(一)日本國民性の優越(二)文化の優越(三)政府當局に於ける人物の優秀(四)海陸軍人の優秀などにあつた。この點の細說は、『五十三年史論』に讓つて置いて、征清の勝利が、日本の文化にどんな波動と影響とを與へたかを大觀したい。

征清の勝利が直ぐに表面的に結果を示したのは、日本の國際的地位の向上と飛躍とである。蓋し征清の勝利を得る迄の日本――明治二十七年の上半期までの日本――は、地理的名稱の上に於て、僅かに世界に知られて居たに過ぎない有様に居た。其の國際的地位は他の弱小國と同じやうに見られて居て歐米人中には、日本を支那の屬國と思つたり、朝鮮や、安南などと同程度の國と誤解して居たやうな狀態にあつた。

それに就て、德富蘇峯は、當時其の實例を擧げて、『記者の知友、嘗て歐洲に遊ひ、或る貴女と會す。貴女卒爾として問うて曰く、日本とは支那の何省に屬するやと。記者嘗て佛京に於て發行したる輸入新聞の、湖南事變を錄するを見るに、津田三藏を始めとして、其の周圍の人物、服裝宛然たる支那人なり。亦以て如何に、大日本なる獨自一己の、世界に識認せられたる程度を見る可し。何ぞ況んや政治上の勢力として、識認せらるゝに於てをや。歐米政治家の眼中、殆と大日本なかりしもの、以て知る可きのみ。』と云つて居る。

斯うした誤解と輕視とを受けた居た日本は、征戰の勝利と共に、始めて、東洋に於ける儼然たる獨立の一强國として認められた。當時イギリスに於ける『評論の評論』主筆ステツドは「昨日までは、日本はアジヤの一州だつた、わがイギリス政府は、日本と新條約を結んだが、それは唯日本當

局の自負心を滿足させようとした爲めで、公然、日本の地位を認めた爲めではなかつた。だが、今日は日本は到る處、大强國の一として、東洋に於ては、思ふに、最大强國として認められ、最早機嫌を取られることもなければ、いぢめられたり、嘲笑されたり、頭を撫でられたりすることがないであらう。」と云ふに至つた。蓋し歐米人が一般に淸國の强大を夢想することが深かつた丈に、日本の雄强に驚いたことも亦深かつたにちがいないのである。

斯うして、日本の國際的地位が向上すると同時に、今までの國民的生活から一躍して、世界的生活に入ることとなつた現象は、どんなに日本國民の自負心を高め、元氣を鼓舞したか知れなかつた。維新前までは、一藩のことのみ思つて居た日本國民は、明治に入つて、始めて、日本全體の事を思ふやうになつた。それが征淸の勝利から來た國際的地位の向上によつて、進んで、思ひを世界の全般に馳せねばならなくなつたのは、確かに偉大な進歩であつた。此の進歩についての自覺、勝利についての抱負と衿持とは、日本文化の全般に對して、宜い影響を附與したのである。而して其のことは、直ぐに、思潮の上に、一反映されなければ措かなかつた。そこに、思潮の進步、文學の向上が見出されたのである。

（二）日本主義の提唱と其の意義

先づ思想界に於ける進歩について略述すると、征清の勝利と共に、間もなく、現はれたのは、日本主義、世界主義の提唱である。明治初期から、日清戰爭時代までに現はれた思想界の現象は、進步主義と、保守主義、歐化主義と國粹主義、功利主義と藝術主義と云つたやうに漠然たる對照に過ぎない觀があつたけれども、此の期に於ける日本主義と世界主義とは、一步進んだ思想の對立であつた。

日本主義は、國粹主義の系統から出て、更らに進んで、思想的陶冶を經たものであり、世界主義は、歐化主義の系統から出て、これも思想的に一層、筋道の通つたものであつた。蓋しそれは、日淸戰爭前から、哲學の民衆化や、科學の研究などによつて、言論を事とする人々の思索が、以前にくらべて、稍精確となり、在來のやうな空漠な言議をするものが、漸次、減少し始めた爲めであつたのだ。

日本主義の提唱は、日本の戰勝から來た明確な國民的自覺の產物である。在來の國粹主義の提唱者も、國民的自覺を持たぬではなかつたが、それは、漠然とした自覺で、哲學的、科學的に思索し

ての自覺ではなかつた。また日本の國際的地位を意識しての自覺ではなかつた。ところが、日本主義の運動を起した人たちは、井上哲次郎を始め、高山樗牛、元良勇次郎、湯本武比古、竹內楠三、木村鷹太郎であつて、何れも哲學、科學に通じた人か、若くは其の方面の學者であつた。而して彼等は、主として、ドイツの國家主義思想に共鳴して、宗教の非國家的であることを信じて居た。これを、國粹主義の提唱者が、三宅雪嶺一人を除くと、大抵、哲學、科學の新しい素養がなかつたのに比較して見ると、素養の點だけでも、進步のあとが見えるのである。

日本主義の綱領とするところは、(一)國祖を崇拜す(二)光明を旨とし、生々を尙ぶ(三)精神の圓滿と淸淨潔白と期す(四)國民的團結及び社會的生活を重んず(五)武を尙ぶ(六)世界の平和を期し、人類的情誼を期すと云ふにあつた。此の派は、機關雜誌『日本主義』を發行して、大に其の主義を宣傳したが、其の中に於て、最も能く主義のために健鬪したのは、『太陽』の論壇に據つて、呼號した高山樗牛であつた。

樗牛は、明治三十年五月、『太陽』に『日本主義』と題した論文を揭げて、其の主義の大綱について、彼れ一流の明快な解說を爲した。それによると、何故に、彼等が日本主義を提唱したかを冒頭に述べて、『本邦文化の性質を考へ、宗敎及び道德の歷史的關係を審にし、汎ねく人文開展の原理に徵し、

國家の進歩と世界の發達とに於ける殊遍相關の理法を認め、更に本邦の精神と國民的性情の特質とに照鑑し、我國家の將來の爲に、吾等は玆に日本主義を唱ふ。」と宣言して居る。

これを、往年國粹主義の徒が「猥りに歐米を模倣する勿れ、我國粹は之を保存せざるべからず。一も二もなく外邦の文に心醉して、我れの長所、美所則ち國粹を抛棄するは、甚だ不可なり。」と云つたのに對照すると、日本主義が、餘程、積極的で、內には、建國本來の精神に溯元し、外には、世界各邦に於ける發達と國民性との關係の上に殊、遍の二面あることを究尋しての提唱であることがわかる。換言すれば、國粹主義よりも、眼界が、より高くなり、より廣くなつて居る。

(三) 日本主義の長所及び欠點

樗牛は、日本主義について、更らに細論に入るに先立つて「日本主義とは何ぞや。國民的特性に本づける自由獨立の精神に據りて、建國當初の抱負を發揮せむことを目的とする所の道德的原理、卽ち是れなり。」と定義し、國民的自覺の必要を高調して居る。而して其の日本主義に於ける一特色として、在來の宗教を排擊し、合せて現世的生活を强調したのは、彼等の特色あるところであると同時に世論の非難を招き、誤解を受けた點であつた。樗牛が、其の末節に於けるが如く、主義について

の穏健な解說だけならば、勿論、非難を受けなかつたにちがいない。それには「君民一家は、我國體の精華なり。之れ實に我皇祖皇宗の宏遠なる丕圖に基くものにして、萬世臣子の永く景仰すべきところなり。故に國祖及び皇宗は日本國民の宗家として無上の崇敬を遯すべき所、日本主義は、是の故に國祖を崇拜して常に建國の抱負を奉體せむことを務む。我國民は公明快濶の人民なり。有爲進取の人民なり。退嬰保守と憂鬱悲哀とは、其の性に非ざるなり。是に於てか、日本主義は光明を旨とし、生々を尙ぶ。是に於てか、夫の退讓を重んじ、禁欲を訓へ、厭世無爲を鼓吹するもろ〳〵の教義を排斥す。」と云ひ、「日本主義は、平時にありて武備を懈らず、愈々國民的團結を鞏固にせむことを務む。然れども、妄りに已れを樹てゝ他を容れざるものに非ず、國內を修めて海外に臨み、與國と共に永造の平和を享受せむことを希ふ。」と云つて居るに對しては、素より、非難の餘地はないのである。

けれども其の前半に於て、「吾等は我か日本主義によつて、現今我邦に於ける一切の宗教を排擊するものなり。即ち宗教を以て、我國民の性情に反對し、我か建國の精神に背戾し、我國家の發達を沮害するものとなすものなり。」と妄斷したことは、到底、識者の非難を受けざるを得なかつた。それは單に宗教家はかりが反對したのでないのである。

勿論、樗牛は、何故に宗教を非とするかに就て、佛教の厭世的、遁世的、出世間的なることを文化史觀の上から指摘し、當代に於ける佛敎徒の迷妄、惰眠を攻撃した。またキリスト敎についても、其の無差別的、超自然的の點が、現世的な日本國民の性質に合しないことを述べて、ひとり神道のみを賞揚した。而して獨斷的に「今日の宗教は是の如き民族(日本)と毫も爲すなきなり。是を以て我國固と一の宗教を有せず、二千年の歴史は遂に宗教と抱合すること能はざりき。」と妄斷したのである。

日本文化史を研究する迄もなく、單に文學の一點に於ても、古來、宗教と結び合つて、『源氏物語』や、『平家物語』などを生んだことは誰も知るところである。また美術の一點に於ても、奈良朝以前、天平時代、平安朝時代に於ける美術か、宗教と結びついて、偉大な發達をしたことは誰も知るところである。單にそれだけでも、樗牛か「二千年の歴史は遂に宗教と抱合すること能はざりき。」と云ふ妄斷を打破るに充分である。だから、此の點について、批評家の反感を買つたり、非難を受けたのは、當然であつた。手短かに云へば、此の點に於て、日本主義は、余りに偏狹であつたのだ。

日本主義の第二の弱點は、その說論の態度の堂々たる割合に、其の內容に特異の進步的な新見を抱有して居ないことだつた。單に其の說き方の新しいのが、一つの長所のやうに思はせた。建部水

城が、當時日本主義に對して、『日本主義は十年前、國粹主義か夙に道破し了せる所を取り來りて、新衣裳の下に衆人の前に開陳する醜然たる陋見なり。』と非難を加へたのも、左樣した弱味について同感し得ない爲めであつた。中には、日本主義の徒を目して、「商竪的匹夫のみ。」と云つた『帝國文學』の一記者さへあつた。

それ等は、勿論、稍苛酷な非難であつたけれども、樗牛が高唱したやうに、日本主義を以て、國民精神の統一を企圖しようとするに至つては、大分、無謀に過ぎたと云ふ非難を受けなければならぬのである。彼れが、三十一年七月、『國民精神の統一』を論じて、「帝國憲法、敎育勅語、及び日本主義。——吾人は是れを以て明治思想史上の三大事實となす。帝國憲法は國法の大綱を示し、敎育勅語は敎育の針路を明にし、日本主義は國民道德の本領を指示するを主眼とす。」ると云ひ、「國民的意識を根柢より統一し、是の憲法と勅語とに適應するの國民精神を陶冶するは即ち是れ日本主義の本分に非ずや。」と斷定したのは、日本主義のみが、國民精神統一の道德的權威を有するかのやうに曲解したものである。即ち日本主義の價値を余りに過大に吹聽して、國民の思想的自由を無視した點があつた。日本主義が、久しからずして立ち消えとなつたのは、斯うした偏見に囚へられ過ぎて居たからである。

けれども、日本主義の功果も亦無いではなかつた。それは、國民的自覺の內容を力めて正確に明示して、それを體系化した事が、國粹主義者の言論よりも、一步を進めた點である。卽ちそれは進步した國家主義思潮の具體化であつた。それに、日本主義者が現世的生活乃至幸福と云ふことを說いて、現實に力點を置いたのが、近代的傾向の一契點に觸れた感があつた。從つて、日本主義の提唱は、必ずしも、無意義だとは云へなかつた。

（四） 世界主義及び帝國主義の提唱

日本主義に對して、對立の地位にあつたのは、世界主義である。世界主義は、戰勝が齎らしたわが識者の世界自覺の產物である。非日本主義の具體化である。此の派の系統は旣に以前から、德富蘇峯らの言說の上に根ざして居たのであるが、日本主義の提唱が、烈しくなるにつれて、それと異つた見地の上から、非日本主義的言說を唱へたのである。其の先頭に起つたのは、『國民新聞』の德富蘇峯、『世界之日本』主筆竹越三叉と其の後援者だつた西園寺公望らとであつた。

思ふに、世界主義の名稱は、日本主義者の如く、公然、自ら主義に冠して現はれたのではなかつた。論壇に於て、いつとなく、左樣した名稱を生じたのである。而して世界主義の提唱者と目せら

れた人々は、日本主義者のやうに、協會を組織したり、宣傳に熱中したりしなかつた、それ程、積極的に主張したのではなかつた。けれども、當時の進步主義者は、大體に於て、世界主義に與みしたのである。

今、內容に立ち入つて、日本主義と世界主義との差別を考へると、殆ど其の畢竟の目的の上には大差なきを認めざるを得ない。けれども、其の目的に到達すべき過程、方法に於ては、自然、別種の見を有したのである。日本主義は、純然たる國家主義だが、世界主義は概して個人主義的であつた。前者が、國家に力點を置いて、比較的に個人を輕く見たに對して、後者は、個人に力點を付して、國家を比較的に輕く見た。また文化の上に於ても、日本主義者は、日本固有の國民性と道德とを高調したが、世界主義者は、必ずしも、それに拘泥しようとしなかつた。而して日本主義は、日本を中心として世界を見たが、世界主義は、世界を基點として日本を見た。それ等が此の二つの主義に於ける重なる差異であつた。

それで、世界主義者は、日本主義者が、宗教を排したり、國家至上主義を唱へたりするのを見て、偏狹若くは固陋だとして、手强く反對したのである。だが、彼等も、日本主義者とひとしく、日本の文化的向上と進暢とを望んだのには何等の變りもなかつた。

世界主義の提唱に續いて起つたのは、帝國主義である。此の主義は、一體に政治家若くは、政論を主とした人々の間に唱へられた。帝國主義は、畢竟、大日本主義であり、國家的膨脹主義にほかならなかつた。露骨に云へば、侵略的色彩を帶びたものであつた。けれども、帝國主義者は、それを粉飾して、(一)帝國主義は侵略主義ではない(二)排他的、獨占的でない(三)武權偏重でない(四)浪費主義でないと辯解して、畢竟、平和的膨脹主義だと云つた。それは、穩健な辯釋と云へないことはないけれども。事實、帝國主義の示すところは、必ずしも、平和的膨脹のみではなかつた、武權的膨脹もあつた。イギリスや、アメリカの帝國主義は、確かに、武權的膨脹を意味し、實證して居たのだ。

要するに、帝國主義の提唱は、日本の國際的地位の向上と對外關係との上から、自然に日本の膨脹を欲求した政治家、政論家の間に唱へられて、當面の趨勢を表示したところに意義はあつたが、思想的には、左程の價値を有するものではなかつた。而してそれは一時、日本の領土的膨脹、民族的膨脹を皷吹したところの一動力となつた功果はあつたが、軍閥政治や、軍國主義を孕む母胎となつて、後には、寧ろ日本の腹心の病を醸す一因となつた趣があつた。

それで、帝國主義は、文學上に何等の影響をも附與しなかつたが、日本主義は、國民文學の要求

となつて現はれ、世界主義は、歐洲文學研究の氣勢を助長する一動力となつて、多少、文學上に影響を殘した。此の點は、別に文藝評論の勃興について叙論する折に述べよう。

（五）　現實的傾向と道德倫理の研究

日本主義運動などから刺戟を受けた思想界は、漸次、現世的生活の軌範たるべき道德、倫理の問題について、思索しようとする傾向を帶びて來た。だが、それによつて、現世幸福を招致しようとする所の皮相觀に墮したものが少くなかつた。『早稻田文學』記者が、三十一年に其の廢刊の辭に於て、「社會の事日に非にして頽波滔々たり、文運の開拓を以て任ずる者の覺悟またおのづから異ならざるを得んや、切に云へば社會の根柢に一道の生命を點ぜざる限りは、之れが表現たる文學や美術や、また言ふに足らざらんとす。吾人は此に見る所ありて、且らく文壇を退き、社會敎育の方面に全精力を移さんとす。」と、云つたのはそれが爲めだつた。一般民衆は當時、現實主義的生活の幻影を追求して、單に功利的な物質的な今日主義的な傾きがあつた爲め、文學衰頽を來たしたのである。

坪内逍遙が三十一年來、一轉して倫理敎育に全力を注いで新倫理學を樹立するに忙はしかつたの

は、畢竟、文學と絶緣したのではなくて、今日の所謂文化教育に力を入れる爲めであつた。高山樗牛も、亦日本主義の提唱と共に、國民道德や、現實生活の軌範たるべき倫理について、可なりに、眞面目に考察し、研究し、思索した一人であつた。だが彼れは、それに懸命になればなるほど、大なる失望を感ぜざるを得なかつた。其の失望の一は、如何にいろいろの學說を推究したりとも、そこに正確な歸一を見なかつたことである。失望の二は、現實主義を追へる都人士の一般的墮落である。第一の失望については、勢ひ彼れは倫理說道德說の實際的價値を疑つた。第二の失望について、甚しい澁面を作つて、慷慨の語氣を洩らした。

　彼れが倫理說、道德說の價値に對する疑惑と悲觀とは、彼れをして、「吾人は道德其物の價値の甚た貧少なることを思はざるを得ず。」と云はしめ、「善と云ひ不善と云ふもの、畢竟人間知見上の名目に過ぎずして、人生本來の價値としては殆ど云ふに足らざるものに非ざる乎。」と云はしむるに至つた。而して都人の只管現實に執着して、墮落を自覺せざる現象を見ては、『規律なき國民』『勝地の俗化』『奢侈』『銀行券の外套』『好意の欠乏』『無趣味の家庭』『腐敗せる宗教家』『紳士と貴女と』『虛榮の世』などの短文に於て、滿腔の悲憤を洩らした。それ等のくちに於て、彼れは、「近時本邦の家屋は益〻劣等の趣味を現し來れり。紳士の邸宅は待合の如し。」と云ひ、「今の中等以上のやゝ品位ありと稱せら

るゝ家庭を見よ。多くは是れ最も陰欝に、最も乾燥無味なる家庭に非ずや。屋外に妾を畜へ、花牌を發する主人の其の子弟に對するや、猶ほ儒學先生の其の門下に對するが如きなり。」と云ひ、「社會に制裁無く、人に義憤無し、姦惡人憎ます。謠詐世怪しますず。」と云ひ、「今や虚榮を誇るの風は凡ての社會に浸潤せり。富めるものは其の富の人に知られざらむことを是れ憂ひ、富まさるものは其の富まざることの人に知られむことを是れ恐る。」と云つた。斯うして、樗牛は何れの方面にも、大なる失望を感じたのである。逍遙は、樗牛の如く、倫理研究に於て失望しなかつた。倫理についての新解釋、其の文學化乃至有意義な民衆化に力めて、新代に適應してゆくべき新倫理、國民的娯樂などに說き及んだ。こゝに樗牛と逍遙との行き方に差異があつた。

（六）　樗牛の個人主義、天才主義、本能滿足說

樗牛が失望と煩悶とを重ねた結果、俄然として、唱へたのは、明治三十四年一月の『太陽』に發表した『文明批評家としての文學者』及び八月に掲げた『美的生活論』である。これ正に文壇にスツルム・ウンド・ドラングを起さんとする第一聲にほかならなかつた。彼れが、其の年四月、姉崎潮風に與へた手紙を見ると、文壇及び思想界に向つて、スツルム・ウンド・ドラングを起す前に、彼れ自身の心

内に先づスツルム・ウンド・ドラングを起したことを知り得られる。

此の頃の僕の精神には、此の一兩年の間に醞釀し來つたかとも思はれる一種の變調が現はれて來た。人は病的と謂ふかも知れぬ、又自分でも境遇、健康の爲に然るのかとも思はれるか、併し僕は僕の精神の自然の發展と外信じ得られない。僕は此の變化を明瞭に君に知らせることが近い内に出來るだらうと信ずるが、要するにロマンチシズムの臭味を帶びて居る一種の個人主義たることは爭はれない。(中略)僕は道德、教育、もしくは社會改良に關する今の人の說には、殆どすべて滿足の出來ぬ樣になつた。曰く國語改良、國家改良、言文一致、風俗改良、是等の主張者には實用以外別に人生の幸福と爲すあるものなしと信じて居る樣だ。例へば、文藝の慰藉訓養が、此世に如何ばかりの幸福を齎すかは、今の俗學者は解し得ぬらしい。(下略)

樗牛が、先づ其の煩悶時代に最も共鳴したのは、三十三年冬、大磯に於て、彼れが讀んだニーチエの著書だつた。それに就ての感想を翌年一月に書いたのだ。當時、文壇は、日清戰爭後、思想界に於ける現實主義的傾向とロマンチシズムの潮流とが橫溢して、一面、田園生活論や、文士保護論が起ると同時に。他面、詩歌の勃興を始めとして、ロマンチシズムの脈を帶びた小說が勢力を得て居たのである。

樗牛は、先づ現實主義的な日本主義を唱へ、次ぎに、ロマンチツクな個人主義、天才主義を唱へ

るに至つたのである。而してロマンチックな個人主義の芽は、彼れの『文明批評家としての文學者』の上に現はれて、ニイチェ讃嘆となり、それが、文壇に大波瀾を捲起し、續いて『美的生活論』にかける本能滿足説に於て、舊道德に挑戰するに及んで、一層、物論を惹起した。それ等は、文藝評論の一章に於て、別に細說したいと思ふ。

唯こゝに、思想的に見ると、樗牛の個人主義、天才主義、本能滿足説は、思想界にスツルム・ウンド・ドラングを捲起して、一種の破壞作用を行ふと同時に、當代の青年に强い感化を與へたが、結局、破壞の後に來るべき建設については、何等の言議をも殘さずに逝いた爲めに、一面、青年の懷疑的思想を增大するの結果を招來した。當時の青年は、舊道德、舊倫理から解放さるべき所由を、樗牛の叫びのうちに見出した丈で、そこに、新代の青年を指導するところの新道德、新倫理については、何等得るところがなかつた。すべて、スツルム・ウンド・ドラングは、斯うした結果に終ることが多いのである。

（七）　哲學宗教熱の沸騰

樗牛が企てたスツルム・ウンド・ドラングの後に來つたのは、懷疑的な思想の勃興である。斯の人

生に於ける思素、討究の熾烈な發生である。樗牛が與へた序論に對する結論の解決である。舊道德も、舊倫理も、最早、新代の人を支配し得ない缺陷を有する以上、吾に無用である、けれども吾は唯懷疑の吾としていつ迄も、居るに堪えぬ。吾のゆく道を暗示するところの新しい光明がなければならぬ。新代の人は　共の解決の鍵を得ようとしてあせつた結果、人生問題に關する討究が、到る處に起つたのである。而してそれに密接な關係を有する哲學、宗教についての言説が、勃然として、いろいろの方面に發生したのである。

蓋し宗教、哲學に關する言説が、漸く旺んになり始めたのは、日清戰爭の少し以前からであつた。此の勢を助長したのは、當時の帝大哲學科の諸教授で、殊にショペンハウエルの哲學を高調したドイツ人ケーベルは、共の最も有力な一人だつた。それと共に哲學界に於て有力だつた井上哲次郎が、三十二年、『哲學雜誌』に於て、『將來の宗教に關する意見』を公にして以來、舊宗教に代るべき新宗教の問題が新たに起つて、諸家の間に、論議が繰返へされた。これと前後して、中江兆民は、『一年有半』に於て、『日本人に哲學思想なきを嘆じ、哲學的偉人の出現を要求した。此の潮流に掉して現はれたのが、三十五六年の頃に於ける綱島梁川の主觀的宗教思想、淸澤滿之の精神主義、黑岩淚香の『天人論』などである。

清澤の精神主義は、一部の佛教界に於ける青年を動かし得たと云ふ丈で、其の影響を及ぼした範圍は割合に狹まかつた。私の記憶によると、清澤と略ぼ同じ流れを汲んだ古河老川と云ふ人があつた。此の人は、矢張、㹏牛と同じやうに早世したが、內觀的で、情熱がある點に於て、私を動かしたことがあつた。

梁川の主觀的宗敎思想と涙香の『天人論』とは、當時の青年を强く動かした。梁川の中心思想は、見神の實驗にあつた、『天人論』の中心生命は、向上主義を高調した點にあつた。『天人論』は、涙香の獨創した哲學思想ではなくて、在來の唯心的哲學から得たところを結收して、そこに、向上主義を結び付けたところに幾分の新味があつたと云ふ迄だつた。だが、彼れが、靈魂不滅を唱へ、直觀的に心靈の窓に映ずる神の力を肯定し、向上的倫理を力說した點は、當時、懷疑の底に沈みつゝあつた一部の青年に一線の微光を投射し得た。

宇宙の大自觀と云ふ者は神なるか。曰く大自觀は大自觀なり。吾人は神と云ふ語が動もすれば。人をして神人同形の想を起さしむるを憂ふ。然れ共若し神と云ふ語が、宇宙の大自觀を指すに非ざれば、何を指すやを知らざるなり。又能く一語にして何人にも大自觀の靈の萬一を想はしむ可き語を求むれば、神と云ふより外に語のあるを知らざるなり。然り、大自觀は神なり。吾人の神てふ思想に超絕せる神なり。神の上の神なり。此の

神や形を以て、又は人格を以て想像し得べき神に非らず。宇宙の或る所に巢を作りて棲へる神にも非ず。萬物の中にあり。萬物と共にあり。故に或人は向上主義を神的方面より視て汎神論と云ひ、萬有理教とも云ふ。汎神論の中興の祖ギョルダノ・ブルノ曰く、物は如何に小なりと雖も、神性を宿さゞるほどに小なることは能はずと。余は深く此語に服す。人は此神を信ぜずと云ふを得るも、神域を脱することは得べからず。之を脱するは宇宙を脫するなり。

此神を信ずるには禮有あるか。曰く無し。此神は萬物と共に在りて我と共に在り。堂宇を要せず。祭壇を要せず。唯だ常に此神と我と共に在ることを信じて。恭謙に、謹愼に、安泰に、歡喜に心を持せば、我の居る所卽はち祭壇なり。此神は萬象の上に天啓して曰く仁愛なれ。義務を盡せ。勇健なれ。勉强なれ。貞誠なれ。正しかれと。此神の姿を示す所は心靈の窓なり。深く自ら省みて之に接せよ。

人は此神に祈禱す可きか。曰く然り。然れども若し祈禱の爲めに、宇宙の物質的關係を一毫たりとも變じ得べしと思はゞ誤解なり。神は唯だ心靈の窓に射映す。我が心靈に神性を感受せんことを求むる者は、思々に祈り、念々に禱らざる可からず。祈禱は我が自覺の上に大自覺を明かならしむ。(下略)

向上は玆に在り。疑ふ勿れ、迷ふ勿れ。心靈に力を得るは力の上の力を得るなり。是れ天啓の倫理なり。宗教の上の宗教なり。萬物の上に照臨せる無二教(モニズム)なり。

淚香の說は、感情的、直觀的な傾向を有する青年の一部を動かし得たであらうけれども、理性が

鋭敏で、合理的な哲學說を求むるものには、勿論、滿足を與へなかつた。藤村操の如きは、直觀よりも理性に聞かうして、結局、失望して、華嚴瀑に投身して自殺したのである。

（八）綱島梁川の宗敎思想

綱島梁川の主觀的宗敎思想に赴く迄、辿つて來た道は、實踐倫理に於ける研究であつた。だが、彼れは、この方面に於て、何等の安心を得なかつた。知的推究を加へれば加へるほど、いろいろの疑問が生じた。それで、元來、主情的な傾向を有して居た彼れは、何とかして、新生面を開いて、自己の精神的安定を得たい、懷疑から光明の巷へ出たいとあせつた。而して冷たい理觀よりも暖かい情想の天地に於て、直に道德的、宗敎的生命に觸れ始めようとした。彼れが書いた『基督の詩』『悲哀の高調』『宗敎的眞理』などを見ると、當時の心持がわかる。

こゝに學ぶべき眞理あり。按ふに詩の爲めに詩を得る詩人あり、實の爲めに實と俱に詩を得る詩人あり、實の境は固より詩の境と殊なり、實の眞は詩の眞にあらず。而かも實に觸るゝと深き程、卽ち天地人生の奧に分け入ることの深き程、實は步々詩と近づき來り、初めは相反目せる仇敵たりしもの、玆に至りては、笑つて、手を握らんとす。此の如き實例は、大宗敎の意識に見ることを得。彼れは一面、極めて莊嚴なる實意識を有す

ると共に、他の一面に於いて、叉縹渺たる美意識を縱まゝにし得。彼れは一頭にして詩と實との兩面を有するなり。釋迦、基督の深く實在の奥に沈潛するや、思ふに自在に此の境に出入したりしなるべく、彼等にありては、信語即詩語、詩語即信語にして、その間に何等の容所をも存せざりしなるべし。(下略)

こゝに笑ふべきは、世の宗教を刺る者の語なり。その意に以爲へらく、宗教とは詩的の空想に信念の加はりたるもの、即ち虚が實に迷信せられたるものなりと、彼等、宗教に詩趣豐かなるを見るや、則ち解して云はく、宗教は詩的空想、例へば天堂、地獄、神國等を描きて、之れを眞ぞと信ずることなりと。何等淺人の語ぞ、殊に知らず、釋迦、基督の實在に沈潛することの深き、其の炎々たる信仰は、直ちに發して、鏘鏗の詩千萬言をなせるを。詩は彼等が實を味へる反射なり、信仰の餘音なり、實意識が迫り出だしたる美意識なり。之れを倒まにして、詩的空想の上に築かれるはかなき迷信即ち宗教なりとする解者の言淺しといふべきかな。(下略)

此の短章は、三十四年一月に書いたものだが、其うちに於ても、既に知に執して、宗教の生命に疑ひを挾むものに對して、一撃を加へた梁川の主情的な宗教觀を窺ふことが出來る。さうした宗教觀を押しつめて、合理的に説明しようと力めたのが、『宗教的眞理の性質』だつた。

彼れは、『宗教的眞理』に於て、「吾人は神を知るといふ、而かも嚴密には、寧ろ神を感ず。若しくは味ふ(語やゝ穩正を缺けども)とこそいふべきにはあらざる乎。神とは結まり、吾人至極の感情の

總量にあらずや、束ねにあらずや、會歸にあらずや。」と云ひ、「こゝにては感ずといふ意識上の事實が、やがて神の存在の唯一の根據なり、感ずることが卽ち在ることの別名なり。」と斷じ、そこに宗敎的眞理の特質があることから、進んで「われ神を造りて、われ自ら其の權威に服する也、我れ自ら主觀的に神を造り出づると同時に、自ら儼然たる主觀性を之に認むる也。」と肯定した。

梁川は、斯うした過程から、次第に進んで、明治三十八年五月に發表した『見神の實驗』に到達したのである。此の一文は、文壇よりも、寧ろより多く思想界に波瀾を捲起した。樗牛は、所詮、文藝の人であつたから、彼れの個人主義說その他は、思想界よりも、より多く文壇に反響したのであるが、梁川は、寧ろ詩的思想家であつたから、勢ひ文藝よりも、宗敎に近付いて、其の說は、思想界に於て、より多く反響したのである。だが勿論、それは、文壇に反響がなかつたと云ふ意味でなくて、思想界の注目の方が、遙かに餘計に梁川の言說殊に『見神の實驗』に向つて集つたことを意味するのだ。

畢竟、當時の梁川は、詩的思想家である。詩を透ほして、宗敎を考へ、神を見たのである。これは、必ずしも、梁川の新しい發見ではない。梁川以前にも、詩的直觀の窓から神を見得た人はある。だが、梁川のやうに、それを光華ある文字を以て、新しく、表現した人はなかつた。そこに、梁川

の強味があつた。即ち彼れは、神を詩化したのである、而してそれを嘆美し、鼓吹し、讃仰したのである。當時、懷疑の巷に彷徨して居た青年は、梁川の主情的宗教思想に於て、新しい解脫の道を見出したやうに感じて、一時、歡喜の色を湛えて、この方に赴いたのだ。

梁川の『見神の實驗』は、今日讀むと、特にそれについて是非紛々の批評を加へるほどのものでないと思はれるけれども、當時、宗教熱、哲學熱の横溢しつゝある時代にあつては、それを以て、重要な一發表と見做された爲めに、思想界の一問題となつたのである。けれども梁川としては、當然此の歸決に到達しなければならなかつた。それが、彼れの主情的宗教思想の結論にほかならなかつたのだ。要するに、梁川と云ひ、樗牛と云ひ、二人共に其の思想に於て、ロマンチシズムの色彩を濃厚に帶びて居た。而してそれが文壇に波及したところの影響については、別に論じたい。

（九） 社會主義思潮の發生

以上の思想、主義のほかに、現實的思潮に一脈、相通じたものとして起つたのは、社會主義思潮である。我國に於て、社會主義について、眞先に評論を發表したのは、大西操山である。彼れは、明治二十九年十一月、『六合雜誌』に於て、社會主義の必要とそれに對する有産階級の誤解を戒めた、

其の後、暫く社會主義に關する言議を見なかつたが、三十五年に至つて、矢野龍溪の『新社會』が、わが國に於ける最初の社會主義思潮の先聲として現はれた。

社會主義は、西暦一八一七年、既にイギリスのロバート・オーエンによつて唱へられて歐洲に於ては、決して新しい聲ではなかつたか、日本に於ては、龍溪の『新社會』が、社會主義に關する最初の著述だつたから、勿論非常に新しいものだとされた。それは、薄い一小冊子で、キングスレーの『アルトン・ロフク』や、ベラミーの『ルツキング・バツクワード』を凌駕するほどの意氣込で書かれたのではなかつたが、出版すると直ぐに飛ぶやうに賣れて、忽ち八版を重ねたと云ふのでも、當時の讀書界で珍重された樣子がわかるのである。

蓋し當時の社會狀態は、中流以下の人士に不平を起さしむべき形勢が多少見えて居た。既に樗牛が、屢々痛擊したやうに、戰勝の余威に醉ふた成金の徒や、現世生活に執着したところの紳士貴女が、自我を發揮して、享樂に始終し、或は政治界に於ては、主我主義を極端に實行した星亨の如き人物を出し、一般の德教が地に落ちた觀があつた。而して『二六新聞』や『萬朝報』などは、筆鋒を揃へて、當時の上流社會に於ける奢侈、非行を容赦なく訐發したので、中流以下の人々は、そこに抑へ難い憤懣を感して、社會的不平を發生させるやうな趨勢となつた。

斯うした時期に、それ等の不平を緩和して、社會の物的不平等を除いて、比しく、生の享樂を得せしめようとしたのが、龍溪の『新社會』であつた。勿論、それは、彼れの創見ではなくて、歐洲に於ける社會主義から見出した理論を、彼れ一流の經世的見地を以て、取捨し、結撰したものであつたが、大體に於て、穩健な色彩を帶びて居た。空想的、非現實ではなくて、餘程、實際的傾向を示して居た。

彼れは、隨意競爭の社會を公業本位の社會と爲し、私有財産制度ではないが、別に個人の所有權を保留するところの餘地を存する方法を執らうとした。即ち政府をして土地山林其の他一切の生産機關を買收させて、其の代償としては、永久据置の利子附公債を舊所有主に頒布すると云ふにあつた。それと共に政治方面では、法治組織から家事組織へ移るべき必要を說いて、中央政府以外に地方行政廳を設かぬこと、立法機關に直議制を設けて、議題は、議員が討論する丈にして、其の可否を直接人民の投票は問ふことを以て、政治改造に於ける龍溪の考案を明かした。

龍溪の『新社會』は、文壇に對しては、未だ何等の波動をも與へなかつたが、思想界は於ては、相當の反響を見出した。後年に於ける社會主義的文藝の萠芽は、『新社會』に於て、見出されたと云つて宜い。

其の他、政界に於ける主要な現象としては、立憲政友會の創立、伊藤博文によつて作られた最初の政黨内閣の出現、星亨が伊庭想太郎のために暗殺されたことなどがあつた。社會現象では、元祿模様の流行などがあつて、一般生活が、以前に比して華美となつた。それ等は、文藝の上に直接の關係はないけれども、文藝が社會の反映である以上は、幾分の影響がないとは云へないであらう。

要するに、第三期に於ける文藝は、以上の思潮的、社會的背景を前に置いて考へると、一層、其の眞相がわかるのである。それで私は、次章に先づ戰爭と文學との關係を説いて、日淸戰爭時代及び戰後の文學に及び、創作方面の進歩を第一に叙論し、第二に評論方面の進歩を述べようと思ふのである。

第二章　文壇の新機運生がんだ新しい小説

（一）戰勝と文學

戰勝が、文學の興隆を齎すことは、いつの世に於ても、略ぼ定則とも云ふべき現象である。日本は、元寇の亂、征韓の役に於て、國威を發揚したことはあるが、これを征清の大勝にくらべると、何れも云ふに足りなかつた。老大國と認めては居たが、兎も角、其の領土の廣大な點に於て、兵數の多大な點に於て、清國も亦侮り難いと云ふ幾分の疑惑もあつたのだから、愈よ勝敗の巷に起つて死生を決するとなつて、連戰連勝するに及ぶと、日本國民の意氣は、大に昂つた。

勿論、此の大戰は、三國干渉によつて、一頓挫したけれども、臺灣を手に入れて、滿洲に日本の勢威を伸暢すると共に、東洋第一の强國となつたのだから、矢張、大體に於て、國民の意氣は、衰へなかつた。而して三國干渉に對して、報復せねばならぬと云ふ念も加はつて、此の點では、内に一致して、上下共に緊張した。

戰勝後に於ける經濟界の好況は、やがて文學上にも、好影響を與へた。二十八年一月には、『帝國

文學』『太陽』、二月には、『文藝倶樂部』八月には『文庫』が出た。二十九年一月には『めさまし草』(『柵草紙』の改題)七月には、『新小說』の再興、『世界之日本』の生誕などがあつた。それに續いて、『新著月刊』『青年文』『日本主義』『ほとゝぎす』『江湖文學』『新聲』『中央公論』(『反省雜誌』の改題)『小天地』『關西文學』などが前後して出た。

私は當時、大阪に居たが、『太陽』が出た時の抱負は、中々、大きかつたやうに思はれた。菊版二倍大の册子で、寄書家、賛助員には、殆ど朝野第一流の大家を網羅してあつて、表紙には、太陽が燦然として八宏を照らして居る畫が出て居た。而して其の第一號には、坪內逍遙の『戰爭と文學』が揭げられてあつたやうに記憶する。それは、可なりの長論文で『戰爭とは何ぞや』『戰爭の影響』『文學に於ける直接の影響』『戰爭と詩文人』『戰爭後の文學』の諸項に分つて、征淸戰勝に伴ふ日本文學の前途を觀測してあつた。

逍遙は、其のうちは於て、『おしなべていふときは、大勝利を得たる國民は、大なる文學を生ずるを得べきなり、但し戰勝其の物がやがて大文學與隆の原因なるにはあらず。前にもほのかに論じたる如く、先づ一國民に高尙偉大なる精神の存するありて、英氣外に奮發し、さてこそ大勝利を博するの道理なれは、凡そ大文學を成するの素は、未だ大勝利を博せざるの前、已に該國民か心裏に成

立てるなり。時の順序よりいふときは、實質上の勝利は、常に虛靈卽ち文物上の勝利に先つの例なるゆえ、文學の興隆は、概して大戰勝に次ぐと雖も、其の本原はもと同一なり。二者相招致するの緣となるも、共に相因果する能はざるものなり。」と云つた。日本は、當時民衆の間に偉大高尙な思想があつたか、どうか、それは疑問であるが、文化的に相當に進んで居た爲めに、戰勝の結果としての思想的飛躍を見るに至つた。思想的飛躍を前提とした文學的進展は、當然の歸結でなければならぬ。

それで、當時日淸戰爭の前半期は、現實的な戰勝の空氣が詩文人の頭腦を强く刺戟して、比較的に其の刺戟の度の過ぎた爲めか、際物的文學を生產するに至つたけれども、戰勝の後半期に及んで、國民的自尊心が詩文人の意氣を雄邁ならしめて、『帝國文學』の如きは、二十八年一月、其の發刊の辭に於て、『維新後三十年にして國民文學の聲初て今日に喧き所以のもの、吾人之を認め、又之を欣ぶ。凡そ己の足に據りて立つことは生存第一の要諦なればなり。吁、國民文學、是れ旣に當に有るべくして、而も尙未だ見ること能はざりし所のものに非ずや。(中略)嗚呼一帶の蜻蜓州、首尾を通じて七百里、歷史を溯れば三千年、山河の美、風俗の醇、宇內其論を見ず。今や國威外に張り、人心內に振ふ。大東帝國の文學、豈獨り久しく此の如く落寞たらんや。」と傲語したのは、幾分の稚氣

と矜持の風を免れ得ないとしても、其の國民的自尊心が、筆端に橫溢して居るのを見るのである。恐らく、此の感じは、ひとり、文界の新人を以て自任した『帝國文學』記者のみでなく、當時の詩文人に於ける通有的、共存的なプライドではなかつたか。果然、新文學は、日淸戰爭前後から、勃然として起つて、二十八九年に於て、目ざましい活氣と進步とを示したのである。

（二）　文壇に於ける黨閥と新人

此の期は、創作、評論の全體を通じて、槪括して、ロマンチシズムの時代だと稱して差支へなからうと思はれる。小說、戲曲、新體詩、短歌、文藝評論などには、ロマンチシズムの色彩を濃厚に帶びたものが多かつた。私は、當時の小說を以て、寫實的過渡期の時代にあるもの、卽ち在來の皮相的寫實よりは、內容に於て、今少し充實味あるものを要求するところの氣脈が一體に動いて居て、眞の寫實に達すべき橋梁であつた時代だつた。だが、其の內容に、一二の例外を除くと、大體に於て、ロマンチシズムの色合を多少とも帶びないものはなかつた。

ロマンチシズムの時代は、美しい夢を見る時代である。詩的空想の翼を舒べて、超現實的の世界を逍遙する時代である。美の憧憬に燃ゆる限をあげて高らかに歌ふ時代である。斯うした時代に詩

歌が勃興するのは當然のことである。それで、當時は、詩歌中心の雜誌が一時に續出した。而して他の雜誌も、爭うて、詩歌を載せた。其の主要なものは、『明星』『白百合』『文庫』『新聲』『山彥』などであつた。其の他『帝國文學』『國民之友』『新著月刊』などにも、相當に注目すべき詩歌が現はれた。勿論、詩歌の勃興と云ふのは、其の一は新體詩の創造に於ける第一期の完成と進歩とを意味し、其の二は、古典的な短歌の革新と進歩とを意味して居たのである。

其の他、戲曲の進歩、俳句の革新、各種の文章——美文、寫生文、紀行文、隨筆——の發達なども、文藝評論に於ける新人の活躍と共に、目ざましい伸張を見たのである。これ等の現象も、勿論、それの閉展に適應し得べき文壇の有力な新人が輩出した結果によるところの多いのは、云ふ迄もないが、一つは、彼等の胸中に鬱勃として居たナショナル・プライドが、しかさせたのではなかつたか。

今、私は、先づ小說に於ける進步から敍論したい。それについて、私は前期と後期とに分つのを以て便宜とする。在來の明治文學史は、漫然として、何等の區劃を設けないで、日露戰爭時代迄の小說を一括して、敍論したが、それでは、後に起るべき自然主義の伏線と萠芽とを知ることが出來ない。それで、日清戰爭中から、三十三年の前半期迄を以て、前期とし、それから日露戰爭迄を後半期としたいと思ふ。比較上より云ふと、前半期は、空想味の勝つた小說の多い時代で、後半期は、

現實味の勝つた小説の多い時代である。前半期は、ロマンチシズムの最盛期で、後半期は、ロマチシズムから醒め始めて、現實に接近しようとした時代である。

前半期に於ける小説の主流と目すべきは、當時觀念小説、悲慘小説、深刻小説と呼ばれた種類に屬するものであつた。其の傍流として心理小説、社會小説、家庭小説と云ふやうなものがあつた。

蓋し當時の評論家は、在來の平凡な小説に慊らず、撥髮小説、探偵小説にも勿論、大きい不滿を以て居たので、何等か小説の内容に於て、深味がありさうなもの、一種の道念乃至理想のありさうなもの、さうしたものを要求して居た。最初、それに應じて出たのが、觀念小説である。觀念小説とは、其の作の内容に一種の觀念を有するものゝ謂ひである。

觀念小説の先驅者であり、同時に中心人物であつた作家は、泉鏡花、川上眉山である。今日の鏡花の作風から考へると、彼れが、觀念小説を書いたのは、どうも、不釣合のやうな感があるけれども、其の時分の鏡花は、極めて若く、これから文壇に出ようとあせつて居た時代だつたから、評論家の要求に應じて、何となく、内容、想念に於て、アトラクチヴなものを書かうと工夫した結果が、觀念小説となつたものだと思はれる。

元來、硯友社の全盛時代には、文閥が旺んだつた。今日でこそ、新しく世に出ようとする若い無

名の作家も、『新人』の名稱の下に概して好意を持たれるけれども、二十八九年頃は、矢張、誰かの門人にならなければ、容易に文壇に出ることが出來なかつた。恰度、それは、政界に薩長閥があつて、さうした閥閣の人に結ばなければ、政界に頭角を擡げ得ないのと同樣だつた。それを打破らうと力めたのが、大隈、板垣、犬養、尾崎、島田らの人々だつた。文壇では、斯うした文閥を打破ることに力めたのは主として、一部の無名白面の青年文士であつた。勿論、其の先頭には、赤門派の田岡嶺雲及び『國民之友』文學批評記者らが居た。彼等は、頻りに、硯友社が文閥を固めることを憤つて、其の中心人物たる紅葉を葬り去らうとした。高山樗牛の如きも、最初は、紅葉に向つて挑戰したのである。

それ等の非難は、要するに紅葉のみを非難したのではなくて、主として紅葉の力によつて支持されて居る小說界に於ける文閥に對する非難をも合せて含んで居たのである。『文庫』『新聲』などは、殊に紅葉に對して、烈しく挑戰した形があつた。『文庫』には、小島烏水、千葉江東(龜雄)らが居て主として文閥打破につくした。『新聲』では、佐藤橘香(義亮)と私とが居て、紅葉非難の聲を幾度か揚げた。目的は、文閥を打破して、無名の新人が自由に文壇へ出ることの出來る道を開かうとするにあつた。勿論、當時の紅葉が、其の作品に於ても、漸く固定的、停滯的になつて、翻案などで、

一時を糊塗しつゝあることにも慊らなかつたのだ。今から、考へると、大分、感情的に流れて居て、紅葉も、私らの非難を憤つて「梅溪と云ふ奴は狂犬のやうな文士だ、誰にでも喰つてかゝる。」と云つたのをある人から聞いたことがあつた。

だが、其の位、憎まれても、文閥打破のために、つくさねばならないほどに、當時の文壇は、新人に取つて、極めて窮屈だつた。それで、田岡嶺雲を始め、『國民之友』『新聲』『文庫』などで、文閥打破の氣勢を揚げた爲めに、文壇でも、戰勝後に於ける新機運に乘じて、新進作家が、徐ろに文壇に出ることが出來るやうになつたのだ。例せば、前半期に出たのは、泉鏡花、小栗風葉の如き硯友社系の人たちのほかに、內田不知庵、田山花袋、德富蘆花、後藤宙外、樋口一葉、島村抱月、小杉天外、北田薄氷、國木田獨歩、田村松魚、水谷不倒などだつた。其の系統を示すと左の通りである。

硯友社系――泉鏡花、小栗風葉、北田薄氷
早稻田系――島村抱月、後藤宙外、水谷不倒
獨立系――田山花袋、樋口一葉、小杉天外
民友社系――德富蘆花
露伴系――田村松魚

後半期に出た新進作家は、德田秋聲、柳川春葉、永井荷風、中村春雨(吉藏)田口掬汀、草村北星などであつた。だが、これ等の人々とても、前半期の時代から、大抵、小說を書いて居たのだが、新進作家として認められたのは、主として、後半期の時代だと云ふ迄である。

以上のうちで、田口掬汀、中村春雨は、主として『新聲』に深い關係を持つて居た點から云へば、新聲系と云ふことが出來よう。秋聲、春葉は勿論、硯友社系であり、永井荷風は柳浪系、國木田獨步は民友社系、草村北星は早稻田系だつた。而して獨立系の人々も、大抵、當時の文壇の大家の門に出入して、其の勢力を假りて、世に出たのが多かつた。天外は齋藤綠雨により、花袋は硯友派に接近し、樋口一葉は半井桃水や『文學界』一派に依つたのだ。今日から見れば、殆ど無意義に近い文閥打破の仕事も、當時では、文壇へ出ようとする新人のために、また藝術的に新生面を打開するために、極めて必要なことであつた。

(三) 觀念小說の先驅者泉鏡花

鏡花のことから、筆が傍徑に外れたが、鏡花は、ロマンチシズムの詩人である、神秘的空想に於て、一境を開拓した北國の詩人である。北國の明るさと暗さとを一身に體現した作家である。彼れ

は、先づ觀念小說によつて、文壇の新機運に乘り出した。其の出世作は、二十八年の前半期に於ける『文藝俱樂部』に出た『外科室』及び『夜行巡査』であつた。『夜行巡査』は自己の職務に對する責任感から、泥醉して彼れを罵り、且つ彼れの戀を妨げようとした男が濠に陷つたのを救はうして、生命を失つたことを描いたもの、『外科室』は伯爵夫人とある醫學士との悲痛な戀を中心として描いだものである。

其の文體は、在來の流麗とか、瀟洒とか云つたやうな風のものでなくて、生硬な飜譯調式のもので、故らに、淸新を衒つたところがあつた。けれども、此の事は、確かに目先きを變へる上には功果があつた。其の內容は、責任感乃至悲痛な異常な戀と云つたやうなもので、此の點に於ても亦、在來の作品とは、全く異つた手觸りがした。此の二つの點に於て、批評家の推讃を得たのであるが、今日から見ると、書き方に新しい工夫があつた丈で、內容は、特に非凡だとか、深刻だとか云ひ得ない、寧ろ平凡なものに過ぎなかつた。けれども當時では、左樣した內容をも、深刻だと見做したのである。

鏡花は、以上の二作によつて、新進作家中の有力なものと認められた。而して續いて『鐘聲夜半錄』を出し、二十九年には『海城發電』を出し、『琵琶傳』『化銀杏』と云ふやうな怪奇なもの、神秘的

なものへ、次第に歩を移した。即ち彼れは觀念小説から出發して、神秘的、怪奇的な空想小説の領域へ足を踏み込んだ。それ以來鏡花は、『一の卷』から『六の卷』に至る長篇を始め、『照葉狂言』『風流蝶花形』『化鳥』『淸心庵』『龍潭譚』『髯題目』などを出した。怪蝶に象徵された遊女の死、魔に誘惑された幼童の幻夢、世を咀へる狂女、少年を愛する草庵の貴女、遊女、藝人の末路などが、そこに描かれた。此の中、特に傑出して居たのは、『照葉狂言』であつた。

『照葉狂言』は、暗い北國の都市に於ける芝居小屋に見た美しい歌舞伎女優の群についての幼時の淡い思ひ出を當時、流行した美文風のスタイルで、印象的に叙した抒情味の多いものだつた。田山花袋は「鷗外が譯した『即興詩人』から暗示を得たのであらう。」と云つて居るが、それは、どうだか。何れにしても、此の一篇は、鏡花特有の怪奇・奇矯の弊を離れて素直なところのある詩的作品だつた。

鏡花は、『照葉狂言』以後、『梟物語』『笈草紙』『辰巳巷談』などを出したが、此のうち、彼れの長所、美所を比較的により多く發揮したのは、『湯島詣』『辰巳巷談』などであつた。後者は、江戸情調の名殘を留めて居る深川や、洲崎を背景として、ある美しい遊女と美少年との戀に意地わるい船頭や、俠氣ある中年の江戸女をからませて、はかない遊女の末路を描いたものである。美少年が、遊女を

深川の陋巷の家にたづねてゆく月夜の光景などは、細かくはつきり描かれて、概して部分的に光つたところがある。けれども妙に獨合點をして、洒落れたり、通がつたりする癖が、既に此の頃から鏡花の作品に出て居て、いやな感じを起させる箇所が、折々ある。それに『外科室』以來悲痛味を衒ふところが、矢張『辰己巷談』にも附き纒つて居て、其の最後の悲痛なるべき筈の光景が、妙にわざとらしく思はせた。そこに戲作的な眞味が漂うて居た。『湯島詣』は、樗牛が、三十二年に於ける文壇の佳作だと推賞した作品で、大體に於て寫實味の勝つたところがあつた。鏡花癖の少い、ロマンチツクな情味のあるところが、評家に認められたのである。

（四）　川上眉山の新傾向

鏡花と共に、觀念小說の作家として、文壇の注目を惹ゐたのは、川上眉山であつた。彼れは、硯友社中、藝術に對して、始終、研究的な態度を執つて居た人だ。文壇に於ける新傾向に對して比較的に敏感で、流動的な人だ。小說家肌よりも、より多く詩人肌を持つた人だ。それで、征清戰後に於ける文壇の新機運に就ても、最も早く感觸して、新しい方面へ出て行かうとした結果、觀念小說に於て、自己の新領域を開いたのである。彼れが當時の作品として出したのは『書記官』『うらおも

て』の二篇である。

川上眉山は、明治二年三月、東京に生れて、四十一年六月に自殺して世を去つた。彼れの死は、藝術難のためだと云はれて居る。それほどに彼れは晩年に入つてからも、藝術に對して眞面目だつた。彼れの作品中、最も廣く讀まれて居るのは『ふところ日記』などである。

『うらおもて』は、二十八年、『國民之友』夏季附錄に出て、批評家の賞讃を得た。『白藤』や『賤機』を書いた眉山が『うらおもて』を書いたのは、少くとも、彼れの文學的轉換の著しいものだつた。『うらおもて』は、眉山の社會觀をある德行家から盜賊になつた一人物波多野十郎に托したものである。それは、世人のために煽動されて、慈善のために財産を無くした德行家が、急に世人から以前と異る冷遇を受けて、社會の無情と殘忍とを怨み憤つて、盜賊になると云ふ筋を描いたのである。

其の描き方は、在來と全くちがつた文體を用ゐて居た。而して主人公の心理的描寫に力めねばならぬのを閑却して、議論的な會話が主位を占めて居た。例せば、主人公の述懷の言葉に「我嘗つて世に弄ばれたるが故に翻つて世を弄びたるのみ。我は既に我が善を味ひ盡しぬ。また我が惡をも味ひ盡しぬ。我は善の苦しみを知つて其の樂みを知らざりき。惡の樂しみを知つて其の苦みを知らざりき。」と云つたやうな風である。要するに描寫、表現の上に於ては、全く失敗した作であつた。け

れども當時、かうした社會觀を小說に寫した作品は、曾て出たことがなかつた點に於て、文壇の注目を惹き得たのである。

『書記官』は、『太陽』に出た作品で、父のために名利の犧牲となつて、節操を汚された可憐な少女の苦い運命を書いたもので、矢張、社會に於ける暗面を摘發したものである。これは、表現上、『うらおもて』に優つて居た。

眉山は、其の後、『朧富士』に於て悲戀に惱む女を描き『絃聲』に於ては、夜半の絃聲に共鳴する幽微な心境を描き、『松風』に於ては、熱情の詩人を描いて、大體に於て、心理的な描寫に力めたあとが能く見えた。だが彼れに乏しかつたのは、其の精力と執着力であつた。それに藝術的良心が、餘りに鋭くて、遲筆であつた。二十八年、『讀賣』に揭げ始めた『暗潮』なども、大きい期待を以て、迎へられに闘らず、中途で筆を擲つて了つた。『暗潮』は、後に『網代木』と題を變へて、春陽堂から出た。

（五）　廣津柳浪の深刻小說、悲慘小說

眉山、鏡花の觀念小說と共に、當時の文境に重視されたのは、廣津柳浪の深刻小說乃至悲慘小說であつた。柳浪は、前期の文壇に於て、旣に其の前途に重を置かれて、稍其の特色を發揮し始めて

居たが、此の期に入つて、二十八年五月の『文藝倶樂部』に『黑蜥蜴』の一篇を出して、愈々其の作家としての手腕を認めらるゝと同時に、所謂深刻小說、悲慘小說の驍將となつたのである。

だが、此の期――二十九年から三十三年前半迄――に於ける柳浪の作を一概に悲慘小說、深刻小說の名の下に一括し、概稱するのは、どうであらうかと思ふ人もあらう。勿論、『變目傳』『龜さん』『黑蜥蜴』『蓄生腹』『靑大將』などは、悲慘小說の名を以てしても宜いが、他に『今戶心中』『中川心中』『女夫心中』のやうな心中小說があり、『羽拔鳥』『女仕入』などのやうな光明小說もある。だが、柳浪をして、最初、文壇に於ける確實な地步を占めさせたのは、主として、センセーショナルな色合を帶びた所謂悲慘小說、深刻小說であつた。それが、三十一二年頃から次第に變形して、悲慘味の少い、稍明るい方面へ出てゆかうとしたのである。

柳浪の作品に共通した長所は(一)人生の暗黑面を描いたものが多いこと(二)戲曲的脚色に富むこと(三)割合に心理描寫に力めたこと(四)現實味が、他作家よりも多いことなどである。

田山花袋は、柳浪の作品に通有の缺點に論及して、「柳浪の作などでは、リアリズムの作家の必らず注意を拂はなければならぬ寫生などをも、最もおろそかにしてゐた。それは天外は勿論、紅葉も寫生を重んじてゐたのに、彼れはたゞ一室に閉籠つて自己の經驗したこと、又經驗の達することの

出來る範圍內の想像とによつて筆を執つた。かやうにスケッチを缺いた彼のリアリズムが、深く核心に達し得られるはづはない。平板な抽象的の程度に止つて、深く人生を味はせるといふよりも、實感を以て低級な讀者を動かす程度に止つてゐたのは仕方かない。『變目傳』『龜さん』などの暗黑描寫も、それが中心からそれに深い意味を感じたといふよりは、單にさうした異常な事件と性格とに興味を持つたといふ程度であつた。『今戶心中』『河內屋』(二十九年)など、この代表的であり、かなり喧しく世に傳へられたものだ。けれども今の眼からこれ等の作を評すると、單なる人情小說、同情小說に過ぎない。作中の人物に對しては最も好惡の判斷が加つてゐた。人情化、道德化といふやうな鍍金が行はれてゐた。突込むべきところもそのまゝにそつと撫でて置くといふ風であるし、分析といふ境地に甚だ遠かつた。(中略)しかしこれは今日からの議論で、その當時にあつては彼の心理描寫は硯友社派の異彩であつた。」と云つて居る。要するに、醜婦、病的な男、悲慘な殺人、自殺と云つたやうな異常な事件と人物とに興味を持つ探偵小說的なセンセーショナルな傾向が、柳浪の病弊であつた。其の暗黑面の描寫も無意義に終つたのは、當然のことである。

此の期に於ける彼れの代表作は、三十年十月の『太陽』に出た『畜生腹』二十九年に出た『今戶心中』『河內屋』などである。『河內屋』と『今戶心中』とは、彼れの心中物の代表作で、『畜生腹』は悲慘小說

乃至深刻小說の代表作であらう。此の中、最も能く纒つて居るのは、『河内屋』で、花袋は「結構の案成していかにもドラマチツクで、事件の錯雜したところが、彼の作風を最もよく示して居た。」と云つて居る。それは、花袋ばかりでなく、大抵の評家が一致した見方である。

（六）柳浪の代表作と心理描寫

『今戸心中』は、『河内屋』ほどに纒つて居ない上に、筋も單純であるけれども、吉原廓内の生活は、忠實に描かれてある。女主人公の吉里と云ふ華魁も、相應に描出されてある。地の文は、『黑蜥蜴』などの雅俗折衷體でなくて、言文一致で、餘程讀み易い。

大空は一片の雲も宿めないが黑味渡つて、二十四日の月は未だ上らず、霙あるが如き星のきらめきは仰げば身も冽る程である。不夜城を誇り顏の電氣燈にも、霜枯三月の淋しさは免れず、大門から水道尻まで、茶屋の二階に甲走つた聲のきらめきも聞えぬ。明後日が初酉の十一月八日、今年は稍暖く小袖の三枚重襲る程にもないが、夜が深けては流石に初冬の寒氣が身に浸る。

と云つたやうな書き出しで、華魁の吉里が其の情人平田と別れを惜む悲み、平田が去つたあとで、今まで嫌惡した古着屋の善吉の眞實に引かされる心持、それに平田を思ひ切れない未練などが、から

んで居る心理を可なりに能く表現してある。

吉里は平田と善吉の事が、別々に考へられたり、混和つて考へられたりする。もう平田に會へないと考へると心細さは一入である。平田が據ない事情とは云ひながら、何とか自分を爲て異れる氣があッたら、何とか爲て異れることが出來さうなものとも考へる傍から、善吉の今の境界が、いかにも哀れに氣の毒に考へられる。其も自分故であると、善吉の眞情が恐ろしい程に染む傍から、平田が戀しくて〱耐らなくなッて來る。善吉も今日限來ないものであると聞いては、此ほど實情のある人を、何て彼樣に冷遇くしたらう、實に惡いことを爲たと大罪を犯した樣な氣がする。善吉の女房の可哀想なのか身につまされて、平田に捨てられた自分の果敢なさも亦一入になッて來る。其て、耐らなく平田が戀しくなつて、善吉が氣の毒になつて、心細くなつて、自分が果敢なまれて沈んで行く樣に頭が森となつて、耳には善吉の言葉が一々能く聞え、善吉の泣いて居るのも能く見え、耐らなく悲しくなつて來て、終に泣出さずには居られなかつた。

此の邊の心理描寫は、柳浪の得意のところである。一葉亭の『浮雲』の心理描寫などにくらべると、稍劣つて居るけれども、當時の文壇では、可なりに能く出來たものとされた。

『畜生腹』は、畜生腹の一婦人が、苦み悶えた末、ある惡婆の勸めに誘惑されて、胎兒を暗のうちに葬つてから、始終深い悔恨の情に惱んで、夫にも疑はれ、到頭、夫婦の間が、遠く隔つて了ふと

云ふ悲劇を描いたのである。
樗牛は、特に『蓄生腹』を推賞して、「近時現はれたる小説の中、吾人は紅葉の『金色夜叉』と是の作とを推す。其文字の洗練巧緻に於ては遙に彼れに及ばず。されど柳浪の作、感興汪溢、一氣直ちに一とりて人の肺腑を把擒す。修辭行文の妙は蓋し彼れの意とする所に非ざらむ。殊に複雜なる事情を操縱し、絲聯繩牽、巧に脚色を勘へ、巧に戲曲的活動を躍如たらしむるの手腕に於ては、當代誰か彼れに及ぶべき。唯寫情の深刻を求むるの餘、往々冗漫重疊の病に陷るは惜むべし。」と云つた。大體に於て、當を得た同情ある批評である。
其の後、柳浪は三十二年に『骨ぬすみ』『目黑小町』『縺れ糸』のやうな三部作を書き、『二人やもめ』『紫被布』などを書き、作風も漸次明るくなつて、手法も老練となり、隱然、紅葉を凌いだ。
斯うして、文壇の新機運に乘じて、其の地步を占めた觀念小說、悲慘小說、深刻小說は、少くも、當時の文壇に活氣を加へて、形式、內容の上に、幾分の新味を添へ得た。それと呼應して、江見水蔭、內田不知庵菊池幽芳なども、創作の上に於て、一飛躍を試み、同時に一葉、蘆花、宙外、天外、風葉、抱月などの新進作家が、續出したのである。

第三章　群起した文壇の新人

（一）人としての樋口一葉

此の期に於ける新進作家として、前半の時代に著しく活動をしたのは、樋口一葉、小栗風葉、後藤宙外、島村抱月などで、それに續いては、德富蘆花があり、小杉天外があつた。就中、最も際立つた文學的成功を收めたのは、樋口一葉である。

一葉ほど、眞面目に人生と藝術とを考へた作家は、當時一人もなかつたと云つて宜からう。彼れが、文學的活動を續けたのは、僅か四五年であり、其の作品は、全體を通じて、二十餘篇あるに過ぎないに關らず、いつ讀んでも、強く胸を打つ力があるのは、其の優秀な作品に於て、はつきり人生の姿が再現されて居て、しんみりとした淡い悲愁の味が、脈々として盡きないからである。

樋口一葉（夏子）は、明治五年三月、東京に生れて、二十九年十一月、僅かに二十五歳で世を去つた。彼の女は母と妹と共に平和に生活したが、物質的には貧しいことなどもあつて、そのため可なりに苦勞した。けれども彼の女は、物質のために心の美しさを失はなかつた。而して國文、和歌書道をも研究して、夙に非凡の才を

示して居た。彼の女の文學生活は、二十五年二月に始まつた。その時、書いたのが『闇櫻』である。而して其の文壇的地位を確立したのは、二十八年七月、『にごり江』を公にしてからであつた。一葉には、別に『書簡文範』『日記』などがある。其の日記を見ると、一葉の生活が、いつも、藝術的氣分に滿ちて居たことが知られると同時に、艱難に屈しないで、文學的進歩を完成した彼の女の强い意志と努力とを知ることが出來る。

一葉の文學的に成功した所以の要素は、(一)普通の女子に比較して、實世間に於ける一部の事情に通じた事(二)藝術的良心が鋭かつた事、(三)狹くとも、自己に親しい環境を描いた事(四)比較的深酷な社會觀人生觀を有せし事(五)表現上に於て西鶴より露伴へ、露伴より獨自の世界に進む努力を怠らなかつた事、(六)西鶴の骨髓に味到して、虛構的、遊戲的の結構を爲さざりし事などを數へることが出來よう。其の他、閨秀作家を歡迎する機運が來て居たところへ、一葉ひとり傑出して居たと云ふことに對して、批評家や世間の同情も割合に厚かつたことも亦彼の女の成功の小さい一要素と云へようかと思はれる。

一葉が、比較的に實世間に於ける一部の事情に精通して居たのは、少女時代から生活の苦勞を重ねて來たからである。實社會の人たちに面接する機會が相當にあつたからである。社會の表裏もを早く知つたからである。此の事は、彼の女の社會觀、人生觀の上に深い影響を與へて居る。

一葉には、哲學的素養もなかつた、科學上の知識も乏しかつた。彼の女の人生觀、社會觀は、机上哲學や、机上科學から得て來たのでなくて、彼の女の閱歷、經驗から得て來た。それがために、一方に偏倚したものとなつた。人生は不如意なものだ、苦い運命に咀はれたものだ、そこには、悲痛、哀泣、苦愁のみあつて、歡喜も、悅樂もない。而して斯うした人生に生きる女子は、不幸である。不合理な社會は、暗い人生と共に、弱い女子を虐げ、惱ませ、苦めなければやまない。要するに人生は悲みの谷でめり、社會は冷めたい石のやうなものだ。斯う云ふ哀世的色彩を帶びたのが、一葉の人生觀、社會觀で最初は、それに對して、虐げられた女性の一人として烈しい反抗的な態度を執つたのである。

だが、彼の女は、後期に入つてから、反抗的な態度を少し柔げられて來た。而してかすかな解決の微光に觸れた。勿論、それは、積極的なものではなかつた。消極的な淋しいものであつた。淋しいながらも、それに取り縋るよりほかに、彼の女の到達すべきところはなかつた。其の解決の微光とは、一種のあきらめであつた。人生は斯うした悲しいものだ、社會は斯うしたつまらないものだ。それを克服し得ない以上は、どうしても一面に於て、あきらめに到達せねばならぬ。一葉は、斯う考へたのである。卽ち反抗しつゝあきらめ、あきらめつゝ、反抗すると云ふ形になつた。當時の女

性としては、何人も、これ以上に出ることが出來なかつたのであらうと思はれる。

（二）生活を藝術化した一葉

一葉の日記を見ると、彼の女が、いかに藝術に對して、全心を捧げて、奉仕したかを知ることと出來る。彼の女が、最初、文壇に踏み出した前から、彼の女には、豐かな藝術的天分があり、それと同時に、鋭い藝術的良心があつた。一葉は、半井桃水の紹介によつて文壇に出たが、桃水から文學的な指導も、感化も、殆ど受けて居ない。彼の女の藝術は、一葉自ら創造し、進化せしめたものである。

勿論、一葉にも、文學的目標はあつた。曾て『源氏物語』に傾倒したこともあつが、殊に西鶴の小說を愛誦して、それから感化を受けた。それは、紅葉のやうに、皮相的な惑化を受けたのではなくて、內部的な感化を受けた。其の外形と共に、精髓に觸れ得たところがあつた。彼の女は、また露伴の小說を一時、愛讀して、それからも、幾分の影響を受けた。初期のある小說には、左樣した影がある。けれども、露伴から來た影響は、極めて一時的のもので、西鶴から來た影響のやうに長く

深くはなかつた。

一葉は、ある意味に於て、精神的に西鶴を小說上の指導者としたと云ふことが出來よう。而して其の內部的な感化の下に、筆を執つて文學的生活の第一步に入つたのだ。ではあるが、彼の女の態度には、少しも、戲作者的なところがなかつた。あく迄、眞面目で、嚴肅であつた。當時の小說家、殊に硯友社一派の人々のやうに、ふざけ切つたところはなかつた。遊戲氣分、洒落氣分が寸毫もなかつた。

それに、彼の女は、其の小說の題材を力めて、自己に親しい環境から採ることにした。彼の女の實際に見たもの、經驗したもの、さうした自己に解し得らるゝ狹い世界の中に取材した。換言すれば、一葉には、現實的傾向が多くて、空想的傾向が少かつた。いつも、彼の女は、生きた現實に面して、其の現實のうちから取材した。空想を主として、小說を製造するやうな手品を餘り用ゐやうとしなかつた。此の點が、一葉の强味であつた。

それだから、一葉の作品は、二十八年頃に書いたものは、何れも、人生の一面を如實に再現し得て、そこに何等の破綻がなく、缺陷がない。能く藝術的に小さいながらも完成されて居る。而して此の時代の描寫は、すべて新鮮な味があつて、一葉自身の個性から生れた文體と形式とを用ゐて居

る。換言すれば、形式の上において、西鶴と露伴から全く離れて了つて、獨自の世界を作つて居る。

一葉の作品が割合に少いのは、勿論、其の生涯の短かつたにもよるが、一つは、物質的慾望を排し、あく迄も、濫作することを謹んだからである。二十八年頃には、彼の女の名聲は、正に頂點にあつたのだから、普通の文士ならば濫作しても差支えないと思ふにちがいない。けれども一葉は、自己の藝術約良心の許さないことをしなかつた。書肆の誘惑も、文壇の推讃も、一葉の潔白な心をどうすることも出來なかつた。彼の女は、藝術と生活とを一致させて、藝術に裏切るやうな生活をしなかつた。名譽の最頂點にある時も、謙虚で、沈着であつた。ある意味に於て、文壇の批評以外に超越して、自己の藝術的生命を守つた。

（三）　一葉の文學的進路と描寫の特長

一葉の代表作は、『にごり江』『われから』『十三夜』『たけくらべ』などで、何れも二十八年の作である、これ等は、何れも後期に屬するものである。彼れの前期時代即ち二十五六年時代の作は、自己の厭世的苦悶や、反抗的な心持を洩らすために、空想と實驗とを縫ひ合せて、作りあげたやうなものが多い。『闇櫻』『玉襷』『うもれ木』『五月雨』などがそれだ。ところが、二十七年の後半期時分から、

空想の世界を離れて、ぴたりと人生に面して起つと云つたやうな態度を現はして、人生に於ける悲痛な環境や、因果や、運命や、複雜した事象を、稍はつきり見る眼が出來た。それと同時に、一葉の作品も、一躍して、大きな進歩を示すやうになつた。これは年齡の上に於て、彼の女が成熟期に入つた爲めでもあつたが、畢竟、其の人生的經驗の進歩と文學的向上の努力とが、一つに結び付いての結果である。

一葉の後期の作品を讀んで誰も先づ感ずるのは、巧妙な女性描寫である。酩酒屋の女の內的苦悶を描いた『にごり江』のお力や、束縛と抑壓とに滿ちた家庭に絕望しながらも、强ゐてあきらめを付けた『十三夜』のお關や、遺傳的にわが儘で、それが嵩じて、身を誤つた可憐な『われから』のお町や、女のかよわい力で、細い生活をしたが、到頭浮世の誘惑に陷つて、妾奉公に出ようと決心した『わかれ路』のお京や、繼母の許にあつて虐められた上、男心の賴み難いことを戀の上に見た『ゆく雲』のお縫や、紀州から東京の吉原遊廓の家に養女に貰はれて來た薄命な少女の境遇と少女時代に於ける性的變化を描いた『たけくらべ』のみどりなど、一葉が女性であるだけに、男性の作家が觸れ得ない微妙な境地に入つて、どの女も、能く描かれてある。殊に其の代表作に於ては、心理的描寫に於て略ぼ成功して居る。お力、お關、お町、みどりなとがそれだ。

其の代りに、男性描寫は、『たけくらべ』のうちにある少年などの、能く描かれてあるのを除くとどれも大抵、類型的で、印象が朦朧として居て、失敗に近いのが多い。それに、前期の作には、到所に說明的文句が挿入されてあるのも、可なりに、うるさい感じがある。後期の作にも、矢張それの名殘りが處々にあつて、花袋が『天衣無縫の趣がある。』と云つた『たけくらべ』にさへ、說明的文句が少し混入されてある。それ等は、一葉の作品に於ける缺點である。

たとひ、それ等の缺點があつても、『十三夜』『にごり江』『たけくらべ』などの後期の作品は、其の眼界は狹くても、しかつかり現實を掴んで居て、人生の悲痛、女性の哀愁と苦悶とを如實に再現して、その間、寸毫の遊戯的氣分がない點に於て、當時の文壇に於けるレヹルを拔いて居る。

（四）一葉の代表作たけくらべの藝術味

殊に『たけくらべ』は、有機的に完成された不朽の傑作である。此の一篇には、人を驚かすやうなセンセーヨナルな出來事もなければ、何等のヤマもない。觀念小說や、深刻小說などのやうに、事件その物の、人物そのものに一も異常なところがない。唯吉原遊廓を中心として、其の附近に於ける少年の生活を描いて居るに過ぎない、筋の上から云へば、極めて單純な、平淡なものである。そ

れで居て、深く人を動かす詩的魅力を以て居るのは、そこに、少年少女の生活の上に、人生の一面が暗示されて居るからである、はかない少女の身の上に來るべき運命が、ほのめかされて居るからである。一葉が、はつきり見た人生の暗愁に滿ちた形が、如實に出て居るからである。

それに描寫の上に於て、圓熟味を示して、寸分のタルミがない。吉原のローカル・カラーも、少年少女の特殊性も、鮮明に表現されてある。生意氣な正太、溫和で陰氣な信如、暗愚で滑稽染みた三五郎なども忘れられぬ印象を與へるが、殊にみどりは、一葉が中心人物とした丈に、蓮葉なお俠な彿の時代から一轉して、性的變化のために、溫和なませた恥しがりの少女になる傾向、過程、心理が微妙に描かれてある。而して彼れ等が、其の環境と個性とによつて、次第に變りゆく前途を無解決のまゝに抛り出してあるところが、殊に宜い。みどりの暗い前途とそれを無意識で居る少女の姿に深い哀愁を感じさせられる。

『たけくらべ』の文章のうちで、殊に優れて居るのは、第十回に於ける吉原情調の叙述である。抑浪が其の傑作『今戸心中』で吉原を描いたものにくらべて、數段、立ち優つて居る。

春は櫻の賑ひよりかけて、なき玉菊が燈籠の頃、つゞいて秋の新仁和賀には十分間に車の飛ぶこと此通りのみにて七十五輛と數へしも、二の替りさへいつしか過ぎて、赤蜻蛉田圃に亂るれば橫堀に鶉なく頃も近づきぬ

朝夕の秋風身にしみ渡りて上清が店の蚊遣香懷爐灰に座をゆづり、石橋の田村やが粉挽く臼の音さびしく、角海老が時計の響きもそゞろ哀れの音を傳へるやうになれば、四季絶間なき日暮里の火の光りもあれが人を燒く烟かとうら悲しく、茶屋が裏ゆく土手下の細道に落かゝるやうな三味の音を仰いで聞けば、仲之町藝者が冴えたる腕に、君が情の假寢の床にと何ならぬ一ふしあはれも深く、此時節より通ひ初むるは浮かれ浮かるゝ遊客ならで、身にしみ〴〵と實のあるお方のよし、遊女あがりのさる人が申しき。（下略）

それから、第十六回に於ける結末も、暗示に富んだ書き方をして、そこに縹渺として盡きない餘韻がある。最後までも感興が燃ゆるやうに出てゐる。

龍華寺の信如が我が宗の修業の庭に立出づる風說をも美登利は絶えて聞かざりき、有りし意地をば其まゝに封じ込めて、此處しばらくの怪しの現象に我れを我れとも思はれず、唯何事も耻かしうのみありけるに、或る霜の朝水仙の作り花を格子門の外より差入れ置きし者のありけり、誰れの仕事と知るよし無けれど、美登里は何ゆゑとなく懷かしき思ひにて違ひ棚の一輪ざしに入れて寂しく淸き姿をめでけるが、聞くともなしに傳へ聞く其の明十九日は信如が何がし學林に袖の色かへぬべき當日なりしとぞ。

（五）　新進小說家としての宙外、抱月、天外、風葉

一葉と略ぼ同時に、新進作家として、相應な成績を示したのは、後藤宙外である。宙外は、最初

評論家として起つたが、後には、創作にも、筆を染めた。早稲田派は、其の頭目である所の逍遙が、創作と評論との上に併行的に筆を續ける端緒を作つたのであるが、宙外、抱月らも、矢張、逍遙の爲すところに導かれて、創作、評論の二面に活動した。

宙外の出世作は、『ありのすさび』『闇の現』の二篇である。前者は二十八年の『文藝倶樂部』に、後者は、二十九年の『新小說』に出た。兩篇共に、心理描寫と田園の叙景とに於て、結構の周到な點に於て、成功したものと云はれた。だが、今日の眼で見ると、「獨得の心理描寫もあまりに空想の多いものだ。」と言つた花袋の評言が至當だと思はれる。硯友社の人達の作品から見れば、やゝ眞面目な作品であるが、樗牛が進んで、推賞したほど價値のあるものではなかつた。

三十年に宙外は天外らと共に『新著月刊』を出した。此の時、それによつて、新進作家として打つて出たのは、島村抱月、小杉天外、水谷不倒らであつた。抱月の小說は、彼れの評論ほどに傑出しては居なかつた。其の筆は、極めて平淡で、描寫などにも、これと云ふ特色がなかつた。唯結構、布置が、ドラマチツクで而も、些の落度のないのが、特に目立つて居た。詩的感興の沸騰によつて書いたと云ふよりは、冷めたい理性に幾分の熱を加へて書いたと云つたやうな趣があつた。當時評判が宜かつたのは、三十年に書いた『めをと波』『月暈日暈』、三十一年に書いた『墨繪草紙』などであ

つた。中村星湖は、抱月の作全體を通讀して、「各篇を殆んど一様に貫いてゐるのはモーラル・トーンもしくはレリジヤストーンで、近松研究などの自然の影響が、餘程ドラマテイツクに仕組まれた物が多い。」と言ふ意味を述べ、「この一例は『玉かづら』である。この作はまた愛蘭土の或作家を聯想させるやうな素朴の强みと、しかし何時とはなしに讀者を引入れて行く特異な暖かみとを持つてゐる。」と云つた。私は、それほどに感じないが、今日讀んでも、左程目立つた缺點がないのが一つの强味であらう。

水谷不倒は、抱月と前後して、『錆刀』『濡脣』の二篇を出した。江戸文學殊に近松などの影響を受けた點がほの見えて居たと云ふ迄で、特異の味も色もなかつた。小杉天外は、齋藤綠雨を師として、文學的生涯に入つたのであるが、其の最初の作は、綠雨と合作の名で出した『五ツ紋』であつた。其の後、二十八年に『奇病』を書き、二十九年に『改良若殿』『卒塔婆記』などを書いた。此の時代の彼れは、綠雨の影響の下にあつたので、諷刺小說は一新生面を開かうと試みた。それで以上の作に於て、或は衆議院議員の裏面を嘲笑し、華族の暗愚を諷刺すると云ふ風であつた。勿論、それは、綠雨のやうに、鋭い苦味がなかつた。輕い甘味のある筆觸を以て居た。

宙外と略ぼの互角勢を以て、文壇に出たのは、小栗風葉であつた。彼れは、鏡花と共に紅葉門下

の双璧だつた。彼れが、新進作家として認められたのは、二十九年に發表した『龜甲鶴』『寐白粉』などによるのである。風葉は、鏡花が北國氣分を帶びたのに對して、三河平野の氣分を帶びて居た。明るくて、常識的なところが、鏡花の暗くて、天才的なところと好個のコンツラストを爲して居た。鏡花には、空想味が多かつたが、風葉には現實味が多かつた。初期に於て、唯一致した點は、共にロマンチシズムの脈を追うて居たことだつた。

風葉には、最初から、肉慾描寫に於て、大膽なところがあつた。當時の文壇は、大體に於て、モーラル・トーンを重んじた時代で、作家の肉慾描寫に於ても、遠慮氣味の傾向があつた。ところが、風葉は、『寐白粉』に於て、兄妹相姦の戀を描いて、文壇に一波瀾を起した。『龜甲鶴』は、一面、觀念小說的傾向を以て居たが、鏡花の『夜行巡査』のやうに露骨な觀念の表出をしなかつた。もつと現實的に半田地方に於けるある酒造家の生活を精細に描いて、フレツシユな味があつた。續いて、三十年には、『十七八』を出した。花袋は、此の作を評して、「初期の自然主義者の取材にあるやうな結構が、當時に於ては最も刮目するに足りるものであつた。作中の一人の男がシヨペシハワーに見るやうな戀愛觀を振廻すのも面白かつた。」と云つて居る。

（六） 風葉の出世作『戀慕流し』

斯うして、風葉は、新進作家として、鏡花と略ぼ同じ度合の進步を示したが、殊に三十一年に『戀慕流し』を『讀賣』に揭載するに及んで、大家の列に入つた。此の篇は、鷗外が譯したオシツプ・シュビンの『埋木』に似たところがあつた。私は當時、『讀賣』に出たのを讀んだのだが、未だに共の印象が、おぼろ氣ながらに殘つて居るところを見ると、一般の若き人々に深い感銘を與へるだけの魅力があつたのだ。其の內容は、樂界の天才と唱はれた一青年と西洋音樂に於て多望の閨秀と目せられた美貌の少女とが、熱き戀に落ちたロマンスである。彼等は戀の盲目者となつて、親に背き、名譽を捨てゝ夫婦になつたが、さて實際界へ出て見ると、彼れらの美しい虹のやうな空想は冷めたい實世間の風に吹き破られた。而して意外にも、社會のどん底であるところの木賃宿生活をするやうになつたが、青年は、尙ほ一管の尺八に其の藝術的生命を托することを忘れなかつた。だが結局、生活の劣敗者となつて、屈辱と暗黑とのうちに葬り去られ、共の美しかつた熱愛も終りを全うしなかつたと云ふ悲痛な結末に終つて居る。

今日の眼で見れば、勿論花袋が云つたやうに、形式と內容との上に破綻があるだらうが、當時に

あつては風葉の濃艶と精緻とをかね才筆は、斯うしたロマンチツクな題材を相當に表現して居た。木賃宿の寫生なども割合に能く其の特殊の色合を摑んで居た。其の結構のドラマチカルな點に於ては柳浪に追隨する所があつた。『戀慕流し』が、風葉を大家の列に入らしめたのは、勿論、當然の報酬と云はなければならなかつた。彼れが、『戀慕流し』と同じ時代に出した『墓下地』は、情人の愛と子の愛とにまつはる女優の悲しい生活を描いたもので、これも亦、彼れの筆にふさわしい題材であつた爲めに、相當の推賞を得た。

第四章　社會小說、家庭小說の出現

（一）文壇に於ける社會的風潮

此の期の新進作家中、社會小說の先驅者として現はれたのは內田魯庵(不知庵)だつた。また家庭小說の方面に先鞭を付けたのは、德富蘆花、菊池幽芳であつた。此の三人は、文士としての閱歷が可なりに長かつた點に於て、新進とは云へないけれども、作家として、頭角を出し始めた時期から云へば、正に新進作家と云つて差支えなかつた。

それ等の作品は、觀念小說、悲慘小說、深刻小說乃至皮相的寫實や空想本位的の作品が飽かれ始めた欠陷を補充しようとして出たものだつた。それについて、一言なければならぬのは、當時に於ける評論界の風潮である。當時に於て、要求されたのは(一)社會小說を書くこと(二)時代精神を描くこと(三)惡寫實の弊を離れて非遊蕩的な健全な小說を書くことであつた。

批評家が社會小說の出現を要求するに至つた理由は、樗牛が「今の小說家が多くの讀者を有し得ず、又大いなる著作を成し得ざる重なる原因は、彼等が社會の實相と隔離せるにあることは、旣

に久しき以前より批評家の齊しく唱へたる所なりき。實に今の作家の多くは、年齢尚ほ弱く、閲歴未だ足らず、隨て其の表現する所の人物、事柄思想の多くが世間見ずのお坊樣的なる事、例令へば彼等が描き得る人物の多くは、彼等と同年輩なる二三十の壯年に過ぎざる事。而して是等の人物だも彼等自らの境遇に近き、一般讀者にとりて極めて興味無き人物なる事。斯かる事情より生ずる自然の結果として、平凡なる戀愛談の外には讀者と作者との間に共通の興味の有り得ざる事、而して是の如き小說が滿足を與へ得べき讀者は、一部靑年の書生輩に過ぎざる事。年四五十以上の少しく實世間に經驗ある人の眼には、斯かる小說はおのづから幼稚空疎に見ゆべき事、一言すれば、今の小說家の根本的缺點は是の實世間、是の活社會の共同趣味を捉ふること能はず、其の主觀性の餘りに幼稚に且つ狹隘なる在る事。」と云つたので、略ぼわかる。

以上の理由によつて、活きた社會の生命に觸れた作品を要求することになつて、社會小說の提唱となつたのである。だが「社會小說とは何ぞや。」と云ふことの意義については、當時言說が區々に分れて一定しなかつた。社會小說とは「社會の實相を描くべきものだ。」と云ふものもあれば、「社會主義傾向を帶びたものだ。」と云ふものもあつた。或は「政治界、宗敎界などに取材して、其の範圍をひろむべきものだ。」とも解した。斯うして解釋は各樣に分れたが、結局、「單調な戀愛的材料、空想本

位の世界から離れて、活きた社會相に積極的に觸れて其の眞相の一部を確實に摑め。」と云ふのが主眼だつた。

けれども、政治界や、宗教界や、實業界などに取材するにしても、どうして、それを藝術化すべきかと云ふことについては、どの批評家も言說しなかつた。

次ぎに、「時代精神に觸れよ。」と云ふ要求も、小說家が超世的に時代の推移に對して、餘りに沒交涉だと云ふことから起つたのである。內田不知庵は、其の點に言及して、「今の小說家は、常に社會を離るゝが故に、餘り時代精神を理解せず、其作は畢竟新聞の三面雜報を延長したるに過ぎず。之を極言すれば、今の小說家は思想界に立ちて、他の學者、政治家、宗教家と共に相馳騁するの權利なき者なり。」と罵り、「見よや、我邦の今日は、政治、宗教、倫理の上に於て新舊思想の乖離は將に來らむとする大衝突を豫告するに非ずや。日々の新聞紙を讀むも、感興百出、慨くべきもの、恐るべきもの、宛然維新前後の歷史を讀むと同一の感あるに非ずや。翻て文藝倶樂部、或は新小說を繙けば、天下は太平無事に泥み、戀愛に狂し、放蕩に勞れたること宛として隔世の如し。」と非難した。結局、不知庵は、以上の缺陷を補ふために、時代精神を描く必要あることを力說したのである。以上の點について、殊に熱心に要求したのは高山樗牛だつた。

所謂寫實派の作家が描ける人物は、名は寫實と謂ふと雖も、喩へば根の無き草木なり。是の人物の生活せる社會、是の社會に弘通なる精神に就ては、多くの解釋も觀察もなく、單に外に現はれたる言語、衣服、風習などの末節に就て寫實逼眞を衒ふに過ぎず。（中略）一人を描き、一事を寫すにも、是の人、是の事の存在し、生起せる時代、社會の少くとも大體の精神を領會し得たる上ならでは、爭でか其の人其の事の具象的表現を得べき。（下略）

樗牛は、斯う云つて、「國民思想の活動を精細に觀察するならば、自ら時代精神を理解し得よう。」と云ふ意味を述べた。だが、不知庵や、樗牛の主張に對して、「時代精神は、俄かに知り得べきものではない。」と云つて、無期延期說を唱へたものもあつた。

（二）　內田魯庵の社會小說

以上の要求があつた爲めに、社會小說が先づ二十九年頃から、徐ろに現はれて、一時流行した。而してそれが藝術的に失敗したあとは、社會的傾向と云つたやうなものが、尙ほ小說の上に、暫く殘留して居たのである。

遊蕩文學を排して、道念ある小說若くは內容の純潔な小說を要求する聲は、二十九年頃から、矢

張、批評家の間に起つて居た。當時は、藝術よりも、寧ろ道德の力を重視した時代で、硯友社一派の遊蕩文學に對しては、次第に反感を抱くものが多くなつた。宗教文學とか、哲學的文學とか云ふ叫びが起つたのも、それがためだつた。畢竟、家庭小說は、社會小說の余波と純潔な內容ある小說の要求とが合一して、其の新しい空氣の中から、通俗味を帶びて生れた結晶であつた。

當時、社會小說に筆を染めたのは、內田魯庵ばかりではなかつた。廣津柳浪、小栗風葉、後藤宙外、前田曙山らも、此の方面に手を附けた。だが、最も努力して、比較的多くの作品を提供したのは、內田魯庵であつた。

蓋し風葉や、宙外らは、魯庵ほどに、切實に社會小說の必要を感じたのではなくて、寧ろ一時の移り氣で一二篇、書いて見たのだと云つたやうな風があつた。宙外の『腐肉團』、風葉の『政黨』などは、政治社會の一部を描かうと試みたのではあるが、單に其の表面を撥撫した丈で、而も其の具象化が行はれて居なかつた。柳浪の『非國民』なども、矢張、當時のある詩人兼批評家某を中心人物にして描いたのだが、露骨な書き方をしたもので、何等の藝術味がなかつた。

ところが、魯庵は、彼れ自ら社會小說を主張した丈あつて、殆どさうした作品にのみ筆を染めた。勿論、其の全部は失敗に近かつたが、一二篇は相當の藝術的價値を有して居た。其の作には、『暮の二

十八日』『落紅』『片うづら』『霜くづれ』『今樣厭世男』『浮き枕』『電影』『血櫻』『青理想』などがあつた。何れも、三十一二年頃に出たものである。

蓋し魯庵の抱負と理想とは、相當に高く、大きかつたであらうが、其の表現の上に於ける中心生命であるところの藝術化が殆ど行はれなかつた。其の大抵の作は、露骨な概念の發表か、乃至は、社會の暗黑面の剔抉に留まつて居た。其の中で、一番藝術味を有して居たのは、三十一年三月の『新著月刊』に出した『暮の二十八日』だつた。

『暮の二十八日』は、大きな事業を夢みて居た靑年が、中途、失敗して、非常に煩悶を重ねて居たのが、不圖、宗敎の光りに觸れて、自己の眞の幸福が家庭にあることを悟つて、爾來、平和な生活に入つたと云ふ筋で、年の暮の氣分、情趣を背景として描いたものである。悲慘小說、深刻小說に飽き始めて居た文壇は、忽ち『暮の二十八日』に喝采した。勿論、其の書き方も、多年の文壇生活をした魯庵だけに圓熟して居た。此の一作が機緣となり、且つ作家としての魯庵の地位を確保したので、爾來、社會小說を連發したのであるが、『暮の二十八日』に匹敵すべきものは、殆ど出なかつた。けれども魯庵が力めて、社會の眞相や時代精神に觸れようとした態度は、寧ろ賞揚すべきものであつた。紅葉が三十年一月から、三十六年にわたつて書き出した。『金色夜叉』にも、社會小說の影響

が、仄かに出たのである。

（三）最初の家庭小說『不如歸』を書いた蘆花

家庭小說の第一作は、德富蘆花の『不如歸』である。それは、三十三年一月に民友社から出版された。蘆花は、其の以前に『夏の夜がたり』と云ふ小說を書いて、一部の人に認められて居た。『不如歸』を出す迄に相當に作家としての經驗を重ねたのだ。

『不如歸』の文學的價値について、花袋は、全然それを否定し、「それが非常な歡迎を得たのは、取材と實感と同情とによるので、藝術上の價値を付し得ない。」と云ふ意味を述べて居る。だが、私の見るところでは、『不如歸』を最初から、純藝術的なものと見てかゝらうとするのは間違つて居ると思ふ。それよりは、通俗小說として、稍藝術味を混和したものとして成功して居た作品だと見る方が穩當ではあるまいか。

勿論、花袋の云ふ通り、實感と同情と取材とが、讀書界を動かしたのも事實だ。だが、私は其のほかに、今一つ附け加へたいことがある。それは、『不如歸』には、在來の小說家のやうな氣臭が、全然ないことが、どんなに讀者を喜ばしたか知れないと云ふことだ。白樺派が、文壇に成功した一

要素も亦、そこにあつた。素人らしくて、フレッシュな匂ひが、『不如歸』の全體を通じて漂うて居るのは事實だ。そこに、蘆花の强味があつたのだ。

菊池幽芳の『己が罪』は、蘆花の『不如歸』が『國民』に出ると間もなく、『大毎』に掲げられた。幽芳も矢張、『己が罪』を書くまでに、作家として相當の經驗を積んだが、『己が罪』によつて、家庭小説の驍將たるべき地位を確保し得た。樗牛は、『己が罪』を評して、「大體に於て重厚の趣あるは嘉みすべし雖も、結構陳腐にして文章甚だ冗漫、加ふるに性格の研究尙ほ大に足らざる所なり、傑作を以て許すべからざるや論無し。」と云つた。だが、新聞小説として見れば、在來の物に比して、進歩したあとが確かにあつた。幽芳は『己が罪』に續いて、矢張家庭小説として『乳姉妹』などを書いて、一般讀者の間に歡迎された。後期に於て、家庭小説の新作家が續出したのは、蘆花及び幽芳が、其の先蹤となつたのによるのである。要するに、失敗した社會小説は結局、問題文藝に迄行かずして、文學の功利化に終り、家庭小説も流行の渦卷を作り出したと云ふ丈で、通俗味の境地から脫しなかつたのである。

此の期には、尙ほ閨秀作家として、三宅花圃、北田薄氷、大塚楠緒子、田澤稻舟などが出た。また翻譯家として、若松賤子、小金井喜美子などが居た。斯うして樋口一葉を始め、比較的に多くの

閨秀を出したのは、前期に於ける一特色であつた。

（四）田山花袋の新進作家時代

それに新進作家のうちに、尙ほ一人記さねばならぬ人が居た。それは、田山花袋である、花袋は、二十六年、トルストイの『コサツクス』を譯して『世界文庫』と云ふ翻譯叢書の一部として出したことがあつた。それの叢書中には、松居松葉の『ドンキホオテ』不知庵の『めをと』などがあつたやうに私は記憶する。『コサツクス』は原稿紙六百餘枚で、原稿料三十圓を貰つたと花袋は云つて居る。花袋が新進作家として出たのも勿論、その頃だつた。

花袋は、三十五年に『アカツキ叢書』のうちに『重右衛門の最後』を書く迄は、戀愛小說のみを書いて居た。美しい山水、美しい靑年と少女との戀。それが、どの小說にもあつた。單調と云へば、恐しく單調だつた。それは、花袋が、ロマンチツクな幻夢に醉うて戀を讃美して居た時代だつた。

花袋の小說に對する態度は、最初から眞面目だつた。而して其の流麗で稍新味のある文章が、戀愛などを描くにふさわしかつた。小說と云ふよりも、寧ろ抒情詩と云ふやうなものが多かつた。從つて靑年の一部には、花袋に共鳴するものもあつた。だが、誰も、其の單調なのには困つた。

二十九年の『國民之友』に夏季附錄に出た。『忘れ水』などは、當時に於ける花袋の代表作で、青年男女の戀の悲みと眞實とを抒情的に歌つた詩的小說であつた。高山樗牛が、「近時發行の群小說中に於て屈指の一たるを失はざるべし。」と推賞したほどである。それから三十年頃に花袋が書いた『ふるさと』は、湖處子の『歸省』と同じやうに、故鄕の山水に對する感想を歌つた散文詩篇だつたが、花袋の初期時代の長所が能く出て居た。

第五章　新進作家に對峙した紅葉、露伴

（一）紅葉等に對する非難と嘲罵

此の期に於け後期に活動した少壯作家の文學的進步を叙論する前に一應、書かねばならぬのは、當時第一流の大家として起つて居た尾崎紅葉、幸田露伴らの業蹟である。文壇の新人が新機運と共に擡出した時、紅葉は、どう云ふ道をゆくか、露伴はどう云ふ風に動くかと云ふことは、當時の批評家らが、興味の中心として、觀測を試みようとしたところであつた。

觀念小說の勃興と共に、文學上から、紅葉に對する悲觀說が、漸く旺んになり始めた。『國民之友』の批評家は、紅葉が二十八年七月以來、約半歲の間、小說を發表しなかつたのを見て、二十九年初頭の頃、紅葉に對する悲觀說を揭げて、紅葉を「排想派」の領袖と稱し、「紅葉が著作壇を退けるは之れ創作の能無きを自覺せるものなり、彼は小說家よりは寧ろ記事文作家なり。」と漫罵を加へた。勿論、此の漫罵は、當時の所謂排想派乃至無想派と稱せられた作家の平板な單調な小說に非常に飽いて了つた反動的氣勢をも含んで居たので、全然、中傷的、非合理的とは云へなかつた。けれ

ども獨斷的、早計的な批判たることを免れなかつた。

紅葉に幾分同情した樗牛さへも、明治文士の文學的壽命の短かいことから說き起して、反動的氣勢の上から、紅葉の文學的狀態を悲觀し、「甞て文壇の梁山伯と聞えたる硯友社の領袖として、久しく宋公明の全盛を擅げたる紅葉すら、今や眉山、鏡花の一輩の新作家に蹴おとされて、暫く著作壇を退くの已むを得ざるに至れりと謂ふに非ずや。吾等は、向後の小說壇に將に來るべき第一流の作家の何人なるかを知らずと雖も、過去を以て未來を察すれば、其聲名の永く持續せさらむことを恐る。」と云つた。

『國民之友』記者や、樗牛ばかりでなく、紅葉非難の聲は、『青年文』『新聲』其の他の雜誌にも出た紅葉ばかりでなく、露伴に對する悲觀說も少しはあつた。だが、紅葉に對するやうに烈しくはなかつた。蓋し當時の文壇に於ては、硯友社の勢力が尙ほ根を張つて居て、紅葉は、其の中心人物であつた上に、二十七年來、トルストイの『名曲クロイツエルソナタ』『隣の女』『冷熱』『笛吹川』などの翻案物や、合作物にのみ筆を執つて、彼れ獨自の世界を開かうとしなかつたやうに見えた。それ等のことが、批評家に滿足を與へ得なかつたのみならず、觀念小說などと共に文壇的新機運が起つたので、何等か小說の內容に於ける觀念を有しなければならぬとした當時の風潮を以てしては、自然沈

默のうちにある紅葉へ向つて、特に、悲觀的、嘲笑的な批評が發せられたのである。それには、幾分の理由はあるが、大體に於て、過酷、激烈に過ぎた點が少くなかつた。

露伴も三十四年頃になると、樗牛のために烈しく非難されたが、二十八九年頃には、尚ほ紅葉よりは、文學的命脈が長いであらうと見られた。彼れは、紅葉のやうに文壇的黨派を樹立して其の首領となるやうなことはせずに、ひとりで超然として道を歩いて居た上に、彼れの『五重塔』『風流佛』などは、或意味に於て、觀念小說的だつたから、稍彼れに同情したものもあつて、非難の聲が割合に低くかつたのであらう。

斯うした非難、嘲笑の間にあつた紅葉は、二十九年十月、久振に『多情多恨』を書いた。花袋は、それについて「たま〳〵寫生風の作品『靑葡萄』を出してます〳〵惡評を買つた。そこで彼竟に憤然として蹶起し、二十九年『多情多恨』の大作を世に公けにした。」と云つて居るが、『靑葡萄』は紅葉の著作年表によると、二十九年十月に出たとある。而して『多情多恨』は二十九年二月起稿、七月發行としてある。それによると、花袋は順序を顚倒して居るやうだ。

何れにもせよ、進取的な紅葉は、批評家の嘲罵に憤つて、「俺の眞の手腕を見よ。」と云ふ調子で、『讀賣』に『多情多恨』を書き始めた。其の豫告には、「これ俳諧にあらず、雜報にあらず、翻案にあら

ず、合作にあらず、實に快腕一揮の大作なり。」と紅葉自ら宣言した。

（二）『小說の米の飯』と自稱した『多情多恨』

『多情多恨』は、紅葉が自ら誇稱した通り、「世間の小說は珍味だがこれは俺の家の米の飯だ。」と云つた丈のことは確かにあつた。紅葉の全作品中、最も優れた大作にちがいなかつた。私は『金色夜叉』よりも、寧ろ『多情多恨』を以て、紅葉の最大傑作だと云ひたいのである。

紅葉が、觀念小說に行かず、深刻小說に行かず、「自ら小說の米の飯だ。」と云つたところの自然主義的な小說に赴いたのは、主として、彼れの文學的識見の優越と藝術的熱意の燃燒とによると云はねばならぬ。勿論、過渡期にあつた彼れは、尙ほ遊戲氣分や、常識道德や、自己の江戶ツ兒的な通人趣味から脫し得ない形跡を『多情多恨』の上に留めて居たけれども、大體に於て、自然主義的な作風を示して、觀念小說、深刻小說以外の新しい世界に出たのは、流石に紅葉であつた。

それで、『多情多恨』には、在來の紅葉の小說に殆ど共通的な事件のヤマや、當て込みや興味中心の出來事などが、餘程、なくなつて居た。筋の上から云へば、多情多恨な數學教師鷲見柳之助が、愛妻を喪うて、尙ほいつ迄も、妻のことのみ思ひ續け、寂寥と孤獨とに堪えられないで、友人葉山

誠也の家に寄寓し、やがて栗山の妻に親近し過ぎた爲めに、栗山の父に疑はれて、友の家を去ると云ふ迄のことで、百五十餘日間の單調な失戀生活を描いたに過ぎない。そこに、何等の曲折も、波瀾も殆どない。それへ現はれる人物も、柳之助、誠也、其の妻お種と父、柳之助の亡妻の母と妹お島らで割合に少數である。殊に始終、出る人物は、柳之助、誠也、お種の三人に過ぎない。以上の筋と人物との上から見ると、深刻小說や、觀念小說を歡呼した當時の批評家には、勿論、好意を以て迎へられ得べき可能性が少かつた。けれども紅葉の文學眼は、それ等の平淡なる境地を以て、流行の小說に優るものだと自信する丈の見識を持つて居た。文壇的戰法より云へば、彼れは、背水の陣を布いて、彼れが得意の境地よりも、寧ろ非得意の境地を描破しようと企てたのである。

蓋し紅葉が覘つた焦點は、柳之助の失戀的心理についての精緻な描寫にあつたと思はれる。勿論それは、半ば成功して居た。けれども柳之助の性格描寫には、矛盾があり、殆ど類型的、作爲的になつて居て、個性が朦朧として居た。性格描寫の上では、誠也、及び其の父、お種、お島らに於て成功して居た。それ等の人物には、はつきりした個性が現はれて誠也の快活な洒落な義俠的な性格お種の外面素つ氣なくて內に溫情のある女房氣質などが、表現の上に眞實味を豐かに持つて居た。それは、紅葉が摑まへたモデルに依つた爲めだと云はれて居るが、此の點は勿論、大體に於て、事

ところがあつた。

實だつかも知れない。誠也は、どう見ても、紅葉自身の性格の一面を浮彫りにしたと云つたやうな

柳之助と葉山との日常生活も、大體、鮮明に描かれて居た。殊に待合の描寫は、紅葉の得意とした點であるだけに、當時の新進作家などには書けない巧みさをもつて、精細に而も無駄がなく描かれて居た。其の待合へ現はれる藝妓と女中などのスケッチも、微妙な筆觸を示して居た。而して『多情多恨』の終りに於て、全體の結末を付けずに、余情を殘したやり方も、氣が利いて居た。

だが、冗漫の傾きがあつて、無理に引きのばしたやうなところがあるのは、掩ひ難い。若し紅葉が、今一段の努力を加へるとしたら、きつと『多情多恨』の分量を緊縮して、冗漫の弊を一排したであらうと思はれる。勿論、それは紅葉のみではなく、當時の寫實主義的小說には、すべてそれが通有の病弊となつて居たのだ。

（三）『多情多恨』に於ける巧妙な描寫

今『多情多恨』の文致を偲ぶために、粋人の葉山誠也が、不粋な鷲見柳之助に其亡妻に似た藝妓を逢はせるため、待合へ伴れていつて、閑談する一節を引用しよう。

(前略)旋て其横町を出ると、忽ち一廓の別天地、狹い兩側に軒ラムプやら御神燈やらが星の如く輝いて、意氣な音〆は行くほど繁く、通過る格子の內から突然に太皷を撃つて、黃色い聲を出されたので、柳之助は不意を吃つて・(あゝつ)と言つたが、其聲を返して、

「おい、おい、何處へ行くのだよ。」

「まあ何でも可いから跟いて來給へ。」

「僕は西洋料理が可いな。」

「西洋料理でも何でも御好次第。」

柳之助は不安心な顏をして、前後を眴しながら葉山に追附いて、

「非常な藝者屋だね。」

うんともすんとも言はず、葉山は匆々と歩くばかり。(中略)

(前略)葉山は磨硝子の燈籠を懸けた門へ衝と入つた。案內が入るから柳之助も跟いて入つたので、何屋であるのやら一向知らぬのである。

門の內は奧深く御影石で甃むだ露地の正面が秩然とした式臺造で、障子が一枚啓いて、銀地の衝立が電燈に反射してゐる、其蔭を隱顯忙しさうに走る人影も見える。

玄關にかゝると直に婢が顯れて、葉山の顏を見るより空々しく可懷さうに、

「おや、入らつしやいまし。」

何と無く間の悪い狀て、柳之助は葉山の後に立ちながら、見るとも無く目を遣ると、左手の小陰が立派な供待になつて、自用車らしいのが五六臺並むで、車夫は悠然と火鉢に聚つて酒を飲むでゐる。

何と云ふ家か知らぬが營業する店、と柳之助は思つた。奥まつた一間へ案内される途次、思寄らぬ所に階子があつたり、無理な所に座敷があつたりして、頻に藝者の徘徊ふのを見掛けたが、大分二階の賑かな樣子。

二人の通されたのは、茶掛つた小意氣な六疊で、折廻した緣の外は中庭になつて、その筋向の間では客と藝者の藤八を打つ影法師が映るのを、柳之助は突立つて見てゐたが、

「馬鹿な眞似をしとるな。」と障子を閉てゝどつかり座ると、此狹い間を電燈の光は耐らぬほど眩く照して、未だ火鉢も出ねば、婢も來ず、唯明くばかりあつて閑寂した中に、葉山が床柱に靠れて、象牙の煙管筒の頭を閑さうに拔差する音がスポン／＼と鳴る。柳之助は又更紗紬の菌の上に我張つて貧乏動をしながら、黒部杉の天井を不思議さうに眺めてゐたが、矢庭に、

斯う云ふ風に大體を描いて、「腹がすいた。」次ぎに女中を點綴するあたりから、紅葉得意の描寫と會話とが鮮かに出てくる。

所へ婢は火鉢を持つて來て、直に引返して茶と菓子を運ぶ。

「あゝ腹が減つた。」と又もや柳之助の呻くのを聞いて、婢は茶を注いでゐたか、

「あら、洪水は岐阜と極つたのですか、飢饉は、貴方、何處」
「えゝ。」とばかりに柳之助は荒膽を挫かれた。虚さぬ葉山は、
「今朝の火事は番町だよ。」
「あら、然う、番町には私の情郎が居るのよう。」
と惡身しながら甘怠れて言ふのを、柳之助は愕然と打目戌つてゐが、たやがて眉を皺めて横を向いた。
「いや、然うだつけかね、はてな、もう臺灣にはゐないのかい。」
餘り葉山の眞面目さに婢も不覺と釣込まれて、
「おや、何故、貴方。」
「軍夫の話だらう。」
「おふざけなさいよう！　貴方の洒落は例でも罪が深いから可厭さ。」
「もつと罪の深い事があるのだが、知つてゐるかい。」
「大知り！」と調に乘る途端、耐りかねたか柳之助は、
「早く何か食はうぢやないか。」
正に是晴天の霹靂、婢は打魂消て、如何に此人が家暮であるか、後學の爲に見て置きたいといふ顔て、彼の面を眺めながら、

「貴方は餘程賤しいよ。此は待合ぢやありませんか、物を食べるなんて、那樣賤しい事を爲る所ぢやないの。」
是も亦柳之助には霹靂一聲で、
「や、此は待合茶屋か。」
「はい、待合茶屋で御座います。」
柳之助は慌て氣味で、
「葉山、此は待合茶屋なのかい、おい。」
「何爲、和洋兼帶の料理屋だよ。今直に命じるから辛抱したまへ。それぢやお若さん、何だ旨さうなものを、大急でね。」
「何に致しませう。」
「西洋料理だ！」と柳之助は獨で主張する。
「御前があゝ有仰るものだから、それぢや西洋料理と爲やう。」
「貴方も？」
「俺は謝る。」
「では、此方は西洋料理、よろしい。そこで貴方の御肴は？」
と御肴の二字に惡く力を入れて、頗る諷する所あるが如し。葉山はぐつと呑込みの、

「それには今日は些と註文が有るのさ。」

「でせう。」と全然心得てゐるのは、更に薬山には心得られなかつた。憖して又彼是と手間取るのを、柳之助は可悶かつて、

「早くしてくれ、もう耐らん。」

急立てられて婢も耐らず、好い話は後にして、

「よろしい、汽車の綱曳！」と忙々出て行つたか、直に入つて來で、（でせう？）の話を續ける。（下略）

（四） 藝術上の時代的要求を綜合化した『金色夜叉』

『多情多恨』に次いで出たのは、三十年七月から、三十六年一月まで、『讀賣』へ連載した『金色夜叉』である。此の作は、約五年間の歳月を經たが、完結しないうちに、紅葉の逝去を見た。『金色夜叉』については、いろいろの批評がある。一般讀者の間には、『多情多恨』よりも重く見られて居るやうだが、文藝批評家の間には、花袋の云つたやうに「作者は後篇あたりでもう型にはまつてどうすることも出來ない心持を示してゐた。內容の意義を考へて見ても、時代の推移に呼應して行かうとしたものでありながら、やはり從來の空想がゝつに寫實から脫し切れないで居た。」と見る者も相

當にある。

それは、紅葉自身も、其の地の文章については『頴才新誌』（明治初期の投書雑誌）的だ。と云つたさうであるから、勿論、『多情多恨』のやうに「俺の家の飯だ、」と云ふ自負はなかつたであらう。畢竟、さうした自意識は明かに紅葉にあつたのだ。だが、新聞の續き物としての起ち場から、曩きに平淡な『多情多恨』を出したのだから、今度は、多少、ヤマがあつて、花やかで、時代の要求する趣味、傾向乃至文壇の新風潮に觸れたものを書かうと企てた結果が、『金色夜叉』となつたので、そこに、多少、同情して見る必要があらうと思はれる。

思ふに、『多情多恨』を書いた時代から、紅葉は、漸く創作について、在來の遊戯的態度から少し宛、離れてゆかうとしたやうに思はれる。さうした感じが、深く彼れを內部から突き動かしたのは三十四五年の頃であらう。それは彼れが當時ベルリンに居た親友巖谷小波に與へた手紙のうちに現はれて居る。

（前略）志を抱きながら酢醬油の事に責められ、又は小天地の親分と立てられ、其が爲につまらぬ責任等を負ひて、身動きもならぬ苦しさは、僕自身よりも獨逸なる君が目に、却つて能く洞察さるゝ處なるべく、今頃は君がみづからの幸福を感じ居たまふなるべし。些々たる虛名の爲に心を沒せられ居候境界、なかなかつらく悲し

く存候。（三十四年二月）

（前略）何か書かんゝの煩悶と大に學ばんとの抱負と日夜胸中に磅礴して始終の苦惱と相成、豪放の氣を脫し老實に成らんずる傾有るを強ひて抑へんとすれば歩々に沈着に赴くの止むを得ざる趣有り。（三十五年三月）

此の手紙は、『金色夜叉』續篇を書いた時分のものだ。斯うして、紅葉の動搖しつゝあつた內面生活の告白を見ると、私は晩年の紅葉に對して、深く同感を寄せざるを得ない。

だが、『金色夜叉』は、紅葉が努力した割合に、缺陷の多いものである。若し藝術味のある新聞小說と云つたやうなものを書く目的の下にあるものとして見たら、勿論、半ば以上、成功したものと云へようが、嚴正な藝術批判の立脚地からすれば、其のお芝居的なところ、興味中心式のところ、地の文に技巧を弄し過ぎたところなどは、どうしても同感しかねる。換言すれば、紅葉らが創めた寫實主義の病弊から脫却し切らない作品だと云はねばならぬ。

けれども左樣した缺陷があつとしても、『金色夜叉』の價値と意義とは、別にある。それは、其の內容と形式との上に於て、舊文藝の長所即ち在來の寫實主義が行き着くべき頂點に達し得たことである。先づ內容上から見ると、社會的に愛と物質との鬪爭、男女學生間に於ける各種の流行を描くと同時に、文學思潮的に觀念小說、心理小說、社會小說、時代精神論、センチメンタリズムなどの

各種の傾向を攝取し、統合して居る。形式上から見ると、雅俗折衷體の美的要素を具體化さうとして居る。會話なども、洗練に洗練を極めようと力めたあとが見えて居る。斯うした點から見ると、『金色夜叉』の價値と意義とが自ら明瞭になるのである。

『金色夜叉』が文學的に最も成功して居るのは、其の前篇であらう。間貫一とお宮との戀の甘美な場面から始つて、お宮が、富のために愛を犧牲にして、貫一に背き、貫一を怒らせ、熱海に於ける月夜の悲痛な別離となる迄であらう。

宮は我を棄てたるよ。我は我妻を人に奪はれるよ。我命にも換へて最愛みし人は芥の如く我を惡めるよ、恨は彼の骨に徹し、憤は彼の胸を劈きて、幾と身も世も忘れたる貫一は、あはれ奸婦の肉を啖ひて、此熱腸を冷んとも思へり。忽ち彼は頭腦の裂けんとするを覺えて、苦痛に得堪えずして尻居に僵れたり。

宮は見るより驚く遑もあらず、諸共に砂に塗れて搔抱けば、閉ぢたる眼より亂落つる涙に浸れる灰色の頰を、月の光は悲しげに彷徨ひて、迫れる息は凄しく波打つ胸の響を傳ふ。宮は彼の背後より取縋り、抱緊め撼動して、戰く聲を勵せば、勵す聲に更ら戰きぬ。

「如何して、貫一さん、如何したのよう！」

貫一は力無げに宮の手を執れり。宮は涙に汚れたる男の顏をいと懇に拭ひたり。

「吁、宮さん恁して二人が一處に居るのも今夜限だ。お前が僕の介抱をしてくれるのも今夜限、僕がお前に物を言ふのも今夜限だよ。一月の十七日、宮さん、善く覺えてお置き、來年の今月今夜は、貫一は何處で此月を見るのだらう。再來年の今月今夜――十年後の今月今夜――一夜一生を通して僕は今月今夜を忘れん、忘れるものか、死んでも僕は忘れんよ、可いか、宮さん、一月の十七日だ。來年の今月今夜になつたらば、僕の涙で必ず月を曇して見せるから、月が……月が……月が……曇つたらば、貫一は何處かでお前を恨んで、今夜のやうに泣いて居ると思つてくれ。」

宮は挫ぐばかりに貫一に取着きて、物狂しう咽入りぬ。(下略)

大分、技巧的に過ぎたところはあるけれども、『金色夜叉』の長所は、斯うしたところにあつた。而して前篇以後は形式的に固定して了つた趣がある。紅葉は、痼疾だつた胃病と戰ひつゝ、『新續金色夜叉』を書くと間もなく、三十六年十月三十日、三十七歳で歿したのである。

(五) 露伴の大作『風流微塵藏』

幸田露伴は、紅葉に比較すると、文學的活動の上に於て、一籌を輸した觀があつた。露伴が、此の期に於ける作品で、批評家の注目を惹ゐたのは、『風流微塵藏』『新浦島』『二日物語』『天うつ浪』な

どである。『風流微塵藏』は、二十六年頃から『國會新聞』に連載し始めた大作で、後數冊に分つて出版された。共のうちで『さゝ舟』『ひとり寢』『きくの濱松』などが優れて居た。

『風流微塵藏』は共の量から云へば、正に紅葉の『金色夜叉』に匹敵すべきものであつた。紅葉の流動的、推移的、敏感的なのに比較して、固定的、內向的、膽汁的な露伴は、『微塵藏』を書くまで、大體に於て、超現實的、乃至主觀的の傾向あるものを書いて來た。けれども時勢の推移、征清戰後の文壇的新機運は、少し宛、露伴を刺戟して、一步、現實の方に進ませようとした。『微塵藏』には、共のあとが明かに現はれて居た。勿論、露伴のことであるから、紅葉の晚年の大作のやうに現實味が多くなかつた。『さゝ舟』などは、何となく抒情味が勝つて居た。其處にまた露伴の妙趣があつたのだ。

『微塵藏』は、餘程、大きな構圖の下に此の人生の一面を多數の人物と共に描かうとしたのであるけれども、途中、倦んだと見えて、露伴は筆を擲つて了つた。『金色夜叉』は、紅葉の死のために、未完となつたのだが、露伴は生きて居ても、再び『微塵藏』の完結に心を向けなかつた。

『微塵藏』のやうに、大作ではないけれども、露伴固有の長所を發揮して、能く纏つてるのは、『二日物語』及び『新浦島』である。『新浦島』は、二十八年一月『國會新聞』に掲けられた抒情味の勝つた

寓意的な小說である。露伴が現世に於ける悟道の觀念を情味ある散文詩的な本篇に托したのである。其の悟道は佛敎的、哲學的である。或は禪的と云つて宜いかも知れない。露伴の見たところによると、生活向上の第一階は、物的生活を離れて、淸淡な自然生活に入るにある。第二階は、自然生活から進んで、神仙生活に入るにある。第三階は、神仙生活から進んで、仙も願はず、生もなく、死もない寂靜無爲の境地に到達するにあるとするのだ。此の心的經過と推移と歸着とを詩的に表現しようと試みて、相當に成功を得たとされたのが、『新浦島』である。

（六）『新浦島』の思想及び技巧

それで、露伴は、浦島傳說に取材して、其の百世の孫であるところの次郞が優れた詩才を持つて居て、都に出ると共に世間の歡迎を受け、戀と榮華のうちに、數十年の享樂生活を送つたが、不圖事に失敗して、故鄕のことを思ひ出し、家に歸ると、其の兩親は、次郞に祖先傳來の玉手箱を與へた。それと同時に兩親は羽化登仙して了つた。それで次郞も亦仙人にならうと九轉の大丹を煉つて見たが、仙人に成れなかつた。それを憤つて今度は魔道に落ちて了つて、飛行自在の通力を得たが貪瞋、愛慾から離れることが出來なかつた爲め、自業の果を受けて、紅蓮淵の石と化し、永久に死

もなく、生もない境地にゆき着いたと云ふに終つて居る。

斯うした筋で、在來の作品『五重塔』や『風流佛』に比較すると、露伴の主觀的な色合が最も鮮明に露骨に出て居る。浦島次郎は、露伴其の人だ。他の人物、神仙、惡魔も露伴の感想を托した傀儡だ従つて前半に於ける人間界の描寫よりも、後半に於ける超人間的な世界を叙する方に於て、露伴の感興が横溢してるやうに見える。即ち第十回から十八回迄が、露伴の得意のところであるやうに思はれる。殊に次郎が魔法を修して、惡魔王に逢ふあたりに筆致の妙が見える。

（前略）少しは習ひたる事あるを幸ひ、本文を力に明王の尊像を描き、護摩壇をしつらひ水瓶水盤金剛盤獨鈷三鈷五鈷の諸法器を或は借り、或は買ひ或は手作りに作り出して遂に殘らず具備しければ、さらばこれより明王を祈らんと、淨衣を引給ひ齋戒沐浴して祈り初め。供水供花の次第嚴に、燈燈の光り晃めき渡りて、護摩の火焔物凄きまでに烈々と燃え、室内に黑煙り渦まき舞ふ有樣何と比ふべき語も無く、恐しなんと云ふばかりなれど、必死を期したる上の事とて次郎は些も怯まばこそ、明王が呪高らかに唱へて心腎脾胃を揉み立て〳〵切りに祈りかけるが、末には眼も血走りて聲はじやり〳〵と涸れ果てつゝ、（下略）

（前略）これ一遍にて、嬉しや修法成就と極れば、一ト際聲も張り上げて何やら娑婆訶と念じ切る時、忽ち大地震動して雷鳴脚下に轟き起り、戸障は皆劈き破られ、家は恰も船の如く上下左右に揺り蕩され、疊より黑き雲

湧き出でて咫尺を辨せず四方を籠むる中より紫色の雷光り走りて瞳を燒くかと思ふばかり鋭く閃く怖ろしさ。豫て期したる浦島次郎も、水磨の獨鈷の水の滴るほど鐵色澄めるを右の掌に、忘るゝばかり緊乎と握りて、左手に護摩壇の界繩を頼みの綱と執りしまゝ呼吸さへ得なさで一生懸命屹と眼を据ゑて見るに、又一段の激雷の音、銀山碎くる百萬の瓦濤一時に寄するが如く、轟然として鳴る途端、思ひもかけぬ我が胸元より一團の烈火躍り出して赤光を放ちつゝ烏雲に乘るよと見る間もあらせず、『内に在りては外に聞き、外に在りて内に聞き、暗きに居ては明らかなるに見、明らかなるに居ては又暗きに能く見る毘奈耶伽王とは我なるぞ。』と潮音松籟比へ難き壯大無上の朗々たる聲先づ頭上にありて、仰げば、頭には寶冠を頂きて髑髏を莊嚴の具と飾り給ひ、齒をもて唇を咬み玉へる忿怒の相形怖しく、左の手には印を結び右には寶劍を提げて三目を睜開き、はつたと睨んで大魔王は次郎が前に突立ち玉へり。（中略）

斯うした魔王が現はれて、次郎に向つて、「愧ぢよ小きもの退れ卑きもの、魔道呼はり、嗚呼なり、慧ぢよ。甘露軍荼利夜叉明王とは即ち異現同實の我が事なりとは知らずや。魔とは什麼。佛とは什麼。汝が求むる仙とは何。云へ。云へじ。あはれ、人の子、鬼の餌。毘藍の風の吹く日より鐵圍の山の灰となるまで佛の背人の胸に住める我を如何でか魔といふぞ。婆羅樹の花の凋まぬ前鶴林の露乾ちぬ間に少時現ぜしものが佛か。思へ愚者。什麼善。なに惡。十善を修せざる魔王なく、天

地を私せざる神佛なし。」と叫んで、露伴の感想を托するところは、正に作者の壇場だ。

（七）　クラシツクの味が深い『二日物語』

『二日物語』は、三十二年の初頭、『文藝倶樂部』に發表したクラシツクの味の豐かな作品である。『平家物語』のやうな文調を以て、西行の半生を歌つた詩篇である。勿論、新しい味はないけれども文章は比較的に精練されて居て、露伴の此の方面に於ける特色の頂點に達したものだと思はれる。樗牛は、當時此の作を「近時の名品だ。」と云つて賞揚した。

『二日物語』以後、露伴は、漸次、作品を發表しなくなつたが、三十六年九月になると、久振に『天打つ浪』を『讀賣』に出した。文壇は、大きな期待を以て、それを迎へたが、大體に於て、露伴の努力のあとが著しかつたに關らず、期待を裏切つた氣味があつた。此の篇に於て、露伴は言文一致體を用ゐて、先づ形式的に新代の潮流と融和しようとしたが、何となく、窮屈さうなところが見えて居た。內容に於ては、矢張、在來の理想的傾向を帶びて居て、一抹の佛敎的色彩があつたが、最早個人主義的、天才主義的な思想や、深い懷疑的傾向を持つた若き人々には、何等の興味を感ぜしめなかつた。新しい嚢に古い香油を入れようとした露伴の新企圖は、空しく失敗した。而して此の作

は未完の儘にして置かれた。『天打つ浪』と共に、露伴の作家としての生活は、略ぼ新代と沒交渉なものとなつて了つたのである。時の推移ほど、恐しいものはない。

（八）水蔭、美妙、小波らの文學的收穫

紅葉、露伴の他に、硯友社同人としての江見水蔭は、此の期に於て、稍活動のあとを見せた。水蔭の長所は、詩的短篇にあつた。『水車』は、彼れの初期に於ける代表作だ。それは、二十八年に出したのである。爾來、『女房殺し』『炭燒の烟』『泥水清水』などを出して、當時、相當に評判が宜かつたが、結局、『水車』のうちにある『斷橋』『溫泉』『燒山越』『狂詩人』などに彼れ本來の長所が能く出て居た。水蔭が、此の方面にのみ執して居たら、彼れの文學的進歩は、確かに見るべきものがあつたにちがいないのだ。文壇の識者も亦此の方面に於て、深く水蔭に囑望した。ところが水蔭はさうした自家特有の詩人的長所を捨てゝ、寧ろ其の短所とも云ふべき興味中心の小說に赴いたのは、水蔭のため、誠に惜むべきことであつた。蓋し水蔭が『中央新聞』に入つて、日清戰爭時代に短篇小說の際物を亂發したことが、先づ水蔭の詩想や筆の上に宜くない影響を與へたのであらう。

紅葉と一時雁行して居た山田美妙は、其の後、暫く文壇に遠ざかつて居たが、二十八年頃に入つ

て再び筆を小説に染めた。『若白髪』『鰻旦那』『お千代』などは、當時相當に認められた作品だつた。三十年に出した、『可憐狂』『閻魔地藏』なども佳作として推賞されたが、これを紅葉の文學的進步に比較すると、餘程劣つて居た。以上の諸篇は、形式の上に於て、圓熟味を示した丈で、描寫が皮相に流れて、眞實味に乏しかつた。而して『可憐狂』以後、彼れは濫作のため、自ら文學的生命を絕つて了つた。

巖谷小波は、夙に御伽話に轉じて、主として、此の方面に力を傾けて、其の特徵を鮮明に示してある程度の成功を收めて居たが、傍ら餘技として、二十八年頃に『董日記』『昭君怨』『燒火箸』などを書いた。其の中、『董日記』が可憐の情趣がある點に於て最も優れて居た。

それ等の人々のほかに、從來、傳奇小說を書いて居た村上浪六『當世五人男』に於て、村井弦齋は『日出島』に於て通俗小說の特色を發揮し、歷史小說に於て名を出した遲塚麗水は『半月城』に於て、塚原澁柿園は、『最上川』『五月女坂』などに於て、其の長所を示した。其のうち、澁柿園の歷史小說は稍傑出して、時に見べき文學的表現を持つて居たが、新味に缺けて居た。

第六章　後半期の小說と少壯作家

（一）鏡花の作品に現はれた神秘的傾向

此の期の後半期時代に於ける小說界には、二つの潮流があつた。其の一つは、前半時代に起つた少壯作家が、以前の通りの道を追うて、次第に向上したものと、今一つは、前半時代に名を成して居たもので、後半時代に入つてから、今迄とはちがつた別な道を歩からとしたもの、乃至新たに頭角を擡げた最初から、新しい道を辿つてゆかうとしたものである。前者は、文壇に新味を加へなかつたが、後者は日露戰後に現はれたところの新興文學に對して、ほのかに其の導火線たるべき役目を勤めて、小說界に幾分の新味を加へた。換言すれば、將に來らんとする新しい文學的機運の動きつゝあることを隱約のうちに、ほのめかした。

在來の作風を守つて、次第に神秘的、象徵的な色合を濃厚にしたのは泉鏡花である。三十三年頃から、日露戰爭時代が來るまでは、鏡花の飛躍時代で、作品の上に最も油が乘つた時だつた。此の期の作品には、『湯島詣』のやうな寫實小說風の『通夜物語』『三枚續』などがあるが、其の他は槪して

神秘的、幻妖的、超現實的な色彩の濃い作品で其のうちには、『錦帶記』『黑百合』『高野聖』『女仙前記』『湯女の魂』などがある。

『通夜物語』『三枚續』などは、ロマンチックの匂ひが强い。鏡花の美しい詩的空想の窓から見た現實の世界が、展開せられてある。現實味よりは、矢張、空想味が勝つて居る。而して鏡花がいつも好んで描く江戸式な俠的な、氣象の勝つた女が中心人物の一人として出てくる。『通夜物語』では丁山と云ふ華魁が出る。『三枚續』には、柳屋のお夏が出る。鏡花は、さうした女を描くことに於て、巧妙な技巧を持つて居た。

『通夜物語』の結構は、ドラマチカルで、興味ある場面が多い。而して若き失意の畫家が、丁山の死に勵まされて、生々しい血で襖に華魁の姿を描くあたりが、最も一般の讀者に共鳴させるやうに出來て居た。

神秘的な作品では、『高野聖』と『黑百合』とが最も優れて居る。『黑百合』は、幻怪が出ると云ふので、誰ひとり行かない石瀧の奥に稀世の珍草と云はれる黑百合の花が咲いて居ると云ふので、それを採取するため、幻怪の世界へ赴いた花賣女、それを救ひ出さうとして、其のあとを追うて、幽暗な怪窟に入つた少年華族を描いたものである。

『高野聖』は、巡教のため、信飛地方の山深く分け入つた高野の聖僧が、不思議な美女を山中の孤屋に見出して、いろいろ幻妖的事象を見たことや、美女に魅惑されようとしたことを描いたものでさうした境地に於ける神秘情調と一種の女性觀とを象徴して居る。大體は、鏡花の詩的空想から成立つたものだが、而も其の描寫は、精細を極めたところや、簡淨を極めたところがあつて、自然に讀者を鏡花の獨有する世界へ導かねばやまない力を持つて居た。勿論、そこに象徴された女性觀などは、極めて平凡で、また故らに神秘を衒つたり、幻妖趣味を誇張しようとしたところも、ほの見えぬではないが、大體に於て、成功した作である。

（前略）手をあげて黒髪をおさへながら腋の下を手拭でぐいと拭き、あとを兩手で絞りながら立つた姿、唯これ雪のやうなのを恁る靈で清めた、恁云ふ女の汗は薄紅になつて流れやう。

一寸〳〵と櫛を入れて、

（まあ、女がこんなお轉婆をいたしまして、川へ落ちたら何うしませう、川下へ流れて出ましたら、村里の者が何といつて見ませうね。）

（白桃の花だと思ひます。）と弗と心着いて何の氣なしにふと、顔が合うた。

すると、然も嬉しさうに莞爾して其時だけは初々しう年紀も七ツ八ツ若やくばかり、處女の羞を含んで下を向

いた。

私は其まゝ目を外らしたが、其の一段の婦女の姿が月を浴びて、薄い煙に包まれながら、向ふ岸の瀲に濡れて黑い、滑かな石へ蒼味を帶びて透通つて映るやうに見えた。するとね、夜目で判然とは目に入らなんだが地體何でも洞穴があると見える。ひら〳〵と、此方からもひら〳〵と、ものゝ鳥ほどはあらうといふ大蝙蝠が月を遮つた。

（あれ、不可いよ、お客様があるぢやないかね。）

不意を打たれたやうに叫んで身悶えをしたのは婦人。

（何うなさいましたか。）最もちやんと法衣を着たから氣丈夫に尋ねる。

（否）

といつたばかり極が惡さうに、くるりと後に向になつた。

其時小犬ほどな鼠色の小坊主が、ちよこ〳〵とやつて來て、啊呀と思ふと、崖から横にひよいと、背後から婦人の背中へひつたり。

裸體の立姿は腰から消えたやうになつて、抱ついたものがある。

（畜生、お客様が見えないかい。）

と聲に怒を帶びたが、

（お前達は生意氣だよ。）と激しくいひさま、腋の下から覗かうとした件の動物の天窓を振返りにくらはした
で。

キツといふて奇聲を放つた、件の小坊主は其まゝ後飛びに又宙を飛んで、今まで法衣をかけて置いに、枝の尖へ長い手で釣し下つたと思ふと、くるりと釣瓶覆に上に乘つて、其なりさら〳〵と木登したのは何と猿ぢやあるまいか。

枝から枝を傳ふと見えて、見上げるやらん高い木の轆て梢まで、かさ〳〵かさり。まばらに葉の中を透かして月は山の端を放れた、其の梢のあたり。（下略）

これは、『高野聖』の一節で、山中の月夜の凄い美しさが、はつきり描かれてゐる。而して筆に無駄がなくて、引締つて居る。

（二）　此の期に於ける蘆花、春雨、秋聲、春葉

『不如歸』を書いて、前半時代に一躍して、文壇の中心へ出た蘆花は、其の後三十四年五月に『思出の記』三十六年二月に『黑潮』を發表した。前者は、キリスト教を信じて、新思想を抱いて居る一青年の自叙傳で、平凡單調な一生を描いたものだが、それを書いた態度が眞面目で、手法の上には

稍清新なところがあつた。そこに現はれた主人公の學生々活、傳道生活といふやうなものが、一面讀者の眼に珍しく映つたらうと思はれる。それに遊蕩文學とは反對に純潔な思想、感情が盛られてあることが、當時の健全小說を要求した一部の批評家を動かしたやうだ。

『黑潮』は、社會小說乃至政治小說の部類に入るべきものである。明治維新前後の勤王のために奔走した東三郎と云ふ老人及び其の一家の純眞な生活に對照すべく、明治の歐化熱の旺んな時代に時めいた有力な二三の政治家を點出して、其の暗面をさらけ出し薩長藩閥の橫暴を諷したものだ。政治家には、一々、モデルがあつて、其の性行を忌憚なく描いてあるところなどは、淺いながら、穿ち得て居た。而して女色に溺れた喜多川伯の家庭に於て、伯に虐待される夫人と愛孃の道子のいぢらしい姿、反抗的な姿が一つの彩りとなつて居た。大體に於て、興味中心的で、處々に作者の篇中人物に對する好惡の批評が出て居て、成功した作とは云へない。けれども風葉や、宙外の政治小說よりは、確かに一段、立優つて居た。

要するに、蘆花の作品は、『不如歸』『思出の記』『黑潮』の三篇共に、今日の藝術批判の上から見ると、殆ど其の價値を認め難い通俗小說の一典型たるに過ぎない。けれども當時のレヹルから云へば其の稍清新なところ、眞面目なところ、キリスト教思想を背景としたところ、時代の傾向を見る眼

の敏活なところ、それ等に於て、一異色を有したものと云はねばならぬ。彼れの强味は、此の邊にあつたのだ。

蘆花の『不如歸』よりは、稍遲れて、三十四年に『無果花』を出した中村春雨(吉藏)は、新進作家中の逸材であつた。『無果花』は・『不如歸』や『己が罪』と同樣に扱はれたけれども、今日の藝術批判の上から云へば、遙かに其の上位にあるものだ。所謂宗敎小說、光明小說たる點に於て、魯庵の『暮の二十八日』と略ぼ同位に置くべき佳作である。春雨に、其の後、短篇のみを集めた『雛鳩』新聞のために書いた『寄航婦』や、脚本『司法大臣』などを出した。當時の彼れは、小說家として、其の純潔な思想と一味哀想を滯びた內容とに於て、一特色を示して居た。

春雨より稍遲れて出て、家庭小說の作家として知られたのは、『伯爵夫人』『女夫波』などを書いた田口掬汀、『濱子』などを書いた草村北星であつた。それ等の人々と略ぼ同期に新進作家として認められ出したのは、德田秋聲、柳川春葉らであつた。春葉は、三十四年に書いた『錦木』に於て、秋聲は同じ年に出した『雲のゆくへ』及び三十五年に『文藝界』にて出した『春光』などに於て、其の描寫に優れて居ることを示した。殊に秋聲は、夙に『都落』や『藪柑子』を書き、評論にも筆を執つたことなどあつて、新進作家の中に於ても、何處となく、澁味を持つて居た。

此の期に入つて、少壯作家のうちで、前期の作風を押し進めて、田園小說の一派を開いたのは、後藤宙外であつた。元來、『宙外は最初から、田園の風光を描寫する上に以て、一頭地を抜いて居るとの評を得て居たのだが、三十三年春、文壇に於ける現實主義的傾向が文士の生活難問題に論及さるゝに及んで、宙外は田園生活の必要を提唱した。而してその意見と關連して小說の上でも、田園美を描いた『乳母の家』『遺る光』などを『新小說』に發表して、其の穩健な情趣と表現とに於て、相當の評判を得た。其の他『新機』『緣不緣』などを書いて、早稻田派のうちに於ける一驍將として、文壇に馳驅して居た。

（三）　天外のゾライズムの功過

以上の作家のなかに、別に將に來らんとする文壇のスツルム、ウンド、ドラングをほのめかしつゝあつた作家は、小杉天外、小栗風葉、國木田獨步、田山花袋、島崎藤村、永井荷風らであつた。彼等は、其の創造せんとする典型を何れも、歐洲文學のうちに求めて、それを見出しつゝあつた。即ち天外と荷風とはゾラに於て暗示を見出し、花袋と藤村とは、モウパツサンに於て行くべき道を見出し、風葉は、ツルゲーネフに於て、新光明を見出し、獨步は、ワーズワースとツルゲーネフとに

於て、自己の新しい影を見出した。

以上の諸家のうちで、先づゾライズムに共鳴して、在來の唯美的、道德的な文學に反抗して、自己の新藝術を造つたのは小杉天外であつた。天外が唱へ出した現實主義の內容は、頗る漠然たるもので、ゾライズムの神髓を得たとは思へなかつた。彼れの主張した要旨は、畢竟「人生は美でもなく醜でもなく善でもなく、惡でもない唯あるが儘の姿にあるのだから小說は實社會のことを寫して人物や事實を正直に丁寧に筆記すべきものだ。」と云ふにあつた。この點について、議論すべき餘地の多いことは云ふを俟たない。けれども、元來彼れは評論家でないし、議論を得意としたのでないから、こゝには、寧ろ其の實績を見る方が便利でもあり、穩當でもある。

天外の寫實主義を具體化した最初の作として發表したのは、三十三年八月に書いた『はつ姿』である。天外は、こゝに到達するまでに、既に寫生を主とした『珈琲店』などを三十年時代に書いて居た。續いて三十二年には『亂れ髮』『蛇いちご』『肱枕』『娘心』などをも書いて居た。『娘心』は後に『左細』と改題したもので、これと『蛇いちご』などは、主として世態人情の一角を力めて虛心平氣に實寫しようとして居たのである。それ等の階段を經て、『はつ姿』に到達したのだ。

『はつ姿』の第一回、第二回に劇場の內部を力めて精細に描いたところは、どうしても、ゾラの

『ナヽ』などを摸したのだと思はせるところがある。『ナヽ』は女優を中心人物として描いたのだが、『はつ姿』は清元に巧みな女藝人お傚を中心人物として居る。畢竟、『はつ姿』は、女藝人の裏面や、其の虐げられた生活や、はかない戀の悲みなどを主眼としたものだが、どうも、冗漫で、皮相的な感じがしてならない。けれども割合に寫生に重きを置いて、好惡の判斷を加へず、人情化を行はないで、あるがまゝの世相、人生の一角を正直に表現しようと力めた心持ちは、確かに看取し得るのである。

天外は、『はつ姿』の成功と共に其の續篇として更らに『にせ紫』『戀と戀』などを書いたが。彼れの主張を宜い方へ伸びさせたのは、三十五年に發表した『はやり唄』であつた。此の作は、多情の遺傳性を受けた妻が、夫が女を圍つて居るのを知つて、嫉妬に燃えた結果、自棄して、姦通の罪を犯し、それがため、「狂ふ仇花親の種」と流行唄に迄歌はれたことを描いたのである。天外は、これによつて、遺傳性と境遇とが、人の運命を作ることを其の精細な筆致によつて、暗示して居るのである。『はやり唄』は、確かに天外の美所と長所とをより多く結晶した作であつた。

若し天外が、此の順序で向上したならば、必ず立派な作品を出したにちがいない、けれども彼れは、其の後、邪徑に陥つて、次第に興味中心的となつて、空想から作り出した人物を用ゐて、作品

の內容形式を通俗小說化し始めた。三十六年に書いた『魔風戀風』や、其の以後に發表した『長者星』や、『コブシ』などが、皆それだ。而して『魔風戀風』などを始めとして、すべて心理描寫を輕視して、單に外面の事象や、會話のみに力を入れた爲めに、また謙虛な、冷靜な態度を以て、人生の眞を摑む用意に受けた爲めに、深味を失つて、淺いものになつた傾向があつたのは、惜しむべきことだつた。

けれども天外の新寫實主義の運動は、決して徒勞ではなかつた。柳浪の寫實小說よりも、一段、立優つて居たのみならず、彼れの運動が當時、道德的調子に囚はれた作品に反抗した點に於て、將た時代の眞相の一部に觸れようとした點に於て、外形だけでも自然ならんことに力めた點に於て、少壯作家を刺戟したことが、可なりに强かつた。花袋も、天外に對して、「純粹に西洋の寫實主義を日本に入れた天外の功績はまた多とせねばならない。』と推賞して居る。斯うして、彼れは、小說界に、一時、天外時代を現出して、小栗風葉らと相匹敵する地位を確得した。

（四）風葉の藝術的得失

小栗風葉は、『戀慕流し』以後、『沼の女』『醒たる女』『涼炎』『黒裝束』などを書き、二十六年には、

『へそ日記』三十七年には、『未成年』を出した。風葉は、紅葉とひとしく流動的な態度と敏感とを以て、始終、批評家の要求に聞いて、新しい傾向新しい時尚に適應してゆくべき才能を持つて居た。だが、それは、彼れが、内部的に味到して、自己の頭で充分、消化してから自發的に出したのではなくて、單に外部的に輕く觸れて見て、直ぐにそれを自分のものとするやうな傾向があつた。例せば『醒たる女』の如きも、樗牛が提唱した本能滿足說や、個人主義の影響を直ぐに受けて、皮相的に其の得たところを小說に現はすと云ふ風だつた。それは、矢張、『青春』に於ても同樣で、一面、ニイチエなどの影響を受け、一面、ツルゲーネフの『ルーヂン』から暗示と感化とを受けて書いたものだ。

私は、風葉の敏感と其の才氣と華麗な濃艶な筆とを彼れの長所として尊敬するのであるが、唯平生、深く自ら思想問題を推究しないために、ともすれば、其の受けた宜い影響が、皮相に流れて了ふのを惜んだことが、一再に留まらなかつた。風葉の『青春』は、彼れの代表作であり、當時の文壇に於ける傑作の一つだが、矢張、其の長所と短所とか鮮かに合せて居ることを感ずるのである。『青春』については、別に本書の後篇に於て、細說したいと思つて居る。

（五）　小說の新傾向に志した人々

當時、新氣運を促がし出す下地を作る上に於て、最も眞面目に努力して居た人たちは、花袋、藤村、獨步らである。だが、花袋の努力も、獨步の眞劍な態度も、未だ時代の認めるところとならなかつた。それは、藤村としても矢張、同じことだつた。時代が、彼等を認むると認めざるとに關らず、彼等は、其の文學的進步の道を退屈せずに、一步々々辿つたのだ。

彼等のうちで、當時、最も不遇の地位に居たのは、國木田獨步だつた。彼れは、三十四年に短篇を集めて『武藏野』を出したが、誰もそれを正當に批判したものがなかつた。唯私は、當時獨步に共鳴して、『新聲』で長い批評紹介を書いたことがあつた。靑年の一部には、矢張私と同樣、少數の共鳴者があつたかなかつたであらう。

『武藏野』のうちにある短篇は獨步が、特に力入れたものはなかつたが、一體に淡い詩情があつて自然味に富んで、些の嫌味がなかつた。『忘れ得ぬ人々』『鹿狩』『武藏野』の三篇は、特に優れて居た彼れは、藝術上に於て、尾崎紅葉に反對して、新聲社から出した『現代百人豪』のうちに於て、『紅葉論』を書いて、乎ひどく、紅葉を罵倒したことがあつた。

獨歩は、三十五、六年頃に『女難』『第三者』『酒中日記』『牛肉と馬鈴薯』などを書いたけれども、未だ時代は、彼れを認むべきところ迄、進んで居なかつたので、どれも世評に上らずに終つた。彼れは、靜かに、次ぎの新しい時代がくるのを待たねばならなかつた。

花袋も亦當時不遇者の一人だつた。勿論、彼れの不遇は、獨歩ほどにひどくはなかつた。けれども、彼れの作は、いつも戀愛小說の名の下に葬られた場合が多かつた。それ等については、花袋は發奮して、益々西歐の近代文學を硏究して、努力をゆるめなかつた。其の結果が、三十五年の『アカツキ』叢書の一部として書いた『重右衛門の最後』となつて現はれたのだ。彼れは、此の一作と共に彼れが長い間、囚はれて居たセンチメンタリズムから略ぼ離れてゆかうとしたのだ。それは、彼れにとつて異常な內部的革命にちがいなかつた。

『重右衛門の最後』は、野獸のやうな自然の儘の少女と生理的に不具な重右衛門と云ふ男とを中心にして、其の悲劇的な一生を描いたもので、藝術上、可なりに大膽な行き方をしたのであつた。けれども其の表現法に於ては、尙ほ未熟な點があつて、花袋の意圖を充分に貫く丈の旨味がなかつたそのため、比較的に認められないで終つた形があつた。

花袋は、更らに『女敎師』を書いて、懷疑時代に於ける寂しさに包まれた女の心情を描き、續いて

三十七年に『露骨なる描寫』と題した論文を『新聲』に掲げた。

其の論文は、自然主義提唱の第一聲で、誇張した技巧を排して、露骨な自然な描寫の必要を力說して、歐洲近代文學の大勢に論及したものであつたが、此の論文に對しても、矢張、反響が殆ど無かつた。花袋も獨步とひとしく、次ぎの新しい時代のくるのを徐ろに待たねばならなかつたと同時に、新しい時代を造り出さねばならなかつた。

(六)『水彩畫家』を書いた島崎藤村

島崎藤村は、不遇の人ではなかつたけれども、小說家としては、未だ重きを置かれて居なかつた彼れは、信州に赴いてから、新體詩人から、一轉して、小說家として進もうと決心した。其の初期の作には、『藁草履』『水彩畫家』『老孃』『椰子の葉陰』などがあつた。

其の中で、世評に上つたのは、『水彩畫家』であつた。此の作は、信州のローカル、カラーを背景として、洋行から歸つて來た水彩畫家の家庭に於ける妻との間に起つた疑惑と不和、藝術家として眞面目にやつてゆくものゝ孤獨感、洋行中に知つた女流音樂家の天才に共鳴する心持、さうした情景を描いて、藝術家の惱み多き生活を示して居る。性格の上では、主要人物でない女流音樂家淸乃が、

最もよく描かれて居る。主人公傳吉の苦悶と懊惱も、相當に書けて居るが、今一息と云ふところがある。地の文は、藤村の新體詩を散文に書き直したやうで、詩趣が豊かに流れて、フレツシユな味がある。だが、此の頃から、藤村には、餘りに彫琢に力めて、何となく、キチンとし過ぎて、窮屈な感じを與へるところが、もう少しづゝ、現はれて居た。

だが、大體に於て、自然主義的な傾向が、其のうちに見えて居た。勿論、過渡期の產物だから、ロマンチツクな匂ひもあつたが、一面、天外などの寫實主義にくらべて、其の描寫が上すべりしないで、多少內面的になり、自然味が、大分加はつて居た。藤村が、『破戒』を書くべき下地は、大體此の頃に芽を吹いて居たのだ。

相馬御風は、此の期に於ける藤村と花袋との新傾向を示したことについて、「此の二作家が同じく當年の若きロマンチシスト(藤村は『文學界』派、花袋は『國民之友』の抒情詩派)であつた事は、最も注目に價する。キリスト敎の敎育によつて養成された理想的態度と、若き情熱の心と、バイブルを讀むに學びたる英語の力によつて窺ひ知つたイギリス、ロマンチシズムの詩歌と、それ等を合せて一時は燃えたる情熱に若い身を任せて、徒らに美しき詩の世界を夢みて居た若いロマンチシストが攻め寄せる實際主義、物質主義の世潮と、彼等自らがぶつかつた現實とに、傷ましくも失敗して、信州

の山間に沈默の生活を送りつゝあつた藤村と、實際生活の苦勞に刻々に『抒情詩』時代の若き心を削られつゝあつた花袋と、この二人の作家が、時を同じくして更に新らしき現實的文藝の道に上り初めたと云ふ事は、單に彼等二人の生涯からばかりでなく、一般文藝界の行程の上から行つても、誠に意味深い現象であつた。」と云つたのは、能く穿つた批評だつた。

（七）『地獄の花』を書いた荷風

以上の人々のほかに、今ひとり、記す必要があるのは、永井荷風である。荷風が此の期に發表したのは、『野心』『地獄の花』『夢の女』などである。荷風は、小說家としての柳浪を崇拜して、其の門弟となつたのであるが、其の作品を見ると、殆ど柳浪の感化を受けたところがないやうだ。『地獄の花』は、荷風の佳作だと認められたものであるが、それは、天外の所謂ゾライズムと同じ程度にあるものだと云ふよりほかはなかつた。勿論、荷風が『地獄の花』に於ける宣言は、可なりに抱負を有するやうに思はれたが、作品としては、天外の『はやり唄』以上には出て居ない。けれども女教師の薄倖と節操を汚された悲みを書いた『地獄の花』の結末は、光明的で、女主人公の失望がない。暗黑面を描いて、最後に希望の曙光を示したのは、天外らの行き方とちがつて居る。其の手法

も、外面的ばかりでなく、稍内面的の描寫に目を付けたやうなところも見えて居る。要するに過渡期に於ける新傾向をほのかに浮べて居た作品で、それと同時に、荷風の多望な前途を豫言するものであつた。尙ほ荷風と略ぼ同期に活動し始めた作家に生田葵山があつた。三十七年頃に書いた『祖先のかぶと』などから、漸く彼れの作家としての手腕を示すに至つた。

斯うして、獨歩、花袋、藤村、荷風らの努力は、此の期に强い反響を得なかつたけれども、將に來らんとする新機運をほのめかした上に於て、自ら功績があつた。新時代の文學は主として、彼等の手によつて、將に展開せられようとしつゝあつたのだ。

第七章　此の期に於ける戲曲、翻譯、雜筆

（一）新史劇の先驅となつた『桐一葉』

此の期に於ける戲曲は、これを前期にくらべると、大分見るべき成績を示した。征清戰勝と共に文壇に起つた新機運は、劇界革新の先驅者だつた坪内逍遙をして、聰明な自覺の下に、『早稻田文學』に新史劇の筆を執らしめた。蓋し逍遙は、既に新史劇を論じた以上、必ず其の典型を示すべき責任を感ずると同時に、東洋の日本から世界の日本となつた國威顯揚の新時代にふさわしい有意義な戲曲の出現を必要としたからであらうと思はれる。

逍遙は、春の屋主人の名で、明治二十七年の末に『桐一葉』を『早稻田文學』に揭けて、それを完結すると、更らに二十九年初頭から、其の三部作の一であるところの『牧の方』を連載し、三十年には『沓手鳥孤城落月』を『新小說』に發表した。其の他、『二葉楠』を『新著月刊』に寄せるなど、逍遙の戲曲に於ける努力と熱心と優秀な手腕とは、ひとり、劇壇を賑はしたのみならず、文壇に對しても、好個の新刺戟を與へた。

桐一葉は、單なるレーゼ、ドラマとしてよりは、主として實演を豫期して書いた新史劇である。それで一面に於ては、實演に適するよう、舊劇の美所を攝取すると同時に、一面に於ては在來の悲劇的制約に囚はれないで、殆ど新しい思想と新しい史的解釋とを具現することに力めた。こゝに逍遙の人知れぬ苦心が存して居た。若し『桐一葉』を單なるレーゼ、ドラマとして、自由に書くならば、どうにでも大膽に書けたであらうけれども、實演を主眼とする以上は、一概に形式上に於ける舊劇の美所を無視するわけに行かなかつた。それがために、新しい史劇に於ける藝術的自由を多少、束縛されなければならぬ事情の下にあつた。二十八九年頃の劇界は、殆ど今日から豫想し得ないほどに舊習の奴隷となつて居たのであるから、逍遙の苦心は、大方でなかつたらうと思はれる。

『桐一葉』には、新史劇として優れた點がいろいろある。それについて殆ど衆評の一致した點は、性根表現に於て略ぼ成功せる事、場面の配合に妙味ある事、台詞其の他の詞句に藝術味の豊かな事などである。だが、其の最も優れた點は、男主人公片桐且元を中心として、理智的悲劇を構成した新しい着意にある。高山樗牛は、綳墨的な悲劇觀の下に、此の理智的悲劇を味ふ丈の味識を以て居なかつた爲めに「著者は總べて悲劇の形式には餘りに注意せざりしが如し。是を以て一齣一場の興味は津々たるものあれども、全篇を通じて之を觀る時は、情淺くして感薄し。」と云つて居る。シル

レルの『ワレンスタイン』などに、共鳴して居た樗牛としては勿論、さう云ひさうなことである。けれども『桐一葉』は、さうした花やかな悲劇たる事を避けて、寧ろ質實味ある理智中心の悲劇を構成したところに、在來の悲劇とは、異つた新味を有したのである。直ちに咏嘆的に共鳴させる悲劇ではなくて、ぢつと考へさせる悲劇であるのだ。

從つて、『桐一葉』の悲劇的な味は、在來の强い情熱の悲劇のやうに、誰に向つても驀進的に其の心を突き動かすと云ふよりは、理智にもつれ、からまつた複雜な悲劇の味を靜觀するものに向つて始めて、其の悲みの深さを泌々感じさせると云ふ風に出來て居るのである。樗牛には、斯うした味がわからなかつたのだ。

次ぎに、性格描寫の上に於て、複雜な內容を有する淀君の面目が最も鮮明に描かれてあることは衆評一致したところであるが、且元の性格については、是非の評が定らないのみならず、寧ろ非難したものが多かつた。描寫の點は稍明透を缺くやうに思はれるが、其の性格は、近代人に取つて興味多く感ぜられる。樗牛は、悲壯的英雄の俤がないことを遺憾としたけれども、逍遙の覘つたところは寧ろ平凡に近い、理智の人、懷疑的な人、意力の足らざる人を表現しようとしたのであるまいか。私はさうした點か、在來の悲劇的英雄と餘程趣を異にしたところに新しい意味が含まれて居る

のを感ずる。

場面の面白味については、櫻狩の場から淀君狂亂の場に變るところに最も感服した批評家が當時は多かつたが、私は寧ろ餘情ある長良堤の場に共鳴したいのである。樗牛は、此の場を以て、「長良堤は悲劇の最後にあらずして、抒情的の結末なり。六段十四場の作業は、何等の果報を止めずして爰に漠然霧消したるの觀なきに非ず」としたが、何等解決を付けずして、未來の悲みを豫想させたところに餘情があるのだ。樗牛の創作評は時々、斯うした見當ちがいがあつて、それを獨斷する弊があつた。要するに、『桐一葉』の最も優れて居た點は、當時の批評家にわからなかつたのである。私は、『桐一葉』を以て、少しも缺點のない、理想に近い新史劇だとは斷言し得ないけれども、當時の劇界を前に置いて考へると、これ迄能く調和的に新味を發揮したことの容易でなかつたことを感ずると同時に、當時の傑作だと云ふを憚らない。

『沓手鳥（ほととぎす）孤城落月』は、『桐一葉』に描かれた片桐且元の悲劇的末路を中心とし、合せて豐臣家の滅落を示した三幕七場の史劇である。『桐一葉』と別に見ても宜いが、また合せて見ると、一段の感興を覺える。『桐一葉』ほどの味はないが、能く纏つて居て、殆ど非難の無い作品である。

（二）逍遙の三部曲の最初に出た『牧の方』

『桐一葉』に次いで、當時の評論界を賑はしたのは、『牧の方』である。樗牛は、長篇の批評文を書き、綠雨は『方角早見五十音』と云ふ皮肉まじりの詳しい是非の批判をした。其の他の人々も、特に『牧の方』に注目した。此の篇は、何となく、シェークスピヤが描いたマクベス夫人を思はせる所のある作である。

『牧の方』は、當時、三部曲の一として書いたもので、約十餘年後に『星月夜』『北條義時』が出て、始めて三部曲が完成した。けれども、當時は、『牧の方』だけ出たばかりであつたから、それに對して直ぐ是非の評を試みることは早計だと云つたものもあつた。

だが、『牧の方』だけ見ても、略ぼ鎌倉三代の悲劇を想像することが出來る。鎌倉時代は、日本史上に於て、最も個人主義的な葛藤と、暗鬪の絕えなかつた時代である。骨肉の爭ひ、同胞の爭ひが續いた上に、其の爭ひの裏面に陰慘な謀略が潜んで居た。單に歷史に記錄されたあとについて揣摩するだけでは、其の骨髓に觸れ得ないのである。逍遙が、此の史的な不可解の謎を解かうとしたことは極めて適切な考へであつた。史劇の方式によつて、其の隱微をあばき出すところに、詩的閑展を

試むべき餘地が充分に存するからである。

それについて逍遙が、先づ牧の方のやうな特異な性格を有する女を中心人物として、それに北條義時らをからませて、史的隱微を描かうとしたについては、當時の批評家も、一致して、其の着眼の非凡を推賞した。蓋し『桐一葉』に於て、淀君のやうな複雜な女性を描いて、見事に成功した作者は、更らに、其の卓越した手腕を『牧の方』に示さうとしたのであらう。流石に牧の方の性格は、前後の矛盾なしに、相應に能く表現せられてあるが、今一歩、突込みやうが足らないやうに思はれる。輪廓は鮮明に出て居るが、其の中核に觸れ得ないやうなところがある。此の點は、淀君ほどに成功しなかつたやうに思はれる。

次ぎに場面の配置も變化があつて、始終、觀者の注意を牽引する力があるが、其の開展してゆく徑路が急促であつて、何となく、巧緻に過ぎた感じがして、悠揚たる自然味が稀薄なやうに思はれる點が無いでもない。畢竟、政治的隱謀の機微を描くことは、一般の作者に取つて極めて困難なことであるから、逍遙の卓拔な手腕を以てしても、此の點に尙ほ幾分の手ぬかりを生じたのであらう。

けれども當時、これほどのむづかしい題材を捉えて、これほどに纒つた史劇を作り得るものは、

蓋し逍遙のほかに誰も居なかつたのである。逍遙が、斯うした困難な境地に其の詩的冒險を試みて相當の成績を收めたことは、確かに當時の劇文壇に新光明を齎らしたものであつた。即ち『桐一葉』や『牧の方』が先づ、新史劇の典型として現はれたことは、劇文學に志しつゝある有爲の若き人々に強い刺戟を與へた。

（三）鷗外の『兩浦島』と『日蓮上人辻說法』

逍遙のほかに、此の期の劇文學に聊か貢獻したのは福地櫻痴であつだ。彼れは、明治二十八年、史劇『豐島嵐』を書き、三十年には、『俠客春雨傘』『大森彥七』を書き、三十二年には『敵討護持院ケ原』を書いた。それ等の諸作は、在來の狂言作者の手になつたものにくらべて、稍立ち優つたところがあるけれども、概して舊樣の形式、內容を有して殆ど詩味に乏しかつた。

其のうち、幾分傑出して居たのは、『俠客春雨傘』である。勿論、これも、主人公の大口屋曉雨や遊女葛城などは、類型的に出來て居て、何等の妙味を有しないが、釣鐘庄兵衞だけは、其の淋しい敗北者の姿を見せたところに、沈痛な味を持つて居た。場面の變化の上にも亦老成なところが見えて居て、流石に捨て難い趣を具へて居る。けれども新時代の戲曲たるには、保守的、常套的たるを

免れなかつた。當時、新聞小說を書き、劇評を書いて居た松居松葉は、三十二年に、史劇『惡源太』を三十七年に『敵國降服』を書いて、左團次一派の手で上演せしめた。これは逵者に書かれてはあるが別に新しい藝術的見解の下に出來たと云ふよりは、寧ろ左團次の柄にはめて書いたと云ふべきものだつた。だが、曩きに櫻痴と團十郎との握手によつて、先づ文士と舊劇との接觸を爲すことを得たのが、今度は松葉と左團次との提携によつて更らに文士の新作を舊俳優によつて上演すべき機緣が作られた。

爾來、文壇と劇壇との交渉が、川上、伊井らの新派劇の勃興と共に行はれたので、森鷗外、高安月郊、岡本綺堂らの人々が、新作を出したり、上演したりした。また尾崎紅葉の小說共の他が、新たに脚色して、上演されるやうにもなつた。

森鷗外は、三十六年、『玉匣兩浦島』を發表し、三十七年、『日蓮上人辻說法』を書いた。『兩浦島』は、鷗外の脚本に於ける處女作で、材を浦島傳說に採つた二幕の劇詩であつた。逍遙が『桐一葉』や『牧の方』のやうなアンビシヤスな大物に手を着けるのを常としたに對して、鷗外は、スケツチ風の短かい戲曲を作つた。『兩曲島』は、歡樂よりは活動、空想的な平和生活よりは寧ろ實際的事業生活の意義あることをほのめかしたところに新味があつた。鷗外の小哲學を浦島傳說を假りて詩的に表

現したものである。臺詞はすべて典雅な洗練された雅言から成つて、七五調を以て一貫して居た。即ち鷗外は、內容に於て、新味を盛ると共に、外形に於ても、舊劇と幾分の調和を保ちつゝ、新しい試みをしたのである。勿論、それは例によつて、情熱に乏しく、淡白に過ぎた缺點があつたけれども、流石に鷗外の名を恥かしめぬだけの價値はあつた。

『辻說法』は、鎌倉に於ける日蓮の英雄的な妙教宣傳の一面を髣髴させた一幕物の史劇だつた。日蓮を描くに必要なのは、强い藝術的情熱である。鷗外には、さうした要素が最初から無かつた。それがために、此の一幕物は單に日蓮の氣分をほのかに浮べ得たに過ぎない傾きがあつた。けれども鷗外が、斯うした方面に眼を着けて、其の雅醇な臺詞と共に、スケツチ風の新味を出したと云ふ點に於ては相當に成功して居たと云つて宜からう。

斯うして、此の期の劇文壇に於ける逍遙の飛躍が、『桐一葉』以來、劇文學の改革に志した人々を刺戟して終に鷗外を起たしめることとなつたのは、極めて意義のある新現象であつた。

（四）　劇壇と文壇の接觸

其の他、高安月郊は、『眞田幸村』を書いて、先づ新史劇の作者として擡頭し、續いて三十六年に

『大鹽平八郎』『江戸城明渡』を書いた。月郊は、すべて其の着眼に於て、稍優れて居たけれども、其の結構と表現との上に於て、常に拙劣、凡庸を免れない傾向があつた。それが彼れの第一の缺點だつた。

翻譯劇は、逍遙の『ハムレット』が、二十九年の『早稻田文學』に掲げられたのを始め、三十二年には、戸澤姑射の『オセロ』が『太陽』に發表され、三十四年には、月郊の『イブセンの社會劇』が、早稻田大學出版部から出た。それには、『人形の家』『社會の敵』などが收められてあつた。

三十六年には、江見水蔭が『オセロ』を譯して明治座の川上一派に上演せしめた。續いて土肥春曙、山岸荷葉が『ハムレット』を譯して、本鄉座に上演させた。春曙は、其の少し以前に『マーチヤントオブ、ヹニス』をも譯して居た。月郊が『キング、リア』を譯したのも、此の時代だつた。逍遙のシエークスピヤを鼓吹したことが、劇壇に於ける翻譯劇を先づシエークスピヤ物に試みさせた結果を招來したのである。

斯うして、文壇と劇壇とは、次第に接近して、やがて、逍遙が『新樂劇論』を書き、『新曲浦島』を發表して、劇壇改革の機運漸く熟し始めんとするに至る順序となるのであるが、それは、本書の後編に於て詳說することとした。

（五）二葉亭の名譯『片戀』と『うき草』

當時の翻譯文學の進歩について概說すると、これを前期、後期に分けて見るのを便利とする、前期は、日清戰爭前後から三十五年の末迄である。後期は、三十六年頃から日露戰爭時代迄である。前期は、翻譯文學の消極的時代で、後期は、其の積極的な時代である。

蓋し後期は、思想界及び文壇に於て、歐洲文學を論述し、紹介するものが漸く輩出して、新機運が勃々として動きかけたので、歐洲文學歡迎熱が大に興起した頃だつた。さうした氣運と共に、新しい翻譯家も亦赤門派、早稻田派などから出て、こゝに翻譯の流行を招致した形となつたのである。

順序上、前期から記すと、先づ眼に入るのは、新しく現はれた閨秀翻譯家である。それは、鷗外の妹であるところの小金井喜美子と嚴本善治の夫人だつた若松賤子とである。喜美子は、二十七年にレルモントフの『浴泉記』二十八年にビンデルマンの『名譽夫人』などを譯して、略ぼ鷗外に似た筆致を見せた。それには女性だけに、一段の優婉な趣が加はつてゐた。それ等は、後に『かげ草』と云ふ單行本中に收められた。若松賤子は　ミス・ブロクトルの『忘れ形見』及び、バーネツト女史の『小

公子』を譯して、平明な暢達な筆致を示した。

此の期に於ける二葉亭は、二十九年十一月、ツルゲーネフの『片戀』を譯し、三十年四月から十二月に亙つて、『太陽』に『うき草』を譯して揭げた。其の他『親心』『猶太人』『夢がたり』『くされ緣』『酒袋』などの譯文を發表した。其の多くは、ツルゲーネフの小說だつた。

其のうち、最も傑出して居たのは、『片戀』と『うき草』とであつた。『片戀』は抒情味の勝つた自叙體の戀愛小說で、ライン河畔の美しい景色を背景として、靑春男女の愛を、委曲に描いたものである。狂熱的な少女アーシヤ、情感によりも理性味が稍優つた男主人公の戀が結局、纏らないで終つたところに新しい味があつた。結末で、男主人公が後に孤獨の老人となつて、其の戀の靑春期を回想したことにしてある點も宜い。「其後婦人とも多く交際したが、アーシヤに逢つた時のやうに、心も蕩然となつて、深く思焦れたことはない。なか〳〵以て、誰がどんな眼をして見ても、アーシヤが情を籠て見たやうなことはない。(中略)私は今淋しい月日を送つてゐるが、アーシヤの手紙と、それから今は乾びて了つたが、昔アーシヤが投げて吳れた風呂草の花とは今だに重寶のやうにして藏つてある。花はまだ微かに殘香を留めてゐるけれど、それを投げて吳れた人の、後にも前にも僅た一度私の脣に觸た手は、今頃は最う疾くに土と成つてゐるか知れん……私とても……今は老込ん

だ。』とあるあたりに無限の感慨が籠つて居る。二葉亭の譯文は、自由な、のびのびした筆で、ツルゲーネフの情趣を遺憾なく表現して居た。

『うき草』は、『ルーヂン』を譯したもので、これも亦筆が自在に暢達して居て、殆ど創作のやうな感じを與へる。此の翻譯を讀んで、男主人公ルーヂンの性格に共鳴した小栗風葉は、やがて『青春』のヒントをこゝに得たのだと傳へられて居る。要するに、『うき草』と『片戀』とは、二葉亭が原文の末に拘泥しないで、情趣そのものを忠實に活現しようと努めて成功した代表的な翻譯である。

『罪と罰』を譯して逍遙に推賞された内田不知庵は、二十九年、ゾラの『戰塵』とコンウエイの『彫刻師』とを譯したが、『罪と罰』に於けるやうな譯文の妙味がなくて、寧ろ生硬なあとがあつたのは、餘りに原文に忠實ならうと努めた結果であつたらう。

（六）　鷗外の『卽興詩人』と上田柳村の南歐文學の紹介

此の期の翻譯文學として、二葉亭のものに拮抗すべき價値を有して居たのは、森鷗外が譯したアンデルゼンの『卽興詩人』である。それは、鷗外が最初に譯した『埋木』と似通つた味があつて、而も亦別な手觸りのある戀愛小説であつた。内容は、ローマの情景のうちにカムパニヤに生れた卽興詩

人と歌妓との强烈な淸い愛を描き出したもので、最後に詩人が其の愛する女の死後、遺書のうちに自分に對する女の熱愛が記されてあるのを見て涕泣するところは、深く人を動かす力があつた。譯文は、例の擬古的な典雅な筆であるが、一字一句苟くもしないで、而も篇中の詩的情味を巧みに表現してある點に於て、鷗外の長所を示して居た。だが文體の上に於て、讀者に何となく、窮屈な、堅苦しい感じを與へることを避け得なかつたのは微瑕であつた。蓋し鷗外が、これを譯し始めたのは、二十六年頃であつたから、尙ほ斯うした文體を固執するの不利を悟らなかつたのであらう。私は鷗外が二葉亭の『片戀』のやうな言文一致體によらなかつたのを遺憾とするものである。

其の他、今野愚公が譯した、ゴーゴリの『小說家』及び『結婚』長田秋濤の譯した『戀のナポレオン』『王冠』淺野馮虛が譯した『スケッチ・ブック』『クリスマス、カロル』、黑岩涙香がユーゴーの『レ・ミゼラブル』を意譯した『噫無情』などが此の時代に出た。

こゝに注目すべきは、『文學界』の一派だつた。戶川秋骨、上田敏、馬場孤蝶らは、頻りに南歐文學の藝術味を推讃して、其の片影を紹介する事に力めたことは、確かに當時の文壇に淸新な風趣を傳へる上に力があつた。殊に上田敏(柳村)は、近代に於けるフランス文學や、イギリス文學を說いて、其の幽韻微韻を細說する上に成功した。また時々此の方面の小品を優婉な筆に譯して、『みをつ

くし』と題して出版した。彼れの藝術的氣禀と共の典雅な調子を帶びた文章とは、確かに赤門派のうちに於て一頭地を拔いて、優に高山樗牛に匹敵するだけの實質を備へて居た。唯其のアカデミツクな氣風とデレツタント風の傾向とは、彼れの文學的猛進と飛躍との妨げとなつた氣味合が、既に此の時代から現はれて居た。

後半期に入ると、翻譯文學は、頓に流行の勢を示して來た。畢竟、評論界に於て、ニーチエ、シエンキーキツチ、マーテルリンク、イブセン、トルストイ、ゴルキー、ハウプトマン、ズーデルマン、ワグネル、ゾラ、ユーゴーなどが、輪廓だけではあるが、斷片的に說かれた爲めであらう。ニーチエに關しては、登張竹風の『ニイチエと二詩人』や、桑木嚴翼の『ニイチエの倫理說』などが出た。ゴルキーに關しては、伊達摸堂の『ゴルキー』が出たと云ふ風で、稍々纒つた紹介が出るやうになつた。

それ等の氣勢に乘じて、永井荷風の『洪水』『女優ナヽ』(ゾラ)長田秋濤の『椿姬』(ヂユーマ)尾崎紅葉の『鐘樓守』(ユーゴー)原抱一庵の『聖人歟盜賊歟』(リツトン)『巴里の秘密』(シユー)吉田萩洲の『走馬燈』(ドーデー)富永蕃江の『緋文字』(ホーソーン)本多增次郎の『驕語』(セウエル)などが出た。量に於て、大分、前期に優つて居たが、質に於ては、却て前期に劣つて居た。比較的に見るべき

は、紅葉の『鐘樓守』で、ユーゴーの歴史小說『ノートルダム』を例の鍛練を重ねた筆で譯したもので大家の風格が斯うした譯文の上にも反映されて居た。荷風の『女優ナ、』『洪水』の二篇は、共にゾラの原作だが、前者は作の梗概を譯し、後者は、意譯したものであつた。荷風の明快な流麗な筆致は譯文の臭味を脫して、大體に於て、忠實な態度が現はれて居た。

（七）寫生文、美文、紀行文、隨筆

雜筆は、兎角、閑却され易いが、大體、記して置きたい。私がこゝに云ふ雜筆とは、寫生文、美文、紀行文、隨筆などの類を總括した意味である。此のうち、美文と云ふのは、當時流行した國文の一新體で、今日で云ふ散文詩風のものであつた。大町桂月、武島羽衣、鹽井雨江らが落合直文のあとを受けて作つたのが、一時、若き人々の間に迎へられのだ。久保天隨、戸澤姑射、淺野憑虛なども、桂月らの辿つた道を步いたが、此のうち、內容上、比較的に藝術味を有して居たのは、憑虛のもの のみで、他は左程の 內容を持つて 居なかつた。當時、私は所謂 美文體を以て、單行本『暮雲』と『アツカキ叢書』の一部として『遊ぶ子』とを書いた。それは私の二十二三歲の 頃の こ と だつた。

寫生文は、正岡子規の主唱によつて、『ほととぎす』派の人々が、三十二年頃から始めた新文體だつた。畢竟、寫生文は、當時、此の派が俳句の客觀的傾向を重んじ、寫生と云ふことに重きを置いたところから系統を引いて思ひ立つたもので、一面、其の頃の現實主義思潮乃至ゾライズムなどと一脈相通じた時代の影響もあつたのだ。

子規は、其の主唱者である丈に、其の手になつた寫生文は、虚子、四方太などのものとちがつて寫生の要領を巧みに捕捉して、而も藝術味がゆたかに流れて居た。『熊手と提灯』『墓』『ランプの影』などが、其の好典型である。『死後』は一篇の小說と云つて宜いほどに、詩的空想の優れたところがあつた。子規の指導の下に、虚子、四方太、鼠骨らが、寫生文を旺んに作るに及んで、一種の寫生文熱を『ほととぎす』派の俳人の間に起したが、それは、人と自然とを見ると云ふ上に精確さを保持すべき事を當時の若い人たちに暗示する上に幾分の功果を以て居た。而してそれの脈が此の派の一部の人によつて、やがて頂點に上りつめようとした時、虚子や、漱石の小說となつて現はれた。

紀行文は、前代に比較すると、幾分の進步が見えた。田山花袋、小島烏水、川上眉山らが、それに筆を染めた。花袋の紀行文は當時其の小說より優つて居ると云はれた。其の自然の描寫に於て、比較的に精細を極めたと同時に、ロマンチックな情趣が、其の背景となつて、何となく、抒情的な

味さへあつて、捨て難い韻致を有したからである。『南船北馬』『日光』などを見ると、花袋の持味がわかる。烏水の紀行文は、花袋にくらべると、才氣に於て優れて居たけれども、何となく、文章美のために囚はれた風があつた。だが、後には次第に平淡になつて、さうした弊から略ぼ脫却して居た。

川上眉山は、專門の紀行文家でなかつたが、三十二年に書いた『ふところ日記』は、紀行文として最も傑出して居た。それは、叙景の上ではなくては、寧ろ詩的狂熱を俳文風の洒脫な奔放な筆で山水の間に托したところにあつた。尙ほ此の他に遲塚麗水の紀行文では、『富士の高根』が優れて居たが、兎角麗水の弊は、正直に自然を見ようとしないで、文字の美を以て、それを塗抹し去るところにあつた。

隨筆では、蘆花の『自然と人生』綠雨の『おぼえ帳』『ひかへ帳』『日用帳』『半文錢』などが優れて居た『自然と人生』は、蘆花の小說よりも寧ろ優れた點を持つて居た。それは、其の叙景の精緻と淸新とに於て、當時のレヹルを稍拔いて居たからである。今日讀んで見ても、ギツシングなどの隨筆を讀むやうに感じて卒讀し去るに忍びない味がある。齋藤綠雨の隨筆は、到底、彼れでなくては書けない短文だ。通人で、皮肉で、潔癖で、穿ちが好きな文士にして始めて書き得べきものだ。『筆は一

本にして著は二本なり、衆寡敵すべからず。』と云つたやうな奇警な二三行の警句は。緑雨の獨自のものだ。

どんがらがん節の神髄を得たるものは、當今第一流の論客なり。

政論擔當の約束にて、初めて新聞社に入れる或英法學者の、はや机に倚りて筆取上げながら、忽ち隣席の記者を顧みて曰く、一體現時の形勢はどんなものですか。

うるさく乞食の附纏はるに・小錢のなければばと袂を振拂へば、そんならお釣あげます。

洋服着たると、和服着たると連立ちて通りしを、もし〳〵と妓夫の認めて、舶來のお方ジヤパンのお方。

以上のやうに短句のうちに、社會の矛盾と滑稽アラとを摑まへてくるところに、緑雨の天地があつた。彼れの隨筆は、確かに當時に傑出したものだ。要するに、彼れは江戸趣味の支柱に最期迄盡した殿將の一人だつた。

第八章　此の期に於ける新體詩

(一)擬古派の少壯詩人

ロマンチシズムの旺んな時代には、詩歌が旺んである、ロマンチシズムの衰へる時代は、詩歌が概して振はない。日清戰爭時代から日露戰爭時代までは、大體に於て、ロマンチシズムの旺んな時期だつた。從つて此の期に於ける詩歌は、一時に勃興して、空前の盛觀を示した。

日清戰爭は確かに日本の詩人を刺戟し、興奮せしめた。それと共に新進詩人が一時に現はれたのである。日清戰爭迄は、透谷の歿後を受けた『文學界』一派及び『國民之友』一派の新體詩人が、時々其の詩作を雜誌に發表して居たばかりで、一體に詩歌の春は未だ來ないと云ふ感じがあつた、それが、日清戰爭から受けた刺戟によつて、若い詩人たちの詩的情熱の沸騰を來たして、先づ鹽井雨江が、スコットの『湖上の美人』を韻文に譯し、續いて外山ゝ山が、戰爭に詩材を採つて『可兒大尉』を歌ひ、同じく、武島羽衣も出征軍人の妻を歌つて、『小夜砧』を發表した。

それに續いて、外山ゝ山、上田萬年、中村秋香らの『新體詩歌集』が出た。井上巽軒の『比沼山』の

歌が帝國文學に出た。與謝野鐵幹の詩歌集『東西南北』が出た。新體詩專門の雜誌『大和琴』が出た。而して三十年頃には、新體詩人中の白眉と稱せられた島崎藤村や、土井晩翠の活躍を見るやうになつて玆に正しく詩歌の春が來たのである。其の最も全盛を極めたのは、明治三十年から三十四年頃迄である。三十五年から三十七年頃迄は、畢竟、其の情熱を維持した形があつた。

新體詩が眞に見るべき形式と內容とを有するやうになつたのは、藤村、晩翠の活躍時代からである。其の以前の諸詩人の活動は、畢竟、藤村、晩翠が出る伏線を畫いたと云ふ觀があつた。外山丶山が詩形自由論、井上巽軒が漢語、國語、俗語の調和を『比沼山の歌』に試みようとした努力も無益ではなかつたが、要するに注目に價するほどのものでなかつた。

『帝國文學』に據つて居た赤門派の詩人大町桂月、武島羽衣、鹽井雨江らは、擬古派の一團を形造つて、主として抒情詩よりも敍事詩に力を傾け、內容よりも、寧ろ形式に囚はれ過ぎた弊を共有して居たが、稍見るべき成績を示した。彼等のうちで、少しく卓越して居たのは羽衣であつた。羽衣の詩想は、幾分西詩の感化を受けて、淸新味を帶びて居ると共に詞藻も典雅な趣を有して居た。其の特長を代表したのは、二十八年六月に發表した『小夜砧』であつた。それは、當時ドイツの詩人ビユルゲルの『レノレ』と同巧異曲の作だと推讃されたもので、出征の夫に對する妻の幻想を歌つて、

幽微の境地に觸れたものだつた。だが、大體に於て、情熱に乏しいために、悠揚に過ぎて緊張を欠いて居たのは欠點だつた。

鹽井雨江は、羽衣に似て、それよりも、遙かに保守的であつた。唯情熱の點に於ては、羽衣にくらべて、稍强いところがあつた。其の特色を代表したのは、海人の子が每夜海邊に起つて、其の胸中を笛竹に洩らす情味を歌つた『磯の笛竹』であつた。桂月は、羽衣、雨江らと略ぼ同じ道を步いたが、其の詩想の情熱的色彩を一番多く有したところに一特色が見えて居た。以上の人々は、何れも、國文科の出身で、思想的方面に於て、何等、當時の新傾向に觸れるところのないのが一つの弱味だつた。詩形も擬古的以外に一步を踏み出さうとしない爲めに。停滯を免れなかつた。

（二）　鐵幹と子規

それ等の人々と前後して現はれたのは、新體詩人としてよりも、歌人として、より多く成功した與謝野鐵幹（寛）であつた。彼れは二十九年に『東西南北』を出し、三十年に『天地玄黃』を出した。此の時代の彼れは大體に於て、志士的な風雲の氣を帶びて、男兒的な詩歌を愛したところから、豪快自ら喜ぶと云つたやうなところがあつた。「虎の鐵幹」と云はれたのは、それがためだつた。彼れの

詩は、概して抒情味に勝つて居て、頻りに漢語を驅使して勇健の趣を見せようと力めたが、ともすると、其の風雲の氣や、衒氣が累を爲して、上すべりをする弊を免れ得なかつた。けれども、羽衣雨江らの女性的な詩に倦んだものは、寧ろ鐵幹の詩に共鳴すると云つた傾向が一部に現はれて、そこに相當の隨喜者を見出した。

子規は、二十九年、『日本人』に據つて、其の俳想を托した詩を作り、湯淺半月らも、詩作に鋭意したが、何れも、云ふに足るべき收獲を示さなかつた。山田美妙が其の才能を詩に試みた『魔世天女』は、三十年、『大和琴』に出たが、小説家の余技に過ぎなかつた。同じ年に『早稻田文學』へ以前から詩を載せて居た繁野天來、三木天遊らが、『鈴虫松虫』を出したが、主として五七の調律を用ゐて、漢語、俗語を併用した。天來は飄逸の氣を示し、天遊は新鋭の氣を示した。『鈴蟲松蟲』と前後して出た詩集に『抒情詩』があつた。

（三）　新體詩界の黎明

『抒情詩』が出た頃から、詩壇は藝術的に漸く新彩と生氣とを帶びて來た。それには、國木田獨歩松岡國男（今の柳田國男）田山花袋、太田玉茗、宮崎嵯湖處子、矢崎嵯峨の舍らの詩を收めてあつた。

それ等の人々のうちで、比較的に優れて居たのは、獨歩、國男らであつた。

當時、此の一派は擬古派の中堅だつた羽衣、雨江らに比して、寧ろ認められない狀態に居た。それは、詞藻の上に於ても平明で、一見、散文的傾向があるためだつた。けれどもまた一面から見ると、平明であるところに、技巧に偏して了ふやうな傾きが割合に少かつた。獨歩の詩でも、形式修辭の上に於て、當時散文的だとされたであらうけれども、其の內容には、愛と涙とに滿ちた清純さがあつた、强ゐて詩美を衒はず、情熱を衒はないところに張りつめた感情の糸があつた。國男の詩は優婉な趣致を帶びて居て、內氣な少女のやうなデリケートなところがあつた。

『抒情詩』と略ぼ同時に出たのは、藤村の『若菜集』である。此の詩集が出て、始めて私等は、詩の春光に浴することが出來たのだ。それ迄の詩は、大體に於て、藝術味の乏しいものが多かつた。ひとしく、ロマンチツクな情想を歌ふにしても、內容、詞藻、詩形の三點に於て、ぴたりと藝術的一致を保有したものを見なかつた。『若菜集』によつて、こゝにさうした藝術的一致が略ぼ見られることとなつたのだ。

高山樗牛は、小說や詩歌の鑑賞力に於て、道德的な既成觀念や、粗雜な見方によつて、ともすると、法外な讃め方をしたり、また時には途方もない非難を加へた事があつたが、藤村に對する彼れ

の態度も、誤解的な點があつた。藤村の『四つの袖』を見て、『朦朧派の末路』と題して、それを非難したやうな例がそれだ。樗牛が、藝術味に乏しい晩翠の詩のみを只管嘆賞したのは、畢竟、彼れが詩を翫味する力に欠乏したことを證據立てゝ居る。

（四）藤村が開拓した詩境

藤村が『若菜集』を出して、新體詩人として成功した所以は（一）西詩に沈潜して、ロゼチ、スヰンバーンの所謂ラファエル前派の影響を受けたこと、（二）雅醇で平明な用語を精撰して用ひたこと（三）藝術的氣禀に豐かでロマンチツクな情熱に燃えて居たこと、（四）いろいろの詩形を試みて多様の趣があつたこと、（五）叙事叙情何れにも才能を有したことなどの長所を併有した爲めである。それ等の諸要素結合と融和とは、藤村の詩をして鮮新、優婉、純一ならしめた。

『若菜集』に收められた詩は、一面、自然の美を歌ひ、一面、戀愛の美を歌つて居る。自然を歌つたうちでは、『深林の逍遥』が最も能く出來て居る。戀愛を歌つたうちでは、『四つの袖』などが優れて居る。フレツシュな青春の心を以て、彼れの眼に映つた自然と戀とを心ゆく限りに歌つた『若菜集』は藝術的に青春の人を魅惑すべき強い力を以て居た。

ロマンチツクな傾向、奔放な情熱、豊麗な清新な詞藻、それは、藤村の藝術的武器であつた。

清しいかなや西風の
まづ秋の葉を吹けるとき
さびしいかなや秋風の
かのもみぢ葉にきたるとき

道を傳ふる婆羅門の
西に東に散るごとく
吹き漂はす秋風に
飄へり行く木の葉かな

朝羽うちふる鷲鷹の
明闇天をゆくごとく
いたくも吹ける秋風の
羽に聲あり力あり

以上は、『秋風の歌』の一節であるが、其の淸新な詞藻、情感の閃きが、こゝに現はれて居るのを見ることが出來る。藤村は、『若菜集』を出した翌年、詩文集『一葉舟』及び詩集『夏草』を出した。それ等の集中にある詩は、これを『若菜集』の時代にくらべると、大分、沈靜の趣を加へて來た。『一葉舟』を見ると、甞きに熱烈な戀を歌つた藤村は、こゝに『白磁花瓶賦』に於て、淋しい失戀に惱む藝術家が苦悶のうちから創造した純白の花瓶に現はれた藝術美を歌ふやうになつた。其の他『月光』『晩春の別離』など、總じて藝術に對する渴仰の心を表現して、奔放な戀の情熱にくらべて、稍沈靜した色調を示して來た。

更らに『夏草』に收められた詩を見ると、空想の世界、夢みた世界から、現實の世界へ足を入れたことが、わかる。『農夫』『新潮』などには、現實生活の謳歌とそれについての敎へを寓した點が見える。此の傾向が一段、濃度を加へたのは、三十四年に出た『落梅集』である。そこには、勞働に對する愛、事業に對する愛、左樣した方面に於ける讃美の心が鮮かに出て居る。畢竟、感情生活の喜びから、一轉して、意志生活の喜びとなつたことを明示して居る。それは、確かに藤村の向上を意味するものであるが、『若菜集時代』にくらべて、一面、藝術的色彩が稀薄になつたやうな點もある。それは、『勞働雜咏』などに現はれて居る敎訓的な傾向である。勿論、それも比較的に婉曲ではある

けれども、わかり切つたやうなことが述べられてあるのは、却て詩的感興を多少打破る場合があるものだ。『あゝ綾絹につゝまれて、爲すよしも無く寢ぬるより、薄き襤褸はまとふとも、活きて起つこそをかしけれ。』と云つたやうな文句がところどころにあるのは、耳障りである。だが、大正の詩人が、今更、民衆のための詩を高調する前に、藤村は既に民衆のために、勞働の價値を高く聲あげて歌つて居たのである。今から十年前に――

（五）冥想詩人としての晩翠

實質上、藤村よりは、一段劣つて居たけれども、當時、樗牛らのために、藤村と對抗すべき價値を有した詩人として、詩壇に濶歩したのは土井晩翠であつた。藤村を朦朧派と見做すほどに詩的眼光の鈍かつた樗牛は、一意、晩翠の冥想的傾向と明快な表現とを讃嘆して措かなかつたけれども、それは、畢竟、晩翠の技巧に魅せられて、其の內容に味到する丈の餘裕を存しなかつたのである。

晩翠の哲理的な詩は、其の思想的發育の內的伸張ではなくて、單に讀書から得た哲學的な思想を鵜呑みにして、それを明快な雄麗な詞藻に托して表現したのである。若し彼れが實人生と戰ひ、若くは實社會の渦中に飛び込んで、大なる苦悶と懊惱とを經て、得來つた哲學想ならは、當然、內的

に人の心を突き動かすところの强い自發性、積極性を具有して居るのだが、机上から得た思想であつた爲め、抽象的で、冷たくて、少しも、根底から心の奥にタッチする能力に缺けて居た。けれども當時、冥想の詩人としては、晚翠一人を數へ得るやうな有樣だつたから、此の點に於て、彼れは一特色を有したものと認められた。

殊に藤村の詩さへ、朦朧派の中に、數へられた位に明快な表現を極端に望んだ時代だつたから、晚翠が巧みに漢語を用ゐて、一點曖昧のあとがない詩を作つて、男性的に勇健な格調を具へたことは確かに、楞牛ばかりでなく、當時の若き人々の一部に强い共鳴を起せる必然性を具したのである。

晚翠が、最初に公にした詩集は、三十二年に出た『天地有情』である。そこには、主觀的に人生と自然とに對して冥想した詩人の胸奥が披瀝されてある。而して悲痛の現實と理想の天地とを對照して流れ出た無限の感慨を哲理的に表出して居る。其の裏面を流るゝのは燃ゆるやうな情熱ではなくて冷靜な思想の脈である。『暮鐘』の一篇は、其のうちにあつて、晚翠の長所を發揮したものである。

祇園精舍の檐朽ちて

蘆酒の香のみ高くとも

セント、ソヒヤの塔荒れて
福音俗に媚ぶるとも
聞けや夕の鐘のうち
靈驚檻檻いにしへの
高き、尊き法の聲。

天地有情の夕まぐれ
わが驂鸞の夢さめて
鳳樓いつか跡もなく
うつゝは脆き春の世や
岑上の霞たちきりて
縫へる仙女の綾ごろも
袖にあらしはつらくとも
「自然」の胸をゆるがして
響く微妙の樂の聲

その一音はこゝにあり。

此の詩の特色は、主として、詞藻、聲調の優れたところにある。思想的には、晩翠の自發的獨創味を持つて居ない。けれども當時は、思想的にも、幽玄なところがあるやうに解したものがあつたのだ。

『天地有情』の次ぎに晩翠が出したのは、『曉鐘』である。それは三十四年に出版したのだ。『曉鐘』は『天地有情』に比較すると、現實味が加はつて、技巧が一段の洗練を增して居た。北清戰爭中の悲痛な事件を歌つた『黑龍江上の悲劇』などがあつた。けれども彼れの詩想は、『天地有情』時代とくらべて、殆ど進步のあとが見えなかつた。大體に於て固定して了つて居た。藤村の時代は必ずしも、『落梅集』と共に去らなかつたが、晩翠の時代は、『曉鐘』と共に去つたのである。それ以後の彼れは畢竟、過去の惰勢のうちに詩的生命の殘端を保つたに過ぎなかつた。

（六）泣菫と有明の詩人的特質

此の時代に詩壇を濶步して、藤村、晩翠の地位に次ぐべき椅子を占めたのは、蒲原有明、薄田泣菫であつた。泣菫は、三十二年、『暮笛集』を出して、其の詩人としての手腕を認められたのである

彼れは、中國に生れて、暖かい胸を持つて居た。而してイギリスの詩人キーツに私淑して、藝術に對する深い渇仰と人生に於ける戀愛に對する優しい情操とを以て居た。『暮笛集』は此の渇仰と情操とを清新味ある典雅な音調を以て歌つたのである。大體に於て、何となく、藤村の影が仄かに印せられた。

泣菫は、其の後、一段の向上を志して、三十四年十月、『行く春』を出した。此のうちには、『暮笛集』時代の俤を留めて、一層、藝術味を加へた『石彫獅子の賦』などがある。それと同時に、現實に歩み寄つて、田園生活、農民生活に愛慕を寄せた詩篇や、時事問題について、詩人的感慨を洩らしたものもある。

裂けたる岩に爪かけて
雄々し憤るかその姿
鬣ながく背にまきて
見れば湧きよる春の潮
胸はゆたかに力男が
曳きしぼりたる弓の如。

忿怒現ずる明王の
ひろき肩より燃えあがる
焔か、ながき尾は躍り
綿毛密なる脚の裏
落ちて野薔薇の花ふむも
巣くへる鳥はめざめんや。

これは、『石彫獅子の賦』から二聯ばかり拔萃したのであるが、雄麗な趣と俊爽な味とが具備せられて居る。けれども斯うしたのは、泣菫の詩に稀有のことで、大體に於て、纎麗な金糸のやうな風趣を帶びたものが多い。だが、詞藻美に傾倒して、稍內在美を輕く見たことと弱々しいところのあるのが缺點だつた。彼れは、詩形に於ては、藤村とひとしく、いろいろの試みを行つて、八六調以外の調子をも用ゐて不斷の工夫を示した。

蒲原有明は、最初の詩集『草わかば』を出した頃は、未だ彼れ獨自の特色を示して居なかつた。其の一家の特質と個性とをはつきりさせて來たのは、三十六年五月、『獨絃哀歌』を出した前後から

だ。

有明は、ロゼチの詩に私淑することが深かつたやうである。『獨絃哀歌』には何となく、さうした影がさして居た。此の詩集は、概して、詩的空想と靈的渇仰との交響樂とも云ふべきものだつた。『草わかば』に於て、一向專念に戀に執した詩人は、こゝに至つて、靈の渴きから來る淋しさと悶えとを、神秘幽玄の詩境に探つて、そこから慰藉を求めようとしたのである。從つて一味の宗敎的情調がどの詩にも浮んで、それが詩的情想と抱合して居る。それが有明の特色であつたのだが、稍晦澁に流れて居るとの非難もあつた。

今眼に入れるかげ見れば
小甕は浪に燃え浮び
甕のおもてはかかやきて
火もて描ける火の少女。

幻影はげにこゝに盡き
小甕は浪に沈むとき

かが身――焔の琴の絃
火の小指もて誰か彈くべき。

『幻影』のうちから拔萃した此の二聯を見ても、略ぼ有明の詩風の一端を察することが出來よう。其の表現、聲調の上に彼れの有した思想を抽象的ならしめずに具象化しようと力めた熱意をも察し得るのである。

（七）史詩の流行

其の他、河井醉茗の『無絃弓』、與謝野鐵幹の『紫』を始め、高安月郊の『夜濤集』『金字塔』兒玉花外の『風月萬象』『社會主義詩集』今村菽夭の『短笛長鞭』岩野泡鳴の『露霜』などが、三十三四年頃の時代に前後して出た。それから『明星』一派が、史詩に力を入れて、晶子の『橘姫』、鐵幹の『清水詣』が發表され、『日本國歌』を三十六年に出した平木白星は、『心中おさよ新七』を始め、劇詩『耶蘇の戀』『釋迦』などを發表した、白星は鐵幹、林外（前田）らと共に、『源九郎義經』の合作をしたことがあつた。それに對して、岩野泡鳴は、『豐太閤』を歌ひ、『女護海島』『田戸の海ぬし』『血ぬれる鐘』などを作つて、彼れ獨自の個性をそこに反映して居た。此の種の流行は、泣菫をして神話的題材を歌はしめ、

山崎紫紅をして『日蓮上人』を歌はしめた。この事は、詩壇の單調を破る上に多少の功果があつた。

こゝに一言しなければならぬのは、河井醉茗の事だ。醉茗は、有明が『新聲』に據つて居たに對して多年、『文庫』に據つて、彼れの周圍に集つた若き詩人と共に、當面の生活を歌つた、『無絃弓』は彼れの溫雅な思想と音調とを示した可憐な詩集だつた。彼れの周圍には、横瀨夜雨、伊良子淸白、溝口白羊、小牧暮潮、北原白秋、人見東明らが集つた時代があつた。此のうちに詩人的に大成したのは白秋のみであつた。

第九章　短歌及び俳句の革新運動

（一）直文、鐵幹の短歌革新運動

明治に於ける歌壇革新の先驅者となつたのは落合直文である。直文が出る迄、短歌は僅かに海上胤平らによつて、其の舊樣の恣態を保つて居た。直文は、時代の推移に見て、其の内容聲調との上に一革新を加へたのである。

だが、其の革新は、稍生ぬるい感じのするもので、要するに過渡期的な傾向を免れなかつた。ところか、彼れの指導の下にあつた與謝野鐵幹、金子薫園らの所謂淺嘉社の一派が佐々木信綱、尾上柴舟らと呼應して、直文の遺志を繼承して、ある程度まで、根底的に短歌革新の仕事を完成した。

鐵幹は、落合直文の感化を受けて、短歌革新の熱意を有し、『東西南北』『天地玄黄』に彼れの所謂「おとこの歌」を發表した。彼れの長所は、新體詩よりも、寧ろ短歌にあつた。此の期に於ける彼れの短歌は、直文の脈を追ふた溫雅な手觸りのあるものと、彼れ自身の趣味に即した粗豪な感觸を有するものとの二傾向を表示して居た。而して當時の若き人々の一部が彼れに共鳴したのは、其の

粗豪な方面にあつた。そこには、韓山の風雲を歌ひ、鷲や虎や太刀を歌ふ男性的な彼れの一面が粗雜ながら現はれて居た。要するに、彼れの短歌に於ける態度は、積極的に在來の格調をも打破つて青春時代の才氣、客氣、覇氣を自由に發舒せんとしたところにあつた。それが改革者としての彼れの長所だつた。而して彼れの目的は、三十三年四月、短歌雜誌『明星』を發行するに及んで、非常な加速度を以て、成就し始められた。

彼れが『明星』を發行した頃は、ロマンチシズムの旺んな時だつた。鐵幹は此の時代の特徴に強くタッチして、其の情熱ある清新な歌を多く讀んだ。『紫』のうちに收められてあるのがそれだ。

見がわしてふたり伏目の人わかし梅にゆづれる車と車

戀と名といづれおもきにまよひ初めぬわが年こゝに二十八の秋

事ひかひ人おとろへぬ蚊遣火にほつれ毛うたて蕗の葉の雨

そや理想こや運命の別れ路に白きすみれをあはれと泣く身

雲を見ず生駒葛城ただ靑きこの日なにとか人を咀はむ

其の格調の大膽なところ、其の詩想の複雜味、淸新味、抒情味などの在來の短歌に見得られなかつたところがあるのは、以上の五首のうちにも明かに看取し得られる。斯うした彼れの新しい短歌

西歐趣味を帶びて近代人の俤を有して居た短歌は、『明星』の發行と共に、彼れの周圍に新代の若き歌人を多く集め得た。鳳晶子（後の與謝野晶子）窪田空穗、山川登美子、増田雅子（後の茅野雅子）水野栗舟、吉井勇、北原白秋、高村碎雨（光太郎）らは、其の重なる人々だつた。專門の歌人でないけれども、『明星』の主義宣傳につくした人々のうちには、中山梟庵らの關西派の人々が居た。

（二）『亂れ髮』の女詩人

それ等の人々のうちで、ひとり、嶄然として傑出して居たのは晶子だつた。晶子は、鐵幹の指導の下に、其の非凡の詩才を發揮し、伸暢させた偉大な女歌人で、堺に近いちぬの浦の秀麗な風光が彼の女の詩想をはぐくんだのであらう。

思ひ出すと、もう二十餘年前のことになるが、私が始めて處女時代の晶子に逢つたのは、明治三十三年の夏だつたと記憶する。場所は波が靜かに咽ぶ濱寺の海邊で、そこに短歌會か催ほされたのである。當時晶子は銀杏返しに結つて、稍色が淺黑かつたが、其の才氣が自然、顏に現はれて、一見、鋭感な情熱的な人だと感じられた。其の後、私は中村吉藏、河井醉茗らと共に、文藝雜誌『關

西文學』に關係すると共に、『新聲』の主筆をして居た。それは晶子か其の詩才を未だこれから發現しようとした時代だつた。

晶子が女歌人としての名を成したのは、それから間もないことで歌集『亂れ髮』を三十四年八月に出版してから忽ち文壇の視聽を其の一身に集めた。思ふに、晶子には、最初から高い藝術的氣禀があつたにちがいないが、一面、王朝文學の影響を受け、他面、鐵幹の感化を受くると同時に、樗牛らが唱へた個人主義、天才主義、本能滿足説をどの影響も受け入れて、それ等を晶子の才能によつて、創造的に配合させたことが、其の成功を花々しくさせたのだと思はれる。鐵幹が企てた短歌革新の事業は、晶子の力によつて、其の半ばを成就することとなつたのである。鐵幹は晶子に據り、晶子は鐵幹に據つて、比しく藝術的向上の一路に精進したのだ。

『亂れ髮』全體の內容的傾向は、ロマンチシスムの潮流が橫溢して居ることである。晶子は、此の一卷に於て、新代の戀を歌ひ、肉感を歌ひ、ロマンチックな人事を歌ひ、幻夢的な情趣と一つにとけ合つた風光美を歌つた。

其の戀の歌は、在來のやうに因習や、外形上の修飾に囚はれないで、大膽に奔放に自由に炎のやうに燃ゆるところの情思を披瀝して憚らなかつた。そこに晶子の特徵が能く出て居た。

春みじかし何に不滅の命ぞとちからある乳を手にさぐらせぬ
道を云はず後を思はず名を問はずこゝに戀ひ戀ふ君と我と見る
いとせめてもゆるがまゝにもえしめよ斯くぞ覺ゆる暮れて行く春
やは肌のあつき血汐にふれもせでさびしからずや道を說く君

幻夢的な情趣を風光美に結び付けた歌にも、ロマンチツクな人事を歌つたのにも、晶子の個性と其の獨自の趣味とが鮮明に出て居た。それに、『亂れ髮』には、京都の情景を讃美した歌が最も多かつたのも、一つの特色だつた。

春の宵をちひさく撞きて鐘を下りぬ二十七段堂のきざはし
夕ぐれを花にかくるる小狐のにこ毛にひびく北嵯峨の鐘
人の歌をくちずさみつつ夕よる柱つめたき秋の雨かな
たまくらに鬢のひとすぢきれし音を小琴と聞きし春の夜の夢
夜の神の朝のり歸る羊とらへちさき枕のしたにかくさむ
乳ぶさおさへ神秘のとばりそとけりぬここなる花の紅ぞ濃き

其の若々しい豐富な詩情、警拔な大膽な歌ひ方、西歐趣味から來たフレツシユな味、それ等は一面に於て、險怪とか、蕪雜とか非難されたものだが、今日から見ると、少しもさうした感じか起ら

ない。勿論、其の主觀を歌つたものには、露骨に過ぎて具象化しないのもあるけれども、それは極めて少かつた。長詩に於ける藤村の『若菜集』と短歌に於ける晶子の『亂れ髮』とは、正に雙璧の觀を爲すものだ。ロマンチシズムの主潮を色濃く藝術的に表現した不朽の作品だ。『亂れ髮』の後を受けて、晶子の詩才を發揮したのは、三十七年に出した『小扇』である。

（三）竹の里人の一派

『明星』一派に對して、一旗幟を當時の歌壇に飜したのは、佐々木信綱、竹の里人（正岡子規）である。信綱は『心の花』に據り、竹の里人は『馬醉木』『日本』などに據つた。信綱は、歌人中の歌學者で、彼の歌は、稍穩健に傾き過ぎた氣味かあつた。直文の歌と同趣異曲で、抒情味が少くて、敍事、敍景の方が多かつた。歌壇の革新に對しては、鐵幹、晶子ほどの成績を擧げることが出來ないのは止むを得ない當然の結果だつた。

竹の里人は、俳趣味を短歌に托して、萬葉調を帶びた勇健なものを作つた。彼れは形式上、萬葉調のみには拘泥しないで、彼れ獨自の措辭、聲調を加味すると同時に、新代の詩的感興を景物の上に發揮することにも力めた。

竹の里人の歌は、確かに鐵幹に對抗して劣らない丈の特色があつた。『明星』派の西詩的な傾向に對して、純日本的な傾向が鮮かに出て居た。彼れが開いた根岸短歌會には、伊藤左千夫、長塚節、香取秀眞らの秀才が集つた。

高とのに春の寒さをたれこめて朝寢しをれば花賣の聲

緣先に玉卷く芭蕉玉解けて五尺の綠手水鉢を掩ふ

春の夜の衣桁にかけし錦襴のぬひの孔雀を照らすともし火

萱の根の長き春日を言問はぬ小鳥と我と只向ひ居り

くれないの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる

吾庵の檐端にかけし鳥籠の鳥さへづらず春の日長る

竹の里人の特色は、以上の六首に現はれて居るやうに、彼れの俳句に於ける客觀的態度とひとしく、短歌に於ても、それを尊重した傾向があつて、抒情的の歌は殆ど見られずに、叙景若くは叙事の歌が多かつた。其の聲調にゆるみなく、摑まへた事象に俳趣が溢るゝやうなところは、彼れ獨自の藝術境を形造つて居た。殊に日常生活の情味を直ぐに短歌に托して發現したところは、現實生活の味が能く出て居た。ロマンチシズムの潮流の旺んな時代に、斯うしたリアリズムの脈を掘りあて

たことは、竹の里人の一特色だつた。

詩人されば歌人座にあり歌人去れば俳人來り永き日暮れぬ
　四月二日（湖村、節、四方太來る）

山吹は散り菜の花は實にならで五月一日われ厄に入る
　五月一日（體温三十九度六分）

翁さび火鉢かへして猩々が火事おこしきと聞けばおかしも
　三月三十一日（淺草公園失火の新聞）

唯こゝに竹の里人が、其の俳句革新運動のやうに、短歌に成功しなかつたのは、彼れが、こゝに其の主力を注がなかつた事や、當時の思潮を支配したロマンチズム潮流と殆ど沒交渉な態度を持した爲めでなかつたらうかと思はれる。即ち『明星』一派が、當然革新運動としての正系を辿つたのにくらべて、竹の里人は稍旁系を辿つた氣味があつたやうに思はれるのである。

其の他金子薫園、尾上柴舟らのやうな若々しい氣分を持つた人々が、此の期の歌壇に活動した。薫園は、直文の感化を正しく受け入れて、それに稍フレツシュな味を加へた叙景的な歌を作つた。其の初期の歌は、『片われ月』『叙景詩』などに收められた。柴舟も大體に於て、薫園と同じやうな道

を歩いたか、彼れには、ハイネなどの影響があつて、必すしも叙景的な歌ばかりを詠まなかつた點が蕉園と自ら異つて居た。蕉園、紫舟らが、其の特色を發揮したのは、寧ろ日露戰爭後にあつたと云つて宜い。

要するに當時の新派歌人によつて、略ぼ成された革新運動の結果は、舊生命に囚はれて居た短歌を解放して、自由な新生命を與へた。それは(一)思想的に西歐趣味乃至近代思潮の特色、俳的情趣を採り入れたこと(二)取材の範圍を非常に擴大して新題材を採り入れたこと(三)形式的な舊套に支配された格調や措辭を一排して、新格調、新措辭を創造したこと(四)個性の發揮及び自然、人生に對して新しい見方に力めたこと(五)短歌に對して藝術的批判が加へられ始めたことなどが合致して功を奏したのである。

(四)　正岡子規俳句革新運動

短歌革新の運動と前後して起つたのは俳句革新運動であつた。其の中心人物は『ほととぎす』『日本』などに據つた正岡子規である。子規は、帝大國文科に居た時分、俳句の研究に沒頭して、彼れ獨自の文學眼を以て、在來の宗匠者流の見解を排し、直ちに芭蕉、蕪村の句について研究しだ。二

十六年に出た『芭蕉雜談』二十九年に發表して、後に一冊子とした『俳人蕪村』は彼れの新しい芭蕉觀、蕪村觀を發表したものだ。

彼れが芭蕉、蕪村の研究から得た見解は、俳句の眞生命が叙景、客觀の句にあると云ふことだつた。換言すれは、芭蕉、蕪村が直ちに自然觀察から新詩材を得たやうに、小主觀や小理屈に拘泥することをやめて、先づ新しく眼の前に展開された自然を眺あることが必要だとした。「正しく、僞らず、自然を藝術的に寫生せよ。」と云ふのが子規の主張であつた。此の主張は、今日から考へると。平凡極まるものであるけれども、子規が始めて『芭蕉雜談』を出した頃は、誰もさうした點に氣付かなかつた。子規が始めて氣付いて、其の考へを公表したのであつた。

それで子規は、在來の宗匠たちが寂栞主義や幽玄主義などの形式に囚はれて居ることに反對して先づ新しい文學的意義を有するところの俳句を說いて、『日本新聞』紙上に鼓吹すると共に、芭蕉の流風を追うて、其の紀行や、俳句を發表し、俳欄をも設けて、新しく俳句に志した人々を指導した。此の時代に子規の周圍に集つて、新しい句作に力を入れた人々は、內藤鳴雪、藤野古白、新海非風らであつた。それに續いて、新進俳人として子規の門に入つたのは、高濱虛子、河東碧梧桐、佐藤紅綠、石井露月、坂本四方太らであつた。また子規の同窓の人だつた夏目漱石も一時、俳句を作つ

たことがあつた。

正岡子規は、慶應三年九月十七日に、伊豫松山に生れ、明治三十五年九月十九日、東京で歿した。二十三年、帝大國文科に入り、二十五年中途退學して、日本新聞社に入つた。而して『獺祭書屋俳話』を連載したが、『芭蕉雜談』も其のうちにあつたのだ。二十八年、日清役に從軍記者となつて觀戰記事を書いたが、其の際、痼疾の肺に強い打擊を受けて病勢が一時昂進した。其の秋、東京に歸つて以來、俳人生活を續けて、俳句革新の目的を達成した。其の他短歌、寫生文、新體詩にも其の餘力を注いで、相當の功果を收めた。彼れは文學者として稀れに見る意志の強い、精力の旺んな人だつた。彼れが七年間、病苦に打克つて、立派な文學的事業を殘すことを得たのは、ひとり其の天禀の才能や、優れた文學的識見ばかりの賜物ではなかつた。一面、意志と精力との賜物だつた。彼れは享年僅かに三十六歲で世を去つたのだ。

彼れは、俳句革新のために、始終、評論と句作とを併行的に發表して居た。彼れは、其の議論と其の議論を具體化すことに力める上に於て坪內逍遙と酷似したところがあつた。子規は空論しなかつた。必ず實行した。それは、俳句ばかりでなく、短歌でも、新體詩でも、寫生文でも、皆左樣だつた。

彼れの俳句は、最初から、才氣が溢れて居て、而も新しい味を帶びて居た。『燈火十二ケ月』や、

『男女句合十二ケ月』などと云ふのを作つた。勿論、此の時代は、格調に於て未だ整はぬところや幼稚な點があつたが、フレツシユな、いきいきしたところが、先づ俳句改革者としての資質に適合して居た。

（五）子規及び其の周圍の人々

彼れの俳境が一進したのは、恐らく蕪村の俳句寫本を故紙堆裡から見出して、それを研究すると同時に、そこから新しい暗示を得た時代からだつただらう。また日本派若くは『ほととぎす』派の地位を略ぼ確立し得たのも、その頃だつたらう。『俳人蕪村』に於ける美學上からの研究は、確かに當時の俳壇を驚したにちがいない。而して俳人としての蕪村の文學的價値を鮮明にし得たことが新しい俳人たちに、其の歩むべき道を一層適切に知らしめたにちがいない。『俳人蕪村』は『俳諧大要』と共に、彼れの主張を宣傳するに上に大きい力となつたのだ。

彼れの俳句が、一特色を形造つたのは、恐らく明治三十一二年頃でなかつたか。此の頃の句は、蕪村に私淑したあとが著しく見えて居て、漢語を使用したものが多かつた。而して一方には、舊宗匠らの說に反對して、破格的な調子をも示してのが往々あつた。

日曜や浴衣袖廣く委蛇々々たり
行水や沛然として夕立す
潮州の碑の石摺や蘭の花
湯婆燈爐臥床あたゝかに讀書かな

此の頃、『新俳句』が世に出ると共に、『ほととぎす』が其の發行處を松山から東京に移した。それは三十年のことだつた。『ほととぎす』紙上の『蕪村句集輪講』が最も異彩を放つて世に迎へられ、それに倣つて、碧梧桐が、新聲社から『俳句評釋』を出して、『猿蓑』を美學的見地から解釋し、批評した。而して子規の俳句革新運動の中堅となつたのは、鳴雪、虚子、碧梧桐の三人だつた。子規の俳句は、一方に偏しないで、次第に多方面となつて、豪爽なもの、纖麗なもの、艶美なものと云つた風に、其の內容、外形共に芭蕉、蕪村に雁行するに足りた。

猿剃るや上野の鐘の霞む日に
枯蘆に春風吹けば目高かな
大佛の日には吾等も朧かな
八萬の毛穴に瀧の風涼し

山風や桶淺く心太動く
虫鳴くや月出てゝ猶暗き庭
狼の小便したり草の霜

子規の事業を助けた虚子と碧梧桐とは。當時年少氣鋭の時代だつたから、積極的に變調を喜んで大膽に奔放に句作に力めた。碧梧桐は、客觀に執して、印象明瞭を主眼とし、虚子は、主客兩觀に跨つて、余韻を尊重した。此のうちにあつて鳴雪は、稍保守的で、變調の句を少しも作らずに、漢語よりも、雅語を主として用ゐて、穩健な句風を示した。

日本派の俳人に對して、秋聲會、筑波會などの俳人が當時、一部に割據して居た。秋聲社の中心は、角田竹冷、尾崎紅葉、巖谷小波らで、筑波會の中心は、大野洒竹、佐々醒雪らだつたが、彼等は秋の聲『帝國文學』などによつて、其の主張する俳風を鼓吹した。けれども到底、日本派や『ほととぎす』派に遙かに及ばなかつた。

『ほととぎす』派は、其の後、益々根を張つて、三十四年には『春夏秋冬』と題した新派句集を出し、三十五年には『獺祭書屋俳句帖抄』『増補獺祭書屋俳話』を出し、それと前後して『太祇全集』や『几董全集』を出し、子規が歿する頃には、日本派の俳風は、天下を風靡するの概があつた。

要するに、俳句革新運動の成功は(一)俳句の藝術的意義を明かにし(二)取材の範圍を擴げ(三)格調を自由ならしめ(四)自然、人事に對する新しい見方と新しい寫生の方法とを敎へた行詰つた舊生命のうちに囚はれて居た俳句に新生命を賦與したのである。

第拾章　文藝評論の勃興及び演劇、美術

（一）新評論家の輩出

此の期に於ける一特徵は文藝評論の勃興である。大正年間に於ける前半は、評論が振はなくて、其の存在の意義すら輕視されて居るけれども、此の期にあつては、文藝評論の價値と勢力とが相當に認識されて居た。ある場合に於ては、創作家よりも、評論家の方が優越者のやうに思惟せられたことさへもあつた。

蓋し赤門派及び早稻田派から新進の文藝評論家が續出したのみならず、それ以外に於ても、評論の筆を執るものが、可なりに現はれたと云ふことが、評論界に於て空前の賑かさを見せたのみならず、彼等のうちには、相當に有力な評論家も居たことが、自然、評論の勢力を增大したのかも知れなかつた。

當時の文壇に於ける新進評論家を數へると、赤門派には、高山樗牛、大町桂月、姉崎嘲風、田岡嶺雲、上田敏（柳村）白河鯉洋、登張竹風、久保天隨、中內蝶二、藤田劍峯、畔柳芥舟、笹川臨風、

佐々醒雪らが居た。早稻田には、島村抱月、金子筑水、長谷川天溪、後藤宙外、中島孤島、綱島梁川、林田春潮、梅澤和軒、平尾不孤、正宗白鳥、德田秋江、高須梅溪らが居た。其の他『文庫』の小島烏水、千葉江東、（龜雄）新聲の田口掬汀、正岡藝陽らが居た。

在來の評論家には、森鷗外、坪内逍遙、内田不知庵、齋藤綠雨らの人々が居た。それに以上の新進評論家を加へると、其の數は、小說家の數に讓らないほどだつた。勿論、白鳥秋江のやうに、後に小說の方へ進んだものもあるけれども、日露戰爭時代迄は、此の二家は主として、評論の筆を執つたのだ。而して樗牛、柳村、嶺雲、桂月、竹風、抱月、宙外、梁川、孤島、天溪らは、論陣の先頭に起つて、氣焰を揚げたのであるから、事實上、評論家うちにも、可なり見るべきものがあつた。殊に少壯氣銳者中では、樗牛、抱月、柳村、梁川の四人が傑出して居た。

當時の評論界では、いろいろの題目が論ぜられたが、こゝには、思想上のことは既に述べたので主として文藝に關して密接な關係を有したものをあげる、（一）古文學の新研究（二）美學的研究（三）ニイチエに關する論爭（四）文士品行問題と生活問題などがあつた。

古文學の研究は、『早稻田文學』同人や高山樗牛の近松西鶴研究、桂月、雨江、羽衣らの『國文學大綱』の述作、劍峯、鯉洋、嶺雲らの『支那文學大綱』の筆などが、其の主要なものだつた。在來古

文學については、訓註、註釋などを主として研究したものはあつたけれども、哲學、心理學、美學などの新知識を土臺として、古文學研究したものがなかつた。逍遙は、夙に近松についての新研究を發表をして、其の典型をしたのだが、さうした機運が熟したのは、二十八九年の頃だつた。早稻田派では、抱月が二十八年一月『西鶴論』を公にし、二十九月十月、近松研究會が開かれて、逍遙抱月、宙外、梁川、巴干らの人々が、近松の傑作（時代物、世話物）を合評して、其の由來、性格意匠、修辭などに分けて、各自の意見を述べた。それは、如何に新しく古文學を翫賞すべきかと云ふことを當時の人々に敎へた。

樗牛は、單獨で、二十八年四月、『帝國文學』へ『近松巢林子』と題した長論文を發表して、巢林子の作中にある人物の性格、彼れの人生觀、女性觀を論じた。彼れの才氣ある花やかな文章は、『帝國文學』に一光彩を加へた。斯うして早稻田派の中堅を爲す人々や、赤門派の樗牛が、古文學の新研究を發表すると、それがやがて他にも影響して、『支那文學大綱』『國文學大綱』などの發刊を見るに至つた。

（二） 文壇に於ける美學研究の傾向

此の期に於ける美學的研究は、これを前期にくらべると、見ちがえるばかりの進歩を示して來た此の方面の研究は、森鷗外らによつて始められ、次ぎに大西祝操山によつて、有益な研究が、折々發表された。二十四年三月に書いた『悲哀の快感』『滑稽の本性』などがそれだ。而して操山は、早稻田の講堂に於て、抱月、宙外、梁川、筑水らに向つて、美學の大要を講じて、彼等を指導した其の研究は、二十八年頃から三十二年にかけて『審美的感官を論ず』『近世美學思想一斑』『審美新說一斑』などの論文に現はれた。大西祝の感化は、やがて抱月をして、美學專攻の志を起さしめ、宙外、梁川、筑水らにも、美學に對する興味を惹起させた。

抱月は、樗牛と略ぼ同期に美學について、いろいろの新研究を發表した。蓋し小說や、新體詩や戲曲の批評は、一面、美學上の知識に省みて、判斷し、評價せねばならぬ必要がある。在來の文藝評論家は、鷗外、逍遙の二人を除くと、殆ど美學上の素養を持つて居なかつた。而して漫然、自家の常識的斷力を規準として、一切の創作を批評した。それは、評家自身が卓越して居ない限りは、頗る危險であり、粗漏を免れないことだつた。一應は、美學上の洗禮を受けるのが至當の順序だつた。さうしたことが、自然、此の期に入つて意識さるゝと同時に、抱月・樗牛の二才人の心を美學研究に向けしめたのであらうと思れる。

抱月が此の時代に發表した美學的論文は、二十八九年に跨つて書いたのが多い。勿論二十七年に『審美的意識を論ず』と云ふ長論文を書いた。それから以後、『新奇の快感と美の快感の關係』『音樂美の價値』『變化の統一と想の化現』『氣韻生動審美的研究の一法』『和漢の美論を研究すべし』などを書いた。

樗牛は、抱月よりも少しく早く美學に志して、二十五年十二月、『戯曲に於ける悲哀の快感を論ず』と云ふ論文を書き、二十八年には『美術と道德』を書き、爾來、每月、美學上に關係ある問題について、其の意見を述べたことが少くなかつた。三十二年頃に書いた『大佛露佛說』や『古社寺及び古美術の保存に就いて』など相當に力も入れた論文だつた。殊に歴史畫についての逍遙との論戰『月夜の美觀に就いて』『美感についての考察』などは、文壇の注目を惹ゐた。

月夜の美感や幽眇言ひ難し。されど一事の明かなるは、そが吾人に及ぼす感情の悲哀の一面に傾けることなり而して凡そ色相の誘起する感情は不定なるものなるを以て、是の場合に於ても悲哀は不定の悲哀なりただ何となくうらかなしきなり。而して月光の靑は吾人の意慾と共に、是の意慾の主體たる『我』をも沒するを以て、其の悲みや、我執の悲みに非らずしてたゞ何となく悲きなり。悲むものの我なることをも打ち忘れ、我は唯悲き世界その物の一分身なるが如く覺ゆるなり。譬へば妙へなる音樂に聞き惚れたる人の、樂み外にありて我れその中

に在るが如く覺ゆると同じかるべけむ。而してこの悲みは素より實なる、確かなる、悲みに非らず、そが漠然として定かならざるは、月の光の底暗きが如く、其の淡はき月の光の夢の如きにも似たらむかし。(下略)

樗牛には、尚ほ『近世美學』と題した單行本があつて、それは、可なりに、明快な說き方をした要領を得た一佳著であつた。彼れが此の期に於ける文藝評論家としては活躍は、眞に目ざましいものがあつた。逍遙、鷗外らと文學上、美學上の論戰をしたり、日本主義について、各方面の思想家を相手に奮闘したり、四角八面に應酬して些の倦怠がなかつた。逍遙とは、史劇について、歷史畫について、ニイチエについて論戰した。それは沒理想について、鷗外、逍遙の二家が、花やかな論戰を續けたほどの偉觀を示す迄には至らなかつたけれども、要するに、樗牛が、いつも、問題を文壇に提供して、一波瀾を起したり、或は先輩の所說に疑義を挾んで、意見を戰はしたりする點に於て、彼れ獨步の觀があつた。だが其の傲慢な態度は文壇の新人に反感を起させた。

高山樗牛(林次郎)は、明治四年一月、山形庄內に生れ、三十五年十二月二十四日、茅ヶ崎で病沒した。明治二十六年、帝大文科に入り、二十九年卒業すると、仙臺高等學校教授となつたが、一年ばかりでやめて東京に歸り、『太陽』主筆となつて、文藝評論に筆を執つた。それが彼れの論壇に雄飛する第一步で、爾來三十五年迄『太陽』に關係した。三十一年頃、美學專攻の目的で海外留學を命ぜられたけれども、肺疾のため斷念しなければ

ならなかつた。而して三十二年、文學博士の學位を得た。其の著書には『樗牛全集』のほかに『論理學』『近世美學』などがある。

（三）　ニーチエについての論戰

樗牛の一生は、大體四期に分けて見ることが出來る。第一期は二十四五年頃から二十九年頃迄で即ち學究本位の時代である。第二期は三十年から三十二年の末頃迄で主として、倫理本位の時代である。第三期は三十三年前後から三十五年春頃迄で文藝本位の時代である。それ以後は第四期で、信仰本位の時代である。勿論どの時代にも。彼れは文藝と終始して、それから離れなかつたが、假りに其の主な傾向から以上のやうに分けた迄だ。或は第一期をセンチメンタルの時代、第二期を現實的な時代、第三期をロマンチツクの時代、第四期を宗教的時代といふことも出來よう。而して樗牛が文藝評論家として最も活動したのは、三十三年前後から日蓮讃仰に至る迄時の代である。

樗牛が、論戰の上に於て、文壇的に花々しく活動したのは、ニーチエについてであらう。彼れが、ニーチエ鼓吹は、明治三十四年一月、『文明批評家としての文學者』を公にした時から始まる。樗牛は、先づニーチエが十九世紀文明の一大反抗者なる所以を述べて、左の如く云つた。

（前略）彼れの說は是に到りて現時の民主平等主義を根本的に否定し、極端にして、而も最も純粹なる個人主義の本色を發揮し來りたるを見る。されば、歷史無く、眞理無く、社會無く、國家無く、唯々個人各自の『我』あるを認むるのみ、十九世紀末の思想に對して何等の對比ぞや。遠くは『ロマンチシズム』の運動も、ヘンリー・マッケーの無政府主義も、ニーチェが是の個人主義の極端なるに較ぶれば、尙ほ遙に緩漫なるを覺ゆ。而して吾人の最も注意すべきは、是の如き思想が獨逸現代の人心を搖滅したることの豫想外に深大なるの事實に在り。

是に於て吾人は文明（クルツール）批評家（クリチカル）としてのニーチェが偉大なる人格を嘆美するを禁ずる能はず。彼れは個人の爲に歷史と戰へり、眞理と戰へり、境遇、遺傳、傳說、習慣、統計の中に一切の生命を網羅し去らむとする今の所謂る科學的思想と戰へり。徒らに外面皮相の觀察を事として精神的生活の幽微を解せさる今の心理學と、認識論の如き一部煩瑣の研究に陷りて、本能と動機と感情と意志とを遺却し去りたる今の哲學とは、彼れの所謂僞學として排斥する所也。彼れは青年の友としてあらゆる理想の敵と戰へり。彼れは今の學術の訓へ得るよりも更に〳〵大いなる實在の宇宙に充滿せるを認めたり。同時に是の實在を認識し、其の秘密に到達せむには、今の所謂學術道德の甚だ力無きを認めたり。彼れは其の豫言者の眼によりて其の方法の何ものなるかを知りぬ。

（下略）

元來、ニーチェについては、三十二年頃に吉田靜致の『哲學史上第三期の懷疑論』を書き、長谷

川天溪も、『早稻田學報』で、其の片影を紹介したことがあつた。けれども未だ一般の注目を惹かなかつた。ところが。樗牛の花やかな、熱烈な文章によつて、ニーチエ嘆美の叫びが揚げらるゝに及んで、俄かにニーチエが、文壇の中心題目の一つとなると同時に、樗牛の嘆美に傾いた態度に向つて、烈しい反對の聲をも聞くに至つた。

蓋し樗牛は、桑木嚴翼の如く、學者的にニーチエを紹介したのでなく、また其の思想を公平に詳密に祖述したのでもなかつた。彼れの紹介は、嘆美と共鳴とのみあつて、批判がなかつた。ニーチエの長所のみを學ぶに急で、其の短所については、一言も洩さなかつた。從つて多少、穩健な學者的態度を有し、若くは相當の文學眼を有するものは、熱心な彼れのニーチエ嘆美に反感を生じたり、疑義を挾んだりするに至つたのは、蓋し止むを得ないことだつた。

彼れのニーチエ嘆美に對して、最も烈しく反對したのは、當時文壇から離れて靜かに倫理研究に沒頭して居た坪内逍遙であつた。『馬骨人言』の一篇は、重に倫理學者としての方面からニーチエの弱點を突いたものであつた。論難の文章として、奇警奔放を極めて光焰萬丈の槪があつた。概して早稻田派の一部は、穩健な思想的傾向から、ニーチエに反對した。それに對して、赤門派の一部殊に登張竹風は、樗牛に應援して、論陣の先頭に起つて、能く戰つた。一時、文壇の興味は、全然此

の論戰の上に集中されて了つた觀があつた。
だが。結局、ニーチエ論議は、ニイチエの本體を稍明かにした迄で、そこに左程の深い意義を見出し得なかつた。けれどもそこに道德的、倫理的懷疑の行くべき歸着點が、やがて個人主義的な境地と、現代に不適合な舊習を打破し去るべき態度とにあることを仄かに暗示して居た。

（四）樗牛の美的生活說

ニーチエ鼓吹に續いて、樗牛が提唱したのは、美的生活、本能滿足の說であつた。それは、ニーチエに共鳴した彼れ、現在の道德、倫理の無價値を信じた彼れの當然到り着くべき歸着點であつたニーチエ鼓吹以來、漸く社會の舊套に反抗して戰はんとした彼れの態度は、一層の鮮明を加へて、三十四年八月、『太陽』に『美的生活を論ず』と云ふ論文を發表したのである。

それに於て、彼れは先づ道德的教說の無力を嘲り、續いて人生の至樂に論及して、「吾人の目的は幸福なるにあり、幸福とは何ぞや、本能の滿足即ち是のみ、本能とは何ぞや、人性本然の要求是れなり、人生本然の要求を滿足せしむるもの、玆に之を美的生活と云ふ。」と斷言し、更らに其の美的生活の一事例として、戀愛美を高調した。今日から見ると、彼れの美的生活論は、極めて幼稚なも

のだと云ひ得る。彼れの說くところの內容は、當時の識者とても、恐らく其の幼稚に驚いたであらう而も彼れの說が强く當時の靑年を動かした所以は、道德や倫理の假面を着けて、毫も現代の傾向に觸れ得なかつた學究先生の道破し得ないところを、樗牛が單的に其の詩味ある嘆美的な文章を透ほして道破したからである。舊道德、舊倫理の重い、冷めたい壓迫から、靑年を解放しようとした意氣の銳さが、自ら其の說の裏面に浮動して居たからだ。現代に不適切な、何等存在の意義なき舊套破壞の精神！　それが樗牛の美的生活、卽本能滿足說に滿ちて居たのだ。

斯うした意味に於て、彼れの說は、決して無意義でなかつた。唯それ程、有名だつた論文が今日から見ると、餘りに幼稚なのに驚かされるのみだ。けれども彼れの言說の影響は、確かに文壇に現はれた。當時の文士の歡樂生活は樗牛によつて、其のヂヤスチフイケーションを見出し得た觀があつた。靑年の一部は爭つて本能滿足、美的生活の叫びに反響した。だが、樗牛自身は結局、日蓮研究と嘆美に入つて、始めて安心を得たのだ。

（五）　文壇に於ける現實生活の問題

文壇の問題として、後藤宙外が、田園生活を提唱したことは、當時の注目を惹ゐた。それは文士

の生活難を緩和すべき一方法として主張されたのである。而して宙外自身が、其の實行者となつて後に田園に歸つたのだが、他には、共鳴者が殆どなかつた。畢竟、此の問題は、當時の現實的傾向に觸れたと云ふ點に、かすかな意義を有したのみであつた。

次ぎに、それと前後して、文士品性問題が起つた。それは、筆者不明の『文壇照魔鏡』と云ふ一冊子が出て、其の最初に與謝野鐵幹の不品行を摘發して、手酷い攻撃を加へたものだつた。當時、其の筆者は不明だつたが、後に衆口一致するところによると、少壯評論家として知られた、G、Mだらうと云ふことが略ぼ判明したやうだ。當時、鐵幹は狼狽して、不合理的に私に疑ひをかけたことがあつた。私はそれ等の理由なき疑ひについては、氣に留めなかつたが、當時『新聲』は文壇風氣の革新を一標目として居たので、正しい信念の下に一般詩人を警醒するため鐵幹を論難したことがあつた。それは當時の文壇に可なりに有力な反響があつたことを記憶して居る。

ニーチエ論議と共に、此の期に於ける文壇に一波瀾を與へたのは、綱島梁川が、三十八年五月に發表した。『見神の實驗』である。それは、既に思潮を說いたうちに紹介してあるが、こゝにはそれに關する論議と思想とが文壇にどう云ふ影響を及ぼしたかを一言して置きたい。

（六）梁川の思想と文壇的交渉

梁川の主觀的宗教思想から生れた見神の說は、一面、宗教界の新人を動かして、『無我の愛』などの雜誌を出さしめ、他面、文壇に於ける詩人の群を刺戟して、神秘的、象徵的の傾向を帶ばしめるやうになつた。此の點の細說は、本書の後編に於てするが有明の『春鳥集』泡鳴の『悲戀悲歌』上田敏の『海潮音』及び姉崎嘲風の『復活の曙光』と題した論文集などは、隱約のうちに、梁川の宗教思想から多少の影響を受けない迄も一脈相通ずるところがあつた。

梁川の宗教思想の閃影は、日露戰爭時代に至るまでに、徐々に發展しつゝあつた。『苦痛と解脫』『答道友書』『信のこゝろを思ふ』などを見ると、梁川の思想的過程が明かにわかる。彼れの評論家としての個性發揮は、此の頃から始まつたのだと言つて宜い。

綱島梁川（榮一郎）は、明治五年に生れ、四十年九月、三十六歲で世を去つた。二十八年、早稻田大學の前身であるところの東京專門學校文科を卒業して、爾來、倫理の研究に力むる傍ら、文藝評論の筆を執つた。彼れが最も多くの感化を受けたのは、其の先輩大西操山、坪內逍遙からであつた。即ち逍遙から文學的感化を受け、操山から、哲學的感化を得た。晚年、肺疾に苦んだが、深く思ひを宗教の上に凝めて、彼れ獨自の詩的色彩を

帶びた主觀的宗教思想を樹立するに至つた。早稻田文科出身者中最も異色ある人だつた。其の代表的著書は、『病間錄』である。

此の期に於ける評論家としては、逍遙、鷗外の二家のほかに卓出して居たものは、高山樗牛一人であつた。彼れは態度の人として、時代精神の一面に觸れた先驅者として、獨自の特色を示して居た。桂月の資質は、評論家に不適當だつたが、文章と覇氣とに長じて居た。桂月よりも、寧ろ田岡嶺雲が稍優つて居た。嶺雲も情感に支配され易かつたが、桂月よりは理論の筋道が立つて居て、文閥打破に力め、新進作家に身方したところに、一特色を有して居たからだ。上田柳村の『文藝論集』一卷は、海外文藝の批評家、紹介者としての優越を示して居た、嘲風は、寧ろ宗教學者として起つて居たので、文壇との交渉が薄かつた。醒雪は俳諧文學の研究者として、臨風は史學と文學との調和者として、芥舟はイギリス文學に通じた人として異色を備へて居た。それ等の人々に對して早稻田派では、抱月が逍遙門下の第一人者として殊に評論家として、其の冷靜な頭腦と明透た文章とを認められて居た。だが、彼れの眞の飛躍は、四十年以後にあつた。梁川は晩年俄かに其の光彩を發して一時、抱月と竝行する丈の力量を示した。宙外の評論は、概して穩健で、文壇の進歩に相當の貢献をしたが、次第に固定的になつた爲めに、自然主義が起ると躓いて了つた。

『めざまし草』の『雲中語』に據つて放言しつゝ、創作を評した鷗外、露伴、綠雨などは、何となく文壇の小姑と云つたやうな感じがした。その批評は、垢拔けして居たが、妙に生ぬるいところや、皮肉なところがあつて、若い人々の間には、共鳴者が少かつた。

逍遙は、三十一年十月、『早稻田文學』を廢刊して、倫理研究に熱中したが、それでも、歷史畫論について、樗牛と論戰したり、『馬骨人言』を書いたりして、矢張、文壇と一脈の關係を維持して、文藝評論の上に依然先進大家としての識見を示して、時々、論壇の單調を破つた。

（七）　文藝評論の勢力

要するに、此の期は、文藝評論の全盛時代で、『帝國文學』『早稻田文學』『新小說』『文藝俱樂部』『太陽』『新聲』『文庫』『少年文集』『明星』『めざまし草』『青年文』、『關西文學』『ほとゝぎす』『新文藝』『時代思潮』など何れも文藝評論を載せないものはなかつた。文士月旦の流行し出したのも此頃の事だつた。それは主として『新聲』の編輯者が思ひ付いたのだ。文壇ゴシックも『新聲』『文庫』が始めたのだ。當時の評論家は意氣が一般に旺んで、どしどし直言し、放語し、少しも屈托したやうな、疲れたやうな色が見えなかつた、元氣の宜い極端なものは社會罵倒、文壇罵倒を續けた。嶺雲は此の方面

の代表者だつたのみならず、內容に於ても、文章に於ても、前期にくらべると、一大進步を示した。其の優れたものは理論が稍精密になり、美學、心理學、哲學などの知識を活用して、科學的な傾向ある評論を書いた。それに演劇についての評論も少し眞面目に行はれて、劇界の一刺戟となつた。

（八）劇界の新現象

序に一言したいのは、此の期に於ける演劇と美術とのことだ。劇界に於て、第一に擧ぐべきことは壯士劇が新派劇となつて、少しく向上し、大に發展したことである。勿論、新派劇に藝術的價値が殆ど無いことは、明白だが、日淸戰爭と共に勃興したのは、戰爭上のロマンスが彼等に有利な影響を與へて、現代劇要求の聲を高めたと同時に彼等が巧みに其の機會を摑まへて、觀衆の新趣味に投じ、新脚本の上演に力めて劇界の單調を破つたことが、興行上の成功を豫想外に大ならしめたのだらうと思はれる。

此の期に於ける機會獲得者の先驅は川上音二郞であつた。彼れは、征淸戰が開かれると、直ちに二十七年八月、『壯絕快絕日淸戰爭』と題する新脚本を淺草座に上演した。其の座員のうちには、藤澤淺次郞、伊井蓉峰、高田實、小織桂一郞らが居た。これが時好に合つて、非常に成功したので、二

十八年五月には、當時俳優の檜舞臺だと尊重された歌舞伎座へ出て、『感海衛陷落』などを演じて、これも亦興行上に於て成功した。此の勢に乘じて、川上は二十九年六月、神田に川上座を建設して一時、舊劇を壓倒するほどの流行を見た。

けれども其の反動が來て、新派劇が不振に陷ると、川上は洋行して、三十五年九月に歸朝して、翌年二月、水蔭が譯した『オセロ』を明治座に演じて、自ら正劇と稱した。この頃から、新派劇は又勢を盛返して、月郊の『江戸城明渡』や、鷗外の『雨沛島』や、紅葉の『金色夜叉』や、蘆花の『不如歸』や、抱一庵が譯した『聖人歟盜賊歟』などを始め、近松物、シエークスピヤ物を旺んに上演して、技藝よりも、寧ろ脚本に於て、舊劇に對抗する方針を執つて、相當に成功した。

要するに、彼等の技藝は、尙ほ生硬未熟であつたが、高田實、河合武雄、伊井蓉峰、喜多村綠郎らが漸く藝術味を發揮し始めたところへ、劇壇と文壇の氣脈を通じて、始終、文士と提携することを怠らなかつたため、其の根據も、漸く固まつて、次第に根を張るに至つた。

舊劇は、概して不振の狀態にあつた。團十郎、菊五郎、左團次らの名手が前後して世を去つたので漸時、行詰らうとした。けれども芝翫(歌右エ門)我當(仁左エ門)家橘(羽左エ門)染五郎(幸四郎)らが、時代に適應して、逍遙の『桐一葉』を三十七年春に上演し、また九月には、蘆花の『不如歸』を出

して、芝翫が女主人公浪子に扮した。舊劇が、新生氣を帶びて、新しい生命を見出さうとしたのはこの頃からだつた。殊に『桐一葉』の上演は、脚本そのものが、新史劇として、藝術的に優れて居た上に芝翫の淀君、我當の且元が共に鈑り役で成功したので、舊劇の人々を文壇といふ交渉が幾分か以前にくらべて親みの度を加へて來た。此の新機運と共に、市川莚升(左團次)が亡父の跡を襲いで、明治座に現はれて、將來新しい芝居に於て、獨自の世界を作つた土臺を築き始めようとしたのだ。

(九) 美術界の新現象

美術界では、日本美術院の創立、白馬會、太平洋畫會の出來たことが、最も重要の現象であつた日本美術院が生れたのは、私的方面を別にして公的方面から云へは、日本畫振興の勢に乘じて、岡倉天心、橋本雅邦が中心人物となつて、新しい日本畫の意義ある伸暢を企つると同時に、他の美術をも、自由な進歩をせしめようと考へた結果の產物である。

日本美術院は、三十一年十月に出來て、研究部、製作部展覽部の三部を設けて、俱樂部組織に出來て居て、機關雜誌『日本美術』を發行した。其の日本畫部には、雅邦を始め、下村觀山、横山大觀、菱田春草、小堀鞆音、寺崎廣業、松本楓湖、西鄉孤月、尾形月耕、山田敬中らが居た。後、久保

田米僊も亦それに加盟した。

此の派の中堅となつた少壯の人々は、其の最初の展覽會（繪畫共進會第五回）に於て主として、新歷史畫に執筆した。樗牛が『歷史畫題論』を書いたのは、それが爲めで、彼れは觀山の『闍維』、大觀の『屈原』を推賞した。それは三十一年の秋だつた。次ぎに展覽會を地方に開き、第六回目の繪畫共進會には、觀山が『日蓮上人』廣業の『秋園』栖鳳の『十二ケ月』永洗の『秋雨』半古の『鬪鷄』などが評判の作だつた。

此の派は、三十二年に『讀賣』で、懸賞歷史畫題を募つて、指名に應じて、それを描いたり、同年の秋には、日本音曲の表象畫に筆を着けて、雅邦は長唄の『伏姬』、廣業は清元の『梅の春』などを描いて、新しい方面の開拓に努力した。殊に大觀、觀山の二人は、最初から急進主義を標榜して、洋畫の長所を日本畫に攝取することを目的として、所謂沒線描法と云ふことを考へ附いた。三十三年秋の展覽會に春草が、それを人物畫の上に試みた時は、大分、非難を受けたことがあつた。當時『化物繪』と云はれたのは、此の沒線畫を指して云つた嘲罵的命稱だつた。けれども大觀・觀山は・世の非難に屈しないで、向上の一路に進んで、大觀は『朝顏日記』『老君出關』を觀山は『大原の露』『問答』などを描いて、漸く其の獨自の藝術境を築いた。而して日本美術院の勢力を增大したが、三十

五六年頃に至つて、一種の反動的風潮が美術社會に起つて、美術院は一時不振の狀態に陷つた。而して共のうちに、日露戰爭の時代に入つた。

洋畫界は、日清戰爭と共に、共の勢力を恢復し始めた。共の時分、歐洲に於て、久しく畫を研究した黑田清輝、久米桂一郎らが歸朝して、二十七年十月に赤坂葵橋に洋畫研究所を設けて、外光派と稱する一派を開いて、主として紫色を多く用ゐたので『紫派』と稱せられた。

黑田清輝は、二十八年春、京都に開かれた第四回內國勸業博覽會に『朝妝圖』と題して裸體婦人が鏡に向つて髮を梳るところを描いた洋畫を出陳した。裸體畫について、未だ充分の知識と鑑賞力を持たなかつた人々の多い時分だつたから、それについて、世論が一時に沸騰した。それが洋畫の宣傳の上に間接の利益となつた。而して黑田は、久米と共に、二十九年、美術學校洋畫科の開設された時、教授に任ぜられて、少女モデルを寫生のために使用することを始めて人々に教へた。それと共に白馬會を組織して、共の秋、日本繪畫協會と提携して、第一回展覽會を開いた。

白馬會の花形は、黑田清輝だつた。彼れは、共の當時、『小督』を描いて、清新な歷史畫を示し、第二回には、『智感情』と題した裸體婦人を描いて、再び物論を沸騰させた。それ等の事が、白馬會の發達を助けて、更らに岡田三郎助、藤島武二、和田英作らの新人を網羅して、それに對時して居

た明治美術を壓倒した。

それで明治美術會の一派は、奮起して三十四年新たに、太平洋畫會を組織した、其の中心人物は、滿谷國四郎、石川寅治、中村不折、吉田博らであつた。而して谷中眞島町に研究所を設け、頻りに新進洋畫家の出現を奬勵した。

斯うして、白馬會、太平洋畫會の競爭が烈しくなるにつれて、洋畫は著しく活氣を加へて進歩した。續いて元老の一人淺井忠が三十五年秋、京都高等工藝學校敎授として赴任するに及んで、關西美術會を組織し、其の會頭となつた。また水彩畫は、それと前後して、大下藤二郎、三宅克已、丸山晩霞らの手によつて開拓され、普及され始めた。以上の人々によつて、洋畫趣味、水彩畫趣味が、先づ學生社會を動かし、次第に其の地盤を固むるに至つたのである。

近代文藝史論（上卷畢）

大正十年五月十五日印刷
大正十年五月廿五日發行

定價金參圓五拾錢

近代文藝史論

奥附

著者 高須梅溪
東京市本郷區弓町一ノ二五

發行者 茅原茂
東京市神田區宮本町五番地

印刷者 高橋治一

發行所 東京市本郷區弓町一ノ二五
日本評論社出版部
電話小石川一九七一
振替東京九六七八



